# 西川津遺跡Ⅸ

朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第14冊

2003年3月

島根県土木部
島根県教育委員会

# 西 川 津 遺 跡 Ⅸ

朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第14冊

2003年3月

島 根 県 土 木 部
島根県教育委員会

# 序

島根県教育委員会では、昭和52（1977）年から島根県土木部より委託を受けて、朝酌川広域河川改修事業区域内の発掘調査を実施してきました。この調査は24年間にわたって断続的に行われ、平成13（2001）年をもって現地調査を終了しました。本報告書は、最終年にあたる平成13年度に実施した、松江市西川津町に所在する西川津遺跡Ⅲ区・Ⅵ区の発掘調査の成果をまとめたものです。

この調査では、今からおよそ6,000年前～江戸時代までの朝酌川の旧河道を検出するとともに、堆積していた土砂の中から当時の人々が日常使用していた土器や木製品などを多量に発見しました。これらの遺構・遺物は朝酌川流域の集落の変遷と当時の生活を知る上で貴重な資料となるものです。

本書がこの地域の自然環境の変化と歴史の変遷に触れる契機となり、私たちの周りに残されている文化財の理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、長期間にわたる発掘調査並びに報告書作成にあたって御協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会
教育長　広　沢　卓　嗣

# 例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が、島根県土木部河川課から委託を受けて平成13年度に実施した朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。

西川津遺跡Ⅲ区　島根県松江市西川津町560番地

西川津遺跡Ⅵ区　　〃　　609番地

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

［平成13年度］

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）、今岡　宏（同総務係長）、松本岩雄（同調査第1課長）、

調査員　広江耕史（調査第1係長）、宮本正保（同文化財保護主事）、鹿野孝博（同調査補助員）、寺本和明（同）

調査指導　中村唯史（三瓶フィールドミュージアム指導員）、西本豊広（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）

［平成14年度］

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）、内田　融（同総務課長）、坂本淑子（同総務係長）

調査員　今岡一三（調査第1係長）、宮本正保（同文化財保護主事）、寺本和明（同調査補助員）

4. 発掘調査及び報告書作成にあたって協力及び従事していただいた方々・機関は以下のとおりである。記して感謝の意を表す。（敬称略）

［調査協力］山本信夫（山本考古学研究所）

［発掘調査作業］

安達多津子、石倉春枝、石丸正、岩本大平、遠藤繁、小川吉子、木村ミヨ子、坂根栄、杉谷勉、高倉重夫、田部茂、田部千重子、永島八重子、永島雄三、野津昭江、野津千俊、福島秀香、藤井武美、福田定男、福田美代江、細木澄子、細田美智子、細田美晴、松本長子、山本雄太、山本嘉男、吉岡昭男、吉野智、和田隆徳

［遺物整理・報告書作成］

瀬川恭子、馬庭志津子、吉田典子、若佐裕子、景山光子、金森千恵子、野田清美、原美樹

5. 挿図中の北は測量法による第Ⅲ座標系Ｘ軸方向を示し、レベル高は海抜高を示す。平面直角座標系ＸＹ座標は、日本測地系による。
6. 朝酌川遺跡群発掘調査区と周辺の遺跡位置図（第2図）は、松江圏都市計画図を使用した。
7. 本報告書に掲載した写真は、宮本が撮影した。
8. 本報告書に使用した実測図は、各調査員のほか伊藤幸子、景山、金森、野田、原が作成し、景山、野田、原が浄書した。
9. 本書の執筆は第1章～第4章・第6章を宮本が、第6章付編を岩橋孝典（島根県古代文化研究センター）が行った。また第5章については渡邉正巳氏（文化財調査コンサルタント株式会社）

に執筆していただいた。

10. 本書の編集は、宮本が行った。

11. 本書に掲載した遺跡出土の遺物・実測図及び写真は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33 番地）で保管している。

## 本文目次

第１章　調査に至る経緯と調査経過 ……（宮本）…… 1
　第１節　西川津遺跡・タテチョウ遺跡・原の前遺跡の発見と調査 …… 1
　第２節　西川津遺跡における 2001（平成 13）年の調査 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 ……（宮本）…… 3
　第１節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
　第２節　遺跡周辺の環境変化 …… 7
第３章　Ⅲ区の調査 ……（宮本）…… 9
　第１節　調査の経過と概要 …… 9
　第２節　調査の結果 …… 10
第４章　Ⅵ区の調査 ……（宮本）…… 45
　第１節　調査の経過と概要 …… 45
　第２節　調査の結果 …… 46
第５章　平成 13 年度西川津遺跡発掘調査に係る自然科学分析 ……（渡辺）…… 81
第６章　小結 ……（宮本）…… 91
　　付編　西川津遺跡Ｖ－４－１区出土の杭状木製品について ……（岩橋）…… 93

**挿図目次**

第１図　遺跡位置図
第２図　朝酌川遺跡群　発掘調査区と周辺の遺跡位置図
第３図　遺跡周辺の地理的変遷
第４図　西川津遺跡Ⅲ区　調査区全体図
第５図　西川津遺跡Ⅲ区　土層図(1)
第６図　西川津遺跡Ⅲ区　土層図(2)
第７図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(1)
第８図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(2)
第９図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(3)
第10図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(4)
第11図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(5)
第12図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(6)
第13図　Ⅲ－２区　砂礫層出土土器実測図(1)
第14図　Ⅲ－２区　砂礫層出土土器実測図(2)
第15図　Ⅲ－２区　砂礫層出土土器実測図(3)
第16図　Ⅲ－３区　灰茶色砂層出土土器実測図
第17図　Ⅲ－３区　砂礫層出土土器実測図(1)
第18図　Ⅲ－３区　砂礫層出土土器実測図(2)
第19図　Ⅲ－３区　砂礫層出土土器実測図(3)
第20図　Ⅲ－３区　砂礫層出土土器実測図(4)
第21図　Ⅲ－３区　砂礫層出土土器実測図(5)
第22図　Ⅲ区出土　縄文土器実測図
第23図　Ⅲ区出土　土器実測図
第24図　Ⅲ区出土　陶磁器実測図
第25図　Ⅲ区出土　土製品・銭貨実測図
第26図　Ⅲ区出土　石製品実測図(1)
第27図　Ⅲ区出土　石製品実測図(2)
第28図　Ⅲ区出土　木製品実測図(1)
第29図　Ⅲ区出土　木製品実測図(2)
第30図　西川津遺跡Ⅵ区　調査区全体図
第31図　西川津遺跡Ⅵ区　土層図
第32図　Ⅵ区　淡青灰色土出土土器実測図
第33図　Ⅵ区　杭・木製品出土位置図
第34図　Ⅵ区　杭・木製品出土状況実測図
第35図　Ⅵ区　砂礫層１出土土器実測図(1)

第 36 図　Ⅵ区　砂礫層 1 出土土器実測図(2)
第 37 図　Ⅵ区　砂礫層 1 出土土器実測図(3)
第 38 図　Ⅵ区　砂礫層 1 出土土器実測図(4)
第 39 図　Ⅵ区　砂礫層 1 出土土器実測図(5)
第 40 図　Ⅵ区　砂礫層 1 出土土器実測図(6)
第 41 図　Ⅵ区　砂礫層 1 出土土器実測図(7)
第 42 図　Ⅵ区　砂礫層 2 出土土器実測図(1)
第 43 図　Ⅵ区　砂礫層 2 出土土器実測図(2)
第 44 図　Ⅵ区　砂礫層 3・4 出土土器実測図
第 45 図　Ⅵ区出土　土器実測図(1)
第 46 図　Ⅵ区出土　土器実測図(2)
第 47 図　Ⅵ区出土　石製品・土製品実測図
第 48 図　Ⅵ区出土　木製品実測図(1)
第 49 図　Ⅵ区出土　木製品実測図(2)
第 50 図　Ⅵ区出土　木製品実測図(3)
第 51 図　Ⅵ区出土　木製品実測図(4)
第 52 図　Ⅵ区出土　木製品実測図(5)
第 53 図　Ⅴ－4－1 区　出土杭状木製品実測図

**表目次**

表 1　周辺の遺跡
表 2　西川津遺跡Ⅲ区出土土器観察表
表 3　西川津遺跡Ⅲ区出土陶磁器観察表
表 4　西川津遺跡Ⅲ区出土土製品・銭貨観察表
表 5　西川津遺跡Ⅲ区出土石製品観察表
表 6　西川津遺跡Ⅲ区出土木製品観察表
表 7　西川津遺跡Ⅵ区出土土器観察表
表 8　西川津遺跡Ⅵ区出土石製品・土製品観察表
表 9　西川津遺跡Ⅵ区出土木製品観察表

**図版目次**

図版１　Ⅲ区全景
Ⅲ－１区全景（北から）
図版２　Ⅲ－２区全景（北東から）
Ⅲ－３区全景（南東から）
図版３　Ⅲ区西壁土層
Ⅲ区西壁土層（南端）
図版４　Ⅲ区南壁土層
Ⅲ区北西壁土層
図版５　Ⅵ区全景
Ⅵ区西壁土層
図版６　Ⅵ区北壁土層
Ⅵ区北壁土層（西側）
図版７　Ⅵ区北壁土層（西側）
Ⅵ区杭列検出状況
図版８　杭列検出状況（北から）
同上（南から）
杭列と土層との関係
図版９　Ⅲ－１区砂礫層出土土器
図版10　Ⅲ－１区砂礫層出土土器
図版11　Ⅲ－１区砂礫層出土土器
図版12　Ⅲ－１区砂礫層出土土器
図版13　Ⅲ－１区砂礫層出土土器
Ⅲ－２区砂礫層出土土器
図版14　Ⅲ－２区砂礫層出土土器
図版15　Ⅲ－２区砂礫層出土土器
図版16　Ⅲ－２区砂礫層出土土器
Ⅲ－３区灰茶色砂層出土土器
図版17　Ⅲ－３区砂礫層出土土器
図版18　Ⅲ－３区砂礫層出土土器
図版19　Ⅲ－３区砂礫層出土土器
図版20　Ⅲ区出土縄文土器
Ⅲ区出土土器
図版21　Ⅲ区出土陶磁器
図版22　Ⅲ区出土陶磁器
Ⅲ区出土土製品・銭貨
図版23　Ⅲ区出土石製品
図版24　Ⅲ区出土木製品

図版 25　Ⅲ区出土獣骨
図版 26　Ⅵ区淡青灰色土出土土器
図版 27　Ⅵ区淡青灰色土出土土器
　　Ⅵ区砂礫層 1 出土土器
図版 28　Ⅵ区砂礫層 1 出土土器
図版 29　Ⅵ区砂礫層 1 出土土器
図版 30　Ⅵ区砂礫層 1 出土土器
図版 31　Ⅵ区砂礫層 1 出土土器
図版 32　Ⅵ区砂礫層 2 出土土器
図版 33　Ⅵ区砂礫層 2 出土土器
図版 34　Ⅵ区砂礫層 2 出土土器
　　Ⅵ区砂礫層 3・4 出土土器
図版 35　Ⅵ区出土土器
図版 36　Ⅵ区出土土器
　　Ⅵ区出土石器・土製品
図版 37　Ⅵ区出土木製品
図版 38　Ⅵ区出土木製品

# 第１章　調査に至る経緯と調査経過

## 第1節　西川津遺跡・タテチョウ遺跡・原の前遺跡の発見と調査

西川津遺跡は、島根県松江市の北東部を南北に流れ、大橋川に注ぐ朝酌川沿いに位置している。朝酌川沿いには西川津遺跡のほか、原の前遺跡、タテチョウ遺跡と合わせて３つの遺跡が約２km にわたって連なるように存在する。これら３つの遺跡は一体となって低湿地遺跡群を形成していることから、近年では「朝酌川遺跡群」と呼称されることもあり、県下でも有数の規模と豊富な出土品をもつ遺跡である。

「朝酌川遺跡群」の発見は、1934（昭和９）年に行われた堰と水門の工事中に西川津町字竪町（現在のタテチョウ遺跡の南端にあたる）において弥生土器などが出土し、遺跡の存在が確認されたことを契機とする。1949（昭和24）年には、島根大学の山本清氏によりこの付近の試掘調査が実施され、タテチョウ遺跡が弥生時代を中心とし、古墳時代に及ぶ複合遺跡であることが確認された。

西川津遺跡の発見は、1939（昭和14）年に行われた水田の排水工事の際に、弥生土器などが発見されたことによる。また、戦後間もない時期の電柱埋設工事や、1967（昭和42）年の県道松江－境線（現在の国道431号線）沿いの電話線埋設工事の際にも、土器などの遺物が発見されていたが、発掘調査が実施されなかったことから遺跡の範囲・性格は不明であった。昭和40年代に入り、朝酌川流域の水田地帯は急激に市街地化が進み、朝酌川の氾濫が宅地にも大きな被害を与えるようになった。1972（昭和47）年から島根県土木部は朝酌川の河川改修計画を立て、河道の直線化と河幅の拡幅に着手することになった。島根県教育委員会では、島根県土木部の依頼を受けて1974（昭和49）年に工事予定地となったタテチョウ遺跡の範囲確認調査を実施し、この遺跡が南北300m に及ぶ大規模な遺跡であることを確認した。タテチョウ遺跡は1977（昭和52）年から本格的に発掘調査が行われ、1991年に終了した。

河川改修の暫定掘削工事は下流側から行われたが、1979（昭和54）年に西川津町橋本に位置するガラガラ橋－宮尾橋の間で遺物が発見されたことで、西川津遺跡とタテチョウ遺跡の中間地帯にも遺跡が存在することが判明した。この遺跡は字名から「原の前遺跡」と命名され、発掘調査が1992（平成４）年と1993（平成５）年の２カ年実施された。

朝酌川遺跡群の最上流部に位置する西川津遺跡では、タテチョウ遺跡の調査と一部並行して1972（昭和47）年から1981（昭和56）年にかけて暫定掘削部分の発掘調査を実施した。1994（平成６）年からは西川津遺跡の残りの区間について調査を実施し、1999（平成11）年をもって現地調査は終了する予定であった。この後、学園橋上流における公園整備工事と西川津遺跡の北端に近い海崎橋上流での河川拡幅工事の計画が追加されたため、2001（平成13）年、この２つの地区について発掘調査を実施して河川改修に伴う現地調査は終了した。

## 第2節　西川津遺跡における2001（平成13）年の調査

西川津遺跡のⅢ区とⅥ区の発掘調査を実施した。Ⅲ区で調査を実施した箇所は、1997（平成5）年に発掘調査が行われたⅢ区右岸の北西に隣接する部分である。調査前は中州だった場所で、調査対象面積は約400㎡である。調査区を便宜上3つに分け、南からⅢ－1区、同2区、同3区とした。Ⅵ区は、西川津遺跡の北端に近い海崎橋上流の左岸に設定した。1999（平成11）年のトレンチ調査で、遺物包含層の存在が確認された場所で、調査前は水田・河川敷であった。調査対象面積は約800㎡である。

発掘調査は、平成13年7月2日にⅢ区に着手した。Ⅲ区は全体が朝酌川の旧河道となっており、これ以外に遺構は検出しなかった。遺物は、砂礫層から縄文時代～近世にかけて各時代の土器・陶磁器などが出土したほか、輸入銭、獣骨などを確認した。途中、降雨による朝酌川の増水のため調査区が2度にわたり水没し、壁が崩落したため土層観察が行えない箇所もあったが、調査区内は完掘し9月13日に空中写真撮影を実施して調査を終了した。

Ⅵ区は9月17日に調査を開始した。この調査区も基本的に旧河道となっており、増水時に堆積した砂礫層に土器などの遺物が含まれていた。遺構は、平面L字状に並ぶ杭列を検出した。砂礫層は少なくとも4層が認められ、上位の層は縄文時代～弥生時代・古墳時代の遺物が混在していたが、下位の層では縄文土器のみが出土し、堆積した時期が特定できる可能性が考えられた。この調査区では遺物包含層が当初の予想よりかなり深くまで存在したが、発掘調査の安全を図るため調査区の一部を深く掘り下げるにとどめ、最終的には基盤層となる玄武岩まで検出し12月17日に調査を終了した。

第1図　遺跡位置図

# 第２章　遺跡の位置と環境

## 第１節　遺跡の位置と歴史的環境

西川津遺跡は松江市西川津町に所在し、松江市の市街地の東側に位置する。付近には島根大学や松江市立川津小学校などの学園が集まり、最近、遺跡の周囲は宅地化が進んでいる。

西川津遺跡は、朝酌川の河川敷を中心に存在する低湿地遺跡である。朝酌川は島根半島の北山に流れを発し、西川津遺跡付近で持田川と合流し、松江市街の東端にある沖積地を南下して宍道湖と中海をつなぐ大橋川に注ぐ河川である。この朝酌川沿いには西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡と３つの低湿地遺跡が存在し、近年ではこれら３つを総称し「朝酌川遺跡群」と呼称することもある。西川津遺跡はこの朝酌川遺跡群の最上流部に立地し、朝酌川に架かる宮尾橋の上流、持田川との合流地点の間に位置する。また、この川が形成する平野周辺部の低丘陵には古墳をはじめ、多くの遺跡が分布する。

[旧石器時代]

現在の地形とは大きく異なり、谷合になっていたと考えられ、今のところ、この時代の遺跡は知られていない。しかし、西川津遺跡やタテチョウ遺跡において、尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土しており、付近に旧石器時代の遺跡が発見される可能性がある。

[縄文時代]

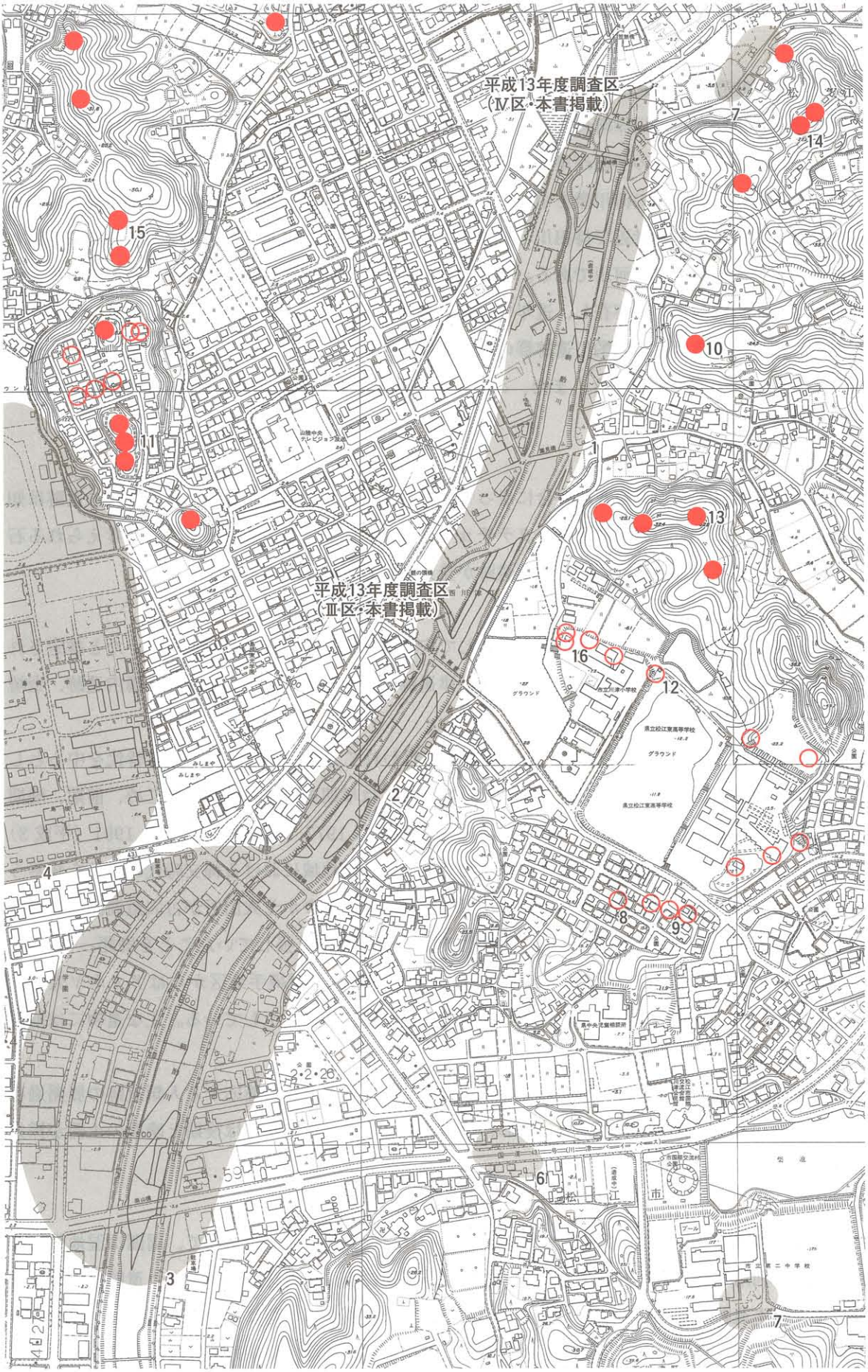
気候が温暖な時期にあたり、海水面が上昇して宍道湖は現在の山合まで広がっていたと推定される。縄文土器が出土している遺跡としては西川津遺跡、タテチョウ遺跡、島根大学構内遺跡、金崎遺跡、城の越遺跡が挙げられる。

西川津遺跡は 1979（昭和 54）年から発掘調査が行われており、縄文時代と弥生時代を中心とした多量の遺物が発見されている。縄文時代の遺物としては早期末の繊維土器をはじめ、前期、晩期の土器や石製品類が多く出土している。タテチョウ遺跡も 1977（昭和 52）年より 1991（平成 3）年まで調査が行われ、西川津遺跡と同様に遺物が多く、この地域における縄文時代の様子を知るうえで貴重な遺跡である。また、西川津遺跡や原の前遺跡ではアカホヤ火山灰が古宍道湖湖底の堆積層中で認められ、前期から中期にかけて宍道湖がこの付近まで拡張していたことを物語っている。島根大学構内遺跡は 1994（平成 6）年から発掘調査が行われ、橋縄手地区からはアカホヤ火山灰の純粋層を挟んで早期末から前期末にかけての遺物群が層位的に出土している。主な遺物には前期初頭から前半頃の丸木船がある。

地質学的調査もあわせて行われており、古環境変遷の復元とそれに適応する人類遺跡の展開過程を追求するうえで重要な遺跡である。なお、金崎遺跡と城の越遺跡からは後期と晩期の土器が採集されている。

[弥生時代]

縄文時代の終わり頃には、宍道湖の汀線もタテチョウ遺跡付近まで後退して、周囲は湿地帯となり、水田に利用されていたと想像される。遺跡は、前述の西川津遺跡やタテチョウ遺跡をはじめ貝崎遺跡、橋本遺跡などが知られている。西川津遺跡では前期から中期にかけての多量の土器や木製農耕具、石製品、骨角器などが出土し、遺構としては前期の貝塚、中期の掘立柱建物跡などが検出されている。タテチョウ遺跡では前期から後期までの土器や木製品および石製品などが発見されて




第２図　朝酌川遺跡群　発掘調査区と周辺の遺跡位置図　Ｓ＝１:7500

いる。両遺跡から出土した特異な遺物には土笛や櫛、腕輪、管玉などの装身具、分銅形土製品、流水文銅鐸がある。原の前遺跡と同様、川辺の生活や朝酌川の洪水などの痕跡を知る遺跡である。なお、貝崎遺跡や橋本遺跡からも弥生土器が採集されている。

[古墳時代]

朝酌川流域の低丘陵には多くの古墳が分布し、出雲地方における古墳の密集地の一つとなっている。しかし、古い時期のものは少なく、山崎1号墳や柴尾2号墳が知られているに過ぎない。山崎1号墳は一辺15mの方墳で、埋葬施設から墳丘裾へ延びる、石を置いた排水溝をもつ。割竹形木棺が直葬されていたと推定されるが、副葬品は少なく、鉄剣と銅鏃のみが出土している。柴尾2号墳は朝酌川中流域の下東川津町に所在する一辺8mの小規模な方墳で、内部主体としては割竹形木棺と箱形木棺が各1基検出されている。出土品には古式の土師器壺や甕がある。

中期以降になると周辺部の丘陵に多くの古墳群が出現する。大部分は、須恵器が出る頃のもので、柴古墳群（3基）、馬込山古墳群（4基）、金崎古墳群（11基）、上浜弓古墳群（9基）、住吉神社裏古墳などがあり、一辺20m以下の方墳が相当数築造されるようになる。また、出土品がなく、時期を明確にできないものの、中期～後期と推定されるものに宮田古墳群、菅田丘古墳群、大内谷古墳群、福山古墳群、深町古墳群などがある。これら古墳群の中でも、規模が大きいのが金崎古墳群である。1号墳は全長35mの前方後方墳で、小形の竪穴式石室をもつ。副葬品には倣製内行花文鏡、子持勾玉などの玉類、剣、矛等の武器及び各種の須恵器があり、朝酌川流域一帯を支配した首長の墓と考えられる。谷を挟んで西の丘陵にある薬師山古墳からも倣製珠文鏡や古い須恵器が出土している。

しかし、後期には、横穴式石室をもつ古墳は原の前遺跡付近の朝酌川中流域には全く存在しない。横穴墓も深町横穴墓のみが知られる程度である。この時期には、上流の持田地区付近には太田古墳群（5基）に代表される、各壁を一枚石で構成する石棺式石室をもつ古墳が多く築造されている。さらに、全長50mの前方後方墳で横穴式石室を2基もつ薄井原古墳も出現する。これらの古墳の被葬者は、後に出雲国府の置かれた意宇川下流域の古墳群の勢力には及ばないものの、大きな力をもった首長であることがうかがえる。

一方、集落跡は調査例が少なく、柴遺跡や堤廻遺跡が知られる程度である。柴遺跡は小さな谷合の奥部に所在し、前期の竪穴住居2棟が調査されている。堤廻遺跡は低丘陵の斜面に位置し、竪穴住居跡21棟、掘立柱建物跡2棟を検出し、この時代の集落を知るうえでの好資料を提供することとなった。竪穴住居については、3棟が前期、8棟が中期前半、9棟が後半、掘立柱建物は1棟が中期前半で他は時期不明である。なお、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、原の前遺跡の河川堆積物中に古墳時代の土師器や須恵器をはじめ、木製品などの遺物が大量に含まれている。この時代の集落が川沿いに幾つも存在し、洪水時に、その一部が川に押し流されたことを示している。また、最近の調査結果より、この時代も今とほぼ同じところが流路となっていたことが知られている。

**表1　周辺の遺跡**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 西川津遺跡 | 5 | 貝崎遺跡 | 9 | 柴古墳群 | 13 | 大内谷古墳群 |
| 2 | 原の前遺跡 | 6 | 橋本遺跡 | 10 | 住吉神社裏古墳 | 14 | 貝崎古墳群 |
| 3 | タテチョウ遺跡 | 7 | 堤廻遺跡 | 11 | 金崎古墳群 | 15 | 福山古墳群 |
| 4 | 島根大学構内遺跡 | 8 | 山崎古墳 | 12 | 馬込山古墳群 | 16 | 馬込山古墓群 |

[奈良時代・平安時代]

733（天平5）年に作成された『出雲国風土記』によれば、奈良時代の西川津町一帯は島根郡に属し、当時の郡の役所である郡家（ぐうけ）も所在する山口郷に比定されている。郡家の所在地には諸説があるが、松江市福原町の芝原遺跡では規則性をもつ掘立柱建物群が発見され、その可能性が指摘されている。朝酌川は『出雲国風土記』には水草河とあり、その源は二つで途中で合流し、入海(宍道湖）に注いでいたとある。なお、今は、朝酌町で大橋川と合流している。この時期の遺構としてはタテチョウ遺跡において船着き場と推定される杭列があり、付近から「驛」と墨書された須恵器坏が出土している。柴Ⅲ遺跡では8世紀末から9世紀前半にかけての掘立柱建物跡が十数棟検出されている。平安時代初めの集落跡である。

[中世]

西川津地域は中世には「長田郷」と呼ばれるようになった。遺跡としては川津城跡や堂ヶ平城跡などの小規模な山城や馬込山古墓群、上浜弓遺跡等の中世末から近世にかけての古墳が知られているに過ぎない。しかし、近年の発掘調査において、古代末から中世の陶磁器や土師質土器などが出土しており、集落は新しい時代にも川沿いに営まれていたと考えられる。

---

【参考文献】

島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳ　1979～1992
島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅷ　1980～2001
山本　清「古代」『川津郷土誌』川津公民館　1982
松江市教育委員会『山崎古墳』1984
松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『柴尾遺跡発掘調査報告書（1）』1994
松江市土地開発公社・松江市教育委員会『堤廻遺跡』1986
松江市教育委員会『上浜弓1号墳他発掘調査報告書』1993
石橋逸郎・近藤正「松江・馬込山古墓群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ　島根県教育委員会　1971
島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学埋蔵文化財調査研究報告』1～6　1997～2000
田中義昭「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』12　島根大学汽水域研究センター 1996

## 第2節　遺跡周辺の環境変化

西川津遺跡は松江低地に立地する低湿地遺跡である。宍道湖に面する松江低地の環境は、10000年前以降の海面変化などの影響を受けながら、陸域から海域・汽水域、そして低地の拡大によって再び陸域へと大きく変化してきた。

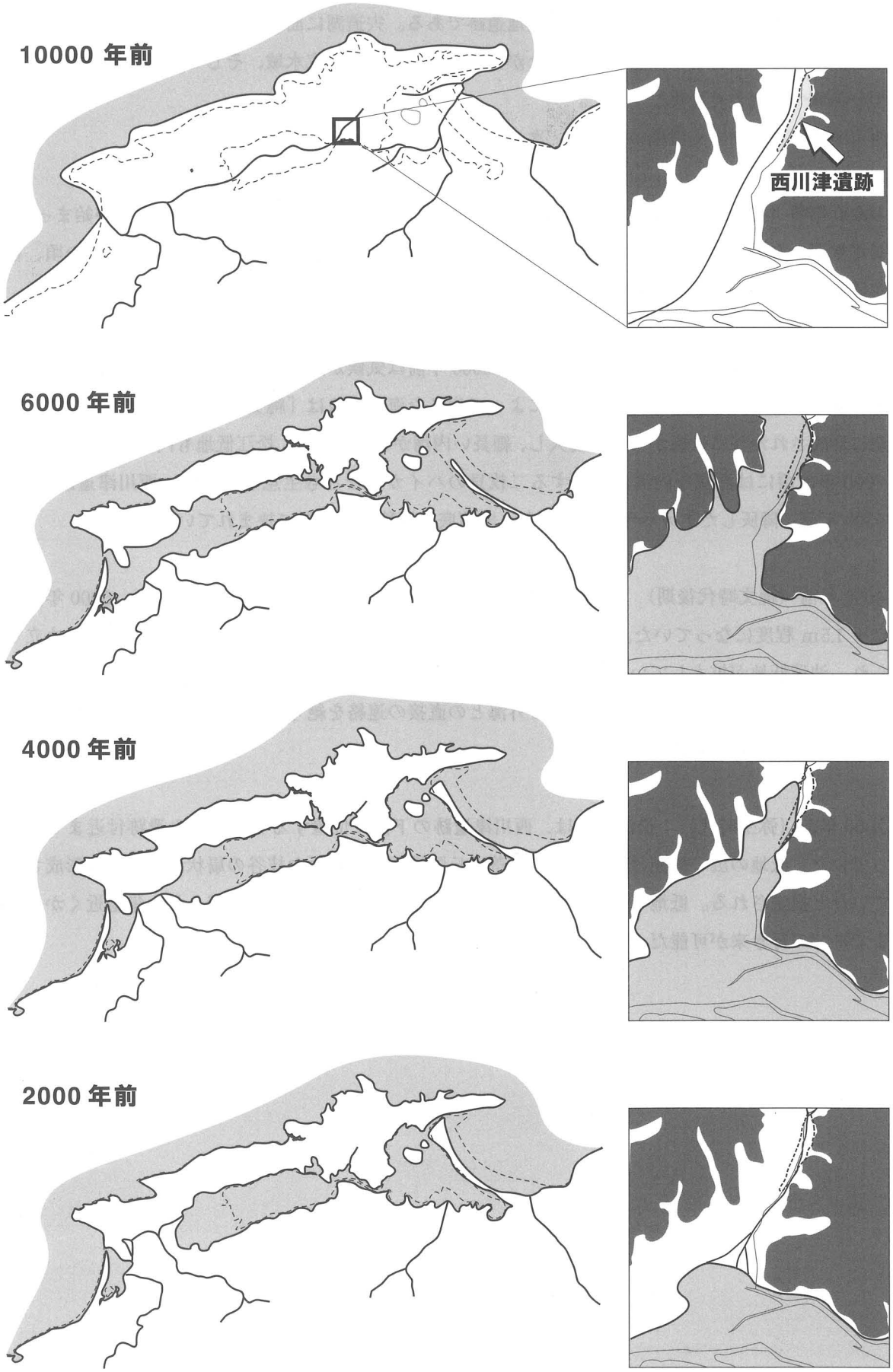
西川津遺跡をとりまく環境の変化は、次のようなものであった。

10000年前（縄文時代早期）：最終氷期が終わり、地質時代では現在に続く「完新世」が始まった。まだ氷期の影響が残っていて、日本列島周辺の海面は－30m ～－40m付近にあった。この頃、松江低地から西へ向かって流れる河川が深い谷を形成し、宍道湖から出雲平野の位置を流れていた。

6000年前（縄文時代前期）：10000年前～6000年前は気候が急速に温暖化した時代で、それに伴って海面が急上昇した。この海面上昇によって生じた海進現象は「縄文海進」と呼ばれている。氷期に形成された谷には西から海が侵入し、細長い内湾が形成された。松江低地も内湾の一部となり、7000年前頃には温暖な内湾に生息する二枚貝のハイガイなども生息していた。西川津遺跡では、6300年前に降灰したアカホヤ火山灰層が、内湾底に堆積した泥層に挟まれている。

4000年前（縄文時代後期）：海面は6000年前頃に現在と同水準まで達し、その後、5000年前頃に＋1.5m程度になっていた。海面上昇が終わると、三角州と海岸砂州が成長して内湾は埋め立てられ、沖積低地が拡大していった。朝酌川の三角州もゆっくりと成長し、松江低地が拡大していった。内湾の西部では出雲平野が拡大して外海との直接の連絡を絶ち、現在のように中海を経て海水が流入する宍道湖へ変化していった。

2000年前（弥生時代）：松江低地は、西川津遺跡の下流に位置するタテチョウ遺跡付近まで広がっていた。低地の広い範囲は湿地状で、集落は丘陵裾部の緩斜面や枝谷の扇状地を中心に形成されていたと推定される。低地を流れる朝酌川は、西川津遺跡付近まで海水が遡上し、集落近くから海まで舟での行き来が可能だった。




第 3 図　遺跡周辺の地理的変遷

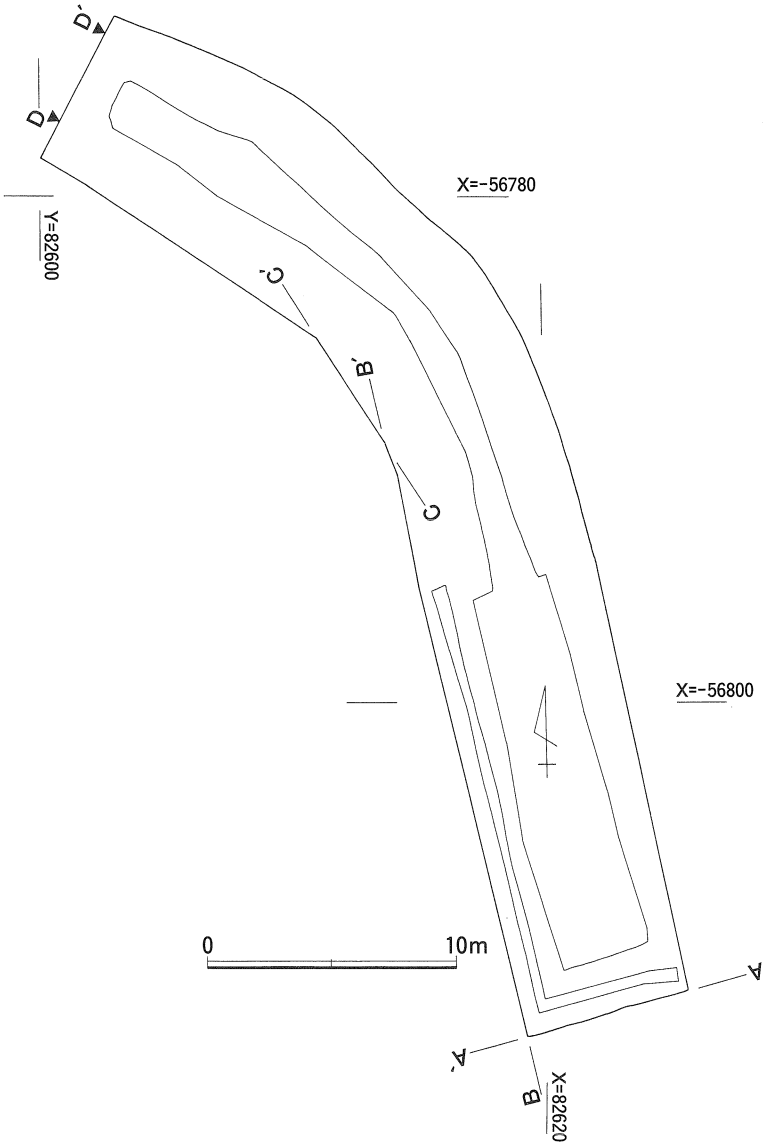
# 第３章　Ⅲ区の調査

## 第1節　調査の経過と概要

### 調査経過

西川津遺跡Ⅲ区で今回調査を実施した場所は、学園橋と嵩見橋との間に存在する中州の南西側部分である。この中州の公園整備に伴い、北西から流れ込む小河川と朝酌川を接続する部分が調査の対象となった。1997（平成５）年、この中州の東側部分は「西川津遺跡Ⅲ区右岸」として調査が行われ縄文時代～平安時代の土器が出土している[1]が、このときの調査成果を参考に土層や包含層の様子を推定した。

調査区は、表土掘削や矢板工事との関係から、便宜的に南からⅢ－１区、同２区、同３区とし、南側のⅢ－１区から調査を開始した。重機により青灰色粘質土（第５図２層）まで除去し、その下位にある青灰色粘質土（第５図３層）から人力で掘り下げを行った。




第４図　西川津遺跡Ⅲ区　調査区全体図　S＝1:300

**調査概要**

Ⅲ区は調査区全体が朝酌川の旧河道と考えられ、遺構はこの調査区では認められなかった。

基本的な層序はⅢ－1区・2区はほぼ共通で、上位から表土（第5図1層）－鉄分を含む青灰色粘質土（同2層）－砂層を含む青灰色粘質土（同3層）－青灰色砂礫層（同4層）－褐色粘質土（同5層）で、青灰色砂礫層が遺物包含層である。褐色粘質土は古宍道湖の湖底堆積物層と考えられており、この中にはアカホヤ火山灰層（同6層）が挟まれる。

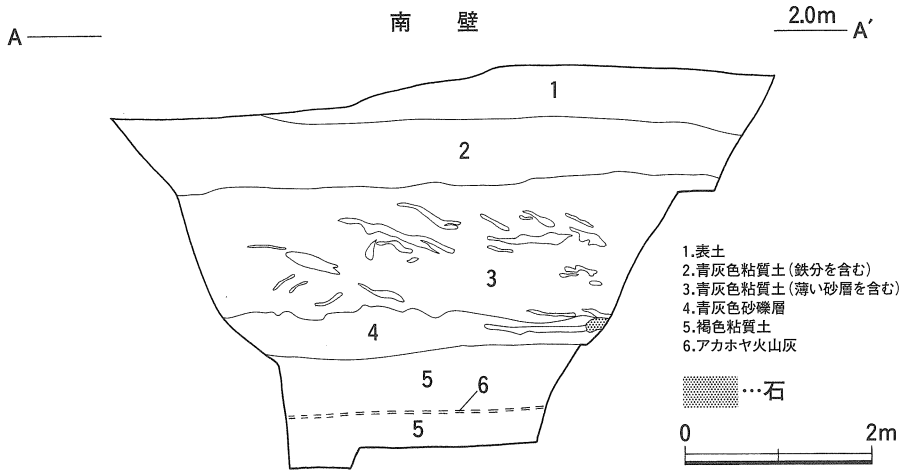
Ⅲ－3区は調査前まで朝酌川の支流だった部分であるため、土層堆積状況が他の調査区とは若干異なる（第5図）。最上層には現代の河川堆積物があり、その下位に青灰色粘質土が存在するが、Ⅲ－1区・2区に比べて薄く、場所によっては認められないところもある。また、壁の崩落のため図示できなかったが、青灰色粘質土と砂礫層との間に青灰色砂層と灰茶色砂層が存在する箇所があり、このうち灰茶色砂層からは弥生土器などの土器が出土している。

遺物は各調査区の砂礫層から縄文時代～近世の土器が出土しているほか、土錘などの土製品、石包丁、石錘などの石製品、椀や下駄などの木製品、獣骨が出土した。

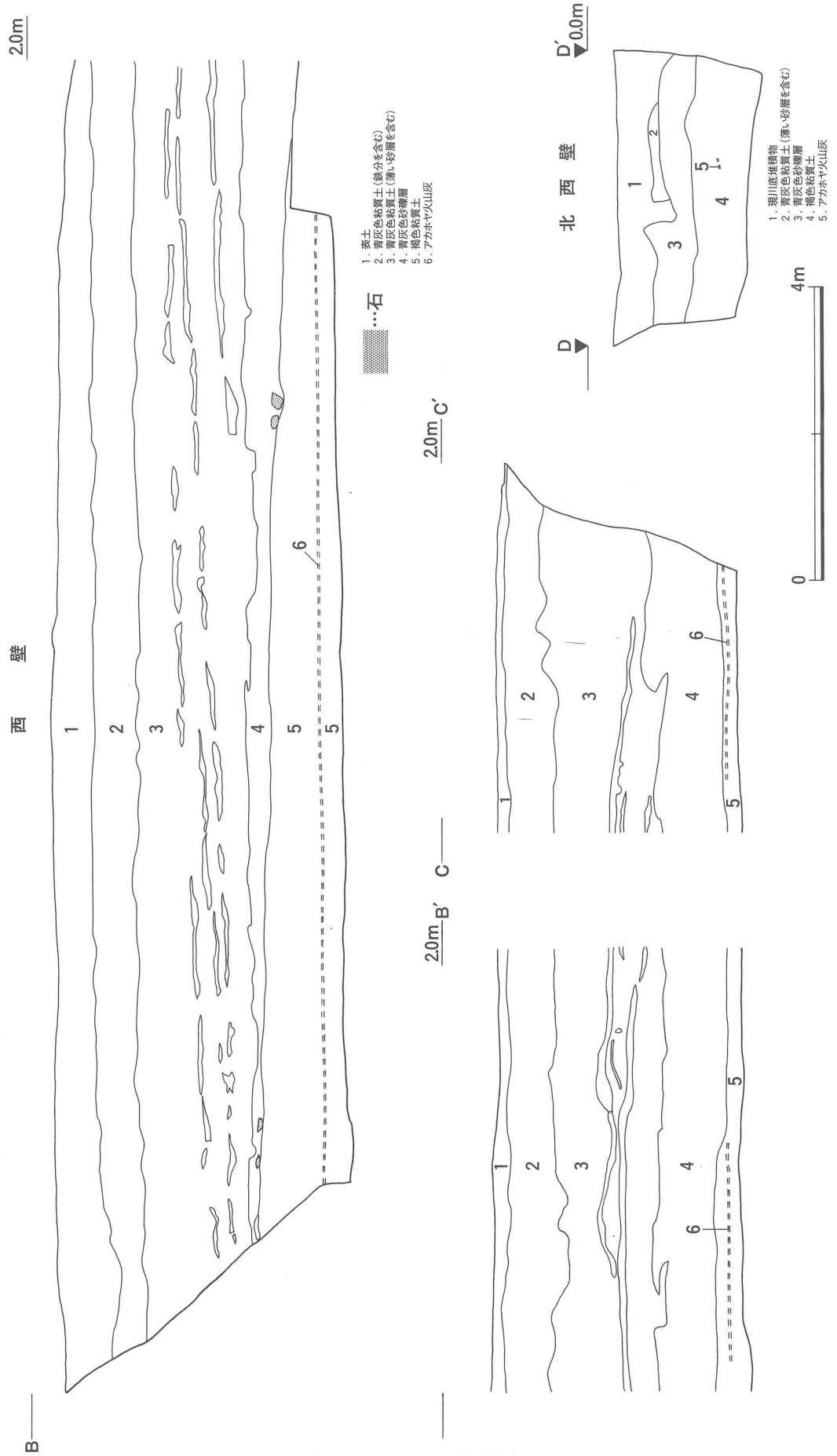
## 第2節　調査の結果

### (1) Ⅲ—1区

Ⅲ区の最も南側に位置し、南端は1996（平成4）年の調査区に接する。調査区は南北25ｍ、東西7mに設定した。南壁（第5図）の土層は、層序・レベルとも基本的には前回の調査で確認されたものと一致する。青灰色粘質土に挟まれる砂層の堆積状況から、南壁は当時の流路にほぼ直交、西壁が流路にほぼ平行するとの指摘を受けている[2)]。南壁、西壁ともほぼ水平の堆積を示すが、西壁では北に行くにつれてわずかに砂礫層の高さが高くなっていく。




第5図　西川津遺跡Ⅲ区　土層図(1)　S＝1:80




第６図　西川津遺跡Ⅲ区　土層図(2)　S＝1:80

### Ⅲ－1区出土遺物

Ⅲ区から出土した遺物は、土器・陶磁器・土製品・石製品・銭貨・木製品・獣骨と多岐にわたる。ここでは土器のうち、Ⅲ－1区砂礫層から出土した弥生時代以降の土器について記すこととし、他のものはⅢ－2区・3区出土のものと合わせて種別ごとにまとめて後述する。

### Ⅲ－1区砂礫層出土土器（第7～12図）

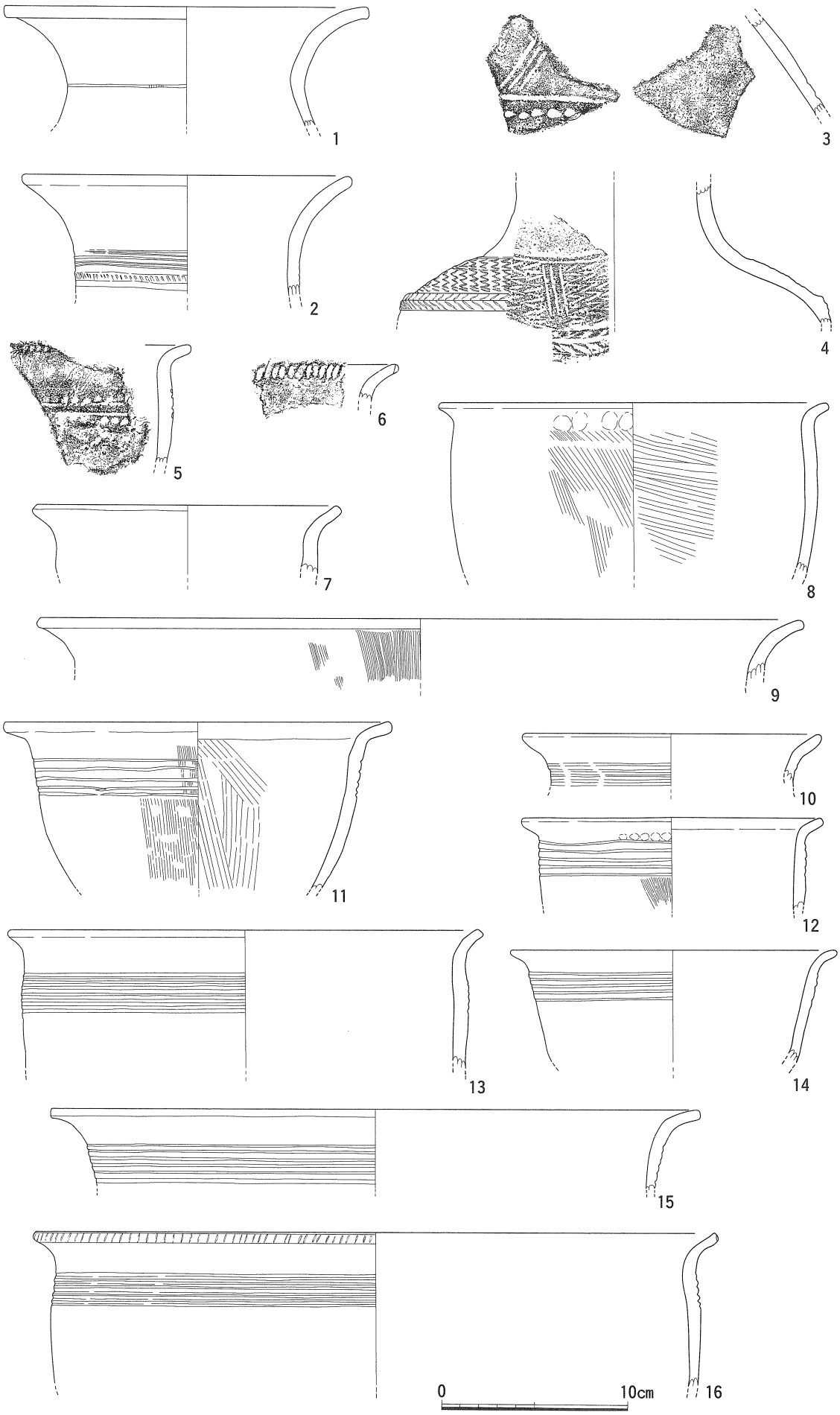
第7図～第9図は弥生時代の土器である。第7図1・2は壺で、1は口縁が外反し、頸部に段をもつ。2は口縁部が外反し、頸部が比較的長くなると見られる。頸部にはヘラ描沈線と刺突文が施される。3も壺の破片で、ヘラ描き沈線・刺突文・木葉文が認められる。4はヘラ描沈線・貝殻腹縁による沈線・羽状文をもつ。羽状文は胴部の突帯にも施される。5・6は甕の口縁で、いずれも口縁部外面に刻目文をもち、5は頸部にヘラ描沈線と刺突文が施される。7～9は甕の口縁で無文のものである。10～12は頸部に多条化したヘラ描沈線文をもつ。13～16は多条のクシ描き沈線を頸部にもつもので、16の口縁部には刻目文も施される。このうち11・14は鉢とみられる。

遺物の時期は、1・3～5が出雲Ⅰ－2様式[3]、2・10～16が同Ⅰ－3～4様式に相当する。6～9については出雲Ⅰ様式の範疇であるが詳細は不明である。

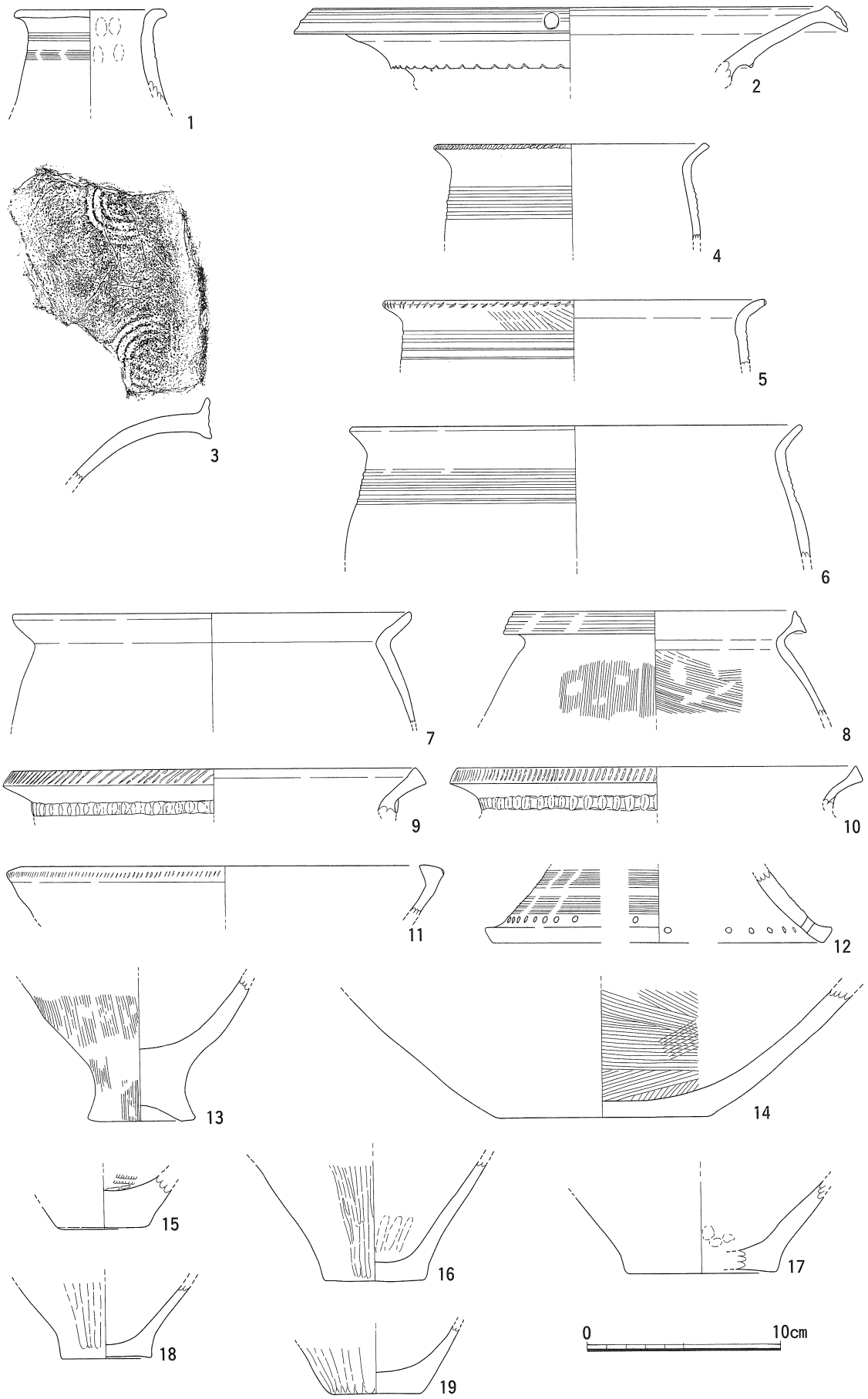
第8図1～3は壺、5～10は甕、11・12は高坏、13～19は底部である。1は長頸壺とみられ、口縁部は短く外反し上面は平坦になる。頸部には7条の浅いクシ描き平行沈線が施される。2は口縁端部が凹線文と円形浮文で加飾され、頸部には刻目突帯を複数有すると見られる。3は大きく開く口縁の内面に弧文が描かれる。4～6は口縁が短く外反し胴部があまり張らないもので、頸部に多条のクシ描き平行沈線をもつ。7は口縁部がやや内湾気味で、胴部の張りもやや強くなるようである。8～10は口縁端部が肥厚し平行沈線や刻目文が施される。8・9は頸部に指頭圧痕突帯ももつ。11は口縁端部が肥厚し、刻目文をもつ。調整は風化のため不明である。12は脚部で、端部が肥厚して平坦面をもつ。浅いクシ描き平行沈線と孔で加飾される。13は台付の甕と見られる。外面は全面ハケメ、内面はナデで調整される。14・15は内面ハケメ、外面ナデ、16～20は内面ナデ、外面ヘラミガキで調整する。

遺物の時期は1・4～6が出雲Ⅱ－1様式、7・9・11が同Ⅲ－1～2様式、8・12がⅣ－1～2様式、13以降の脚部、底部については内面にヘラケズリ調整がみられないことから出雲Ⅲ－1様式以前となる可能性が高い。

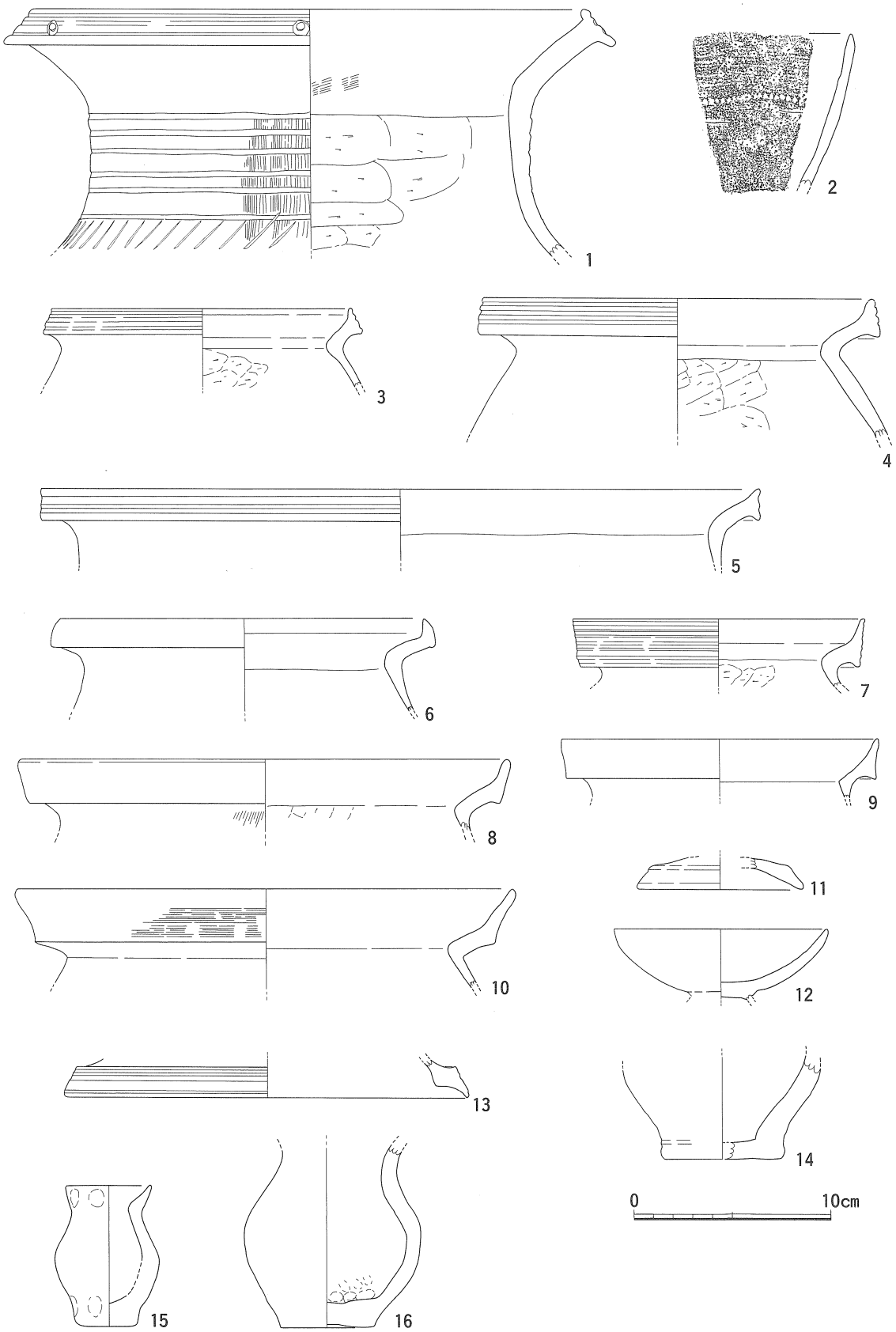
第9図1・2は壺と考えられる。3～10は甕である。11は蓋、12は低脚坏、13は脚部、14～16はミニチュア土器である。1は口縁部に円形のスタンプ文、頸部には凹線文と刻目文が施される。調整は頸部外面がハケメ、内面はヘラケズリされる。2は、細頸壺と考えられ、外面に平行沈線と連続刺突文がわずかに認められる。3～5は口縁端部が内傾し、2～3条の凹線を施す。内面頸部以下はヘラケズリされ、5も不明確ながらヘラケズリと見られる。6も風化が著しいが、同様なものであろう。7～10は口縁端部が外傾するもので、8・9は口縁端部に平行沈線が施されるものと思われる。11は端部が複合口縁状に作られ、内外面ともヨコナデ調整されている。12は口縁部が丸く作られ稜などはもたない。13は高坏と見られ、複合口縁状の端部に3条の沈線をもつ。14～16は頸部が短く、口縁が外傾するものと考えられる。弥生時代前期の壺のミニチュアであると見られる。




第７図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(1)　S＝1:3




第８図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(2)　S＝1:3



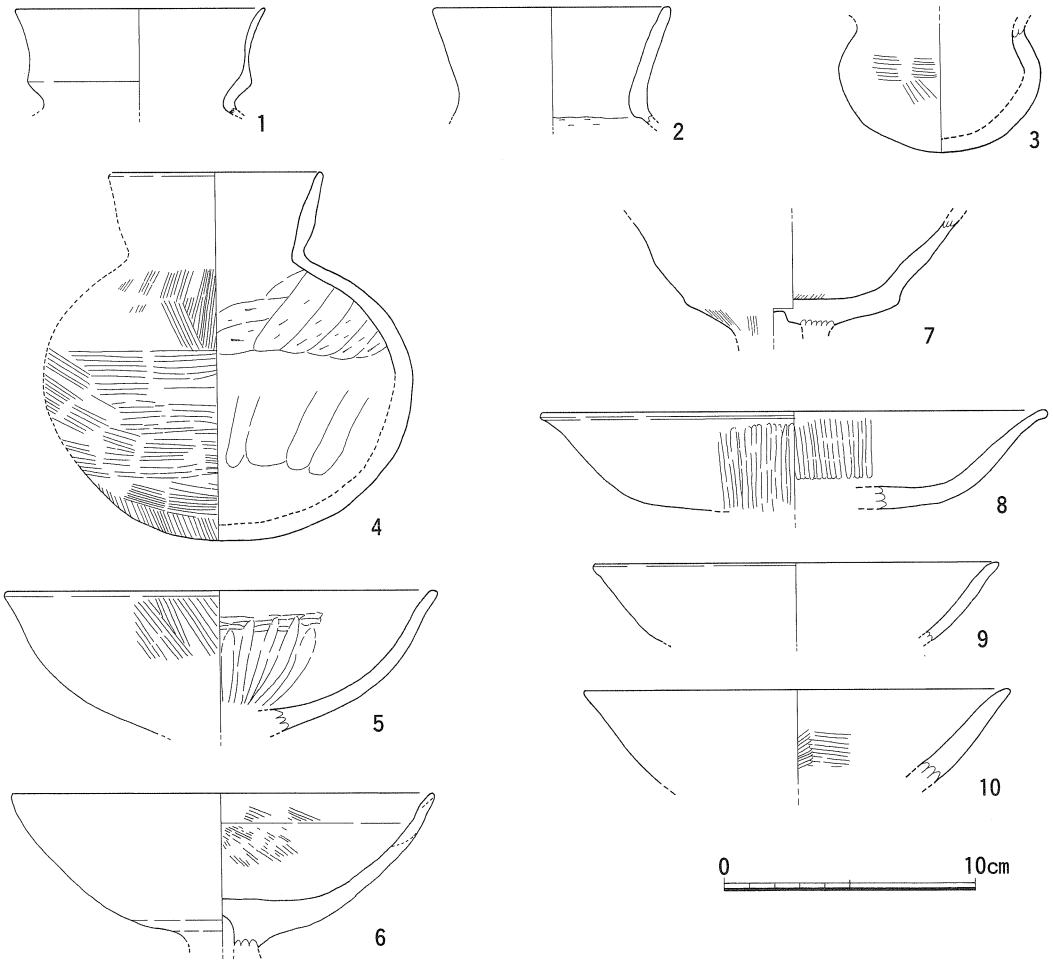

第９図　Ⅲ－１区　砂礫層出土土器実測図(3)　S＝1:3

遺物の時期は、1～6・8が出雲Ⅴ－1様式、7・9・13が同Ⅴ－2様式と考えられる。11・12は出雲Ⅴ－3～4様式であろう。

第10図は土師器で、1～4は甕または壺、5～10は高坏である。1は複合口縁で、風化のため文様・調整は不明である。2も口縁で直線的に外傾する。頸部以下はヘラケズリである。3は小形の胴部で内面胴部上半はナデ、下半はヘラケズリとみられる。4は完形の壺で、2に似た口縁をもつ。胴部内面上半はヘラケズリ、下半はナデを施す。5・6は坏部が比較的深いもので、5の内面にはヘラミガキが認められる。6は脚との接合部近くにかすかな稜をもち、内面はハケメののちヨコナデで調整する。7は坏部外面に段を有し、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面ともナデとハケメで調整される。8は坏部が比較的浅く、口縁端部はわずかに外反する。内外面とも縦方向のヘラミガキで調整する。9は内外面ともヨコナデ、10は内面ハケメ調整される。

遺物の時期は1・3が松山編年Ⅰ期[4]、4・7が同Ⅱ期、6が同Ⅲ期と考えられる。そのほかは同Ⅱ～Ⅲ期と見られるが、詳細は不明である。

第11図は須恵器である。1は坏蓋で、口縁端部に平坦面をもつ。2・3は坏身で、口縁部は内湾する。4～6は坏と考えられる。4は体部が外傾し、外面は凹凸が著しい。5・6は器壁が薄い。7・8は、体部がきわめて短い坏である。9・10は東播系の鉢で、10は口径が不明である。11は単純口縁の甕で端部は丸く収める。12は底部で、内面は回転ナデ、外面はケズリの後ナデか。

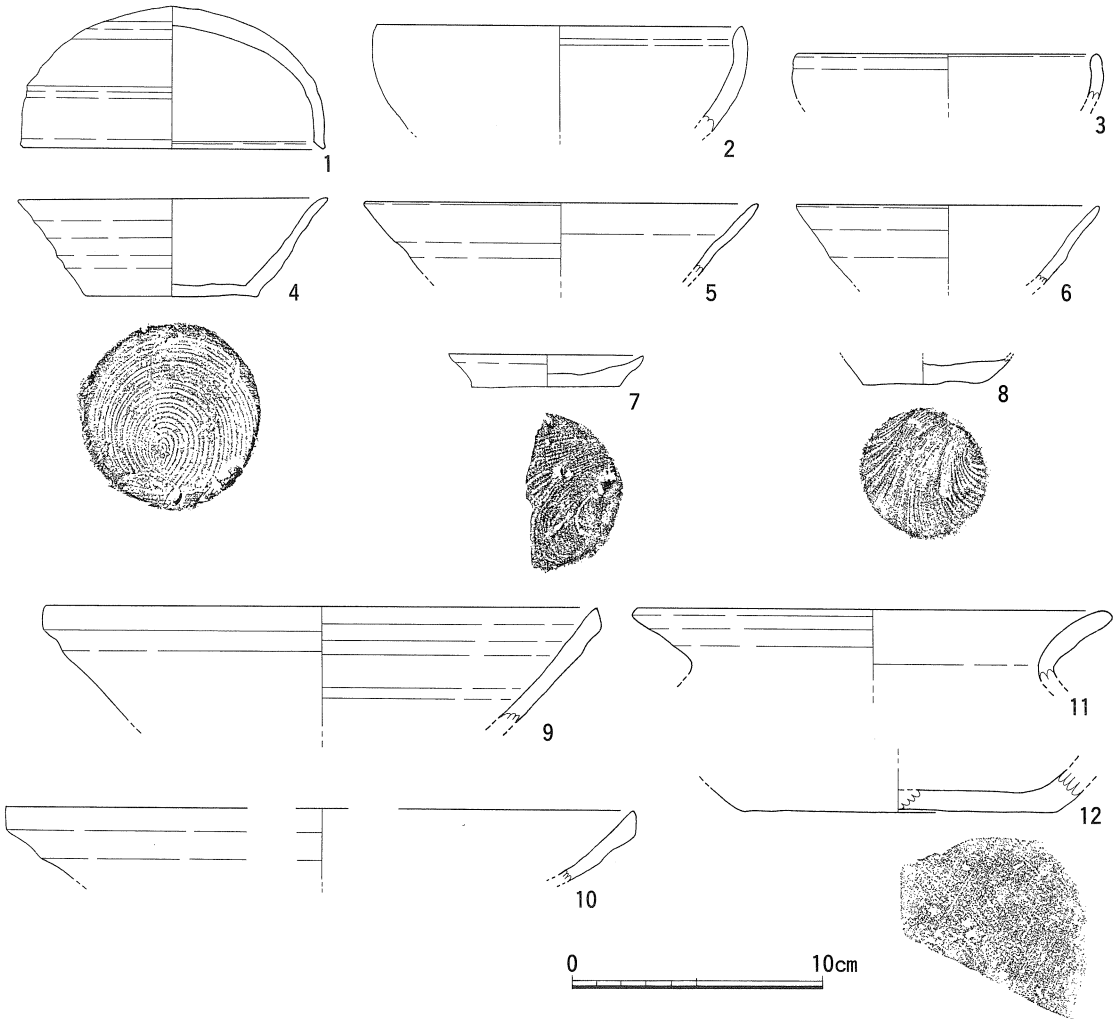



**第10図　Ⅲ－1区　砂礫層出土土器実測図(4)　S＝1:3**

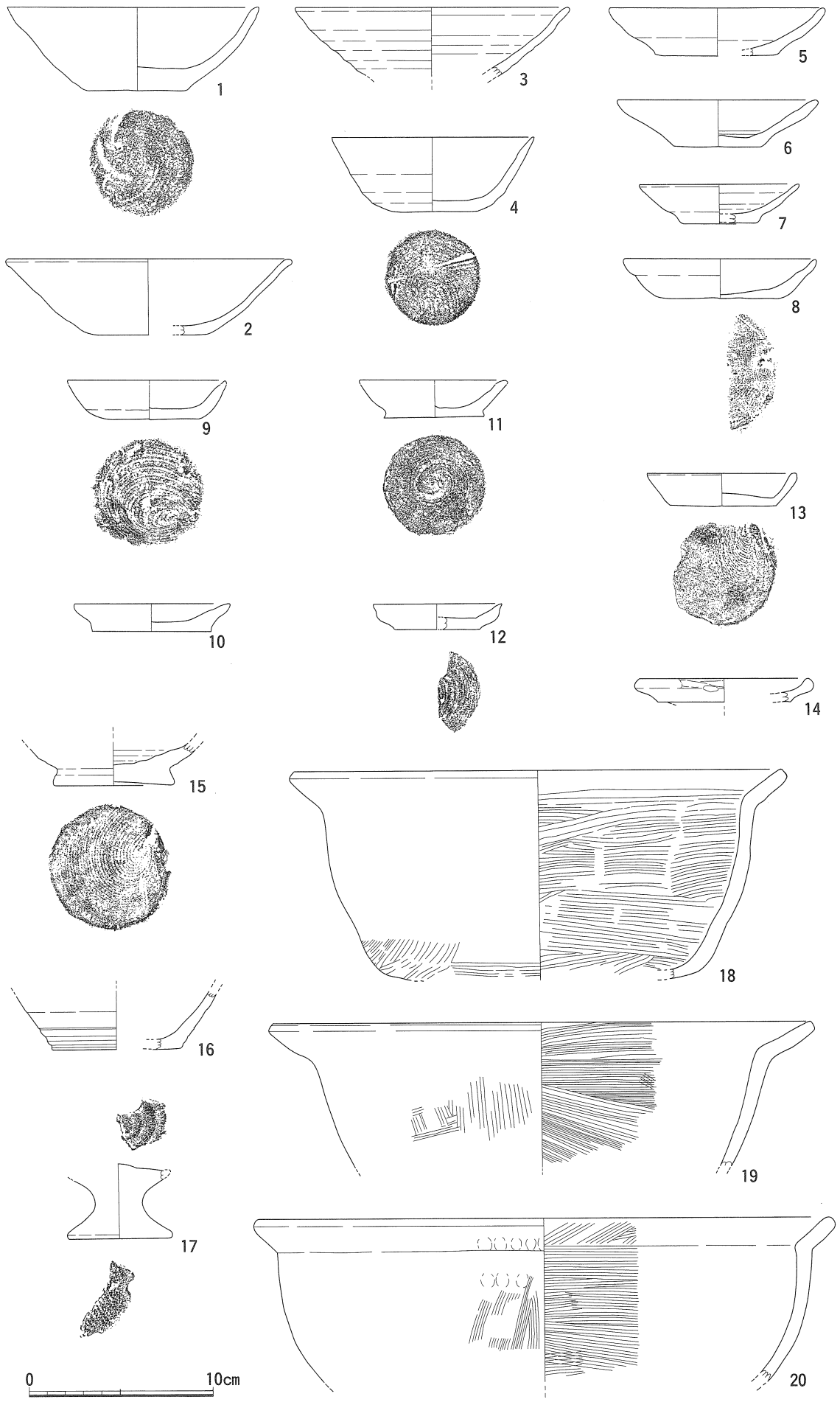
遺物の時期は、1が大谷編年出雲3期[5]、2〜3が出雲国庁編年[6]の3形式、4が同4形式、5〜6が10世紀代、7・8は12世紀[7]と考えられる。9・10が12世紀末〜13世紀初頭[8]、11・12については中世のものと見られるが詳細な時期は不明である。

第12図は奈良時代以降の土師器を図示した。1〜14は坏または皿、15・16は底部、17は高台付き坏、18〜20は鍋である。1は坏部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。2は口縁端部がわずかに外反する。3は坏部に凹凸が顕著である。4は、坏部が深く、口縁端部は若干細くなる。5・6は口縁部の外傾が大きく、全体に肥厚する。7もこれらに近い器形であるが、口径が小さく口縁も肥厚しない。8は全体に器壁が厚く、坏部外面中位に稜をもつ。9は器壁の厚い小形品である。10〜12は底部が外へ張り出す。13は口縁端部が肥厚する。14は口縁端部が玉縁状に肥厚する。15は台状の底部で、回転糸切りである。16は底部外面に沈線状の凹凸をもつ。17は柱状高台付き坏で、坏部内面には回転ナデ、底部には糸切り痕が残る。18〜20は口縁部・頸部外面をナデ、そのほかは粗いハケメで調整される。

遺物の時期は2・3・5〜7は12世紀、17、18〜20も同時期と見られ、9〜12は12世〜13世紀と考えられる[9]。その他についても古代末〜中世のものと見られるが、詳細な時期は特定できない。




第11図　Ⅲ－1区　砂礫層出土土器実測図(5)　S＝1:3




第12図　Ⅲ－1区　砂礫層出土土器実測図(6)　S＝1:3

(2) Ⅲ−2区

Ⅲ−1区の北側に位置する。Ⅲ区自体が狭いため、調査の際にはⅢ−1区を北側に拡張するように掘り下げた。調査区は南北約10m、東西7mに設定した。堆積状況は基本的にⅢ−1区と同様であるが、遺物包含層である青灰色砂礫層（第6図4層）が厚くなり、西壁北側ではアカホヤ火山灰層（同6層）が確認できない。

**Ⅲ−2区出土遺物**

Ⅲ−2区においてもⅢ−1区と同様に、青灰色砂礫層から各時代の多様な遺物が出土している。第13図に弥生土器、第14図は弥生土器と土師器、第15図には須恵器を図示した。

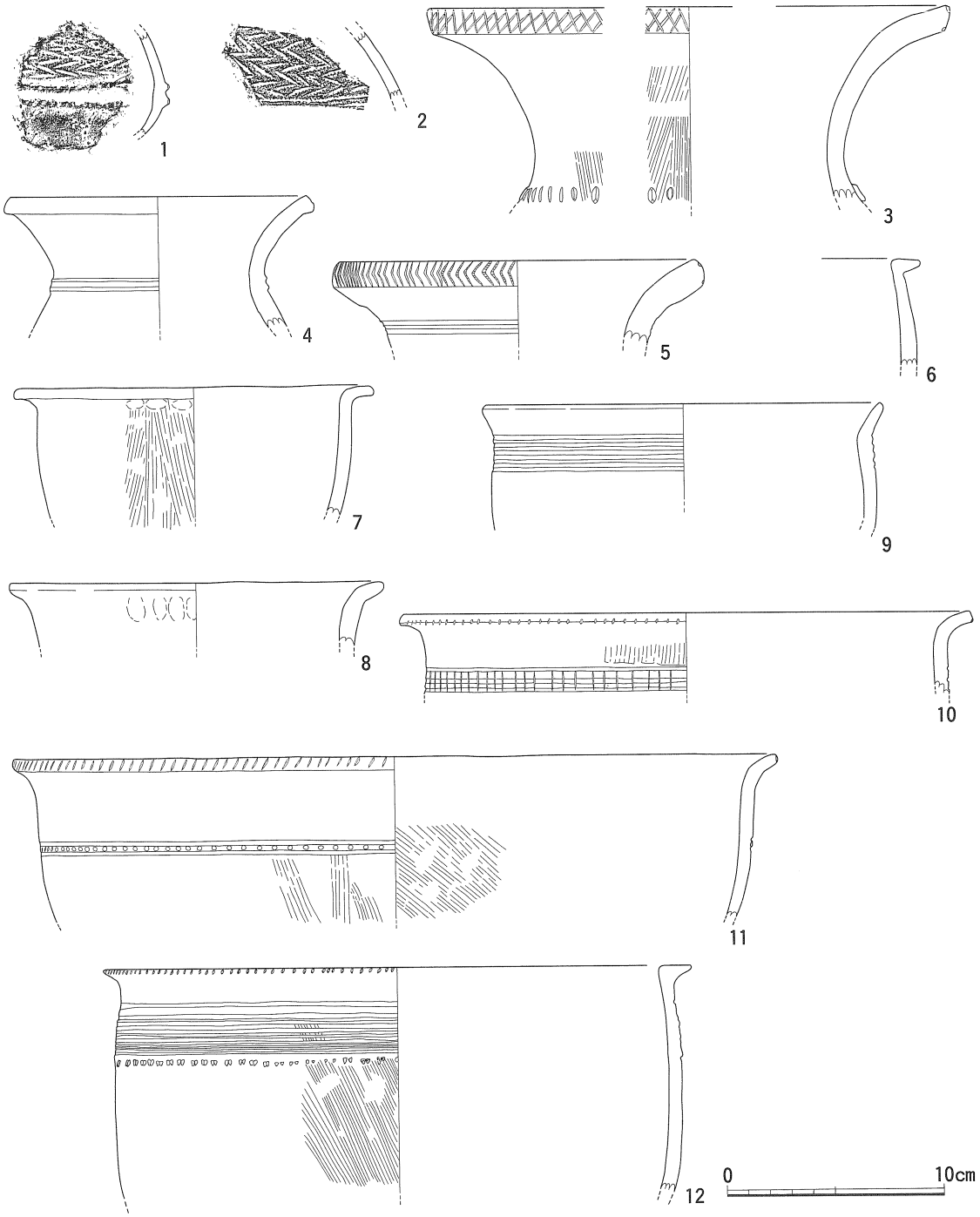
第13図はいずれも前期の土器で、1〜5は壺、6〜12は甕である。1・2はいずれも胴部の破片で貝殻腹縁による羽状文を施す。1は胴部最大径付近に2条の刻目突帯をもつ。3は口縁端部外面に面をもち、そこにヘラ描きの斜格子文を施し、頸部には指頭圧痕のある浮文を貼り付ける。破片のため径は定かではない。4は口縁端部が肥厚するもので、頸部には2条の削出突帯をもつ。5は口縁部に羽状文、頸部に沈線文が施される。6は口縁部が外側へ屈曲し、上面に面をもつもので、いわゆる「L字甕」である。7は口縁が外へ屈曲し、頸部に指頭圧痕をもつ。8は口縁が緩やかに外反するものである。9は口縁の屈曲は緩やかで、頸部には5条のヘラ描き沈線をもつ。10は口縁端部に刻目文、頸部にはヘラ描き沈線に縦方向の浅いヘラ描き沈線を組み合わせ、格子文を描く。11は口縁部に刻目文、頸部にはヘラ描き沈線と円形のスタンプ文をもつ。12は口縁が外側に屈曲するもので、端部には刻目文、頸部にはヘラ描き沈線と2個単位の刺突文を施す。

遺物の時期は、いずれも出雲Ⅰ−2〜4様式のものである。このうち、器形、施文の特徴から1・2・10・11は出雲Ⅰ−3〜4様式、3〜5・9・12はⅠ−4様式に特定できると考えられる。

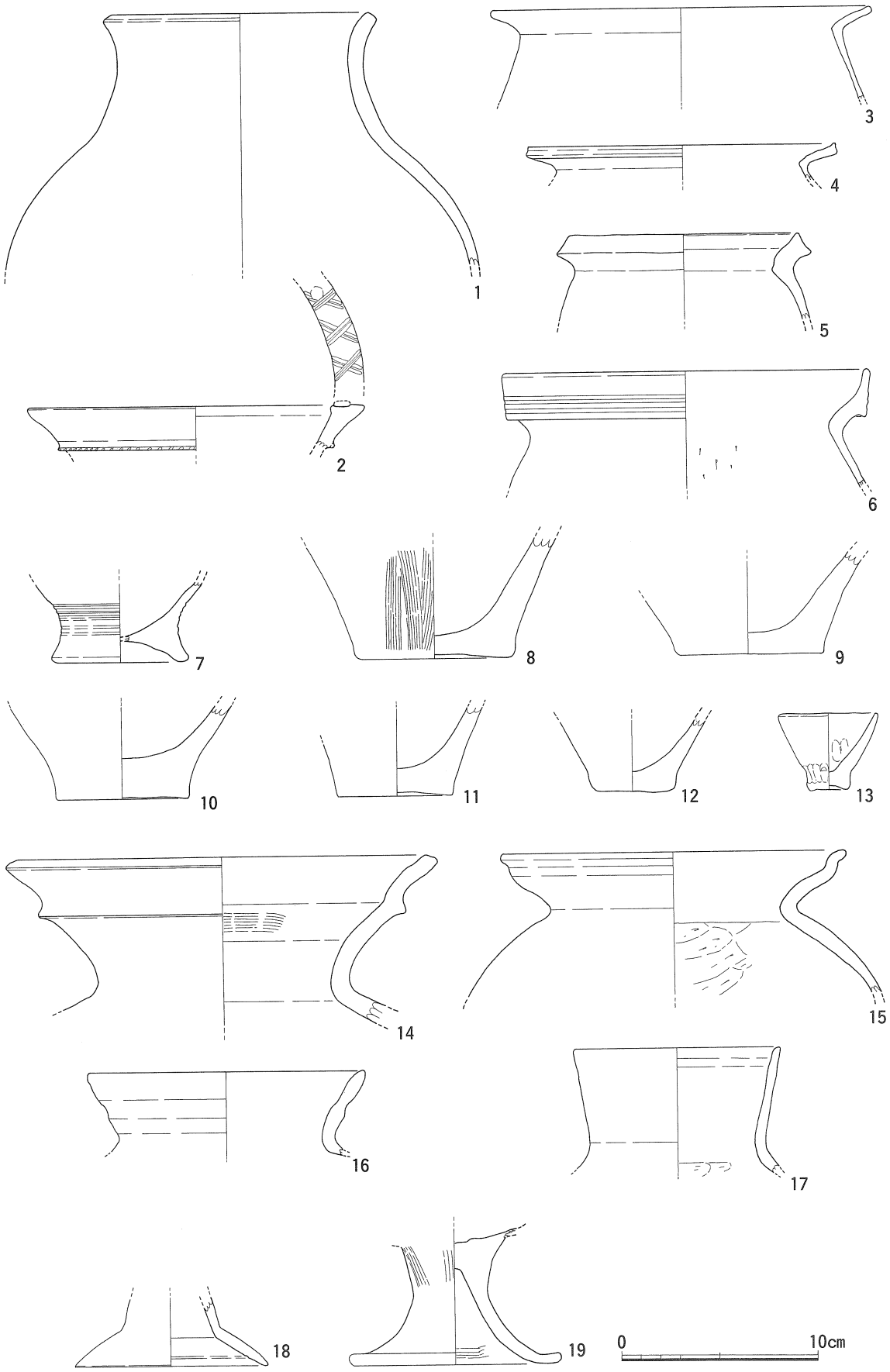
第14図1〜5は弥生時代中期の土器、6は後期、7〜12は底部、13はミニチュア土器、14〜19は土師器である。1・2は壺で、1は口縁部がわずかに外反し、端部は肥厚しないがわずかに面をもつ。2は口縁部が外傾するもので上面に2条単位の斜格子文が施され、円形浮文の痕跡も残る。頸部には刻目突帯も認められる。3〜5は甕で、3は口縁端部がわずかに肥厚する。4は口縁端部が肥厚し、わずかに上方に突出する。3は頸部付近から器壁が全体的に厚く、口縁端部が幅広くなる。これらはいずれも文様をもたず、ナデで調整すると見られる。6は風化が進んでいるが、口縁は複合口縁となり外面には沈線文も認められる。頸部以下はヘラケズリである。7は脚部で、外面に多条の平行沈線が施される。8〜12は底部で、いずれも内面にヘラケズリは認められない。13は手づくねで、指頭圧痕が顕著である。14は古墳時代前期の壺で、複合口縁をもつ。15・16は甕で、複合口縁を意識しているがかなり形骸化している。口縁部はヨコナデ、内面頸部以下はヘラケズリである。17は単純口縁の壺とみられ、頸部以下はヘラケズリである。18・19は高坏の脚部である。18は脚端部へ屈曲しながら広がるもので、ヨコナデ調整、19は緩やかに外反し、端部がわずかに肥厚する。一部にハケメが認められるほかはナデで調整する。

遺物の時期は、1・2が出雲Ⅲ−1様式、3・4が同Ⅲ−1〜2様式、5はⅣ様式、6はⅤ−1様式と考えられる。7〜12は出雲Ⅲ−1様式以前の可能性が高い。13は出雲Ⅰ様式であろう。14・15は松山編年Ⅱ期、16・17が同Ⅲ期、17〜19は同Ⅲ〜Ⅳ期と考えられる。

第15図1～3は須恵器、4～13は土師器である。1は口縁部で複合口縁状を呈する薄手のものである。2・3は坏で、口縁部まで直線的に外傾する。坏部には回転ナデによる凹凸が目立ち、低い高台をもつ。風化のため不明瞭だが、底部は回転糸切りである。4は甕で、頸部が「く」の字に屈曲する単純口縁のものである。口縁部内面と胴部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリである。5・6は坏と見られるが、底部を欠いている。坏部は直線的に口縁に至るもので、6は器壁が厚い。7・8も坏であるが、坏部が深く内湾しながら口縁に至る。9は全体が復元できた小形品で、底部はヘラで切り離すようである。10も小形の坏だが底部の調整は不明である。11・12はいずれも坏



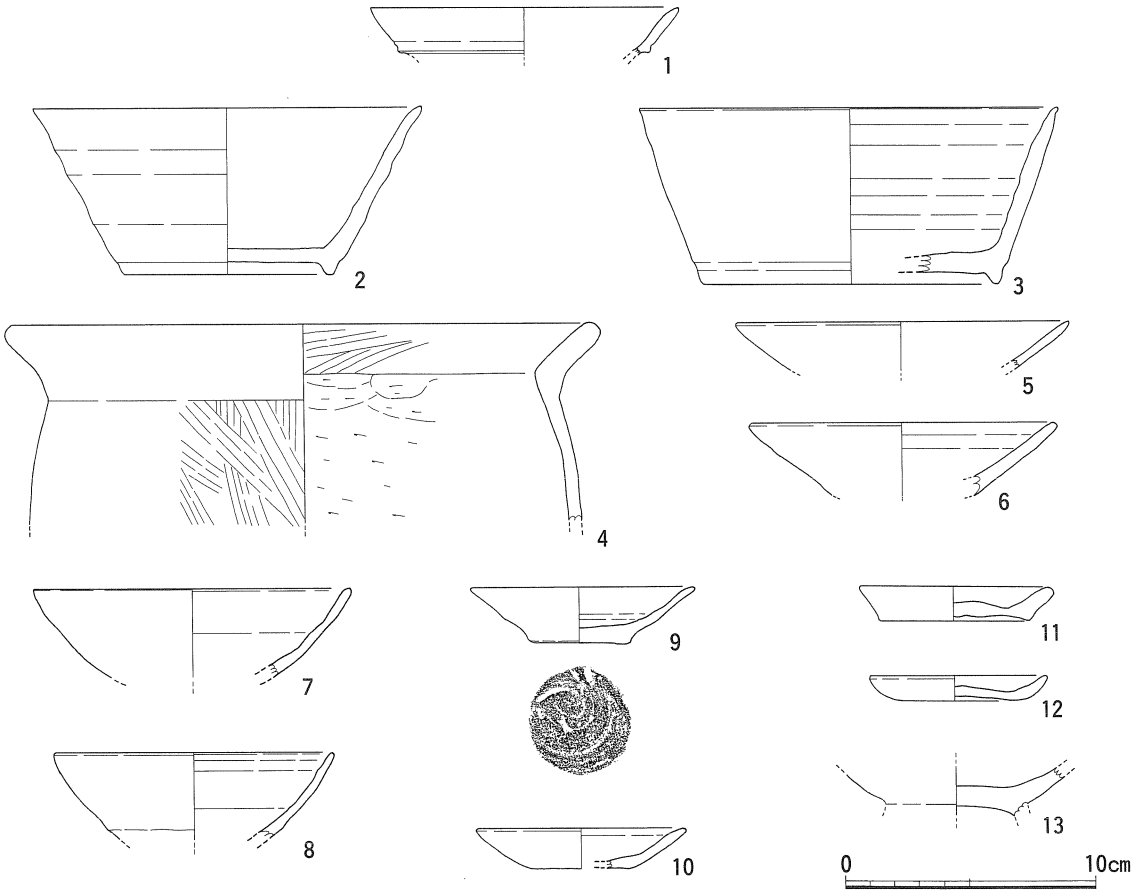

第13図　Ⅲ－2区　砂礫層出土土器実測図(1)　S＝1:3




第14図　Ⅲ－2区　砂礫層出土土器実測図(2)　S＝1:3

部が短く浅いもので、11は器壁が厚く直線的に立ち上がり、12はやや内湾する。13は短い脚をもつものと見られる。坏部、脚部ともに欠くが、底部内面に糸切りの痕跡が認められる。

遺物の時期は、1は器形から大谷編年の出雲2期と見られる。2・3が国庁編年の5形式[10]、4～13は古代末～中世の土師器で5～10が12世紀、11・12は13世紀とみられ、13は足高高台とすれば11世紀と考えられる[11]。




第15図　Ⅲ－2区　砂礫層出土土器実測図(3)　S＝1:3

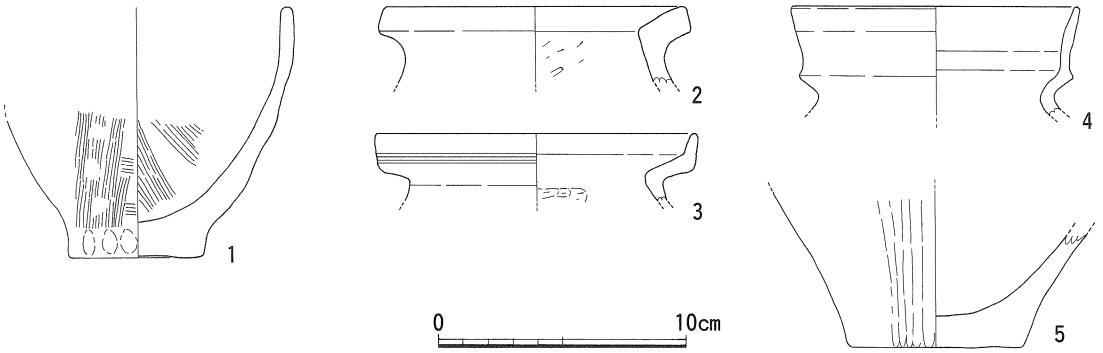
### (3) Ⅲ－3区

Ⅲ－2区の北西側に位置する。この地区もⅢ－2区から北西に拡張して調査を実施した。Ⅲ区自体が狭いため、調査の際にはⅢ－1区を北側に拡張するように掘り下げた。この調査区についても調査区は南北約14m、東西8mに設定した。調査終了直前に調査区が再び水没したため、西壁のセクションが図示できなかったが、堆積状況は、基本的に前の2つの調査区と同様である。ただ、Ⅲ－2区との境界付近のごく一部で、青灰色砂礫層の上に灰茶色砂層が存在する箇所があり、この層の中から土器が出土した。また、北西壁のセクションでは、青灰色砂礫層、褐色粘質土の検出面は他の調査区よりやや深いが、わずかに認められるアカホヤ火山灰層は逆にやや高い位置で検出されており、青灰色砂礫層が堆積する際に褐色粘質土が削られているものと見られる。

### Ⅲ－3区出土遺物

この調査区でも縄文時代以降、各時代の遺物が出土した。第16図は灰茶色砂層出土の土器でいずれも弥生時代のものである。1は直口の鉢で、ヨコナデとハケメで調整し、底部には指頭圧痕が

残る。2〜4は甕である。2は風化のため詳細は不明だが、無文のものとみられ、内面頸部以下はヘラケズリが施される。3は口縁部に平行沈線をもち、内面頸部以下をヘラケズリする。4は口縁端部が大きく拡張する。5は底部で外面ヘラミガキ、内面ナデ調整である。遺物の時期は、1が出雲Ⅰ〜Ⅱ様式、2・3が同Ⅴ−1様式、4が同Ⅴ−4様式に相当するとみられるが、灰茶色砂層自体は二次堆積で、遺物の時期とは異なる。

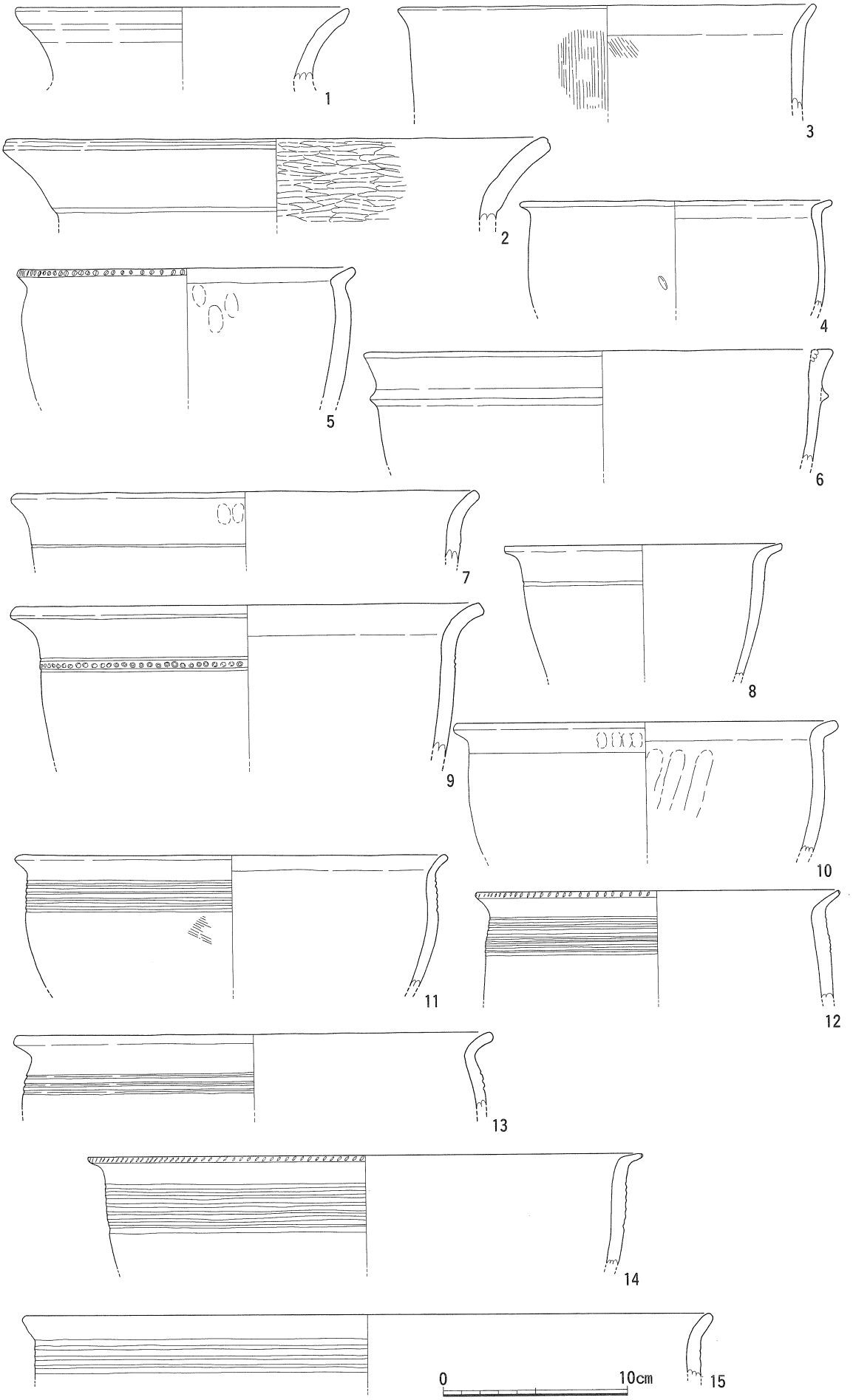



**第16図　Ⅲ−3区　灰茶色砂層出土土器実測図　S＝1:3**

第17図〜第21図は青灰色砂礫層から出土した土器類で、第19図までが弥生土器、第20図が古墳時代前期〜中期の土師器、第22図に須恵器と奈良時代以降の土師器を図示した。

第17図1・2は壺、3〜5、7〜15は甕、6は鉢である。1は口縁が緩やかに外反し端部に面をもつ。2は頸部に段を有し、内面は細かいヘラミガキを施す大形のものである。3は口縁部が外傾し頸部から胴部へ直線的に続く。4・5は口縁部が短く外反するもので、5は口縁部に刻目文が施される。6は口縁部が肥厚し、上側には面をもつ。頸部には断面三角形の突帯を有する。7・8は頸部に1条の沈線が施される。9は頸部の2条のヘラ描き沈線の間に、竹管状工具によるスタンプ文が施される。10は頸部に細く鋭い沈線が施され、外面頸部と内面に指頭圧痕が残る。11〜15は頸部のヘラ描き沈線が多条化するものである。ナデ調整のものが多いが、11の外面にはハケメも認められる。また、12・14は口縁部に刻目文をもつ。時期は2が出雲Ⅰ−2様式、1・3〜10が出雲Ⅰ−3様式、11〜15が出雲Ⅰ−4様式に相当すると考えられるが、6については口縁形態から、出雲Ⅲ様式ぐらいまで下る可能性もある。

第18図1・2は壺、3〜14は甕、15・16は鉢と考えられる。1は口縁部が大きく外反するもので、上面には2条の指頭圧痕突帯、外面には2条単位の斜格子文を施す。2は頸部から口縁部へ直線的に外傾し、端部上面に円形浮文を貼り付ける。頸部には複数の刻目突帯をもつ。3は口縁部のみの破片で、刻目文が施される。4・5は口縁が短く外反し、端部には刻目文が施される。頸部にはクシ描きの平行沈線をもつ。6・7は頸部が外へ屈曲するもので、6は口縁端部が丸みをもつが、7はわずかに肥厚し面をもつ。また、6の頸部には指頭圧痕突帯が巡らされる。8〜10は口縁部が短く外反する無文のものである。8・9は外面ハケメ、内面はナデで調整され、8は内面に部分的にヘラミガキを施す。11は口縁部のみであるが、頸部が外へ鋭く屈曲するものとみられる。風化のため、調整など詳細は不明だが口縁端部には刻目文が認められる。12〜14は、頸部が外へ屈曲し、口縁部が肥厚・拡張して平行沈線をもつものである。口縁部の肥厚はわずかで、施される沈線はいずれも2条である。調整は口縁部〜頸部付近がヨコナデ、胴部は12をのぞきハケメが認めら

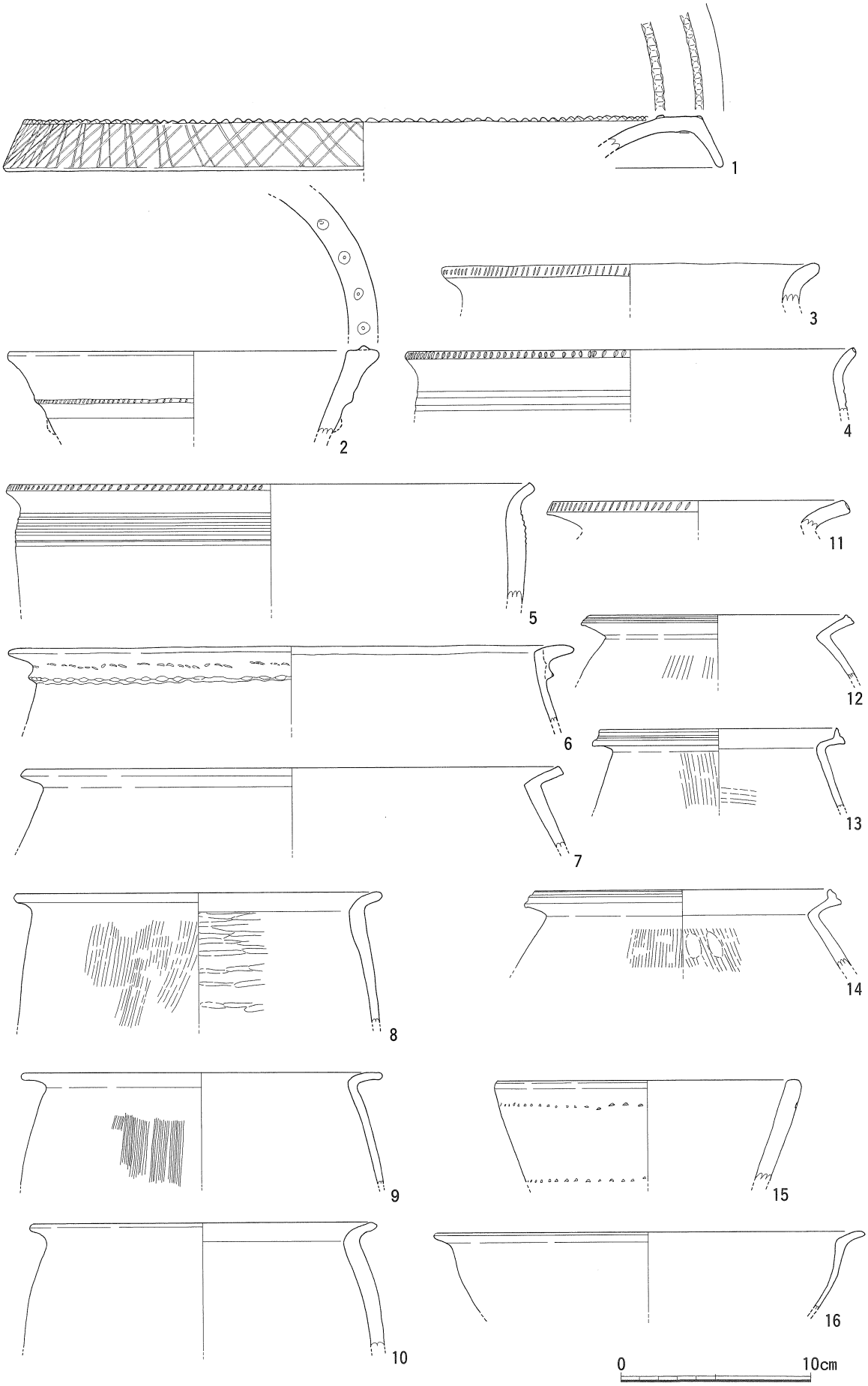



第17図　Ⅲ－3区　砂礫層出土土器実測図(1)　S＝1:3

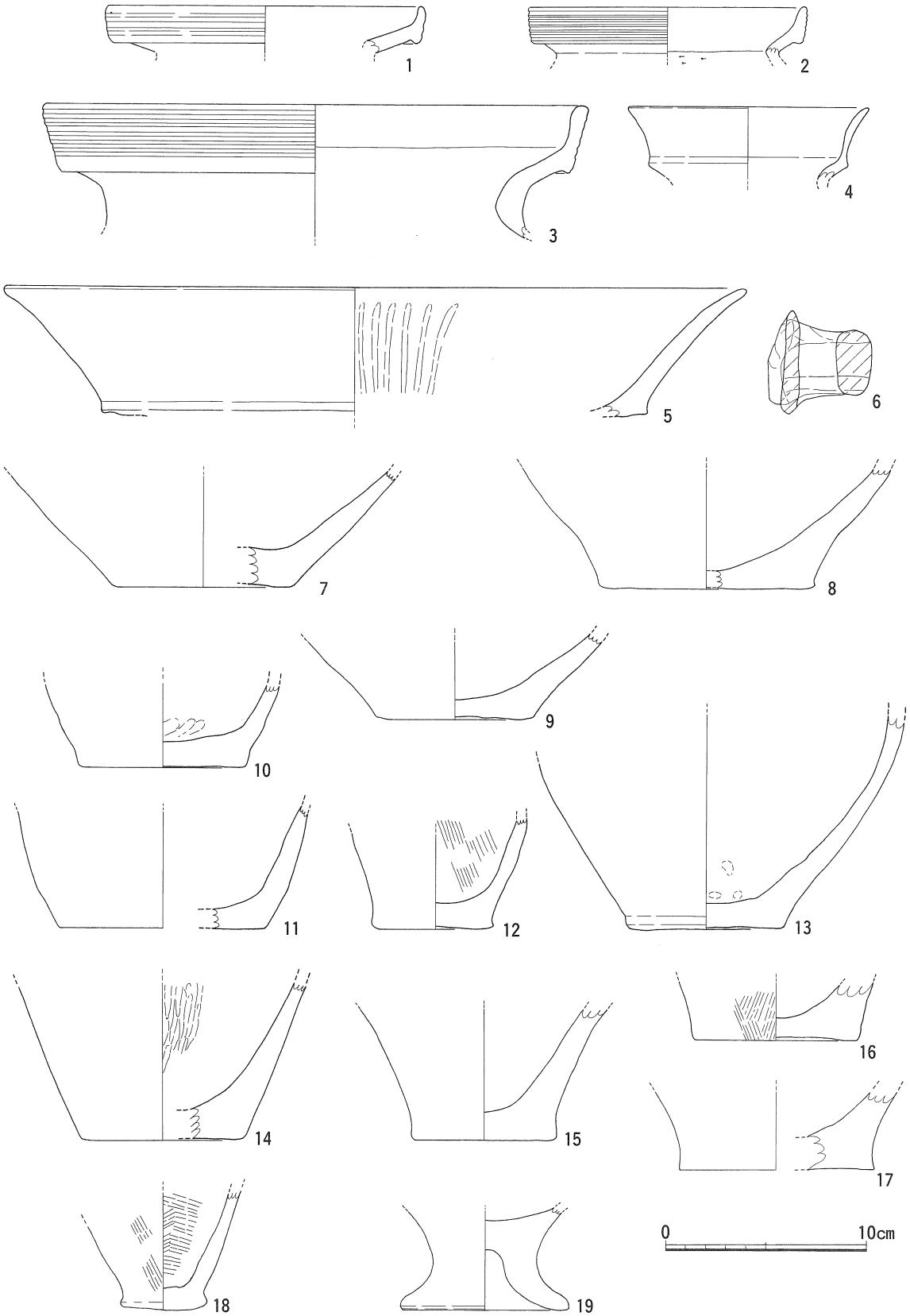
れる。15は厚い器壁をもつ直口の口縁で、三角形の刺突文が2列認められる。この地方ではあまり見られない器形だが、備前の弥生時代中期の鉢にこのような口縁をもつものが存在するようである[12]。16は風化が著しく器壁の厚さも本来よりかなり薄いものと見られる。調整も不明だが、一応鉢としておくが、高坏の可能性もある。遺物の時期は、3～5・8・15が出雲Ⅱ－1様式、2・6～10・16が出雲Ⅲ－1様式、1・11が出雲Ⅲ－2様式、12～14が出雲Ⅳ－1様式に相当すると考えられる。

第19図1・2・4は甕、3は壺、5は鼓形器台、6は把手、7～19は底部・脚部である。1・2は口縁端部が上下に拡張し、外面に擬凹線を施す。1は口縁部のみの破片で、頸部以下の調整が不明であり、中期の範疇に入る可能性もある。2は内面頸部以下ヘラケズリである。3は複合口縁で6条の擬凹線文が施される。4は口縁部が内湾して外へ開くもので、調整は風化のため不明である。5は大形の鼓形器台で、受部と見られる。内面に縦方向のヘラミガキがかすかに認められる。6は風化のため調整は不明だが、器壁が厚くしっかりしたもので、大形の注口土器またはいわゆる山陰型甑につくものであろう。7～9は大きく外傾して胴部に至るもので、調整が不明な部分もあるが、ナデ調整と見られる。10～13はやや外湾しながら立ち上がるもので、10・13の内面に指頭圧痕が残るほか、12はハケメが施される。14～17は外傾が小さく、直線的またはやや内湾して胴部に至るもので、14の内面にヘラミガキ、16の外面にはハケメが施される。18はやや小形の底部で、手捏の可能性もある。内外面ともハケメが認められる。19は脚部である。器壁は厚く、短く外反して端部は丸くおさめる。遺物の時期は、1・2が出雲Ⅴ－1様式、3が出雲Ⅴ－2様式、4・5が出雲Ⅴ－4様式、6が出雲Ⅴ－3～4様式に相当すると考えられる。7～18はヘラケズリが認められないことから出雲Ⅲ－1様式以前、19は出雲Ⅲ－2様式以降と考えられるが、いずれも詳細な時期は特定できない。

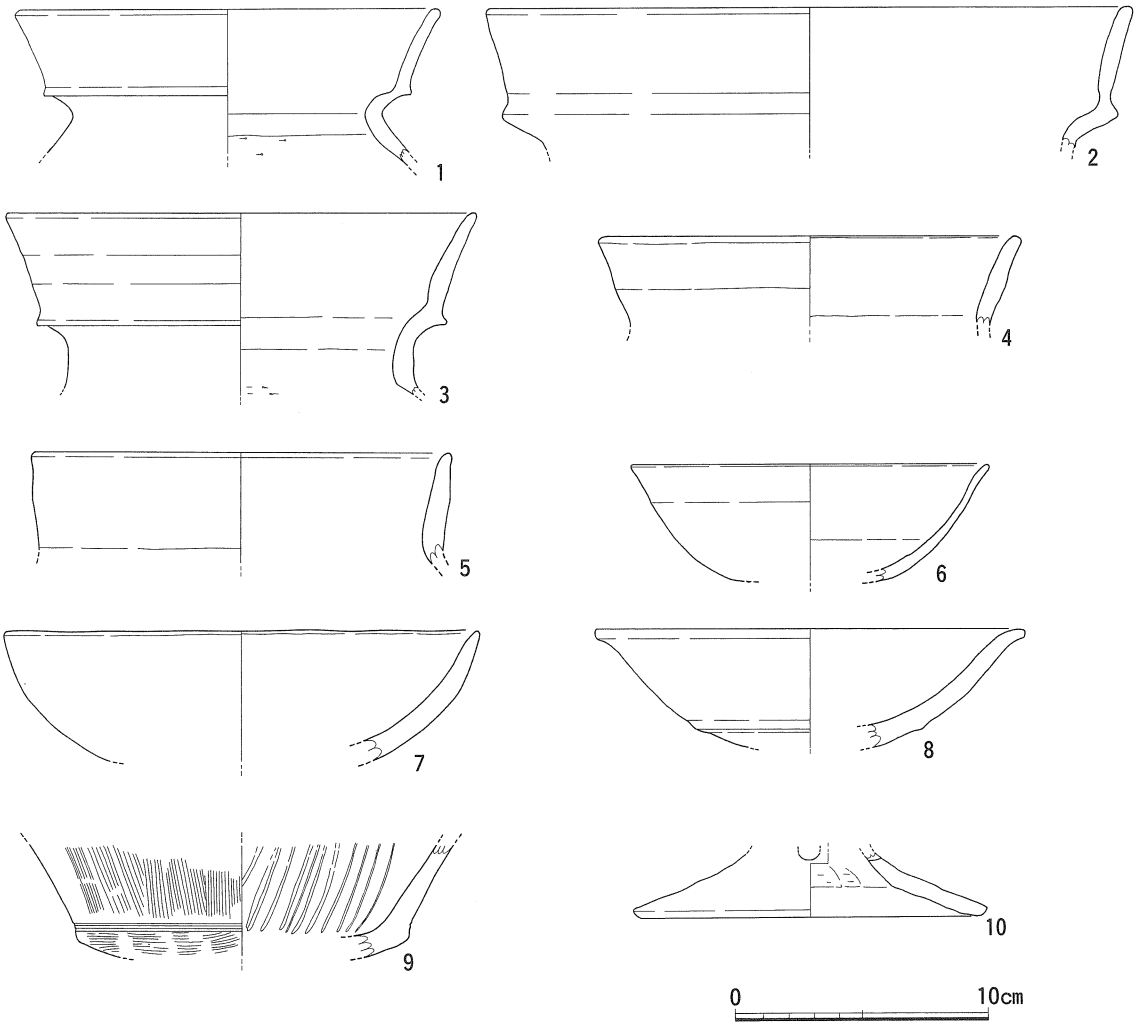
第20図1・4・5は甕、2・3は壺、6～10は高坏とみられる。1は複合口縁で、外方へ直線的に開き、端部がわずかに肥厚する。頸部下位からヘラケズリで調整する。2・3もこれと似た口縁部をもつが、端部や稜が全体に丸みを帯びる。3も頸部の下位からヘラケズリを施す。4・5は単純口縁であるが、口縁部外面にくぼみをもち、複合口縁の痕跡がみられる。6は器壁が薄く、坏部が比較的深いもので、丸底の坏の可能性もある。7は器壁が厚く、口縁端部はやや鋭くなる。8は坏部外面に段をもち、口縁部は外反する。9は坏部外面の段が8よりも強調され、坏部も深い。坏部内面には暗文が施され、外面の段より上側は縦方向、下側は横方向のは細かいハケメで調整される。10は高坏の脚部で、端部に向かって大きく開く。径約1cmの円孔をもち、内面はヘラケズリ、端部付近はナデで調整される。遺物の時期は、1～3が松山編年Ⅰ期、4～10が同Ⅲ期に相当すると考えられる。




第18図　Ⅲ－3区　砂礫層出土土器実測図(2)　S＝1:3




第19図　Ⅲ－3区　砂礫層出土土器実測図(3)　S＝1:3

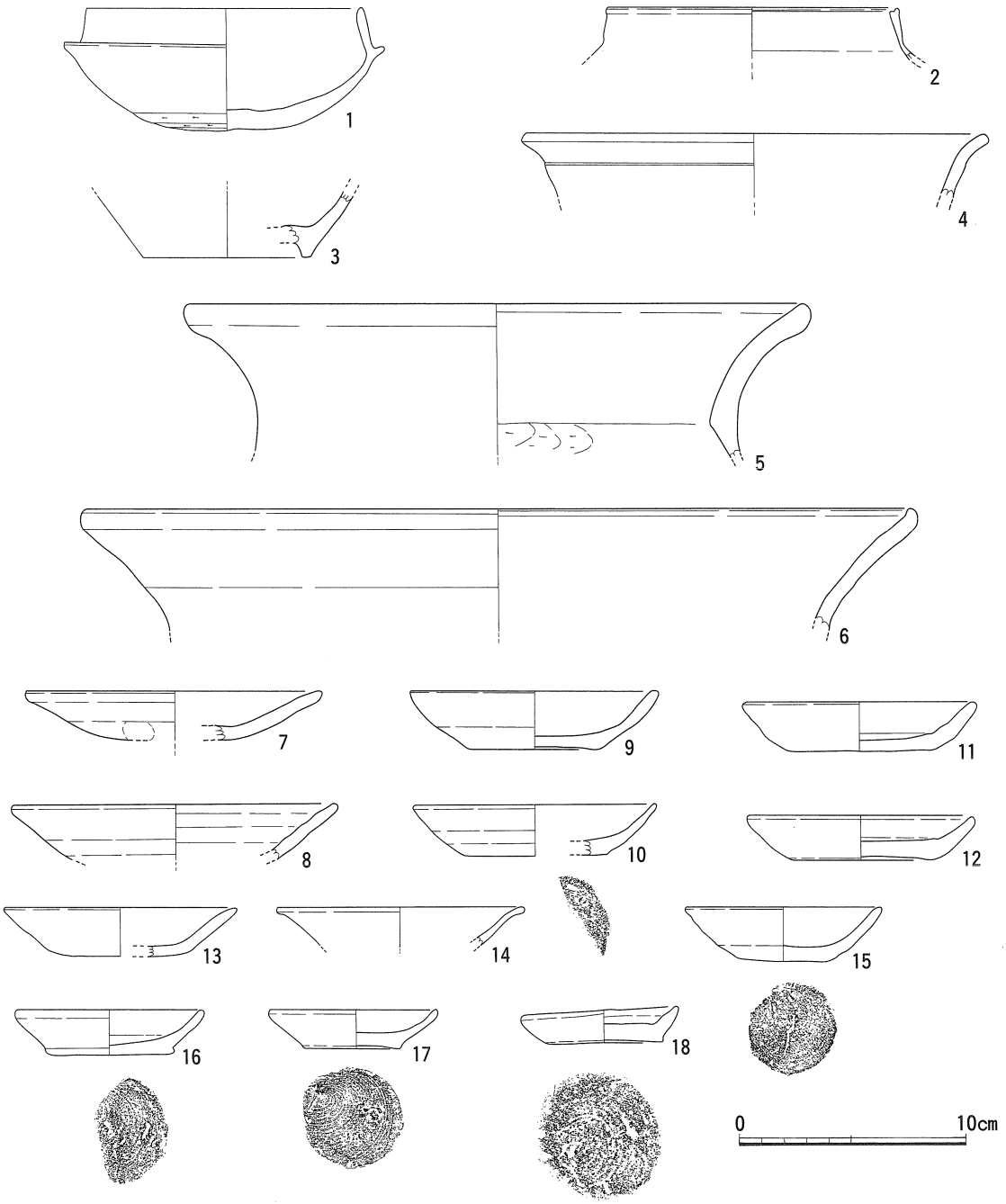



**第20図　Ⅲ－3区　砂礫層出土土器実測図(4)　S＝1:3**

第21図1～4は須恵器で、1・2は坏身、3は底部、4は甕の口縁部である。5以下は土師器で、5・6は甕、7～18は坏である。1は口縁部に沈線などを施さず丸くおさめるもので、底部の狭い範囲にヘラケズリを施すほかは回転ナデで調整する。2も坏身の口縁部付近の破片と考えられ端部には沈線状のくぼみをもつ。3は底部で、短い高台が底部最外周につけられる。4は口縁部が外反し、頸部付近に1条の沈線をもつ。5・6は口縁部が緩やかに外反するもので、5は端部が肥厚し、6は上側につまみ上げられるような形をとる。5では頸部以下はヘラケズリで調整しており、6も頸部を欠くが同様な調整と思われる。7・8は口径に対し底部が小さいもので、回転ナデで調整し、これによる凹凸が内外面に残る。7の外面底部付近には指頭圧痕も認められる。9・10は底部からやや内湾しながら口縁部に至るもので、9では口縁部の器壁が厚くなる。風化のため明瞭ではないが、いずれも回転糸切りで切り離される。11・12は全体的に器壁が厚く、坏部がやや浅いものである。底部は11が糸切り、12はヘラ切りと見られる。13は底部から直線的に口縁部に至り、端部はやや鋭くなるが丸くおさめる。底部まで回転ナデを施しており、ヘラや糸切りの跡は認められない。14は坏部のみで、口縁部は緩やかに外反する。15は坏部外面にわずかな稜をもち、回転糸切りで底部を切り離している。16～18はは底部が外へ張り出すものである。16・17は坏部がやや内湾しながら立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。底部は回転糸切りの痕跡が残る。18は坏部

が短く不整形なものであるが、完形品で底部は回転糸切りである。

遺物の時期は1が大谷編年の出雲3期、2〜6は古墳時代後期〜奈良時代と考えられる。7〜18は古代末〜中世のもので、7〜17が12世紀、18は13〜14世紀とみられる[13]。



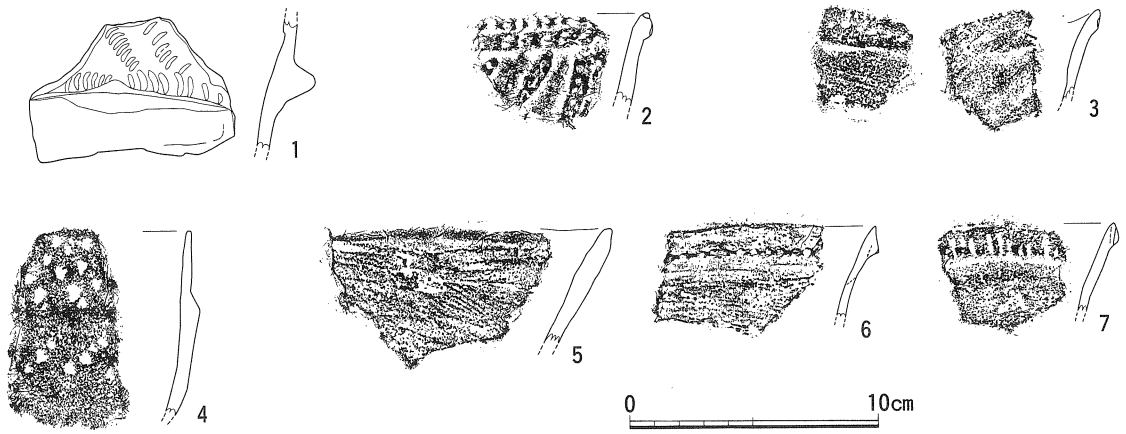

**第21図　Ⅲ－3区　砂礫層出土土器実測図(5)　S＝1:3**

**Ⅲ区出土縄文土器**

第22図は、Ⅲ区から出土した縄文土器をまとめて図示したものである。1は外面に突起をもち、それより上はヘラ状工具による連続刺突文で押引刺突文とも考えられる。下は条痕調整、内面も条痕調整である。2は口縁部で、幅約1cmの隆帯が貼り付けられる。口縁端部と隆帯には半截竹管状工具による刻目文が施され、地文が縄文となっている。3は口縁部が肥厚する波状口縁で、口縁

部外面には刺突文が認められる。4は浅鉢で口縁部付近は器壁が薄くなる。外面全体に刺突文が施される。5は粗製の深鉢で条痕調整である。6・7は突帯文土器で突帯には刻目をもつ。

遺物の時期は、2が縄文時代早期末、1・3・4が前期初頭[14]、5が縄文時代後・晩期、6・7が晩期である。




第22図　Ⅲ区出土　縄文土器実測図　S＝1:3

**その他のⅢ区出土土器**

第23図は、壁の崩落土などから出土した土器のうち図化できるものを掲載した。1〜10は弥生土器、11〜13は土師器、14は須恵器である。

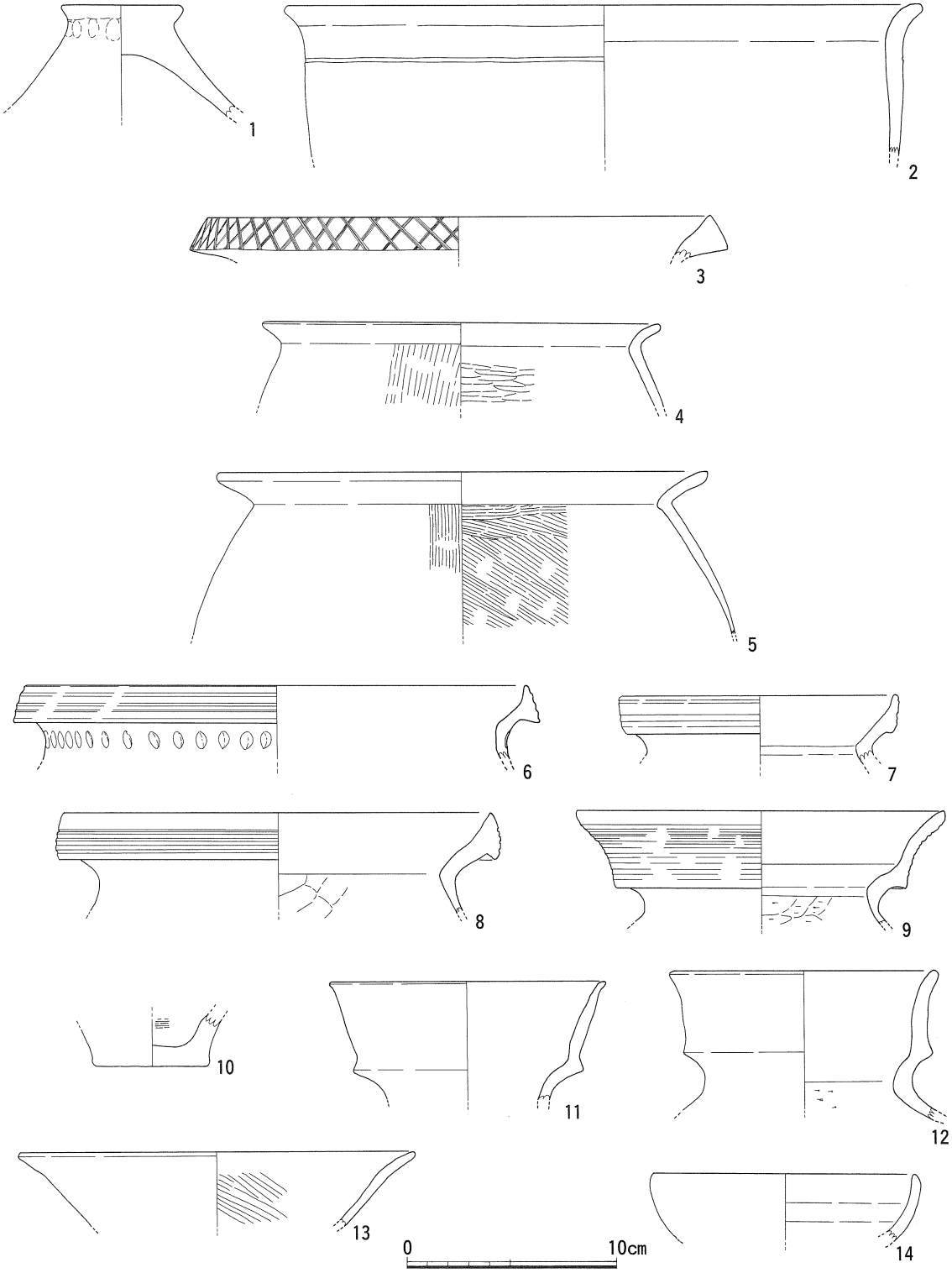
1は蓋で、Ⅲ区から出土したものはこの1点のみである。風化しているが、外面ヘラミガキ、そのほかはナデと見られ、指頭圧痕も一部に残る。2は甕で、頸部にヘラ描き沈線をもつ。3は壺の口縁で、肥厚する端部の外面には2条単位の斜格子文を描く。4・5は甕で、頸部がくの字に屈曲する。胴部はハケメ調整であるが、4の内面はヘラミガキを施す。6〜9も甕である。6は口縁部には4条の擬凹線文、頸部には指頭圧痕文をもつ。調整は風化のため定かではないが、内面頸部はヘラケズリと見られる。7・8は口縁部が肥厚し、外面に3〜4条の沈線をもち内面頸部以下はヘラケズリである。9は口縁部が拡張して外反し、13条の平行沈線を施す。10は底部で、内面の一部にハケメが見られる。11・12は甕で口縁部に沈線文はもたない。11は端部を肥厚させ外面に屈曲させる。12は全体に器壁が厚く、口縁部は外反する。13は高坏と考えられ、内面の一部にハケメが見られる。14は坏で、坏部は内湾し口縁は丸くおさめる。遺物の時期は、1が出雲Ⅰ−3様式、2が同Ⅰ−2様式、3〜5がⅢ−1様式、6〜8がⅤ−1様式、9がⅤ−3様式、11・12がⅤ−4様式である。13は松山編年のⅡ期、14は奈良時代以降と考えられるが詳細は不明である。

**Ⅲ区出土陶磁器**

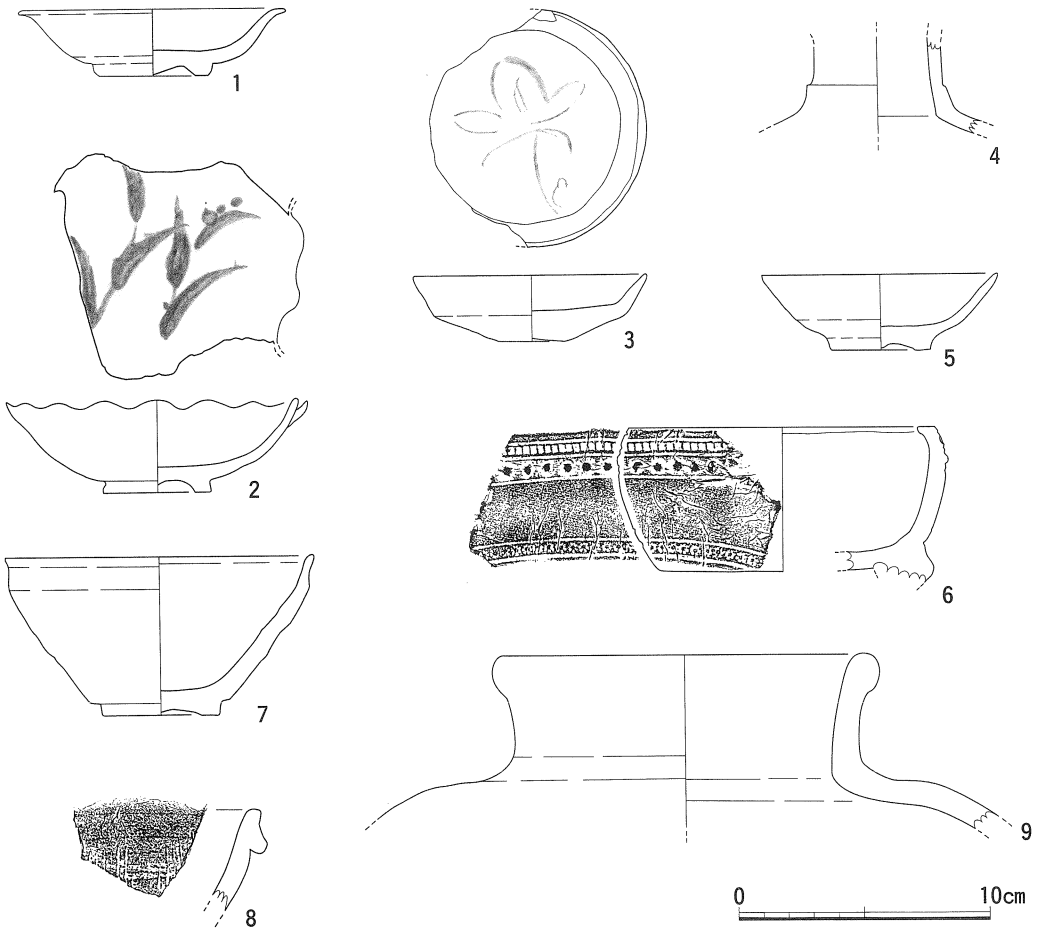
第24図は、Ⅲ区から出土した陶磁器類をまとめたものである。小片のため図化できず、写真掲載のみとしたものもここで合わせて紹介する。

1・2は肥前系の皿である。1は、内面に胎土目が認められる。2は輪花皿で、内面に鉄絵が描かれる。時期はいずれも17世紀第1／4半期である。3は龍泉窯の青磁皿で、大宰府編年[13]の皿1類に比定される。4は広東産の水注ないし瓶である。時期は平安時代である。5は李朝の皿で、高台にも胎土目が認められるものである。6は瓦質の高炉で、中世後半のものである。7は美濃天

目、8は肥前系の摺鉢、10は備前の甕である。写真図版22aは越州窯系の青磁碗1類または2類で、内面に目跡を残す。bは龍泉窯の青磁碗B1または2類で、蓮弁をもつ。cは大宰府編年の碗Ⅷ類である。d・eは肥前系の碗と見られ、17世紀末～18世紀初めと考えられる。出土した地区は1・3～6とb・c・dがⅢ-1区、9がⅢ-2区、2・7・8とa・d・eがⅢ-3区である。




第23図　Ⅲ区出土　土器実測図　S＝1:3




第24図　Ⅲ区出土　陶磁器実測図　S＝1:3

**Ⅲ区出土土製品・銭貨**

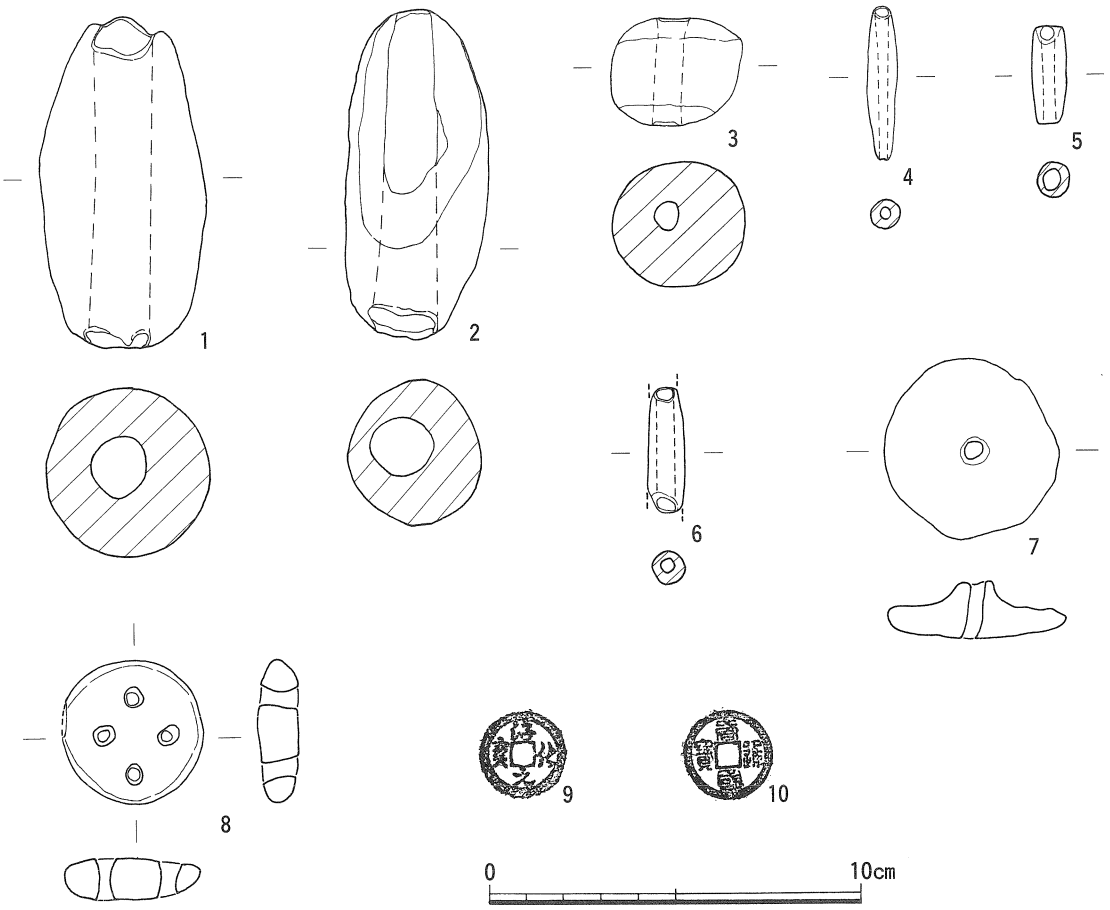
第25図はⅢ区出土の土製品と銭貨を図示した。

1～6は土錘である。1・2は平面が長楕円形で、長さ約9cm、幅約4cmとほぼ同様な大きさのものである。2は長さ2.9cm、幅3.6cmで横幅の方が大きくなるものである。4～6は細身で小形のものである。完形品は4のみで、長さ約4cm、幅約1cmである。7は紡錘車で、欠損する部分があるように見られる。径は約5cm、孔の径は0.5cmである。8は有孔円盤の可能性があるが、孔を4つもつ例はないようであり、詳細は不明である。9・10は輸入銭で、9は淳化元寳（草書・990年初鋳）、10は唐國通寳（蒙書・959年初鋳）である[16]。遺物の出土した地区は、1・3～6・8がⅢ－1区、2・7はⅢ－2区、9・10はⅢ－3区である。

**Ⅲ区出土石製品**

第26・27図には石製品を図示した。第26図2・4、第27図1・2・4・6がⅢ－1区、そのほかはⅢ－3区から出土した。

第26図1は黒曜石製の石鏃で、先端を一部欠いている。2は石包丁の破片である。刃も一部に残存する。紐を通す孔から浅い溝状のくぼみが続き、これは紐による摩滅痕の可能性もある。3は石鎌の破片と見られる。右下のごく一部に刃が残っている。4は石錘で、両端に紐をかけるくぼみをもち、長さ約7cm、幅約5cmである。摩滅が著しく一方の端部を一部欠く。




**第25図　Ⅲ区出土　土製品・銭貨実測図　S＝1:2**

第27図1～3は管玉の未製品及び素材である。いずれも薄い緑色を呈する石材を使用するものである。1は右端付近が厚さ約5㎜になっており、片面に溝の痕跡が残る。2は全体が厚さ約5㎜になっており、右端から約5㎜のところに溝をもつ。図の上端をのぞく3つの端も直線的になっており、打割・研磨の痕跡は明瞭ではないが、一定程度厚さ・長さの調整が行われた段階のものと考えられる。3は前の2者よりやや厚みがある。溝の痕跡は右端にあり、図の表面と裏面の両方から溝を入れている。右側面には擦痕をもつほか図の左上も斜めに切り取られているが、これが玉作に関係するものかどうかは不明である。これらは板状の素材に施溝して柱状の素材を得る擦切技法が認められるものである。

4は表・裏面の一部に平坦面や凹面をもち、擦痕も認められることから砥石とした。きめの細かい軟質の石を使用している。5も片面が凹面になっており砥石と考えられる。砂岩系の石を使用している。6は板状を呈する石材の片面に墨書が残るものである。墨書は2文字のうち上が「冠」ないし「罪」と見られるが、「冠」の可能性が高い。下の文字は「神」である。何らかの祭祀に関わる遺物で、平安時代以降のものと考えられるが詳細な時期や性格については不明である。

### Ⅲ区出土木製品

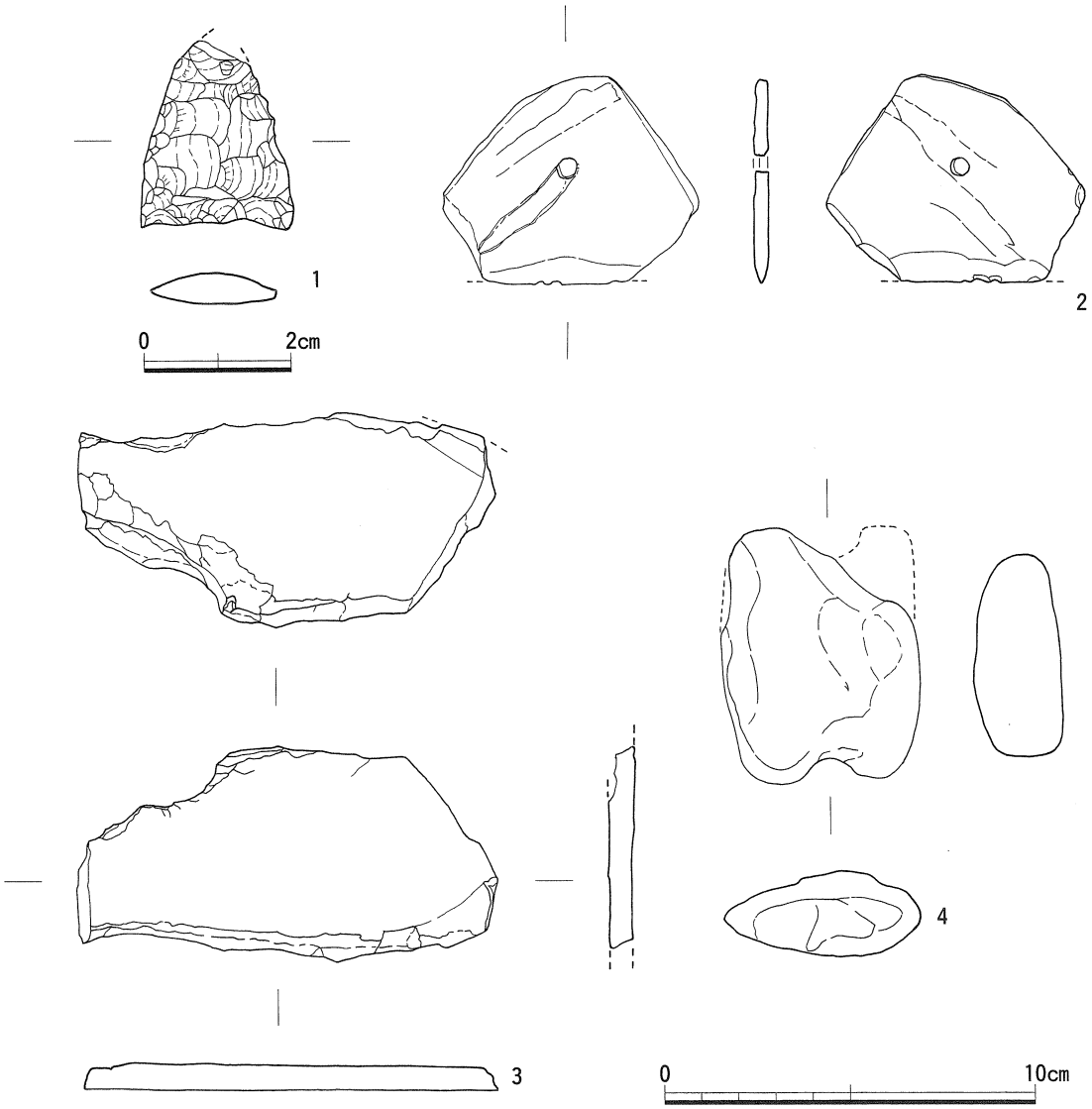
Ⅲ区から出土した木製品を第28・29図に図示した。木製品は、青灰色砂礫層のほか灰茶色砂、青灰色砂質土からも加工痕をもつものが出土しており、それらについても掲載した。

第28図1は椀で、口縁の平面形は楕円になり、口径は長径で15.2㎝となる。2は下駄と考えられる。3は用途不明で、外径約5㎝、中に径2.5㎝の孔をもつ。4は下駄の差し歯と考えられる。

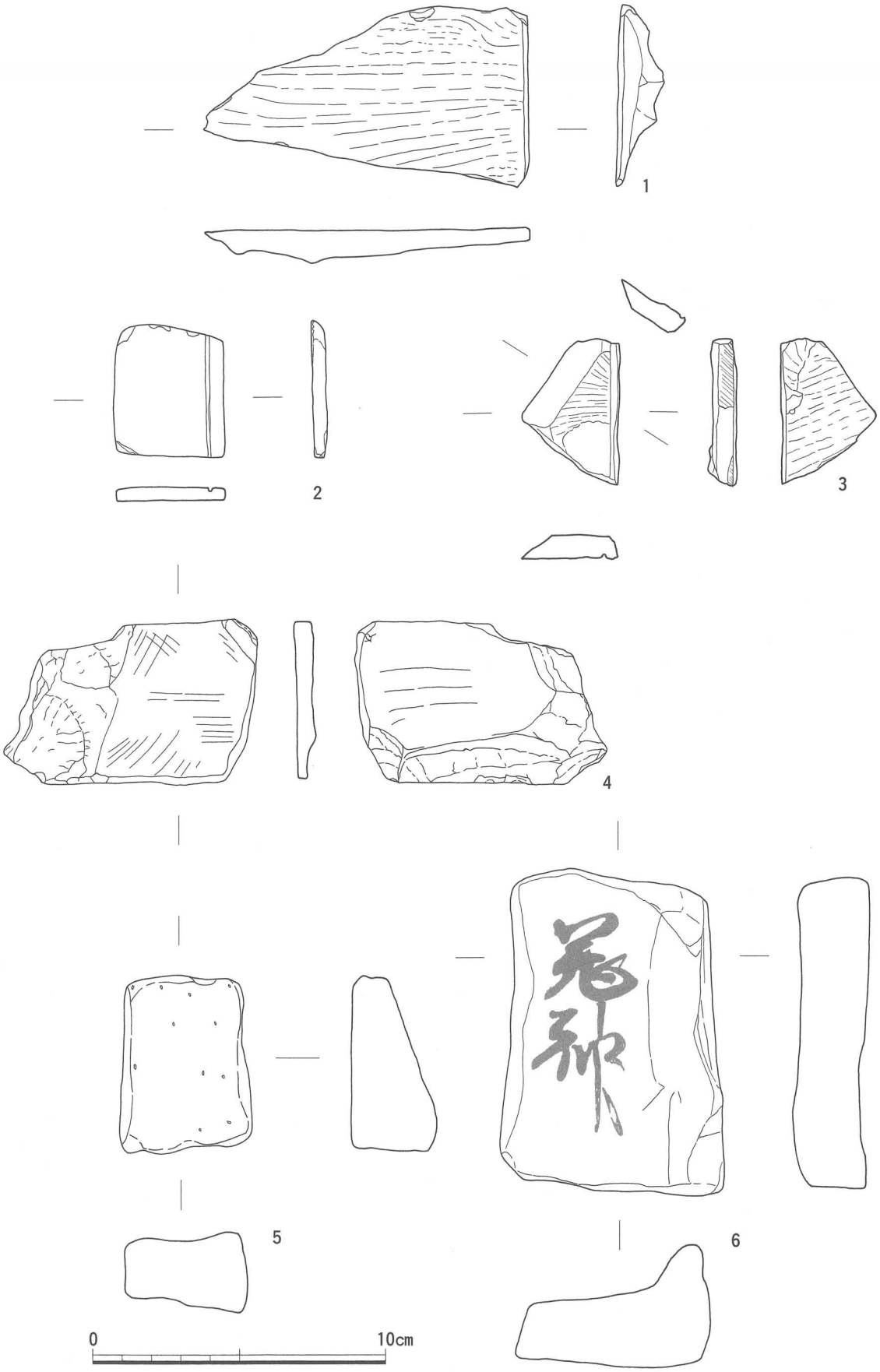
第29図1・2は下駄である。2は一方の端部が斜めにカットされ、中央に3つ、端部に1つの小孔をもつ。3は棒状で一方の端部を欠くが、もう一方の端部には小さな抉りをもつ。4は平面四角形の板状を呈すもので、一方の端部付近に刳り込みがある。両端には計4つの釘孔を有する。5は断面円形の棒状のものである。一方の端部付近に抉りがある。

### Ⅲ区出土動物遺体（写真図版25）

Ⅲ区から出土した動物遺体を掲載した。ウシ、ウマ、シカの骨や歯牙、スッポンの腹甲が検出された[17]。



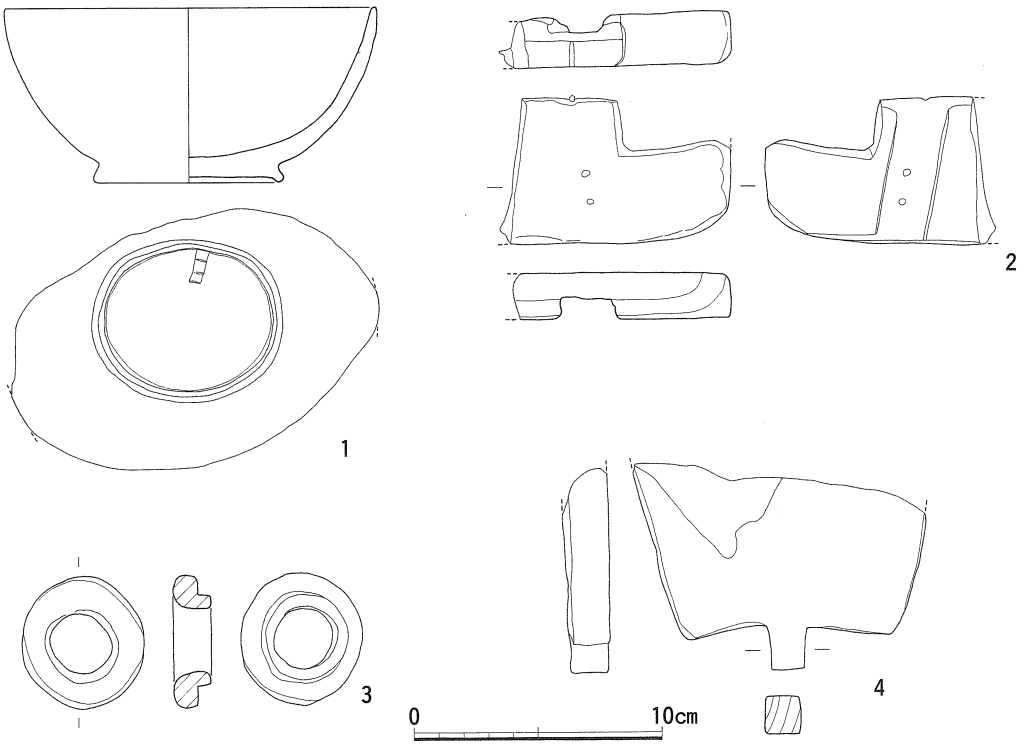

第26図　Ⅲ区出土　石製品実測図(1)　S＝1:2（1のみS=1:1）



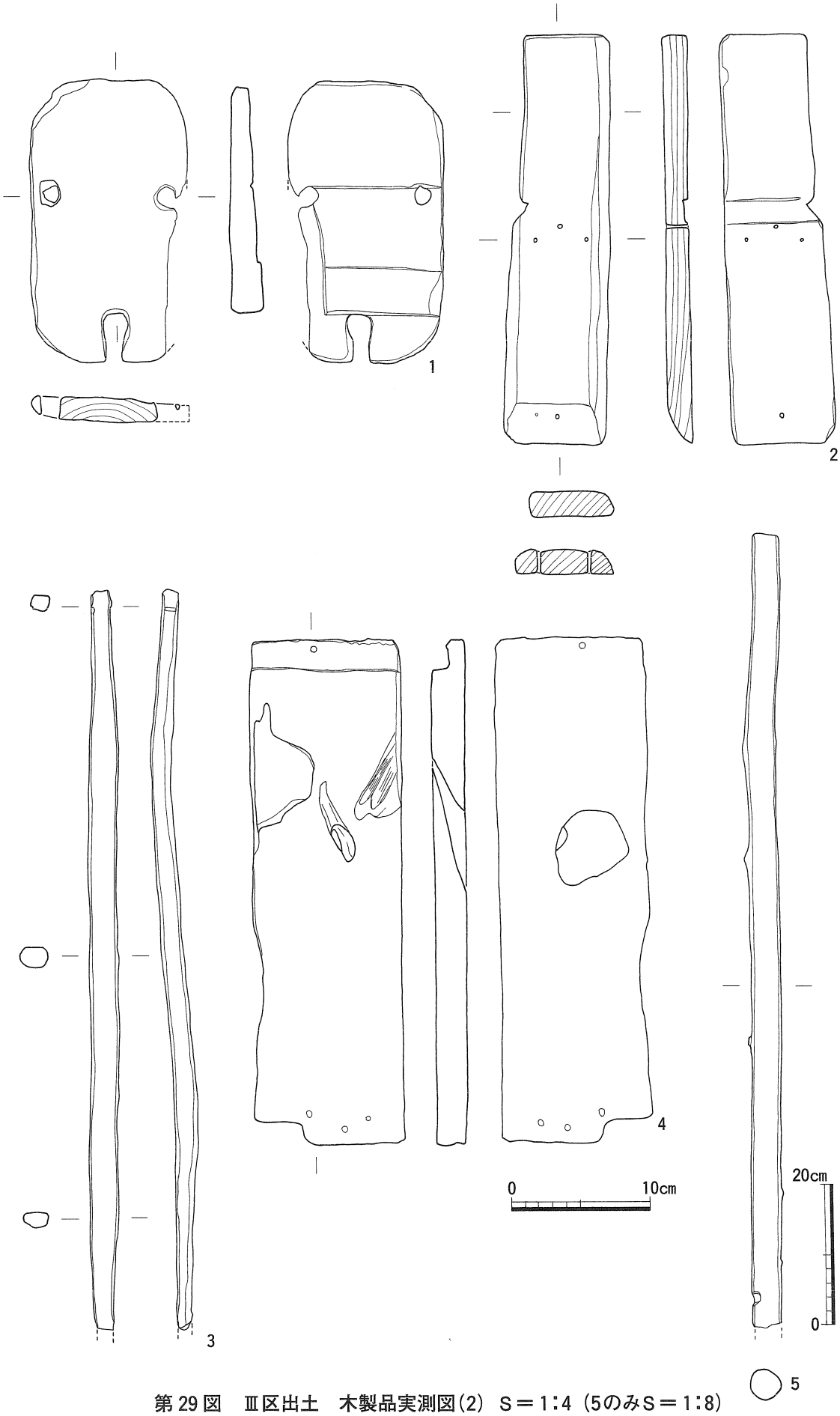

第27図　Ⅲ区出土　石製品実測図(2)　S＝1:2

註

1) 島根県教育委員会『西川津遺跡Ⅵ』 1996
2) 中村唯史氏の御教示による
3) 松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』—山陰・山陽編— 1992
以下、出雲○様式と記載したものはこの編年による。
4) 松山智宏「出雲における古墳時代前半期の土器様相」『島根考古学会誌』第8集 1991
以下、松山編年○期と記載したものはこの編年による。
5) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
以下大谷編年出雲○期と記載したものはこの編年による。
6) 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』 1971
7) 広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第8集 1992
広江耕史・片岡詩子「島根県における古代末～中世にかけての須恵器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 1988
8) 明石市教育委員会・平安博物館『魚住古窯跡群発掘調査報告書』 1985
9) 註7に同じ
10) 註6に同じ
11) 註7に同じ
12) 正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年』—山陰・山陽編— 1992
13) 註7に同じ
14) 井上智博「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』 38－2 1991
15) 輸入陶磁器の時期については山本信夫氏の御教示を得た。他に次の文献を参考にした。
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
16) 永井久美男 編『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭研究会 1994
17) 獣骨・動物遺体鑑定については西本豊弘氏に御指導いただいた。




第28図　Ⅲ区出土　木製品実測図(1)　S＝1:3




第29図　Ⅲ区出土　木製品実測図(2)　S＝1:4（5のみS＝1:8）

## 表２　西川津遺跡Ⅲ区出土土器観察表

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) | | | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 07-01 | 弥生壺 | 19.6 | | | 外面:ヘラミガキ、ナデ<br>内面:ナデ、ヘラミガキ | 青灰色砂礫 | 2mm大の砂粒を含む　淡黄灰色<br>良好 | 頸部に段 |
| 07-02 | 弥生壺 | 17.2 | | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 1～3mm大の砂粒を含む　黄灰色<br>良好 | 頸部:3～5条のヘラ描沈線文、刺突文 |
| 07-03 | 弥生壺 | | | | 外面:ナデ？　内面:ハケメ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　灰白色　良好 | 木葉文？ヘラ描沈線、刺突文 |
| 07-04 | 弥生壺 | | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を含む<br>外面:淡灰褐色　内面:灰色　良好 | 貝殻による羽状文、ヘラ描沈線文 |
| 07-05 | 弥生甕 | | | | 外面:ナデ、ハケメ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm大の砂粒を含む<br>淡灰色～暗灰色　良好 | ヘラ描沈線、刺突文 |
| 07-06 | 弥生甕 | | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 2～3mmの砂粒を少し含む<br>淡黄白色　良好 | 口縁部:クシか貝殻による刻目文 |
| 07-07 | 弥生甕 | 16.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を多く含む　淡褐色<br>良好 | |
| 07-08 | 弥生甕 | 20.8 | | | 外面:指頭圧痕、ハケメ<br>内面:ナデ、ヘラミガキ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 1～3mm大の砂粒を含む<br>外面:淡灰茶色　内面:灰色　良好 | |
| 07-09 | 弥生甕 | 40.8 | | | 外面:ハケメ　内面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡茶褐色　良好 | |
| 07-10 | 弥生甕 | 16.0 | | | 内・外面:ナデ？(風化著しい) | 青灰色砂礫 | 3.5mmまでの砂粒を含む　灰白色<br>良好 | 頸部:最低3本のヘラ描沈線 |
| 07-11 | 弥生鉢 | 20.8 | | | 内・外面:ナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 3mm程度の砂粒を多く含む　外面:暗灰色<br>内面:淡灰色～暗褐色　良好 | 胴部:ヘラによる5条の沈線文 |
| 07-12 | 弥生甕 | 15.8 | | | 外面:ナデ、ハケメ、指頭圧痕<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2～4mmの白く大きな粒を多く含む<br>灰～暗灰色　良好 | 胴部に5条のヘラ描沈線文 |
| 07-13 | 弥生甕 | 15.4 | | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を含む　淡茶灰色<br>良好 | 胴部:ヘラ描7条平行沈線文 |
| 07-14 | 弥生甕 | 17.0 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2～5mm大の白色砂粒を多く含む<br>灰黄色　良好 | 頸部:5条ヘラ描沈線文 |
| 07-15 | 弥生甕 | 35.0 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2～4mmの白い砂粒を含む<br>外面:淡桃白色　内面:灰白色　良好 | 頸部:6条のヘラ描沈線文 |
| 07-16 | 弥生甕 | 36.4 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:刺突文<br>頸部:5条平行沈線文 |
| 08-01 | 弥生壺 | 7.6 | | | 外面:風化のため不明<br>内面:ナデ(指頭圧痕) | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　淡灰色<br>良好 | 頸部:4条クシ描沈線、<br>3条クシ描沈線 |
| 08-02 | 弥生壺 | 26.8 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:灰色　内面:灰白色　良好 | 3条平行沈線文、円形浮文、<br>刻目突帯 |
| 08-03 | 弥生壺 | | | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm大の砂粒を含む　淡灰色<br>良好 | 口縁内面に孤文 |
| 08-04 | 弥生甕 | 13.8 | | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 刻目文、クシ描6条平行沈線文 |
| 08-05 | 弥生甕 | 19.8 | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2～3mmの白い砂粒を含む<br>外面:灰茶色　内面:灰褐色　良好 | 口縁部:刺突文　胴部:4条以上のクシ描平行沈線文 |
| 08-06 | 弥生甕 | 23.2 | | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 胴部:6条平行沈線文 |
| 08-07 | 弥生甕 | 20.6 | | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰白色　良好 | |
| 08-08 | 弥生甕 | 14.6 | | | 内・外面:ヨコナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰橙褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 08-09 | 弥生甕 | 21.0 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡黄白色～淡灰色　内面:灰白色<br>良好 | 口縁部:ヘラ描刻目文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 08-10 | 弥生甕 | 20.8 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:灰白色　内面:灰色　良好 | 口縁部:刻目文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 08-11 | 弥生高坏 | 29.4 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡黄灰色　良好 | 口縁部:刻目文 |
| 08-12 | 弥生高坏 | | 17.0 | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 外面:平行沈線文(2段)、<br>直径4mm位の円孔 |
| 08-13 | 弥生底部 | | 4.2 | | 外面:ハケメ　底部ナデ<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | |
| 08-14 | 弥生底部 | | 11.0 | | 外面:ナデ　内面:ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　淡灰色<br>良好 | |
| 08-15 | 弥生底部 | | 4.5 | | 外面:ナデ<br>内面:底部指頭圧痕　ハケメ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　黒灰色<br>良好 | |
| 08-16 | 弥生底部 | | 5.3 | | 外面:ヘラミガキ　底部ナデ<br>内面:ナデ？(指頭圧痕) | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡橙茶褐色　良好 | |
| 08-17 | 弥生底部 | | 7.4 | | 外面:風化のため不明<br>内面:ナデ(指頭圧痕) | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡黄灰色　内面:淡黒色　良好 | |
| 08-18 | 弥生底部 | | 4.8 | | 外面:ヘラミガキ　底部ナデ<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰～暗灰色　良好 | |
| 08-19 | 弥生底部 | | 4.8 | | 外面:ヘラミガキ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1～2mmの砂粒を含む<br>灰茶色～暗灰色　良好 | |
| 09-01 | 弥生壺 | 27.8 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ、ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>灰白褐色　良好 | 3条平行沈線文、円形スタンプ文、<br>6条の凹線、ヘラ描刺突文 |
| 09-02 | 弥生壺 | | | | 外面:ナデ？<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む　灰白色<br>良好 | クシ描平行沈線、連続刺突文 |
| 09-03 | 弥生甕 | 15.1 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡黄褐色～暗褐色<br>内面:淡黄褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 09-04 | 弥生甕 | 19.6 | | | 外面:頸部ナデ、胴部風化のため不明<br>内面:頸部ヨコナデ　胴部ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　淡灰褐色<br>良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 09-05 | 弥生甕 | 36.4 | | | 外面:ヨコナデ？<br>内面:ヨコナデ？　ヘラケズリ？ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　外面:灰白色<br>内面:暗灰色～灰白色　良好 | 口縁部:浅い沈線文2本 |
| 09-06 | 弥生甕 | 18.6 | | | 外面:ヨコナデ　口縁部風化のため不明<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mmの砂粒を含む　淡茶黄色　良好 | |
| 09-07 | 弥生甕 | 14.8 | | | 外面:ナデ<br>内面:ヨコナデ？ナデ？ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡灰色～暗灰褐色<br>内面:淡灰褐色　良好 | 口縁部:7条平行沈線文 |
| 09-08 | 弥生甕 | 24.5 | | | 外面:頸部ハケメ　他不明<br>内面:頸部ヘラケズリ　他不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　外面:淡褐色<br>内面:灰白色　良好 | |
| 09-09 | 弥生甕 | 16.0 | | | 風化のため調整不明 | 青灰色砂礫 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色～暗灰褐色　良好 | |
| 09-10 | 弥生甕 | 25.0 | | | 外面:ヨコナデ？　内面:口縁部ヨコナデ？頸部ナデ？胴部ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　外面:淡灰褐色<br>内面:淡灰褐色～灰褐色　良好 | 口縁部:浅い平行沈線文 |

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) | | | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 09-11 | 弥生<br>蓋 | 8.4 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　淡灰茶色<br>良好 | |
| 09-12 | 弥生？<br>低脚<br>坏 | 10.8 | | | 外面:ナデ？　内面: ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡<br>桃白色　内面:淡灰白色　良好 | 内面:口縁付近に一部すす付着 |
| 09-13 | 弥生<br>高坏 | | 20.4 | | 外面:ヨコナデ<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　外面:灰<br>褐色　内面:暗灰褐色　良好 | 脚部:3条の沈線 |
| 09-14 | 弥生<br>底部 | | 6.0 | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1～2mmの砂粒を含む<br>外面:淡灰黄褐色　良好 | 壺のミニチュア |
| 09-15 | 弥生<br>壺 | 4.2 | 2.8 | 7.1 | 外面:ナデ(指頭圧痕)<br>内面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　黄褐色<br>良好 | 壺のミニチュア |
| 09-16 | 弥生<br>壺 | | 4.8 | | 外面:ナデ　内面:ナデ<br>底部指頭圧痕 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰白色<br>良好 | 壺のミニチュア |
| 10-01 | 土師<br>甕 | 9.8 | | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>黄灰褐色　良好 | |
| 10-02 | 土師<br>壺？ | 9.2 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>青灰褐色　良好 | |
| 10-03 | 土師<br>坩 | | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を少し含む　黒褐色<br>良好 | |
| 10-04 | 土師<br>壺 | 8.4 | | 14.5 | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む　灰褐色<br>良好 | |
| 10-05 | 土師<br>高坏 | 17.2 | | | 外面:ハケメ、ナデ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ後ヘラミガキ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　茶白色　良好 | |
| 10-06 | 土師<br>高坏 | 17.0 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　外面:淡黄赤<br>褐色　内面:淡茶白色　良好 | 脚部に直径1cmの穴あり |
| 10-07 | 土師<br>高坏 | | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を僅かに含む<br>黄灰褐色　良好 | |
| 10-08 | 土師<br>高坏 | 20.2 | | | 内・外面:ヘラミガキ(タテ方向) | 青灰色砂礫 | 微砂粒を多く含む　黄白色　良好 | |
| 10-09 | 土師<br>高坏 | 15.8 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>外面:暗灰褐色　内面:灰褐色　良好 | |
| 10-10 | 土師<br>高坏？ | 26.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm大の白色砂粒を多く含む<br>橙褐色　良好 | |
| 11-01 | 須恵<br>坏蓋 | 12.0 | | 5.7 | 外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ<br>(後ナデ？)　内面:ナデ、回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む　青灰色<br>良好 | |
| 11-02 | 須恵<br>坏 | 14.8 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を僅かに含む　暗青灰色<br>良好 | |
| 11-03 | 須恵<br>坏 | 12.0 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　灰色　良好 | |
| 11-04 | 須恵<br>坏 | 12.2 | 7.0 | 3.9 | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り<br>内面:回転ナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 密　灰～暗灰色　良好 | |
| 11-05 | 須恵<br>坏？ | 15.6 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　灰色　良好 | |
| 11-06 | 須恵<br>坏？ | 12.2 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　暗青灰色　良好 | |
| 11-07 | 須恵<br>坏 | 7.8 | 5.4 | 1.3 | 外面:ナデ　底部静止糸切り<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　淡灰褐色　良好 | |
| 11-08 | 須恵<br>坏 | | 4.8 | | 外面:ナデ　底部静止糸切り？<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 11-09 | 須恵<br>鉢 | 22.0 | | | 内・外面:ナデ？ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む　淡橙灰色<br>不良 | 東播系 |
| 11-10 | 須恵<br>鉢 | | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　暗灰色　良好 | 東播系 |
| 11-11 | 須恵<br>甕 | 18.6 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 密　灰色　良好 | |
| 11-12 | 瓦器？ | | 12.8 | | 外面:不定方向のケズリ後ナデ<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　灰色　良好 | |
| 12-01 | 土師<br>坏？ | 13.2 | 5.4 | | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り？<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm大の砂粒を僅かに含む　灰茶色<br>良好 | |
| 12-02 | 不明<br>坏 | 15.2 | | | 外面:回転ナデ　底部糸切り？<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む　灰褐色<br>良好 | |
| 12-03 | 土師<br>坏 | 14.8 | | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 密　淡橙灰色　良好 | |
| 12-04 | 土師<br>坏 | 11.0 | 4.8 | | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　外面:明茶色<br>内面:淡褐色　良好 | |
| 12-05 | 土師<br>坏 | 11.6 | 5.6 | | 外面:回転ナデ　内面:回転ナデ<br>底部回転糸切り | 青灰色砂礫 | 密　外面:灰茶色　内面:淡茶褐色<br>良好 | |
| 12-06 | 土師？<br>坏？ | 10.8 | 4.8 | | 外面:回転ナデ　内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 砂粒を含まない　外面:黒灰黄色<br>内面:淡黄茶色　良好 | |
| 12-07 | 土師<br>坏 | 8.8 | 4.2 | | 内・外面:回転ナデ<br>底部風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密　茶黄色<br>良好 | |
| 12-08 | 土師？<br>坏？ | 10.6 | 6.2 | 2.1 | 外面:回転ナデ、回転糸切り<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を僅かに含む　暗灰褐色<br>良好 | |
| 12-09 | 土師<br>坏 | 8.5 | 5.4 | | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 3～4mm大の砂粒を含む　橙褐色<br>良好 | |
| 12-10 | 須恵<br>坏 | 7.2 | 6.4 | 1.5 | 内面・外面:回転ナデ<br>底部回転糸切り | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　淡灰黄色　良好 | |
| 12-11 | 土師<br>坏 | 8.2 | 5.2 | 2.0 | 内・外面:回転ナデ　底部ヘラ切り? | 青灰色砂礫 | 砂粒を含まない　淡茶褐色　良好 | |
| 12-12 | 土師<br>坏？ | 7.0 | 4.6 | 1.3 | 内・外面:ナデ　底部回転糸切り？ | 青灰色砂礫 | 密　淡茶褐色　良好 | |
| 12-13 | 土師<br>坏？ | 7.6 | 6.0 | 1.8 | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>外面:灰褐色<br>内面:茶白色～淡灰色　良好 | |
| 12-14 | 土師<br>坏？ | 9.2 | | | 内・外面:口縁部ヘラミガキ？<br>ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 密　淡茶白色　良好 | |
| 12-15 | 土師<br>坏？ | | 6.6 | | 外面:回転ナデ　内面:回転ナデ<br>底部糸切り | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　淡黄灰色　良好 | 脚台をもつ |
| 12-16 | 土師<br>底部 | | 7.0 | | 外面:回転ナデ　底部糸切り<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　黒灰色　良好 | |
| 12-17 | 土師<br>坏 | | 5.4 | | 外面:回転ナデ　底部糸切り<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含み密<br>茶白色　良好 | 柱状高台付坏 |
| 12-18 | 土師<br>鍋 | 13.2 | | | 内・外面:ナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>黒褐色　良好 | |

| 挿図番号 | 種類 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12-19 | 土師鍋 | 29.2 | | | 外面:ナデ、ハケメ　内面:ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>黒褐色　良好 | |
| 12-20 | 土師土鍋 | 30.8 | | | 外面:ナデ(指頭圧痕)、ハケメ<br>内面:ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　外面:淡茶褐色　内面:淡灰色　良好 | |
| 13-01 | 弥生壺 | | | | 外面:不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　灰黄色　良好 | 貝殻腹縁による羽状文、<br>2条の刻目突帯 |
| 13-02 | 弥生壺 | | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　外面:暗灰色<br>内面:灰色　良好 | 貝殻腹縁による羽状文、沈線文 |
| 13-03 | 弥生壺 | | | | 外面:ナデ、ハケメ　内面:ナデ? | 青灰色砂礫 | 4mm以下の砂粒を多く含む　黄褐色<br>良好 | ヘラ描斜格子文、指頭圧痕浮文 |
| 13-04 | 弥生壺 | 13.6 | | | 内・外面:ナデ? | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 頸部:削出突帯 |
| 13-05 | 弥生壺 | 16.4 | | | 外面:ナデ　内面:ナデ、ヘラケズリ? | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を少し含む<br>淡灰褐色　良好 | 羽状文(クシ状工具)平行沈線文 |
| 13-06 | 弥生甕 | | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 4mm以下の砂粒を含み密<br>淡灰桃褐色　良好 | |
| 13-07 | 弥生甕 | 16.2 | | | 外面:ナデ、ハケメ　頸部指頭圧痕 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　黒褐色<br>良好 | |
| 13-08 | 弥生甕 | 17.0 | | | 外面:ナデ?指頭圧痕<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 13-09 | 弥生甕 | 18.2 | | | 内・外面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰茶色<br>良好 | 5条平行沈線文 |
| 13-10 | 弥生甕 | 25.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を少し含む<br>淡白褐色　良好 | 刻目文、ヘラ描格子文 |
| 13-11 | 弥生壺 | 35.0 | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | 刺突文、ヘラ描平行沈線文、<br>円形スタンプ文 |
| 13-12 | 弥生甕 | 26.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を僅かに含む<br>外面:暗灰褐色　内面:灰褐色　良好 | 口縁部・胸部:刺突文 |
| 14-01 | 弥生?壺 | 6.5 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を含む　淡褐色<br>良好 | |
| 14-02 | 弥生甕 | 17.5 | | | 外面:風化のため不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を含む　淡肌褐色<br>良好 | 斜格子文(2条単位)円形浮文痕跡、刻目突帯 |
| 14-03 | 弥生壺 | 19.0 | | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | – |
| 14-04 | 弥生甕 | 15.8 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密<br>暗青灰褐色　良好 | |
| 14-05 | 弥生甕 | 11.6 | | | 内・外面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　橙灰色<br>良好 | |
| 14-06 | 弥生甕 | 18.4 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰茶色<br>良好 | 口縁部:平行沈線文2条以上 |
| 14-07 | 弥生?脚部 | | 7.0 | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む　淡灰茶褐色<br>良好 | 6本以上の沈線 |
| 14-08 | 弥生底部 | | 7.4 | | 外面:ハケメ　底部ナデ<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を少し含む<br>外面:灰褐色　内面:暗灰褐色　良好 | |
| 14-09 | 弥生底部 | | 7.6 | | 外面:ナデ?　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2～3mmの砂粒を含む　外面:黄褐色、一部橙色　内面:淡灰色　良好 | |
| 14-10 | 弥生底部 | | 6.6 | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　茶褐色<br>良好 | |
| 14-11 | 弥生底部 | | 5.7 | | 外面:底部ナデ　他不明<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を僅かに含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 14-12 | 弥生底部 | | 3.6 | | 外面:風化のため不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を含む　外面:白褐色～淡黒色　内面:白褐色　良好 | |
| 14-13 | 弥生甕 | 4.8 | 1.8 | 4.0 | 内・外面:ナデ(一部指頭圧痕) | 青灰色砂礫 | 2mm程度の砂粒を含む　黒灰色<br>良好 | ミニチュア土器 |
| 14-14 | 土師壺 | 20.6 | | | 外面:ナデ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の白色砂粒を含む<br>外面:黄褐色　内面:灰褐色　良好 | |
| 14-15 | 土師甕 | 17.2 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | |
| 14-16 | 土師甕 | 14.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 14-17 | 土師壺? | 10.4 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>外面:灰褐色　内面:黄灰褐色　良好 | 脚部 |
| 14-18 | 土師高坏 | | 9.8 | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　灰茶色<br>良好 | |
| 14-19 | 土師高坏 | | 10.6 | | 内・外面:ハケメ、ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | |
| 15-01 | 須恵鼎? | 12.4 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　灰黄色　良好 | |
| 15-02 | 須恵坏 | 15.6 | 8.4 | 6.6 | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り<br>内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　外面:暗灰色<br>内面:淡灰色　不良 | |
| 15-03 | 須恵坏 | 16.8 | 11.8 | 7.0 | 内・外面:回転ナデ<br>底部回転糸切り(風化) | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　淡灰色　良好 | |
| 15-04 | 土器甕 | 23.4 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ハケメ後ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | |
| 15-05 | 土師皿? | 13.4 | | | 外面:回転ナデ　内面:回転ナデ? | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密<br>淡灰褐色　良好 | |
| 15-06 | 土師皿 | 12.0 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 15-07 | 土師坏 | 12.6 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　淡明褐色　良好 | |
| 15-08 | 土師坏? | 11.0 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密<br>外面:橙褐色　内面:黒褐色　良好 | |
| 15-09 | 土師坏 | 8.7 | 4.1 | 2.3 | 内・外面:ナデ　底部ヘラ切り? | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　灰白色<br>良好 | |
| 15-10 | 土師坏 | 8.2 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含み密<br>外面:白灰色　内面:灰黒色　良好 | |
| 15-11 | 土師皿? | 7.5 | 5.9 | 1.4 | 外面:回転ナデ　底部ヘラ切り?<br>内面:回転ナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　淡灰褐色<br>良好 | |
| 15-12 | 土師皿 | 7.1 | 4.7 | 1.0 | 外面:風化のため不明<br>内面:回転ナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む<br>外面:淡明褐色　内面:淡褐色　良好 | |
| 15-13 | 土師不明 | | | | 外面:ヨコナデ　底部糸切り?<br>内面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密　淡灰褐色<br>良好 | 足高高台? |
| 16-01 | 弥生鉢 | | 5.4 | | 外面:ヨコナデ、ハケメ、ナデ(指頭圧痕)<br>内面:ヨコナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰白色<br>良好 | |

| 挿図番号 | 種類 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16-02 | 弥生 甕 | 12.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | |
| 16-03 | 弥生 甕 | 12.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:2条平行沈線文 |
| 16-04 | 弥生 甕 | 11.2 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰白色　良好 | |
| 16-05 | 弥生 底部 | | 6.7 | | 外面:ヘラミガキ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡茶色　良好 | |
| 17-01 | 弥生 壺 | | 18.0 | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を少し含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 17-02 | 弥生 壺 | 28.8 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヘラミガキ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む　乳褐色<br>良好 | 頸部に段 |
| 17-03 | 弥生 甕 | 22.2 | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ナデ、ハケメ? | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む　外面:茶褐色　内面:黒茶褐色　良好 | |
| 17-04 | 弥生 甕 | 16.4 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 4mm以下の砂粒を含む　外面:風化のため不明　内面:赤茶褐色　良好 | 外面に籾痕あり |
| 17-05 | 弥生 甕 | 18.0 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ?<br>内面:ヨコナデ、ナデ(一部指頭圧痕) | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | |
| 17-06 | 弥生 鉢 | 25.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ナデ? | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む<br>黄灰色　良好 | |
| 17-07 | 弥生 壺 | 12.4 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 17-08 | 弥生 壺 | 14.8 | | | 外面:ナデ?風化のため不明(ハケメ?)<br>内面:ナデ、ハケメ? | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>黒褐色　良好 | |
| 17-09 | 弥生 甕 | 15.0 | | | 外面:ナデ　内面:不明のため不明 | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を含む<br>外面:橙灰色　内面:橙褐色　良好 | 2条のヘラ描沈線　竹管状工具による刺突 |
| 17-10 | 弥生 鉢 | 20.4 | | | 外面:頸部指頭圧痕　他不明<br>内:胴部指頭圧痕　他不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | |
| 17-11 | 弥生 鉢 | 23.0 | | | 外面:ナデ、ハケメ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を含む<br>外面:茶褐色　内面:淡褐色　良好 | 外面:6状ヘラ描沈線文 |
| 17-12 | 弥生 甕 | 19.4 | | | 内・外面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:刺突文<br>肩部:8条平行沈線文 |
| 17-13 | 弥生 甕 | 25.5 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:茶白色　内面:灰褐色　良好 | 外面:3条ヘラ描沈線文 |
| 17-14 | 弥生 甕 | 30.0 | | | 外面:ナデ　内面:ヨコナデ、ナデ? | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>黒褐色　良好 | 刻目文、7条ヘラ描平行沈線文 |
| 17-15 | 弥生 甕 | 36.8 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | 4条平行沈線文 |
| 18-01 | 弥生 壺 | 37.6 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む<br>黄褐色　良好 | 2条のヘラ描?斜格子文、<br>刻目突帯 |
| 18-02 | 弥生 壺 | 19.2 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む<br>淡茶灰色　良好 | 口縁部:突起状浮文<br>頸部:刻目突帯 |
| 18-03 | 弥生 甕 | 19.4 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>淡灰褐色　良好 | 口縁部:刻目文 |
| 18-04 | 弥生 甕 | 23.4 | | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:刻目文<br>肩部:2条平行沈線文 |
| 18-05 | 弥生 甕 | 27.2 | | | 内・外面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を少し含む<br>灰白色　良好 | 刺突文、6条クシ描平行沈線文 |
| 18-06 | 弥生 甕 | 29.8 | | | 外面:ナデ　頸部指頭圧痕(爪)<br>内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含み密<br>暗灰褐色　良好 | 頸部:指頭圧痕突帯 |
| 18-07 | 弥生 甕 | 28.0 | | | 風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | |
| 18-08 | 弥生 甕 | 19.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ(一部ヘラミガキ) | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>外面:黒褐色　内面:灰褐色　良好 | |
| 18-09 | 弥生 甕 | 18.2 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>外面:暗灰褐色　内面:灰褐色　良好 | |
| 18-10 | 弥生 甕 | 17.6 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | |
| 18-11 | 弥生 甕 | 15.4 | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:刻目文 |
| 18-12 | 弥生 甕 | 13.6 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>淡灰褐色　良好 | 口縁部:2条平行沈線文 |
| 18-13 | 弥生 甕 | 12.4 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:平行沈線文 |
| 18-14 | 弥生 甕 | 15.6 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ、指頭圧痕 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:平行沈線文 |
| 18-15 | 弥生 鉢? | 15.8 | | | 外面:風化のため不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>黒褐色　良好 | 刺突文 |
| 18-16 | 弥生 鉢 | 22.8 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:白灰色　内面:白褐色　良好 | |
| 19-01 | 弥生 甕 | 15.4 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 19-02 | 弥生 甕 | 13.6 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:6条平行沈線文 |
| 19-03 | 弥生 甕 | 26.6 | | | 外面:風化のため調整不明<br>内面:口縁部ヨコナデ　他不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>黄褐色　良好 | 口縁部:6条平行沈線文 |
| 19-04 | 弥生 甕 | 11.8 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　黄褐色<br>良好 | |
| 19-05 | 弥生 器台 | 34.4 | | | 外面:風化のため不明<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　灰白色<br>良好 | |
| 19-06 | 弥生 把手 | | | | 外面:ヘラケズリ?ナデ? | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　白黄色～<br>淡黒褐色　良好 | |
| 19-07 | 弥生 底部 | | 9.0 | | 外面:風化のため不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 19-08 | 弥生 底部 | | 10.2 | | 内・外面:ナデ? | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を多く含む　淡黄褐色<br>良好 | |
| 19-09 | 弥生 底部 | | 7.8 | | 外面:不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 4mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰橙褐色　良好 | |
| 19-10 | 弥生 底部 | | 8.3 | | 外面:ナデ?<br>内面:ナデ(指頭圧痕) | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を含む<br>内・外面:不明　良好 | |
| 19-11 | 弥生 底部 | | 10.3 | | 外面:風化のため不明　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　淡灰褐色<br>良好 | |
| 19-12 | 弥生 底部 | | 5.7 | | 外面:ナデ　内面:ハケメ、ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含む　外面:淡赤褐色　内面:暗灰茶褐色　良好 | |

| 挿図番号 | 種類 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 19-13 | 弥生 底部 | | 7.5 | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 4mm以下の砂粒を含む　淡黄褐色 良好 | |
| 19-14 | 弥生 底部 | | 8.0 | | 外面:ナデ?　内面:ヘラミガキ、ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を含む　外面:淡明褐色　内面:淡暗灰褐色　良好 | |
| 19-15 | 弥生 底部 | | 6.8 | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色　良好 | |
| 19-16 | 弥生 底部 | | 7.8 | | 外面:ハケメ　底部ナデ　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色　良好 | |
| 19-17 | 弥生 底部 | | 9.6 | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 4mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色　良好 | |
| 19-18 | 弥生 底部 | | 4.2 | | 内・外面:ナデ、ハケメ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　淡灰褐色 良好 | ミニチュア土器 |
| 19-19 | 弥生 脚部 | | 8.0 | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色 良好 | |
| 20-01 | 土師 甕 | 16.2 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む　灰褐色 良好 | |
| 20-02 | 土師 壺? | 25.4 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む　茶白色 良好 | |
| 20-03 | 土師 壺 | 16.4 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色 良好 | |
| 20-04 | 土師 甕 | 16.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ 頸部不明 | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　淡灰色 良好 | |
| 20-05 | 土師 壺 | 16.2 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含む　外面:灰白色　内面:青灰色　良好 | |
| 20-06 | 土師 坏 | 14.0 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密　外面:橙褐色　内面:灰茶褐色　良好 | |
| 20-07 | 土師 高坏 | 18.6 | | | 外面:ヨコナデ後ナデ 内面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密　外面:灰色　内面:灰褐色　良好 | |
| 20-08 | 土師? 高坏 | 16.8 | | | 内・外面:ヨコナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む　灰褐色 良好 | |
| 20-09 | 土師 高坏 | | | | 外面:ハケメ後ナデ 内面:ナデ(暗文あり) | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を僅かに含む 茶褐色　良好 | 坏部:内面に暗文 |
| 20-10 | 土師 脚部 | | 13.4 | | 外面:ヨコナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:淡灰褐色　内面:灰褐色　良好 | 高坏の脚、円形の穿孔あり |
| 21-01 | 須恵 杯身 | 12.2 | | 5.4 | 外面:回転ナデ　底部ヘラケズリ 内面:内面ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を僅かに含み密 青灰色　良好 | |
| 21-02 | 須恵 坏身 | 12.8 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 密　灰色　良好 | |
| 21-03 | 須恵 底部 | | 7.6 | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 微砂粒を含む　外面:暗灰色 内面:淡灰色　良好 | 坏の脚部? |
| 21-04 | 須恵 口縁 | 20.4 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 5mm以下の砂粒を含む　暗灰褐色 良好 | 頸部:1条の沈線有り |
| 21-05 | 土師 甕 | 27.2 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色　良好 | |
| 21-06 | 土師 甕 | 36.6 | | | 内・外面:風化のため不明 | 青灰色砂礫 | 3mm以下の砂粒を含み密　外面:淡灰色　内面:一部赤褐色　良好 | |
| 21-07 | 土師 坏 | 13.0 | | | 外面:回転ナデ(一部指頭圧痕) 内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含む　黄褐色と灰色のまだら　良好 | |
| 21-08 | 土師 坏 | 14.2 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む 淡灰褐色　良好 | |
| 21-09 | 土師 坏 | 10.6 | 5.6 | 2.6 | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含む 淡灰褐色　良好 | |
| 21-10 | 土師 坏 | 10.6 | | | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含み密 淡茶黄色　良好 | |
| 21-11 | 土師 坏 | 10.0 | 6.4 | 2.2 | 内・外面:回転ナデ、回転糸切り | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含み密 暗灰褐色　良好 | |
| 21-12 | 土師 坏 | 9.7 | 6.9 | 2.0 | 外面:回転ナデ　底部ヘラ切り? 内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含み密　黄灰色 良好 | |
| 21-13 | 土師 坏 | 10.1 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰茶色　良好 | |
| 21-14 | 土師 坏? | 10.8 | | | 内・外面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む 淡灰褐色　良好 | |
| 21-15 | 土師 坏 | 8.6 | 3.8 | 2.4 | 内・外面:ロクロナデ 底部回転糸切り | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を少し含み密 灰白色　良好 | |
| 21-16 | 土師 坏 | 8.2 | 5.2 | 2.0 | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含み密 暗灰褐色　良好 | |
| 21-17 | 土師 坏 | 7.4 | 4.3 | 1.7 | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を僅かに含み密 灰褐色　良好 | |
| 21-18 | 土師 坏 | | 5.1 | | 外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ | 青灰色砂礫 | 2mm以下の砂粒を含み密　外面:淡灰褐色　内面:淡茶褐色　良好 | |
| 22-01 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:条痕、ナデ　内面:条痕 | 青灰色砂礫 | 1mm以下の砂粒を含み密　暗褐色～暗茶褐色　良好 | 刺突文 |
| 22-02 | 縄文 深鉢 | | | | 内・外面:ナデ | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を含む　暗灰色　良好 | 刻目突帯 |
| 22-03 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:条痕　内面:ナデ? | 青灰色砂礫 | 3mm大の砂粒を含む　黒灰色～暗褐色　良好 | 波状口縁、口縁外面に刺突文 |
| 22-04 | 縄文 深鉢? | | | | 外面:ナデ?条痕?　内面:ナデ? | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を含む　暗灰色　良好 | 刺突文 |
| 22-05 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:条痕　内面:口縁部ナデ? | 青灰色砂礫 | 2mm大の砂粒を含み密　灰色～暗灰色　良好 | |
| 22-06 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:ナデ、貝殻条痕　内面:ナデ | 青灰色砂礫 | 1mm大の砂粒を多く含む　灰～暗灰色　良好 | 刻目突帯 |
| 22-07 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:ナデ　内面:風化のため不明 | Ⅲ－3 | 2mm大の砂粒を含む　灰白色～灰色　良好 | 刻目突帯 |
| 23-01 | 弥生 蓋 | 5.4 | | | 外面:ナデ?指頭圧痕、ヘラミガキ 内面:ナデ | Ⅲ－1 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡茶褐色　内面:暗灰褐色　良好 | |
| 23-02 | 弥生 甕 | 30.2 | | | 外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ、ナデ | Ⅲ－3 | 3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色　良好 | 頸部:沈線 |
| 23-03 | 弥生 壺 | 24.0 | | | 外面:ナデ?　内面:ヨコナデ? | Ⅲ－1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡灰褐色～灰色　内面:淡灰色　良好 | 口縁部:2条単位の斜格子文 |
| 23-04 | 弥生 甕 | 18.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ?ヘラミガキ | Ⅲ－3 | 1mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色　良好 | |
| 23-05 | 弥生 甕 | 23.2 | | | 内・外面:口縁部ヨコナデ 胴部ハケメ | Ⅲ－1 | 微砂粒を含む　灰黄褐色　良好 | |

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) | | | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 23-06 | 弥生甕 | 23.8 | | | 外面:ナデ?<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ? | Ⅲ－1 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>黄灰褐色　良好 | 口縁部:平行沈線文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 23-07 | 弥生甕 | 13.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | Ⅲ－3 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:平行沈線文 |
| 23-08 | 弥生甕 | 20.4 | | | 外面:ヨコナデ?<br>内面:ヨコナデ?胴部ヘラケズリ | Ⅲ－1 | 1～2mmの砂粒を含む　外面:灰白色<br>～灰黄色　内面:灰白色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文 |
| 23-09 | 弥生甕 | 17.4 | | | 外面:ナデ<br>内面:口縁部ヨコナデ　胴部ヘラケズリ | Ⅲ－1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | 口縁部:13条平行沈線文<br>外面にすす付着 |
| 23-10 | 弥生底部 | | 5.4 | | 外面:ナデ<br>内面:ナデ(一部ハケメ) | Ⅲ－2 | 1～3mmの砂粒を含む　外面:淡灰褐色～橙色　内面:淡灰褐色　良好 | |
| 23-11 | 弥生?甕 | 13.0 | | | 外面:ヨコナデ?<br>内面:ヨコナデ? | Ⅲ－3 | 2mm以下の砂粒を少し含む　灰褐色<br>良好 | |
| 23-12 | 弥生甕 | 12.4 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | Ⅲ－3 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | |
| 23-13 | 土師?<br>高坏? | 18.7 | | | 外面:ヨコナデ?<br>内面:ヨコナデ?　ハケメ | Ⅲ－3 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>暗灰褐色　良好 | |
| 23-14 | 須恵坏 | 12.2 | | | 内・外面:回転ナデ | Ⅲ－1 | 1mm程度の白色砂粒を含み密<br>淡青灰色 | |

## 表3　西川津遺跡Ⅲ区出土陶磁器観察表

| 挿図番号 | 器種 | 口径（cm） | 器高（cm） | 底径（cm） | 胎土 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 24-01 | 皿 | 10.6 | 2.65 | 4.6 | | 淡灰緑色 | 内面に胎土目 |
| 24-02 | 皿 | | | 4.4 | 密 | | 内面に鉄絵 |
| 24-03 | 皿 | 9.4 | 2.6 | 2.4 | | | 龍泉 |
| 24-04 | 水注 | | | | 密 | | 広東産 瓶？ |
| 24-05 | 皿 | 9.4 | 3.0 | 4.0 | 密 | | 李朝　高台に胎土目 |
| 24-06 | 高炉 | 12.2 | | | | | |
| 24-07 | 碗 | 12.4 | 6.3 | 4.7 | 密 | | 美濃天目 |
| 24-08 | 摺鉢 | 15.0 | | | | | 肥前系 |
| 24-09 | 甕 | 22.0 | | | | | 備前 |
| 図版21a | 碗 | | | | | | 越州窯系の青磁 |
| 図版21b | 碗 | | | | | | 龍泉窯の青磁　蓮弁をもつ |
| 図版21c | 碗 | | | | | | |
| 図版21d | 碗 | | | | | | 肥前系 |
| 図版21e | 碗 | | | | | | 肥前系 |

## 表4　西川津遺跡Ⅲ区出土土製品・銭貨観察表

| 挿図番号 | 種類器種 | 法量(cm) 長さ | 最大径 | 孔の径 | 重さ(g) | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25-01 | 土錘 | 8.8 | 4.4 | 1.6 | 136.4 | ナデ | Ⅲ－1 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>黒褐色　良好 | |
| 25-02 | 土錘 | 8.8 | 4.0 | 1.7 | 91.7 | ナデ | Ⅲ－2 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>黒褐色　良好 | |
| 25-03 | 土錘 | 2.9 | 3.6 | 0.7 | 35.5 | ナデ | Ⅲ－1 | 2mm以下の砂粒を少し含む<br>灰褐色　良好 | |
| 25-04 | 土錘 | 4.0 | 0.9 | 0.3 | 2.2 | ナデ | Ⅲ－1 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | |
| 25-05 | 土錘 | 2.6 | 0.9 | 0.4 | 2.6 | ナデ | Ⅲ－1 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>黒褐色　良好 | |
| 25-06 | 土錘 | 3.4 | 1.1 | 1.0 | 2.1 | ナデ | Ⅲ－1 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | |
| 25-07 | 紡錘車? | 4.8 | 4.8 | 0.5 | 21.9 | ナデ？(風化のため調整不明) | Ⅲ－2 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡茶灰色　良好 | |
| 25-08 | 有孔円盤？ | — | 径3.8 | 0.2～0.4 | 14.1 | ナデ？(風化のため調整不明) | Ⅲ－1 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰色　良好 | 4つの孔をもつ |
| 25-09 | 銭貨 | — | 径2.3 | — | 3.3 | | Ⅲ－3 | | 淳化元寳<br>(草書 990年初鋳) |
| 25-10 | 銭貨 | — | 径2.4 | — | 3.7 | | Ⅲ－3 | | 唐國通寳<br>(篆書 959年初鋳) |

## 表5　西川津遺跡Ⅲ区出土石製品観察表

| 挿図番号 | 種別 | 出土場所 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(cm) | 石材 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 26-01 | 石鏃 | Ⅲ－3 | 2.5 | 2.1 | | 2.4 | 黒曜石 | |
| 26-02 | 石包丁 | Ⅲ－1 | 5.5 | 7.0 | | 18.2 | | |
| 26-03 | 石鎌 | Ⅲ－3 | 5.8 | 11.4 | | 74.7 | | |
| 26-04 | 石錘 | Ⅲ－1 | 6.9 | 5.4 | | 76.8 | | |
| 27-01 | 玉素材 | Ⅲ－1 | 6.2 | 11.1 | 1.6 | 77.0 | | 管玉<br>擦切の溝 |
| 27-02 | 玉素材 | Ⅲ－1 | 4.6 | 3.8 | 0.5 | 16.0 | | 管玉<br>擦切の溝 |
| 27-03 | 玉素材 | Ⅲ－3 | 5.0 | 3.3 | 1.0 | 15.2 | | 管玉<br>擦切の溝 |
| 27-04 | 砥石？ | Ⅲ－1 | 5.6 | 8.6 | | 55.5 | | |
| 27-05 | 砥石？ | Ⅲ－3 | 6.2 | 4.6 | | 107.4 | | |
| 27-06 | 不明<br>石製品 | Ⅲ－1 | 11.2 | 7.6 | 10.6 | 396.4 | | 祭祀具？ |

## 表6　西川津遺跡Ⅲ区木製品観察表

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) 長さ | 最大径 | 厚さ | 出土場所 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 28-01 | 椀 | 15.2 | 7.0 | 7.2 | Ⅲ－1　青灰色粘質土 | 高台は平面やや楕円形 |
| 28-02 | 下駄？ | 5.9 | 9.3 | 1.9 | Ⅲ－3　青灰色砂礫層 | |
| 28-03 | 不明 | 5.3 | 5.0 | 2.4 | Ⅲ－3　青灰色砂礫層 | |
| 28-04 | 下駄？ | 11.8 | 8.4 | 1.9 | Ⅲ－2　青灰色粘質土 | |
| 29-01 | 下駄 | 20.0 | 11.3 | 2.4 | Ⅲ－1　青灰色粘質土 | |
| 29-02 | 〃 | 29.2 | 8.0 | | Ⅲ－1　青灰色砂礫層 | |
| 29-03 | 不明 | 47.1 | 2.1 | 1.6 | Ⅲ－3　青灰色砂礫層 | |
| 29-04 | 〃 | 36.9 | 11.0 | | Ⅲ－3　青灰色砂礫層 | |
| 29-05 | 〃 | 112.0 | 5.1 | | Ⅲ－2　青灰色砂礫層 | |

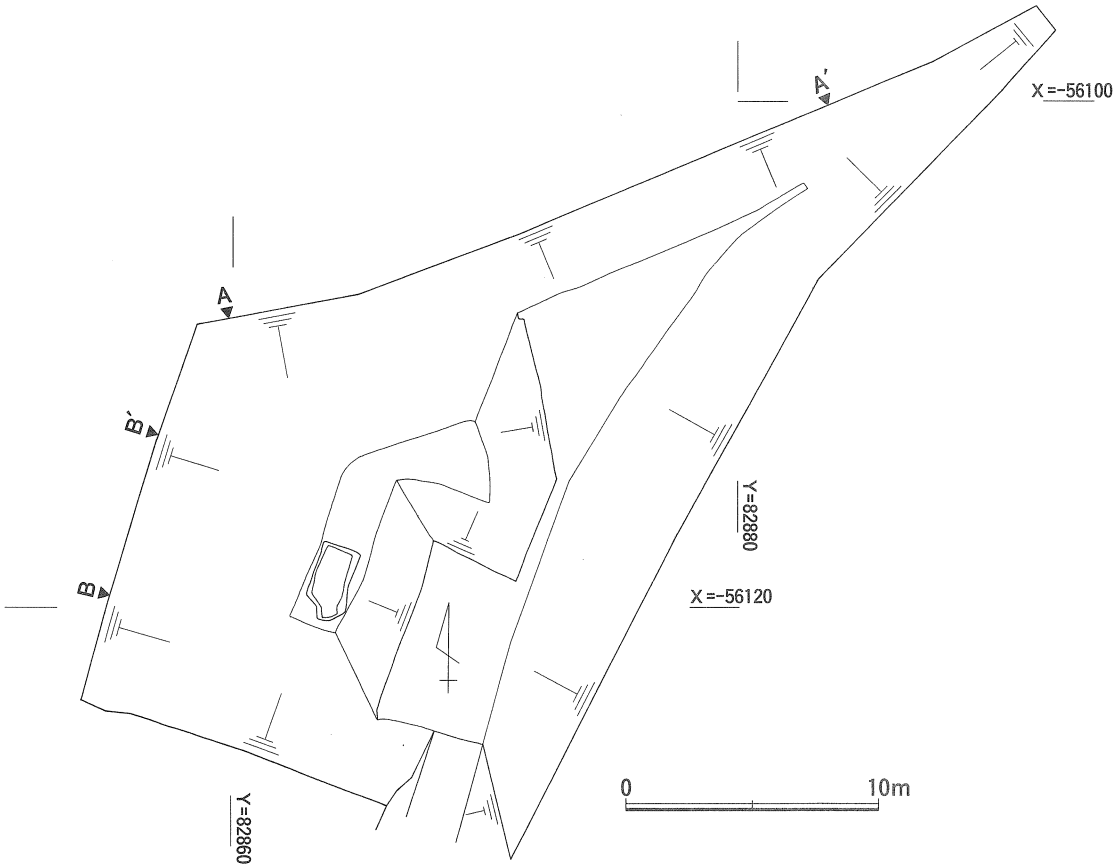
# 第４章　Ⅵ区の調査

## 第１節　調査の経過と概要

### 調査経過

西川津遺跡Ⅵ区は朝酌川と持田川の合流地点付近に位置し、左岸の河川敷を中心とする部分である。海崎橋付近については1983（昭和58）年に調査が実施され、縄文時代の遺構としては土坑、遺物では、早期末～前期の土器を大量に確認している[1)]。このときの地形図を見ると、朝酌川は現在より西側を流路とし、今回調査を行ったⅥ区の位置は水田になっていた。

Ⅵ区は、海崎橋付近で行われた前回の調査区よりさらに約50m上流に所在する。調査区の旧状は、大きく水田部分と河川敷部分に分かれ比高差がおよそ２ｍあったため、水田部分の発掘を先行して土層の確認を行うとともに、比高差を小さくしてから河川敷部分の調査にとりかかった。調査開始時には、遺構や遺物包含層は標高０ｍ付近までに存在しそれ以下は無遺物層と考えていたが、標高０ｍ以下にも遺物包含層が存在することがわかった。無遺物層は適宜重機により除去し、最終的には最深部で標高－２ｍ付近まで掘り下げを行った。水田部分は重機により表土から約１ｍまで除去し、その下位にある青灰色粘質土から人力で掘り下げを行った。河川敷部分は表土のみ薄く除去し、以下は人力で掘り下げた。




第30図　西川津遺跡Ⅵ区　調査区全体図　S＝1:300

### 調査概要

Ⅵ区は、下流で実施された以前の調査で地山が確認され、縄文時代の土壙などが検出されている。今回も遺構の存在が想定されたが、水田部まで含めて調査区全体が朝酌川の旧河道と考えられ、河道内に杭列遺構を検出したほかは遺構は認められなかった。

基本的な層序は、旧水田耕作土を除去すると河川堆積物層が厚く存在し、最下部ではこの付近の基盤層となっている玄武岩が存在する。北壁、西壁それぞれで分層は可能だが、実際の調査ではそれぞれの層位を把握することは困難であった。

主要な遺物包含層は砂礫層1（北壁15層）、砂礫層2（北壁19層・西壁8層）で、ここから弥生時代の土器を中心に遺物が多量に出土した。また、粘質土と細砂の縞状堆積（北壁21層・西壁10層）以下では、砂層と混在する礫層から少量ながら縄文土器が出土し、砂礫層1・2よりも古い時代の堆積があったことを示している。このほか土層図には示すことができなかったが、調査区の南東部に存在する淡青灰色土層から、まとまって土器が出土している。この層は砂礫層1より上層に存在し、土器の時期は全体的に新しいものである。

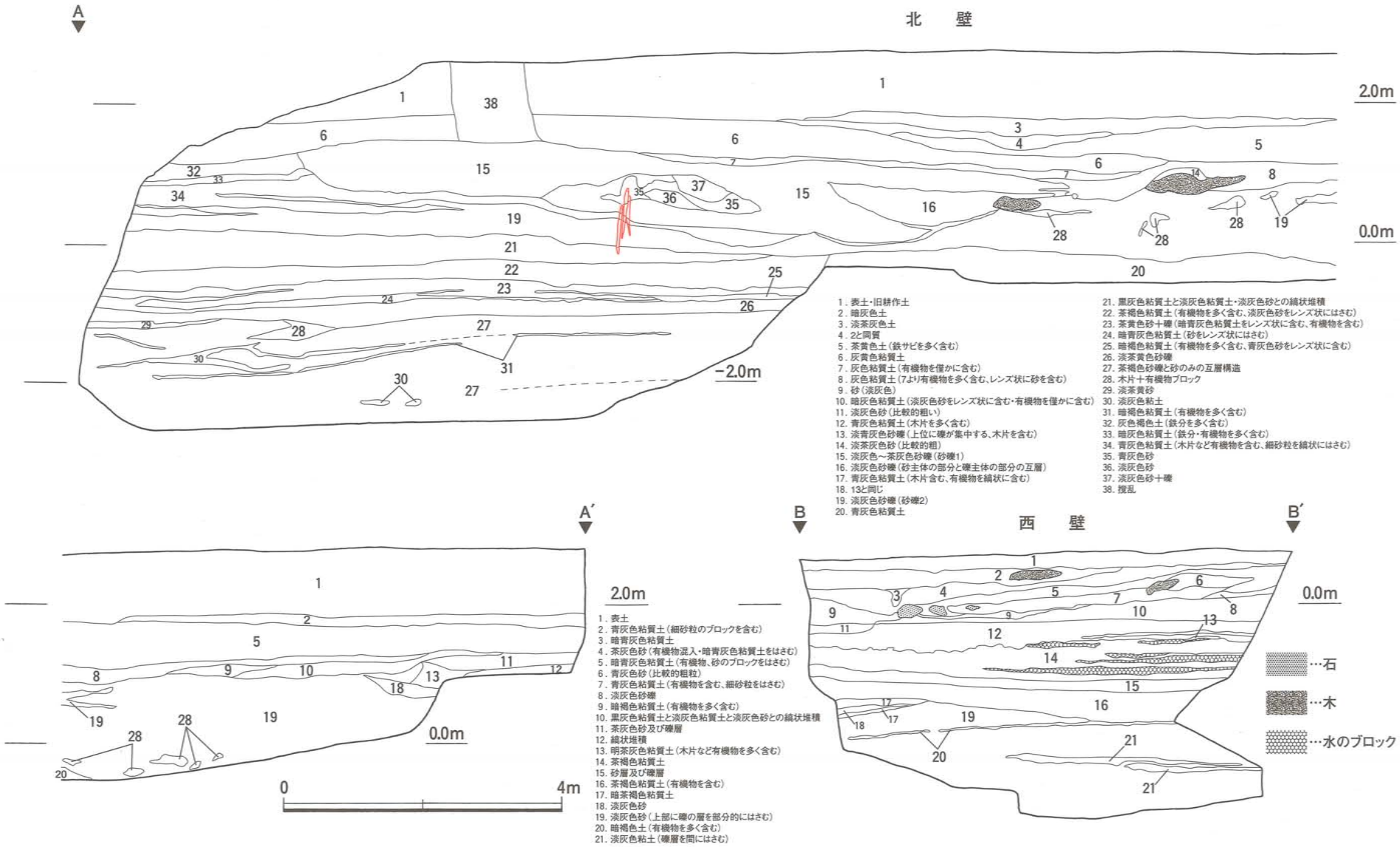
遺物は砂礫層1・2から縄文時代～古墳時代の土器が出土しているほか、磨石などの石製品、分銅形土製品、鋤、杭などの木製品が出土している。

## 第2節　調査の結果

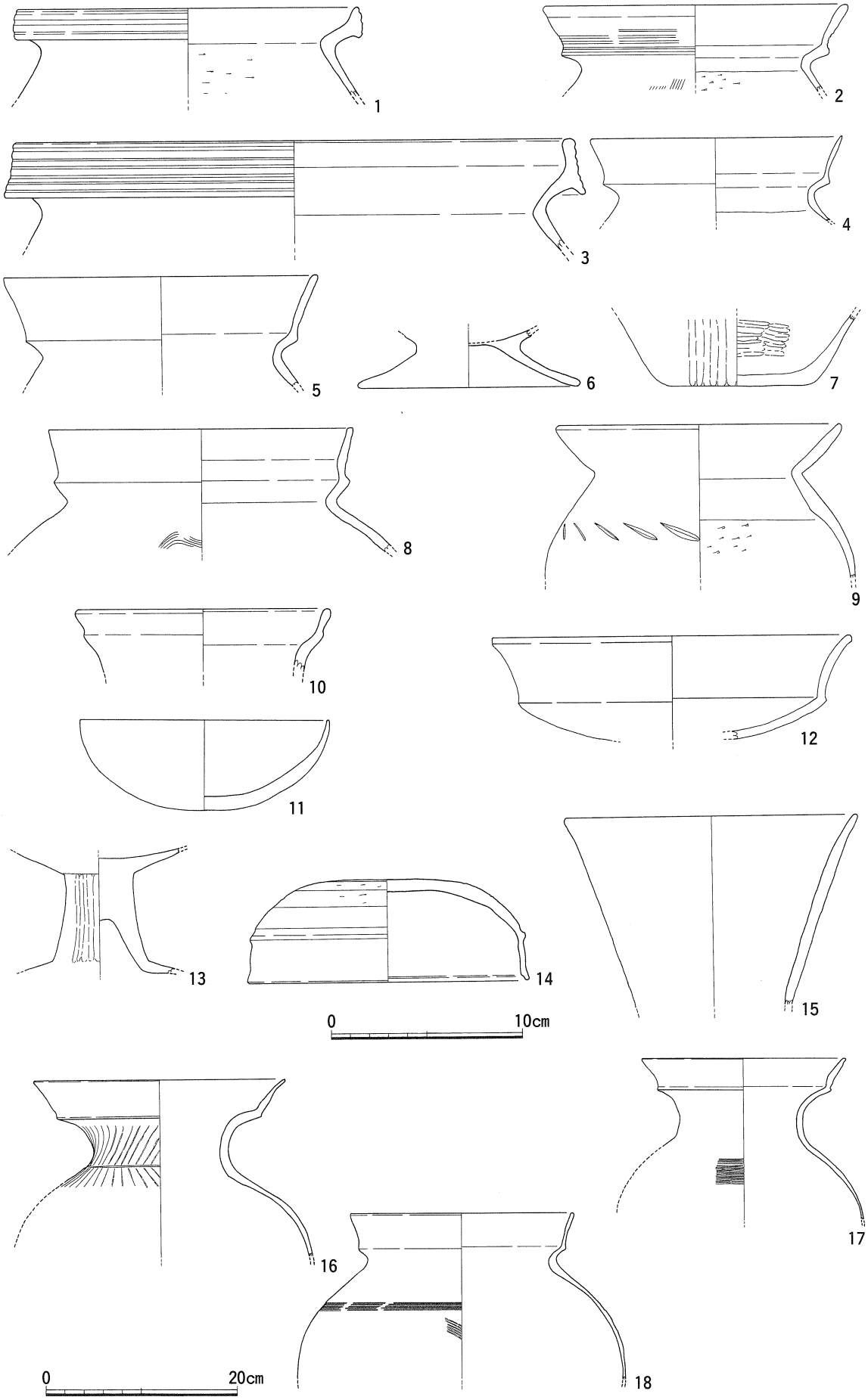
Ⅵ区については、それぞれの遺物包含層、遺構を層位的に上位のものから記述する。

### 淡青灰色土出土遺物（第32図）

淡青灰色土は砂礫層1の上位に位置し、砂礫を含まないことから増水時ではなく、比較的流れが緩やかな時期に堆積した層と考えられる。第32図1～7が弥生土器、8～13・15～18は土師器、14は須恵器である。1～5はいずれも甕で、4をのぞき口縁端部に沈線を施し、2では沈線が細く多条化する。調整は風化のため不明なものもあるが、内面頸部以下はヘラケズリを施すものと考えられる。6は脚部で、器壁は薄く脚端部は丸くおさめる。鉢または高坏の脚部と考えられる。7は底部で、内外面ヘラミガキが認められる。8～10は甕である。8は複合口縁の端部に平坦面をもち、肩部には波状文がかすかに認められる。9は単純口縁で、肩部にはヘラ状工具による刺突文を施す。内面のヘラケズリは、頸部よりやや下位から施される。10は複合口縁が形骸化したもので、頸部が長く壺とも考えられる。11は坏で、器壁は表面が剥離している。丸底で、口縁部先端では器壁が薄くなる。12は高坏で、外面坏底部に段をもち、口縁部が外反する。古墳時代のものと考えたが、弥生時代終末まで遡る可能性がある。13は高坏の脚で、途中から屈曲して端部にいたる。脚外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施した後ナデている。14は坏蓋で外面に突帯をもち、口縁部内面は段をもつ。15は口径約15cmをはかる口縁である。風化のため調整など詳細は不明であるが、直口壺の口縁の可能性がある。16～17は壺、18は甕でいずれも大形のものである。風化が進んでいるが、16の頸部にはヘラ描きの沈線を組み合わせた有軸羽状文、18の肩部にはクシ描きの平行沈線と波状文が認められる。遺物の時期は、1・3が出雲Ⅴ－1～2様式[2]、2が同Ⅴ－3様式、4～6が同Ⅴ－4様式、8～12・15～18は松山編年のⅡ～Ⅲ期[3]、11・13が同Ⅲ～Ⅳ期、14が古墳時代後期で大谷編年の出雲2～3期[4]である。




第31図　西川津遺跡Ⅵ区　土層図　S＝1:80



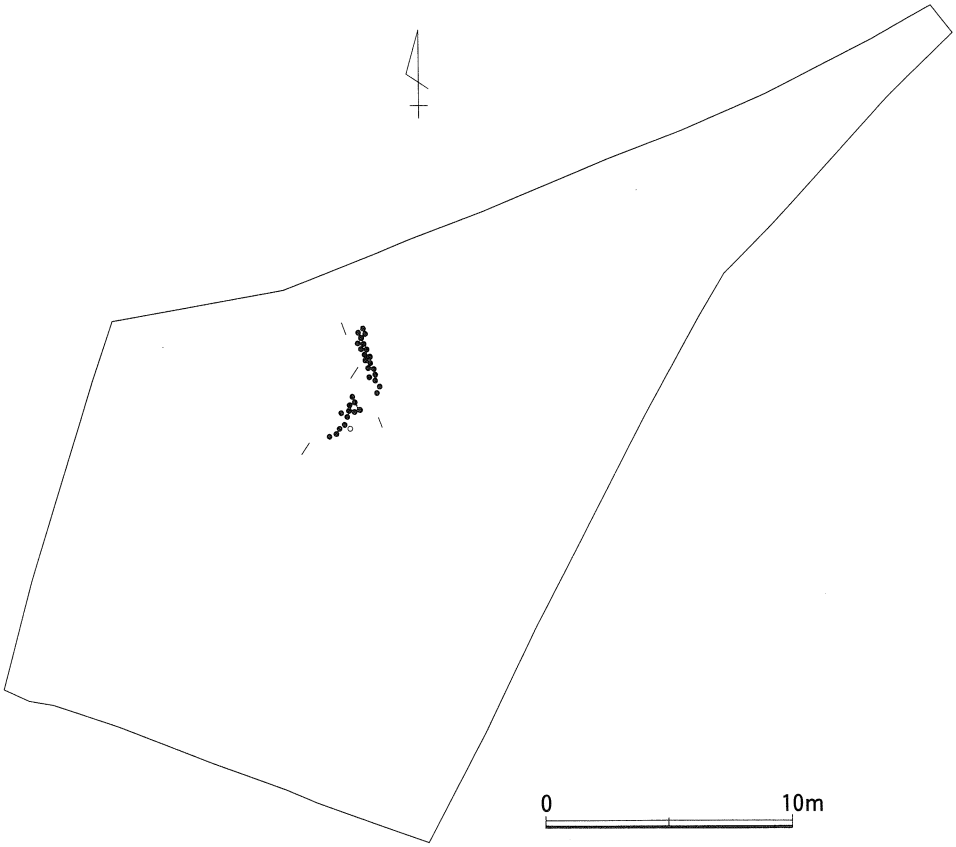

第32図　Ⅵ区　淡青灰色土出土土器実測図　S＝1:3　16～18　S＝1:6

**杭列状遺構**（第 32・33 図）

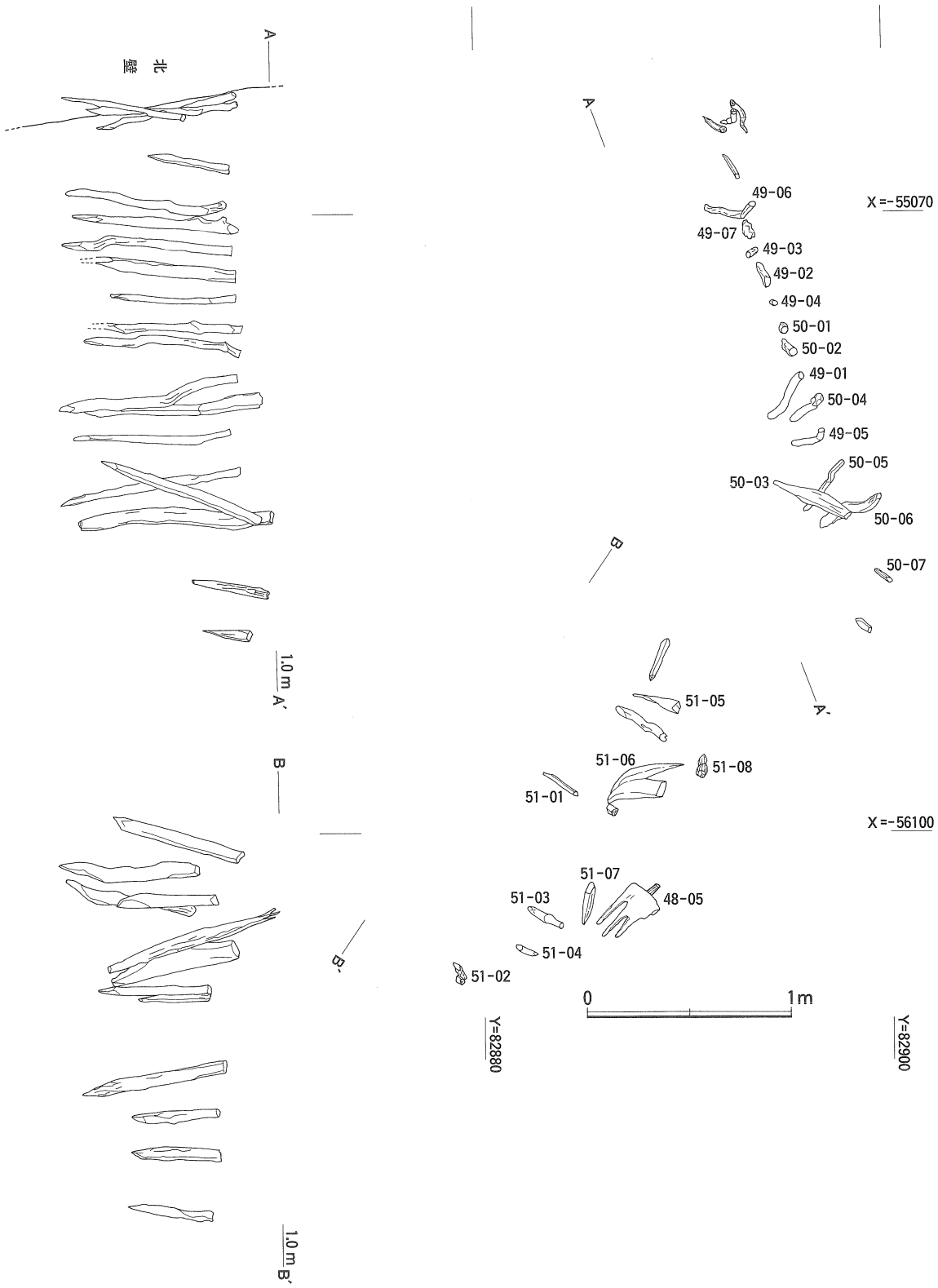
Ⅵ区の中央付近に存在する旧河道で検出された杭列である。この河道は、この調査区の主要な遺物包含層である砂礫層 1 に覆われていた。杭上面の高さは標高約 1 m である。検出時にはこの杭列に自然木が引っかかるように残っていたが、加工の痕跡はなかったため、後の自然堆積にかかるものと考えて除去した。

杭は大きく 2 群に分けられると考えられ、河道に平行するように約 20 本、直交するように約 10 本の杭が打ち込まれている。杭の長さは 0.4m ～ 1.0m と様々であるが、河道に平行な一群が直交するものにくらべ長い傾向が認められる。杭は土層図（第 31 図）から考えると、青灰色粘質土（北壁第 34 層）に打ち込まれたものと見られる。

杭列の時期は、後述する砂礫層 1 の遺物から考えて、古墳時代前期を下ることはないものと考えられる。なお、河道に直交する杭列に近接して弥生時代の鋤が 1 点出土しており、この杭列の時期を示す可能性もある。




**第 33 図　Ⅵ区　杭・木製品出土位置図　S＝1:300**




第34図　Ⅵ区　杭・木製品出土状況実測図　S＝1:30

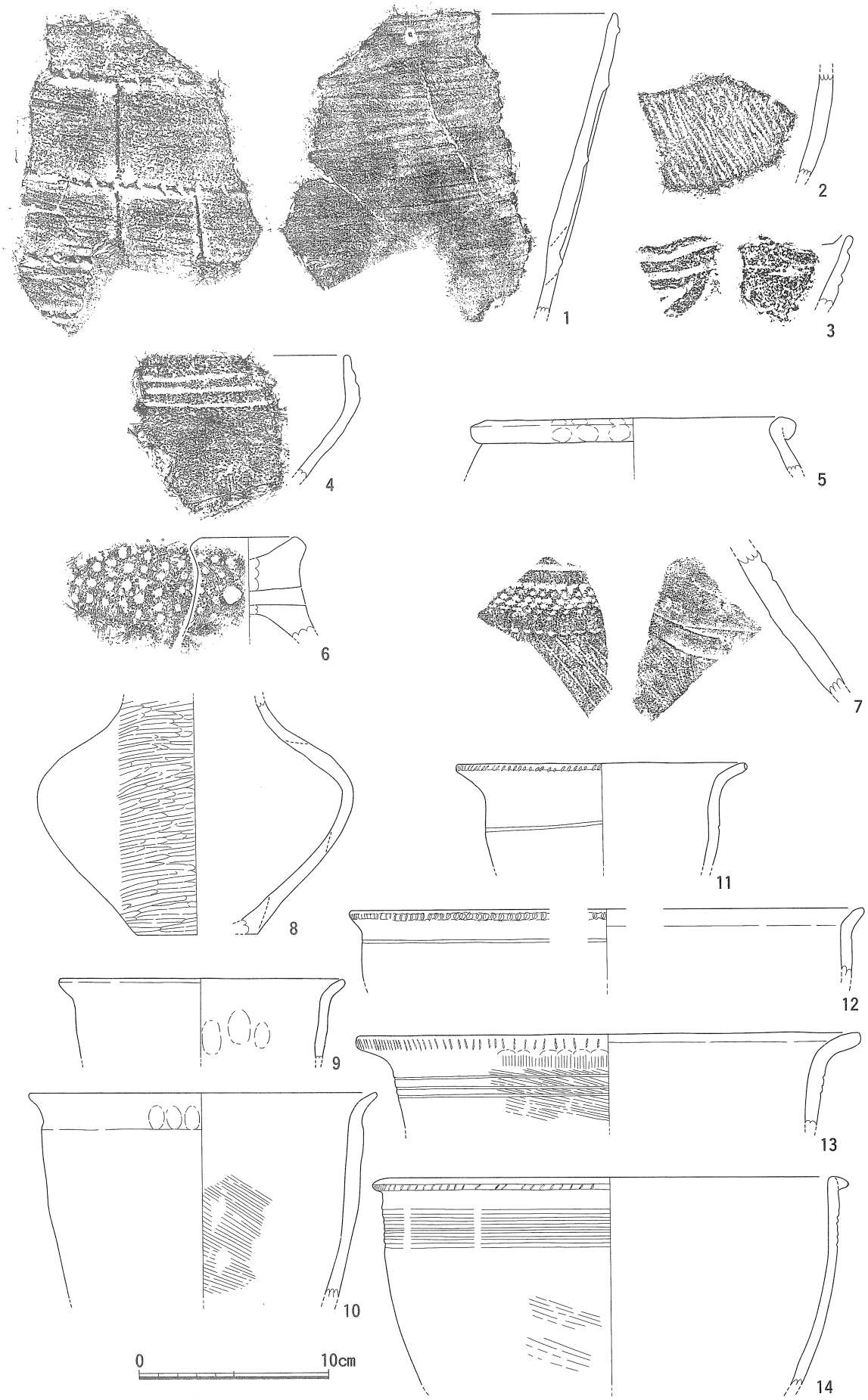
**砂礫層1出土遺物**（第34～40図）

砂礫層1からは、縄文時代～古墳時代前期までの遺物が出土しているが、その大多数は土器である。第35図は1～4が縄文土器、5・7～14が弥生土器である。1は深鉢で、胴部から口縁部へ直線的にのびるものである。外面には横方向と縦方向の隆帯をもち、横方向の隆帯には刻目が施される。内外面とも条痕調整である。2も深鉢で外面に縄文をもつものである。3は波状となる口縁部で、外面には凹線が認められる。4は浅鉢で、風化しているが外面の凹線は巻き貝によるものと考えられる。5は朝鮮系無文土器の可能性がある。口縁部を外面に折り曲げて肥厚させるもので、指頭圧痕が認められる。6は時期・器種とも不明の土器である。蓋または台状を呈し、外面には多数の刺突文をもつほか、中央付近には径1㎝の円孔が貫通する。7は壺の肩部付近で、外面には列点文、ヘラ描き文が施される。8は壺の胴部で、外面全体がヘラミガキで調整される。9～14は甕である。9は無文で内面に指頭圧痕が残る。10も無文であるが、頸部付近で器壁が薄くなりアクセントがつく。頸部には指頭圧痕、内面にはハケメが残る。11は頸部やや下に沈線をもつもので、口縁端部に刻目文が施される。12は正確な口径が不明であるが大形のもので、頸部に1本の沈線をもち、口縁部にはヘラによる刺突文が施される。13はヘラ描きの沈線が多条化するもので、口縁部には刻目文をもつ。頸部付近には、縦方向と斜め方向のハケメが認められる。14は口縁部が短く外傾するもので端部には刻目文をもつ。頸部の沈線は6本施される。遺物の時期は、1が前期初頭、2が中期、3が後期初頭、4が晩期である[5]。6は縄文時代のものと考えておきたい。7は出雲Ⅱ－1様式であろうか。8～12が出雲Ⅰ－2様式、13が同Ⅰ－3様式、14が同Ⅰ－4様式と考えられる。なお、5は弥生時代中期のものと見られる。

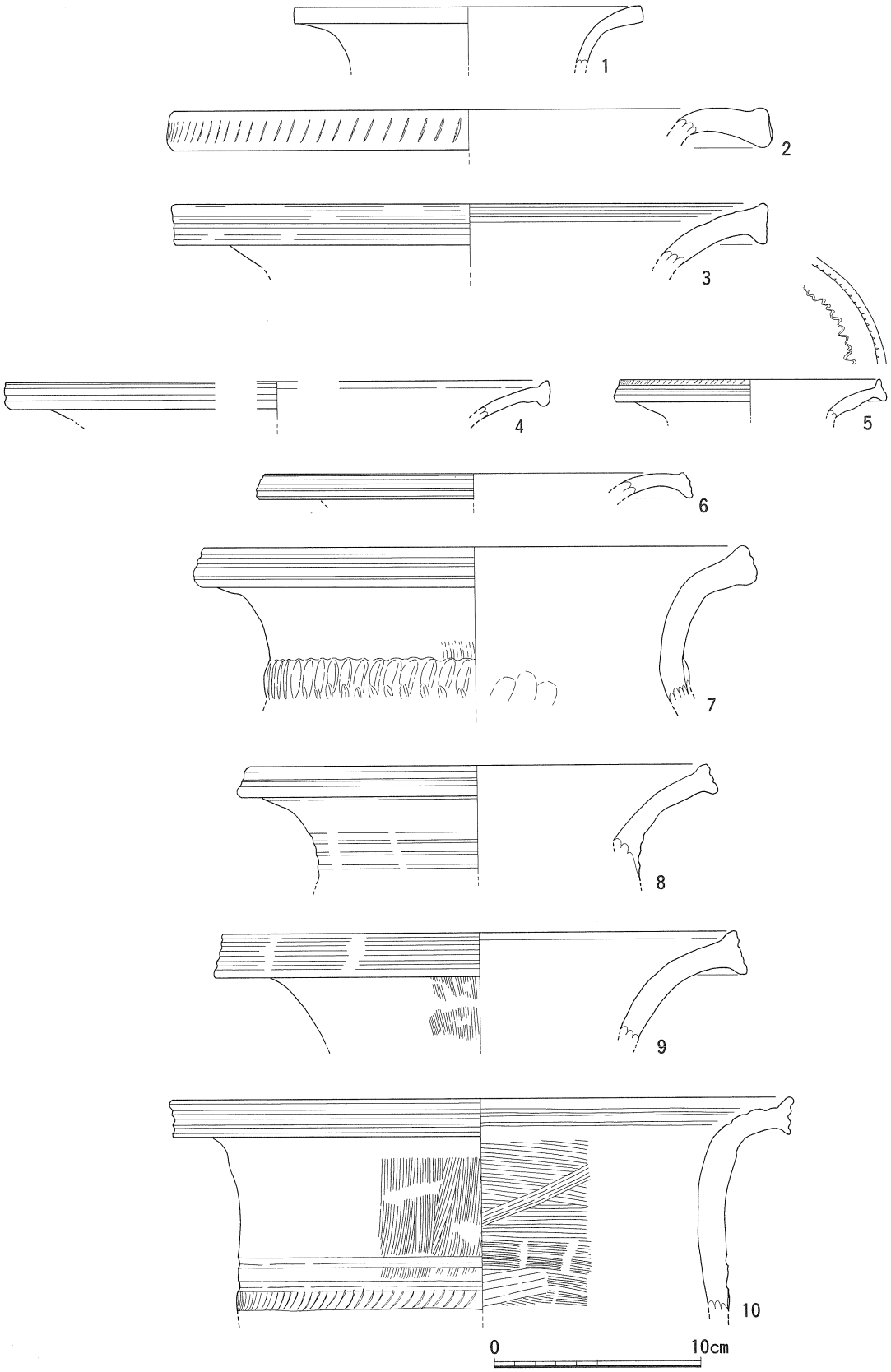
第36図は弥生土器の壺である。1は口縁が大きく開くもので、端部は全体に肥厚し、面をもつが文様はない。2は端部外面にヘラ描きの刻目文をもつものである。3～6は端部がわずかに上下に拡張し、外面には凹線文をもつものである。4は外面のほか、内面にも5条の凹線をもつものである。5も口縁内面にヘラ描きの波状文をもつ。7は口縁部に凹線を施すが、口縁部の外反が緩やかである。頸部には貼付の指頭圧痕突帯をもつ。8も口縁部の外反は緩やかで、頸部は破損しているが、少なくとも4条の凹線文が施されている。9は頸部外面にハケメが認められる。10は頸部が長く、口縁部は短く外反する。口縁部には外面のほか内面にも3条の凹線文をもち、頸部にも2条の凹線文とヘラ描き刺突文が認められる。頸部の内・外面はハケメで調整される。遺物の時期は、1が出雲Ⅱ－1様式に相当すると考えられる。2は出雲Ⅲ－1～2様式、3～10は同Ⅲ－2様式～Ⅳ－2様式のいずれかに相当すると考えられるが、口縁部のみの破片が多く、特定は困難である。

第37図は甕である。1は口縁が短く外反し、頸部には8条のクシ描き平行沈線を施す。2は口縁がくの字に屈曲し、端部はわずかに上方へつまみ上げられるように拡張する。3は2と同様の形態をとるもので胴部内・外面はハケメで調整される。4は口縁部がわずかに肥厚し、頸部付近の器壁が胴部よりやや薄くなる。胴部最大径付近にクシ描きの列点文を巡らせ、調整は胴部上半が内・外面ともハケメ、外面胴部下半は縦方向のヘラミガキである。5は大形の甕で、口縁端部に1条の浅い沈線を巡らせる。胴部外面にはハケメが認められる。6は口縁部が肥厚し、わずかに上方に拡張する。口縁端部には刻目文、頸部には指頭圧痕突帯、胴部最大径付近にはクシ描きの列点文が2段にわたって施される。調整は胴部上半に内・外面ともハケメが認められる。

遺物の時期は、1が出雲Ⅱ－1様式、2～6については凹線文が認められないことから、同Ⅲ－1～2



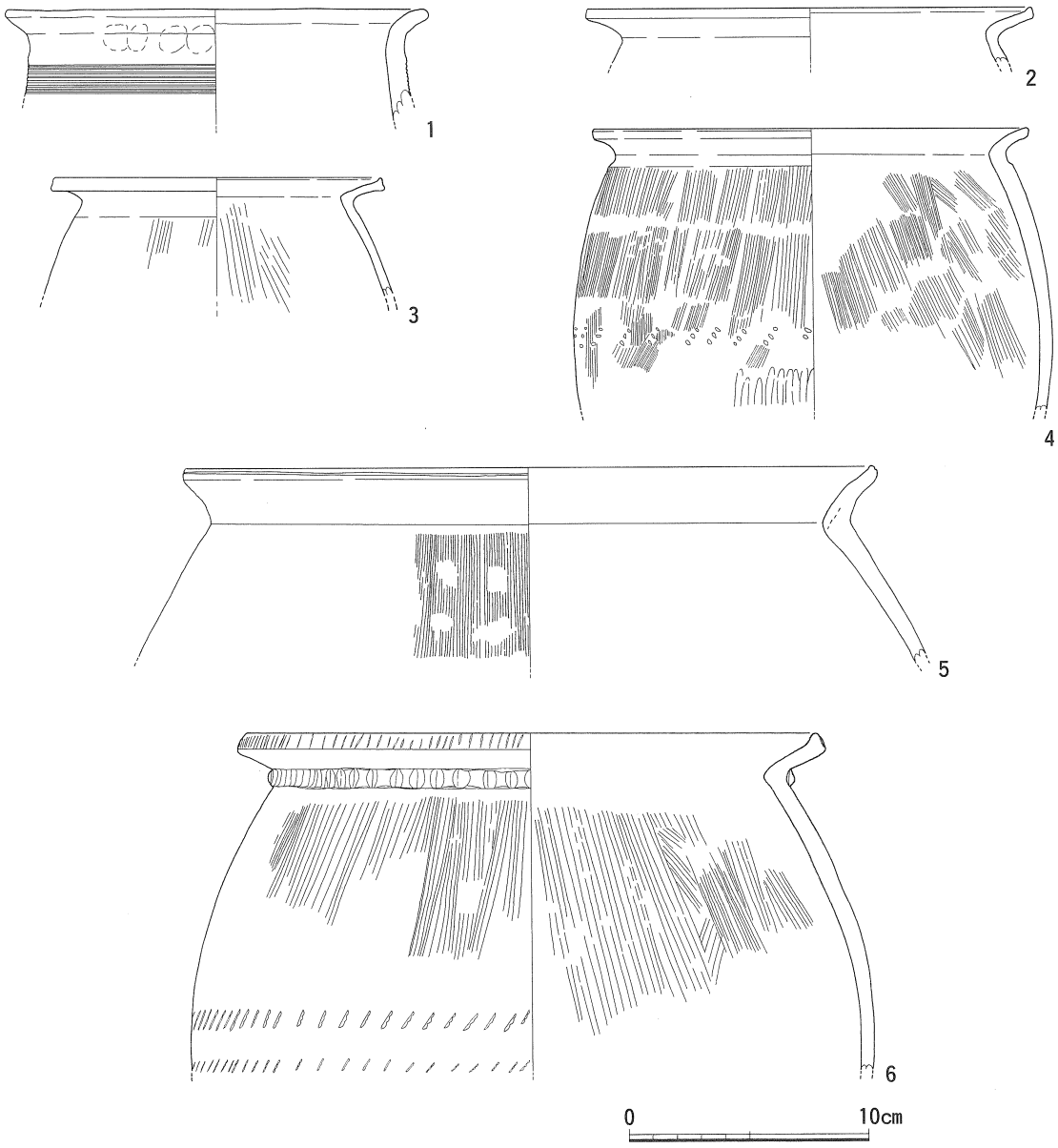

第35図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(1)　S＝1:3




第36図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(2)　S＝1:3

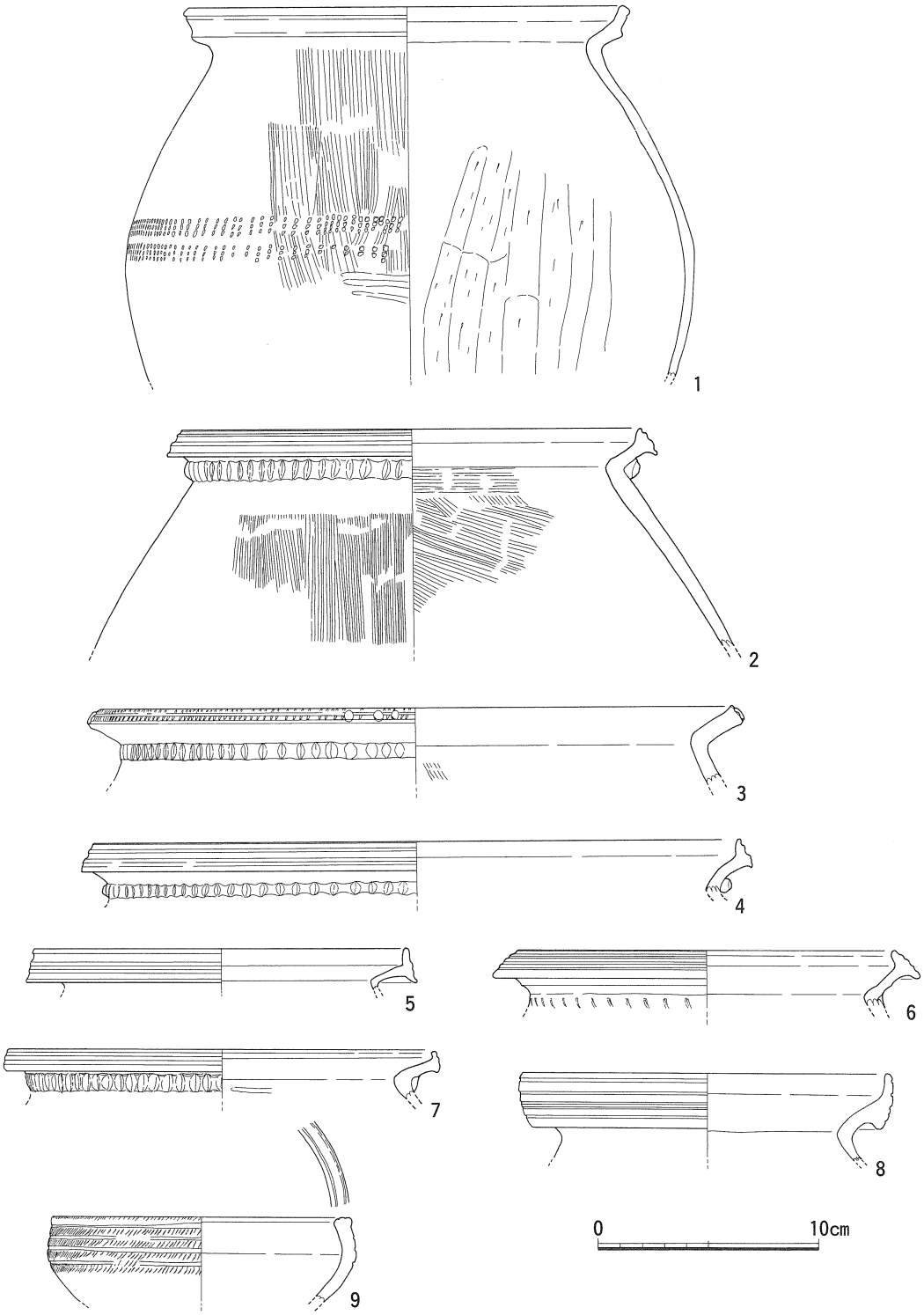
様式に相当すると考えられるが、全体の器形をうかがわせるものがないため、詳細は不明である。

第38図は甕と高坏である。1は口縁が上方に大きく拡張するもので、口縁端部には沈線が施されるほか、胴部最大径付近にはクシ描きの列点文が2段にわたって施される。調整では胴部内面のかなり頸部に近い位置までヘラケズリが施されるのが注目される。2〜7は頸部がくの字に屈曲し、肥厚する口縁端部に凹線文が施されるものである。2は頸部に指頭圧痕突帯をもち、ハケメ調整が認められる。3は口縁部付近のみの破片で、口縁部は凹線文のほか刻目文、円形浮文により加飾される。4も指頭圧痕突帯をもつもの、5は口縁部のみの破片で、頸部以下の調整は不明である。6は頸部に粘土紐を貼り付けず、指頭圧痕文のみを施すものである。8は口縁部が上方に大きく拡張し、5条の凹線文を施すものである。調整はヨコナデのみで、ヘラケズリは確認できない。9は高坏で、坏部は内湾して端部の上面には2条の沈線が施されるほか、坏部外面に4条の凹線と刻目文が巡らされる。内面には砂粒の移動痕が残り、ヘラケズリののちナデで調整したものと見られる。




第37図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(3)　S＝1:3

遺物の時期は、1については、ヘラケズリの範囲がかなり上位にまで及ぶことから時期が下る可能性もあるが、クシ描き列点文の施文位置から出雲Ⅳ−2様式と考えておきたい。2〜8については出雲Ⅳ−1〜2様式と考えられる。9については坏部の形態から出雲Ⅳ−2様式に特定できると考えられる。

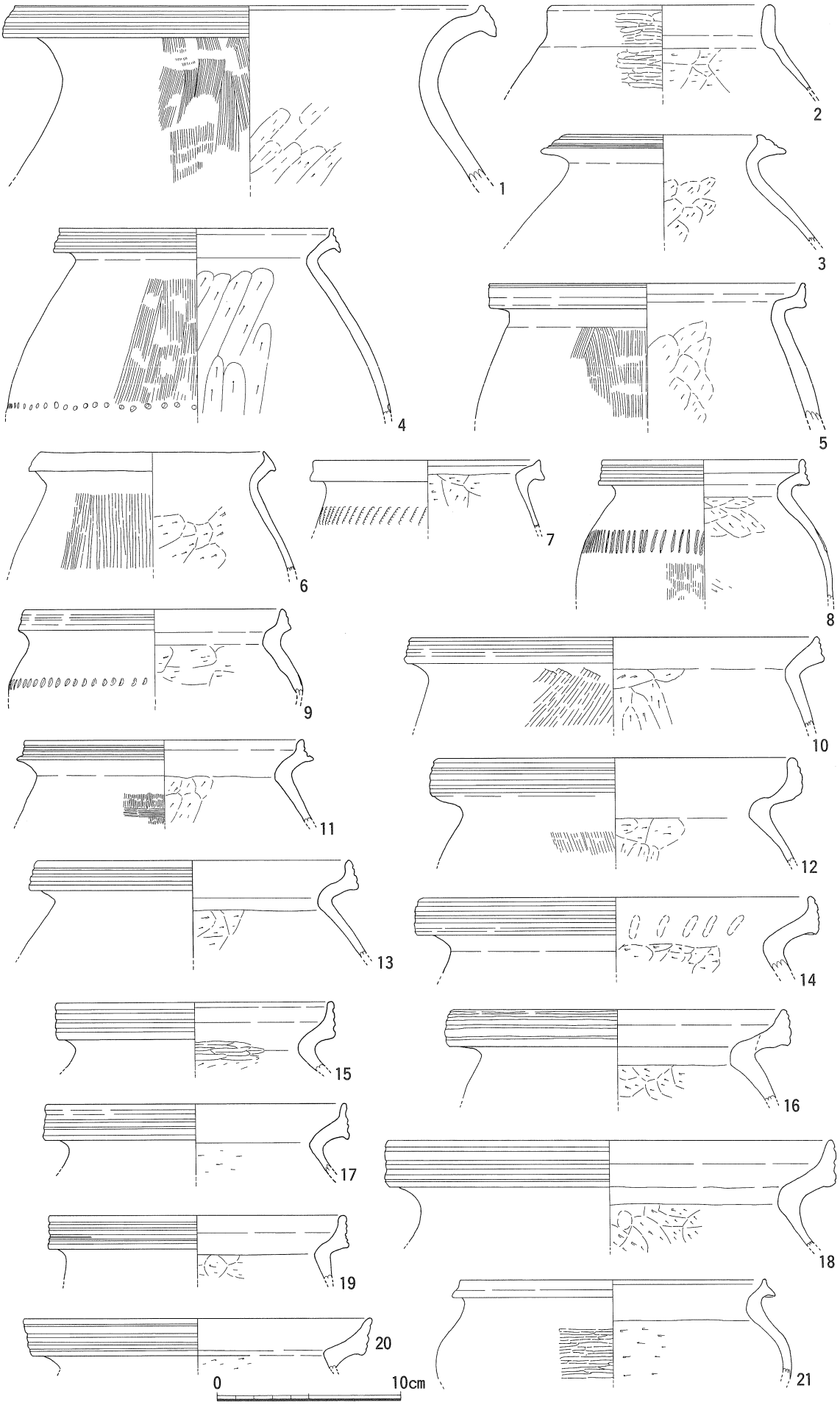



第38図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(4)　S＝1:3

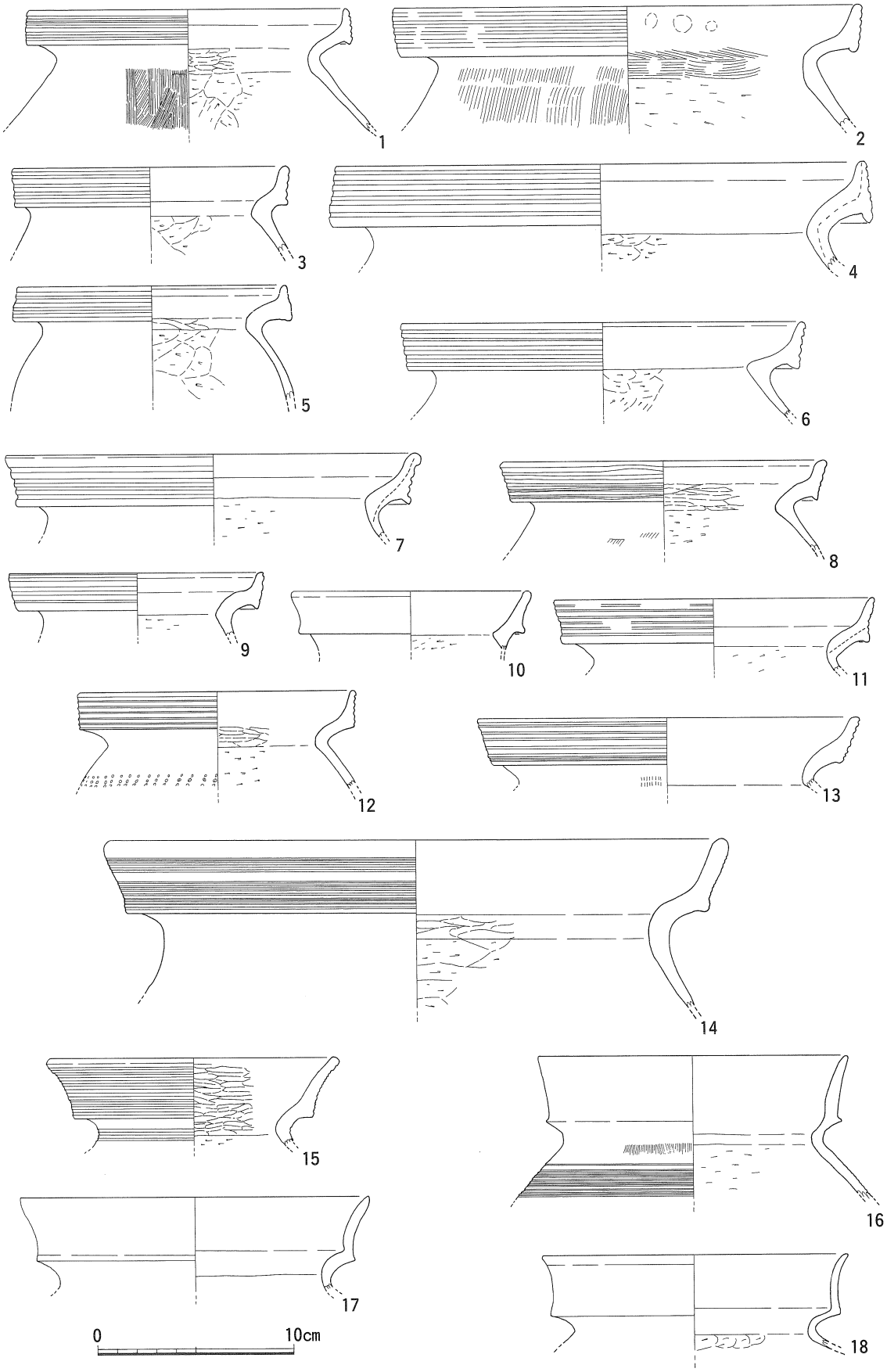
第39・40図は弥生時代後期の土器を掲載した。第39図1・2は壺、3〜20が甕、21が鉢と見られる。1は口縁部が緩やかに外反し、端部は上下に拡張して4条の凹線を施す。頸部以下をヘラケズリで調整する。2は直口壺で、口縁部は胴部よりもやや厚く、端部は丸くおさめる。外面は口縁端部をのぞいて細かなヘラミガキ、内面は口縁部〜頸部をヨコナデ、胴部はヘラケズリで調整する。3〜6は内面のかなり高い位置まで縦方向のヘラケズリを施すが、頸部にまで及ばないものである。口縁の形態は、3のように全体に肥厚するもの、5のように上方に拡張するものなど各種あり、口縁端部には2〜3条の凹線文を施すが、6のように無文のものも存在する。口縁端部以外への施文は、4で胴部最大径付近に刺突文をもつほかは認められない。7〜9は外面の頸部よりやや下に刺突文をもつものである。いずれも頸部付近まで横方向のヘラケズリで調整される。7のように口縁部に文様はもたないものも存在するが、口縁は肥厚・拡張する。7はクシ状工具、8は貝殻腹縁、9はヘラ状工具による刺突である。10〜20は、施文が口縁端部の凹線文のみで、刺突文が認められないものだが、これは土器の残存状況によるところも大きいと考えられる。10のように口縁部全体が肥厚するものもあるが上方に拡張するものが多く、3条〜5条の凹線文を施すものである。13・16のように頸部内面に面をもつものや、15のようにヘラミガキを施すものも存在する。21は鉢と考えたが、下半部の形状は不明である。外面には横方向の細かいヘラミガキが施される。遺物の時期は、いずれも出雲V−1様式と考えられる。

第40図はいずれも甕である。1〜9・11〜13は口縁端部が拡張し、口縁端部に4〜5条の擬凹線文を施すものである。口縁部〜頸部付近までの破片が多く、胴部の施文や調整が不明なものが多いが、12では外面の頸部からやや下にクシ描きの列点文が施される。調整は1・2・8など外面にハケメを残すものと、5や12のようにナデ調整のものが存在する。内面は胴部に横方向のヘラケズリを施すが、1のように頸部にヘラミガキを施すもの、2のように横方向のハケメを施すものなども見られる。14・15は、口縁端部に細い多条の沈線が施されるものである。14は口縁部が大きく上方に拡張し、外面に14条の平行沈線が巡る。頸部の内面は横方向のヘラミガキ、胴部は横方向のヘラケズリである。15は口縁端部に17条の平行沈線が巡るほか、頸部にも同様な沈線が少なくとも4条認められる。口縁部内面は横方向の細かいヘラミガキ、頸部以下はヘラケズリである。16〜18は口縁端部が文様をもたないものである。16は比較的器壁が厚く、口縁の先端に向かい先細りとなる。外面の頸部やや下にクシ描きの平行沈線を巡らせる。17・18は、16よりも器壁が薄くなり、口縁部が緩やかに外反しながら上方へ拡張して先端は先細りとなる。内面の頸部以下はヘラケズリを施す。

遺物の時期は、1〜13が出雲V−2様式、14・15が同V−3様式、16〜18が同V−4様式と考えられる。なお、10は口縁端部に文様をもたないものであるが、口縁形態・調整から出雲V−2様式のものと考えられる。




第39図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(5)　S＝1:3



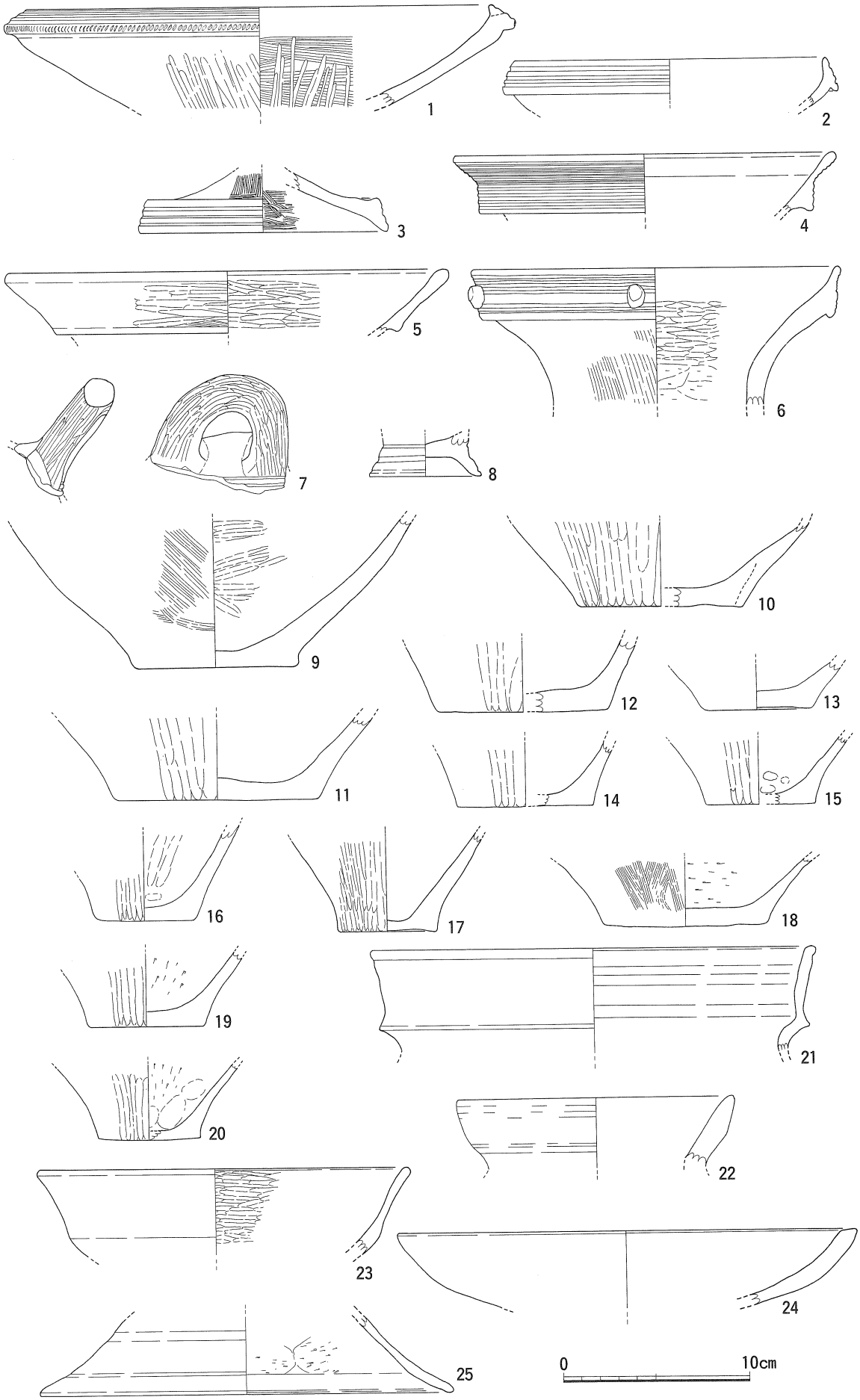

第40図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(6)　S＝1:3

第41図は弥生時代の高坏・器台・把手・底部、土師器の甕・高坏・器台を図示した。1・2は高坏の坏部、3は脚部である。1は端部が拡張し、3条の凹線と刻目文が施される。坏部外面がヘラミガキ、内面はハケメの後ヘラミガキで調整される。2も口縁部に3条の凹線文をもつ。3は脚端部が複合口縁状を呈し、3本の凹線が施される。内・外面ともハケメで調整される。4〜6は器台でいずれも受部である。4は外面に10条の平行沈線を巡らせる。外面の一部はヘラミガキ、内面はヨコナデで調整される。5は外面に文様をもたないもので、内・外面とも横方向の細かいヘラミガキで調整する。6は口縁部外面に平行沈線のほか、円形浮文を貼り付ける。外面はハケメ、内面は受部をヘラミガキ、筒部をヘラケズリで調整する。7は把手で、細かいヘラミガキで調整する。この把手がつく土器の器壁は比較的薄く、内面はヘラケズリが認められることから、注口土器の肩部につくものと見られる。8は脚部で、外面に3条の沈線が巡る。9〜20は底部で、9は外面にハケメ、内面にヘラミガキが認められる。10〜14・16・17はいずれも外面が縦方向のヘラミガキ、内面はナデが施される。18〜20はいずれも内面にヘラケズリが施されるものであるが、19・20はヘラケズリが縦方向で、外面はヘラミガキであるのに対し、20は横方向のヘラケズリで外面はハケメである。21は土師器の甕で、複合口縁の先端部が外側へ屈曲する。22も甕であるが器壁が厚く、短く外傾する単純口縁で外面にはナデの痕跡が残る。23・24は高坏と考えられる。口径は23が20.8cmで坏部が深く口縁端部は丸くおさめるものである。調整は坏部内面に横方向のヘラミガキが施される。24は復元口径が24.6cmと大きく、浅い坏部をもつものと見られる。先端になるにつれて徐々に器壁が厚くなり、端部には平坦面をもつ。25は鼓形器台の脚部である。脚端部に向かってハの字状に開き、端部は丸くおさめる。文様はもたず、内面はヘラケズリで調整する。

遺物の時期は、1〜3が出雲Ⅴ−1様式、4・6が同Ⅴ−2様式、5・7がⅤ−3様式に相当すると考えられる。9〜20については、内面ナデ調整のものは出雲Ⅲ−1様式以前、ヘラケズリが見られるものは同Ⅲ−2様式以降と考えられるが、それ以上の特定は困難である。土師器については、21・25が松山編年Ⅰ期、23が同Ⅲ期と考えられる。22・24については詳細は不明である。

**砂礫層2出土遺物**（第42・43図）

砂礫層2からは、縄文時代〜弥生時代の遺物が出土している。遺物の時期が砂礫層1と重なるところもあるが、下限は弥生時代で、古墳時代の遺物は出土していない。第42図1〜4は縄文土器である。1は浅鉢と考えられ、外面に斜め方向の隆帯をもつ。内・外面とも条痕調整である。2は胎土に繊維を含み内・外面とも条痕調整を施す。3・4は突帯文土器で、口縁部のやや下方に刻み目をもつ突帯を巡らせるものである。5・6は弥生時代の壺である。5は肩部の破片で、ヘラ描きの平行沈線などを施文する。6は頸部に段をつくり出す。7〜11は甕である。7は口縁端部を外側へ折り曲げて肥厚させるもので、頸部にヘラ描き沈線が施される。8は無文のもので、外面にハケメ、内面に指頭圧痕が認められる。9は口縁が外側へ屈曲し、わずかに肥厚するもので鉢の可能性もある。頸部には指頭圧痕をもつ貼付突帯を巡らせる。調整は内・外面ともハケメである。10も口縁部が屈曲するもので、外面はハケメ、内面は部分的にヘラミガキが認められる。11は口縁部が肥厚し、端部には平行沈線が施される。胴部は内・外面ともハケメで調整される。12・13は鉢で、12は口縁端部がT字状に拡張し、刻目文が施される。また胴部にはクシ描きの列点文も施文される。13は大形のもので、胴部は内湾して口縁部に至る。口縁部は12と同様にT字状に拡張し、上




第41図　Ⅵ区　砂礫層1出土土器実測図(7)　S＝1:3

面には3条単位のクシ描き格子文が施されるほか、口縁部から胴部には刻目突帯文、クシ描き刺突文が施文される。

遺物の時期は、1が縄文時代前期初頭[6]、2が早期末[7]、3・4が晩期[8]である。6～8は出雲Ⅰ－2～4様式、9・10・12が同Ⅲ－1様式、13がⅢ－2様式、11がⅣ－1様式に相当する。

第43図1～5は甕、6～13は脚部・底部である。1は器壁が全体に厚く、口縁が上方に拡張し4条の平行沈線を施す。内面はヘラケズリで調整するが、頸部付近は指頭圧痕が残る。2は5条の平行沈線を施し、頸部まで横方向のヘラケズリで調整する。3は口径が小さく、口縁部に円孔をもち、頸部に平行沈線、刺突文を施文するなど装飾性の強いものである。内面頸部はヘラミガキ、以下はわずかながらヘラケズリが認められる。4は比較的器壁が厚く、口縁部先端が先細りになるものである。胴部内面はヘラケズリと見られる。5は小形の甕で、単純口縁をもつ。胴部最大径付近から4段にわたって半截竹管による刺突文を施し、内面は頸部までヘラケズリで調整する。6は小形の壺ないし鉢の底部と見られ、内面に指頭圧痕が残る。7は底部穿孔された脚部で内・外面ともヘラミガキを施す。8～13は外面に縦方向のヘラミガキを施すものである。9については、最下部付近にハケメが認められるほか、砂粒の移動痕もありヘラケズリが行われた可能性もある。内面調整はナデ、ハケメ、ヘラミガキ・ヘラケズリと各種のものがある。

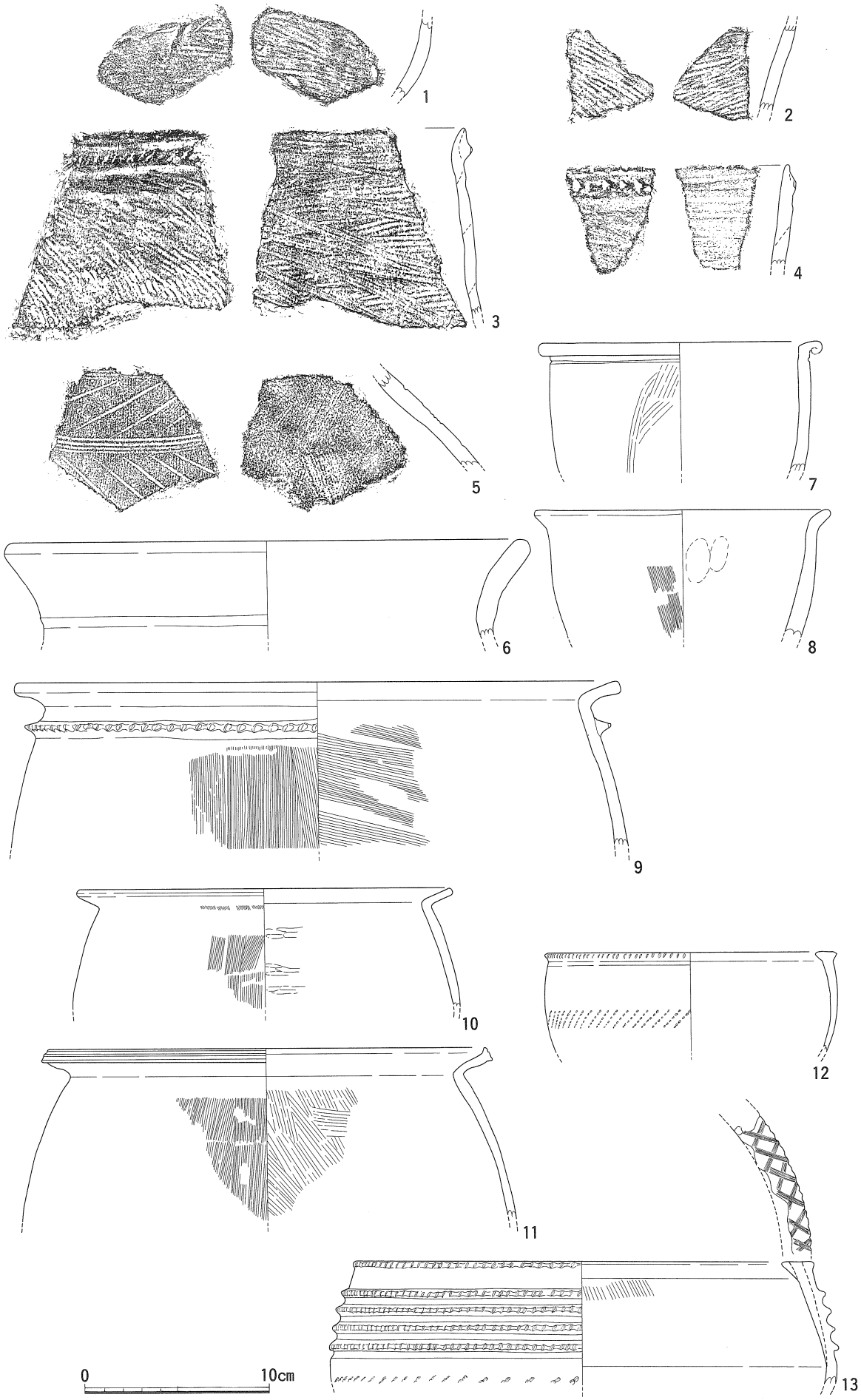
遺物の時期は、1が出雲Ⅴ－1様式、2・3が同Ⅴ－2様式、4がⅤ－4様式に相当する。5は内面ヘラケズリ調整を施しているが、器形・文様の特徴からは出雲Ⅲ様式とも考えられる。脚部、底部については内面調整から13が出雲Ⅲ－2様式以降、その他は同Ⅲ－1様式以前の可能性が高い。

**砂礫層3・4出土土器**（第44図）

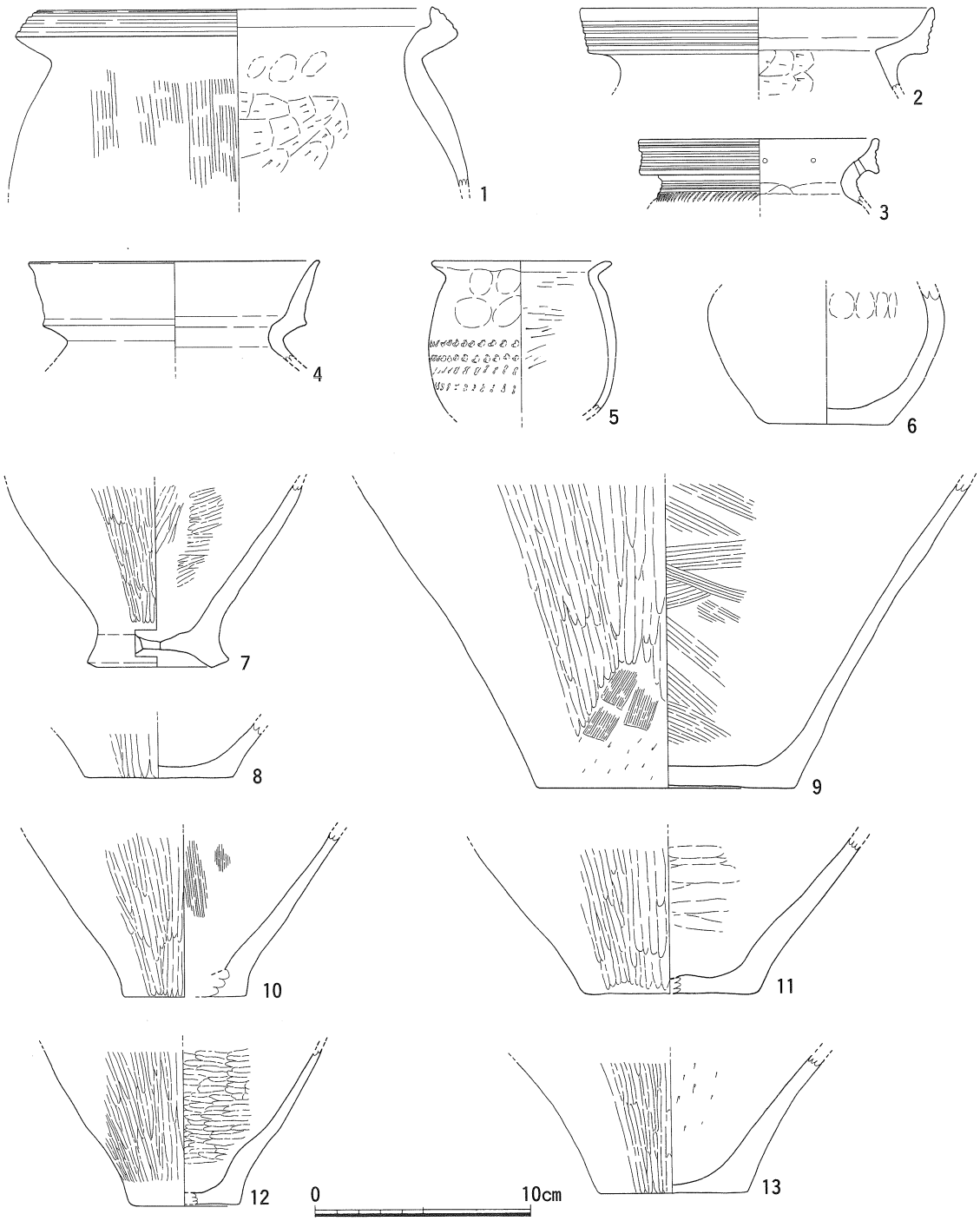
遺物包含層である砂礫層は、北壁の土層観察では23層、26層、27層の3つに分層できる。一方西壁では15層、19層の2つにしか分けられない。このため、北壁と西壁の層位については、北壁23層はそのまま西壁15層に対応させ砂礫層3、北壁26層・27層の2つは西壁19層に一括して対応させ砂礫層4としておく。ただし、19層は20層・21層といった有機物を含む粘質土を挟み、細分できる可能性をもつ。なお、これらの層は二次堆積と考えられるものの、縄文土器以外の遺物は出土していないことから、堆積した時期が出土遺物の時期に比較的近い可能性がある。

第44図1～4は砂礫層3、5～8が砂礫層4から出土したもので、いずれも深鉢と考えられ、胎土に繊維を含んでいる。1は内・外面を条痕調整する。2は口縁部が肥厚し、貝殻腹縁による刺突文をもつもので内面は条痕調整である。3は、外面に半截竹管様の二叉の工具と2枚貝の貝殻腹縁を用いた連続刺突文を施す。内・外面とも条痕調整である。4は、内・外面とも条痕が認められる。5は底部付近で、丸底になるものと考えられる。外面には縄文、内面には条痕が施される。6は外面は条痕地で、一部に縄文がみられる。7は縄文を地文とし、口縁部に貼付突帯をもつ。突帯には2枚貝による刺突文が施されるほか、器表にも同様な刺突文が複数列施されるようである。
8は内・外面条痕調整とみられる。

1は長山式、2・3が西川津A式で、4も西川津式と見られるが、文様がないため詳細は不明である。5・6・8は菱根式、7は長山式で、時期は縄文時代早期末～前期初頭にあたる[9]。



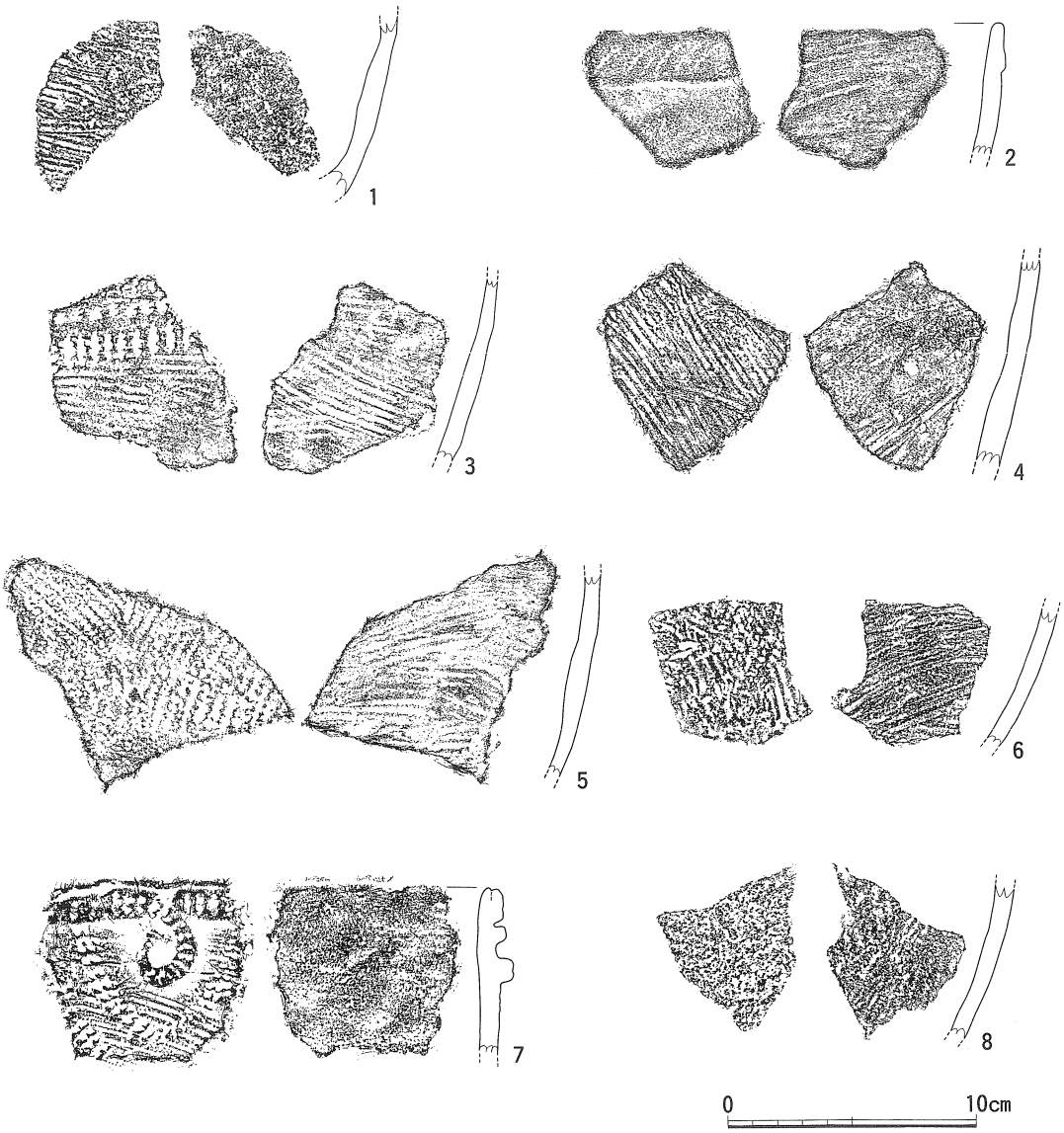

第42図　Ⅵ区　砂礫層2出土土器実測図(1)　S＝1:3




第43図　Ⅵ区　砂礫層2出土土器実測図(2)　S＝1:3

Ⅵ区出土土器（第45・46図）

第45・46図は、壁の崩落などにより出土層位が特定できなかった土器のうち、図化可能なものを掲載した。第45図1～4は縄文土器でいずれも深鉢である。1は胴部から口縁部へ直線的にのびるもので、外面に羽状縄文、内面に条痕をもつ。2は波状口縁で、口縁部が肥厚する。外面には太い凹線をもち、内面は条痕調整である。3・4は突帯文土器で、口縁よりやや下に刻目を有する突帯が巡る。内・外面とも条痕調整である。5～18は弥生土器である。5は壺の胴部で、ヘラ描きの沈線文、刻目文などが施される。調整は内・外面ともヘラミガキである。6は甕で、口縁が緩やかに外反する。7～9は壺である。7は口縁が大きく外反し、端部は肥厚する。頸部には凹線が認め




第44図　Ⅵ区　砂礫層3・4出土土器実測図　S＝1:3

られる。8は短頸壺で、肥厚する口縁の上面に2条の沈線文が施される。内面はナデであるが、ハケメと見られる工具痕がわずかに残る。9は大きく開く口縁の端部で、上面に4条の凹線とクシ状工具による刻目文が施される。10は鉢と考えられる。胴部から直立して口縁部に至り、端部が小さくT字状に拡張する。内・外面ともナデ調整と考えられ口縁部直下には指頭圧痕が残る。11～17は甕である。11は口縁端部がわずかに上方につまみ上げられるように拡張し、外面に刻目文が施される。全体に風化が著しいが、内面の一部に粗いハケメが認められる。12は口縁全体が肥厚し、端部は丸くおさめる。胴部外面はハケメで調整する。13～16は口縁端部に平行沈線を施すものである。15は頸部に指頭圧痕突帯をもつが、そのほかは頸部以下を欠くため、詳細は不明である。18は高坏で、口縁端部が肥厚し、刻目文を施す。内・外面ともヘラミガキで調整する。

遺物の時期は、1が縄文時代早期末[10]、2は同後期初頭、3・4は晩期である[11]。5・6は出雲Ⅰ－2～3様式、7・10～12・18が同Ⅲ－1～2様式、8・9・13～17がⅣ－1～2様式と考えられる。

第46図1～6・8・9は弥生土器の甕で、口縁端部が拡張して外面に3～5条の平行沈線を施すものである。内面頸部付近から下位にはヘラケズリを施すが、4・6では頸部の一部にヘラミガキが加えられている。9は肩部付近まで残存し、外面に刺突文を巡らせているのがわかる。7は頸部がやや長く、壺の可能性がある。内面の口縁部から頸部にかけてはハケメで調整する。10は甕と考えられ、口縁部が大きく拡張し、10条の細い沈線が施される。11も弥生土器の甕で、口縁端部がわずかに外側へ屈曲する。口縁部には施文されず、肩部に平行沈線が施されるのみである。12は短い単純口縁をもつ甕で、頸部はくの字に屈曲する。文様は施されず、内面頸部以下はヘラケズリで、胴部下位はさらに細かいヘラミガキを加える。13～18は底部で、13～16は内面ナデ、17・18はヘラケズリが施される。16は底部に穿孔がある。19・20は脚部である。19の胴部内面、20の脚部内面はヘラケズリで調整される。21は須恵器の坏身で比較的長いかえりをもつ。

遺物の時期は1～9が出雲Ⅴ－1様式、10が同Ⅴ－3様式、11がⅤ－4様式と考えられる。12は出雲Ⅴ－3～4様式のいずれかに相当すると見られる。底部・脚部については、内面ナデ調整を施す13～16は出雲Ⅲ－1様式以前、17～20は同Ⅲ－2様式以降の可能性が高い。21は古墳時代後期である。

**Ⅵ区出土石製品・土製品**（第47図）

第47図は石製品と土製品を掲載した。1は、砂礫層1の上にのる砂＋粘質土層から出土した磨石で、一方の面がやや平坦になり、その中央付近に径約2cmの浅いくぼみをもつ。2は砂礫層1から出土した石錘で、板状の石の両短辺にくぼみをつくる。3は分銅形土製品で、これも砂礫層1から出土した。半截竹管状ないしクシ状の工具による刺突文、ヘラ描沈線文などが施されるものである。

**Ⅵ区出土木製品**（第48～52図）

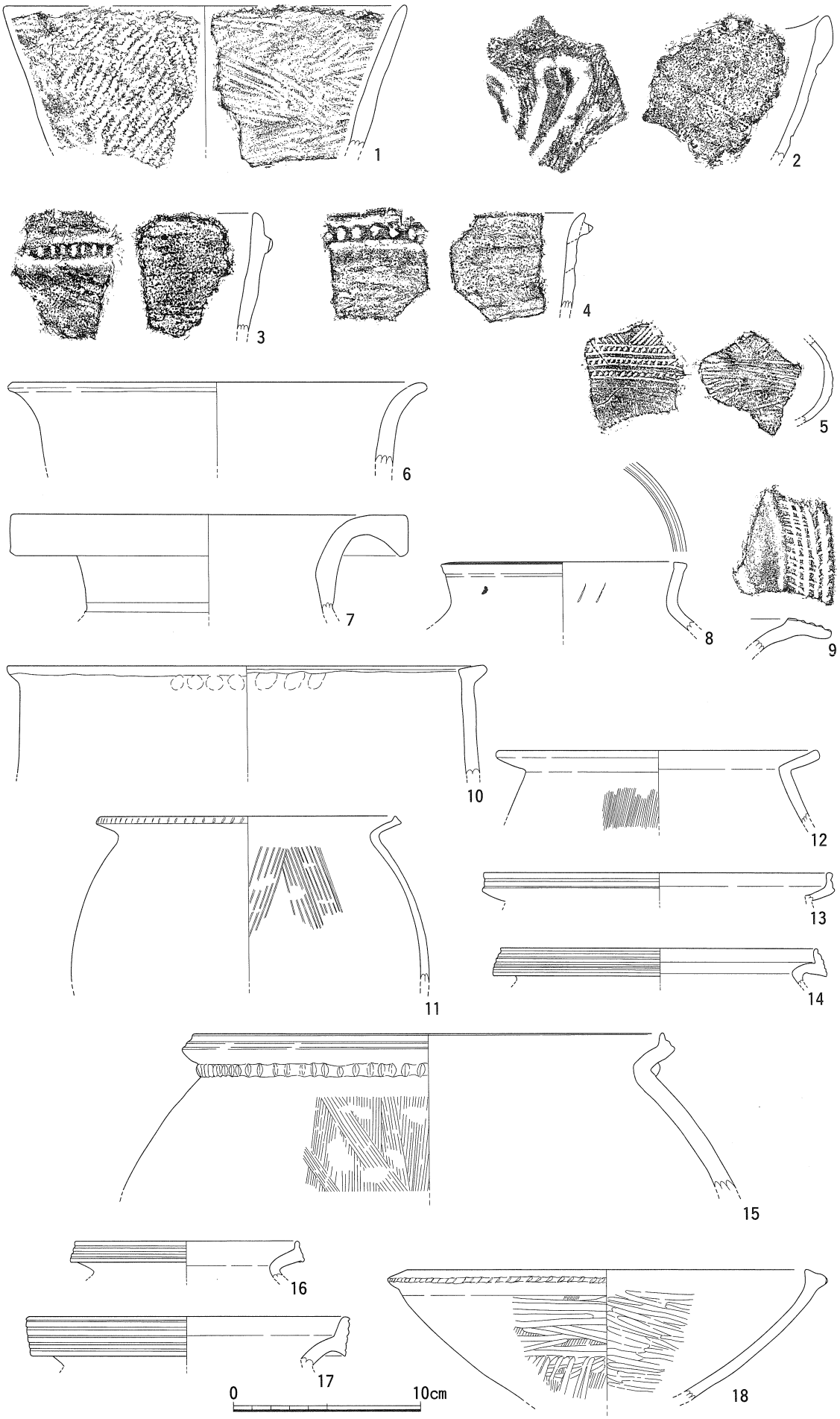
Ⅵ区から出土した木製品は、杭列状遺構を構成する杭が多数を占めるが、高坏などの容器、鋤、祭祀具とも考えられる用途不明の木製品なども出土している。

第48図－1は高坏の坏部である。坏底部は比較的平坦で、底部外面には花弁状の装飾が施される。底部のほぼ中心となる位置には、小さな孔をもつ。2・3は用途不明の木製品である。2は一方の端部を欠いているが、もう一方の端部はふくらみをもつように加工される。横断面は半円形である。3は薄い板状で、片方の端部を欠くが、もう一方の端部は突起状に加工される。何らかの祭祀具の可能性が考えられる。4は用途不明の部材である。各面ともきれいに面取りされている。5は鋤の先端部分である。4本刃とみられ、柄を取り付けるためのくぼみをもつ。6は柄とも考えられるが、一端は杭のように削られている。7は一方の端部にふくらみを残し反対側をとがらせている。8は一方の短辺に刳り込みをもち、長辺の円孔が認められる。

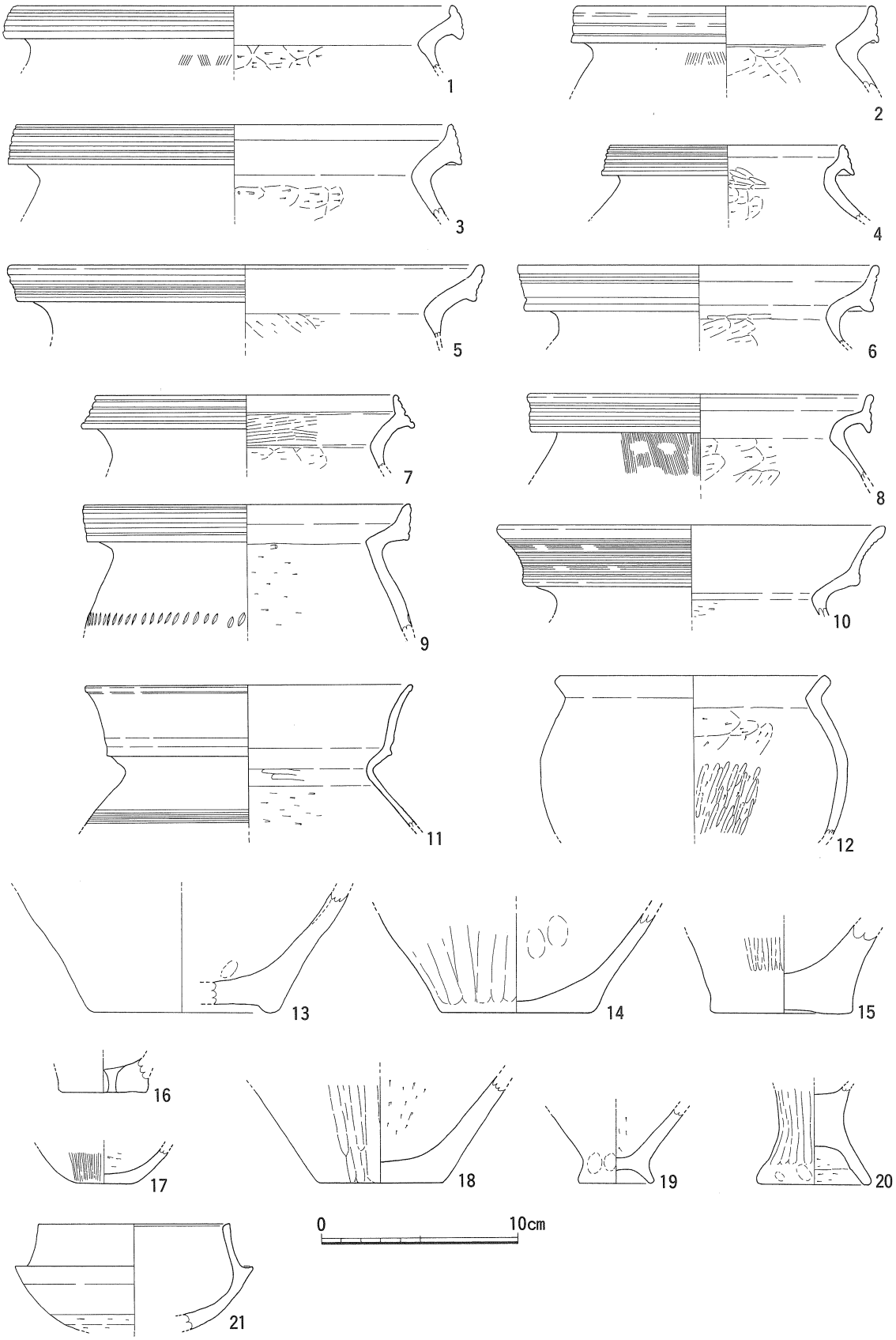
9は薄い板状の木製品で、円孔が3つ認められる。10も板状の木製品で、用途不明である。

第49・50図は杭である。自然木の先端のみを削って杭としたものがほとんどで、全体に加工を施したものは第49図2・6、第50図2・4など少数である。長さは36.0cm～93.1cmと様々である。

第52図は梯子と考えられる。径10cm前後の比較的太い自然木に、深さ4～8cmのくぼみを3つ設けている。




第45図　Ⅵ区出土　土器実測図(1)　S＝1:3




第46図　Ⅵ区出土　土器実測図(2)　S＝1:3

註

1) 島根県教育委員会『西川津遺跡』Ⅲ　1987

2) 松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』―山陰・山陽編―　1992
以下、出雲○様式と記載したものはこの編年による。

3) 松山智宏「出雲における古墳時代前半期の土器様相」『島根考古学会誌』第8集　1991
以下、松山編年○期と記載したものはこの編年による。

4) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
以下大谷編年○期と記載したものはこの編年による

5) 小林達雄 編『縄文土器大観』1・3・4　1989

6) 井上智博「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38－2　1991

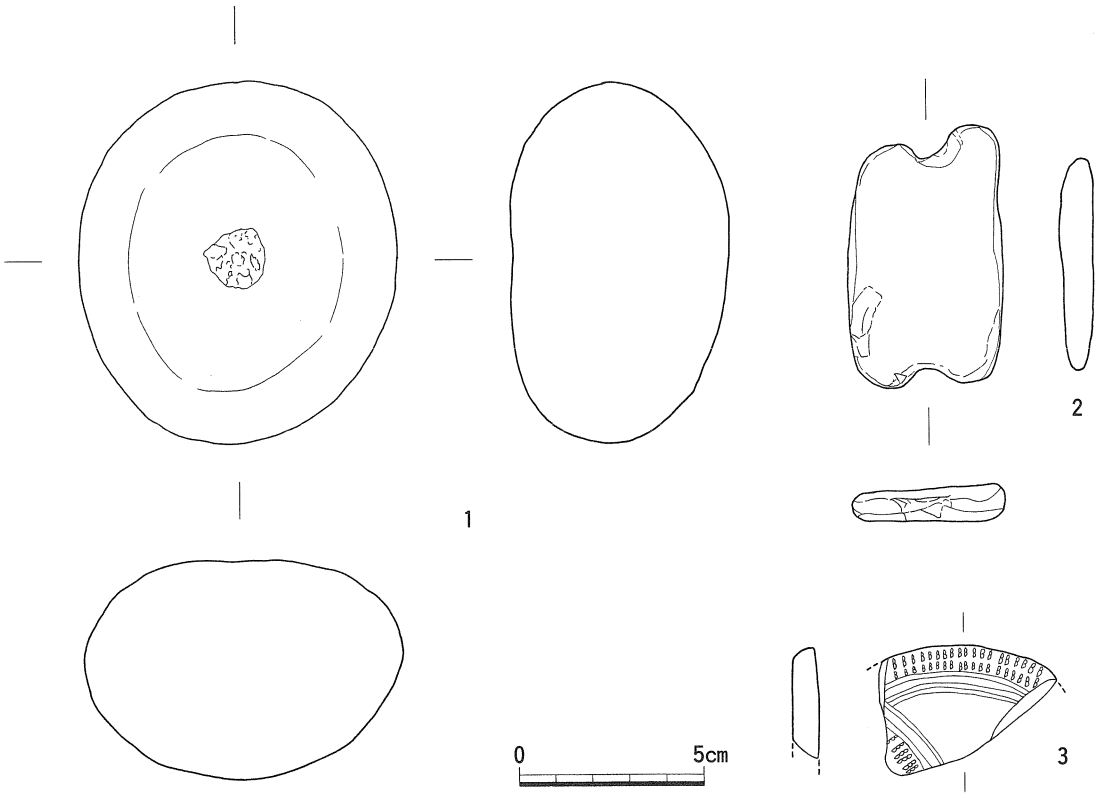
7) 註6に同じ

8) 小林達雄 編『縄文土器大観』4　1989

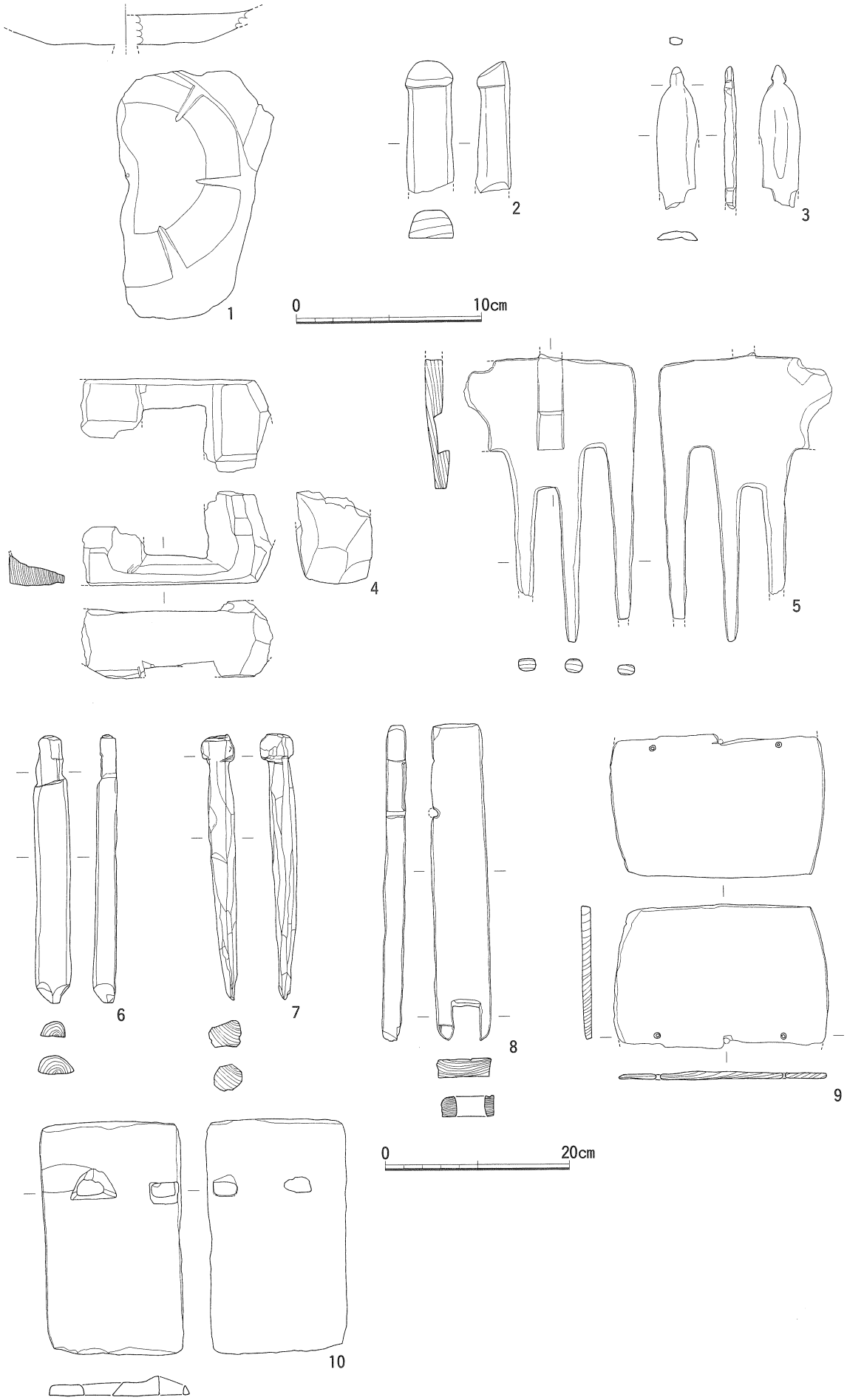
9) 註6に同じ

10) 註6に同じ

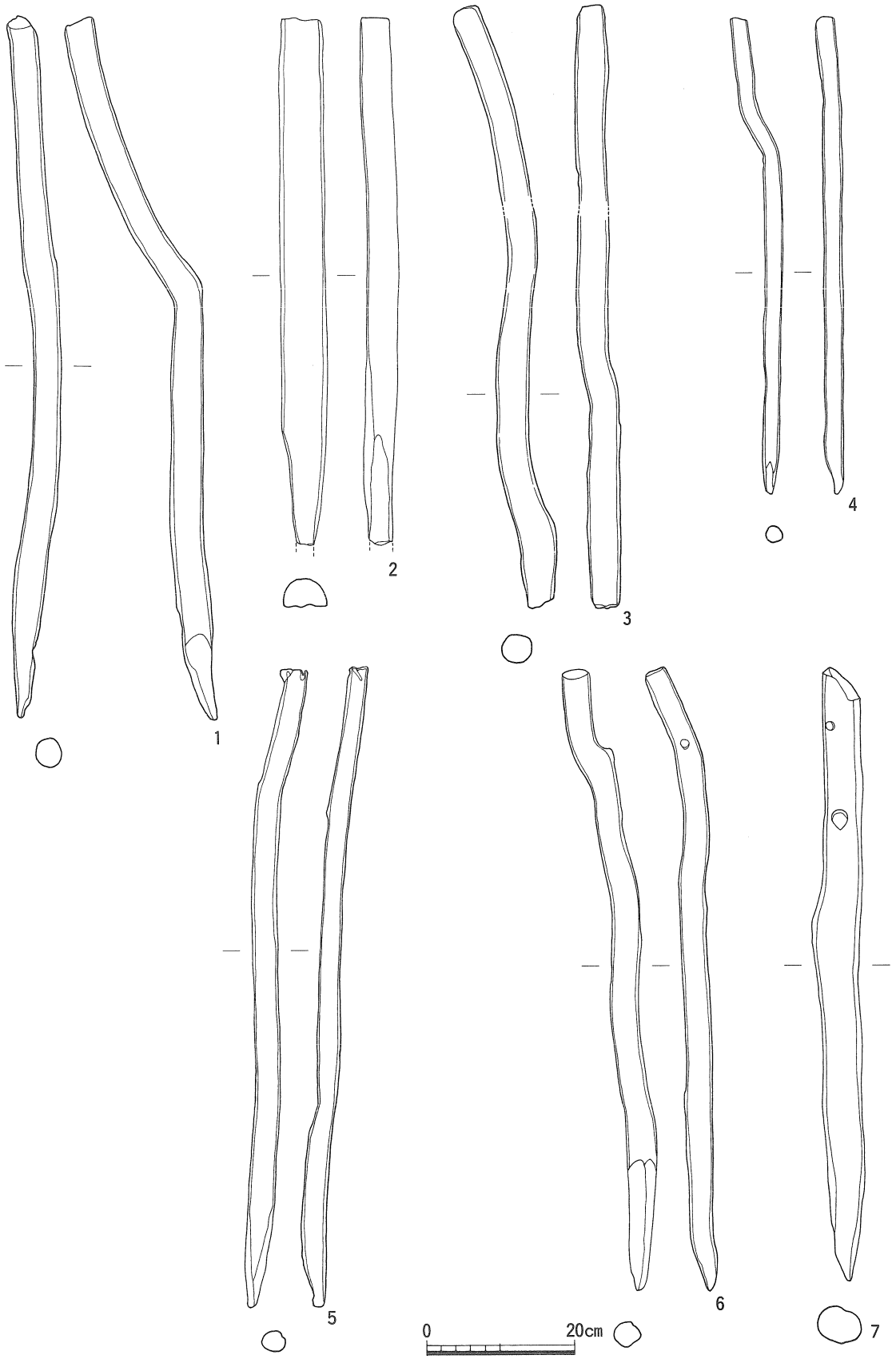
11) 註8に同じ



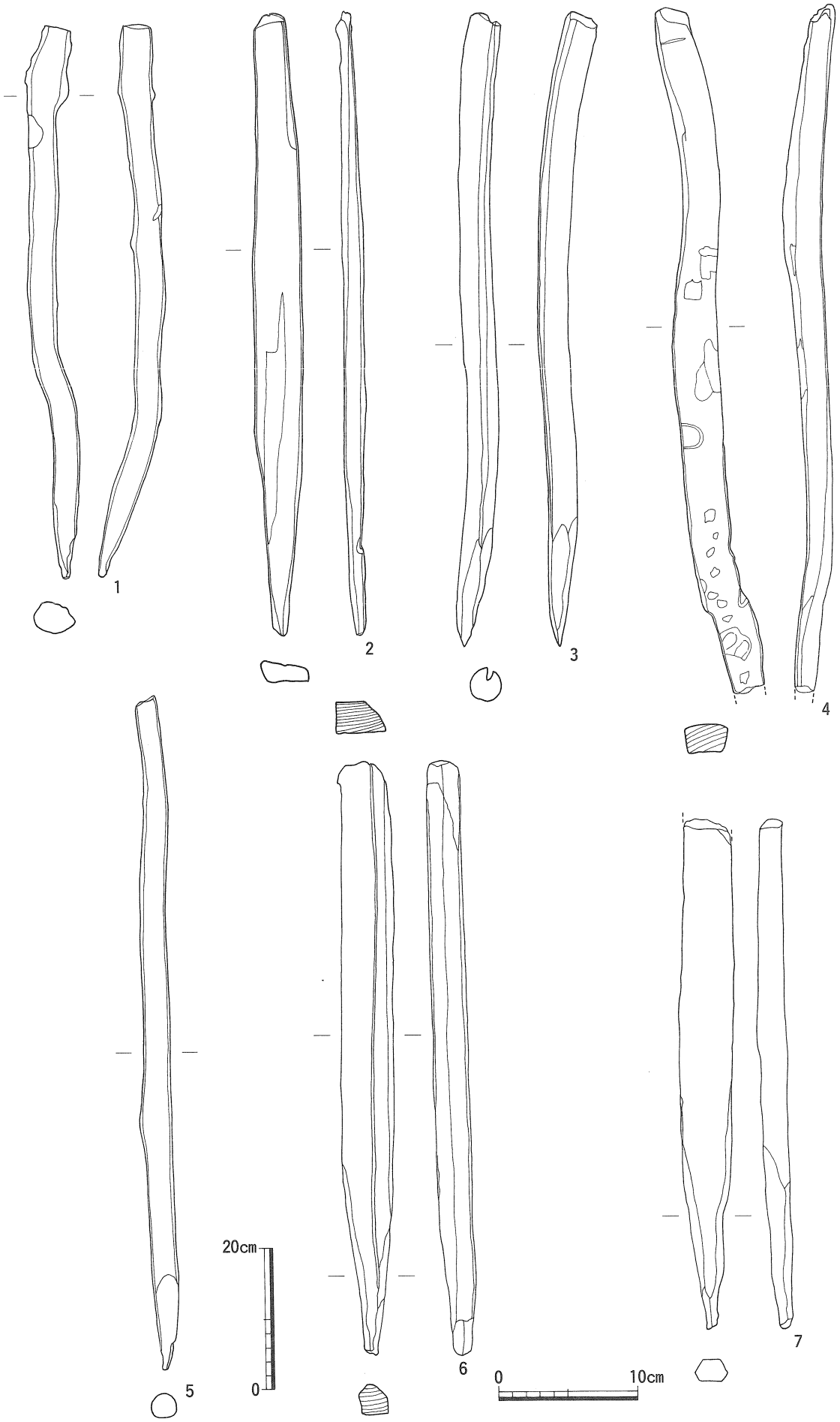

第47図　Ⅵ区出土　石製品・土製品実測図　S＝1:2



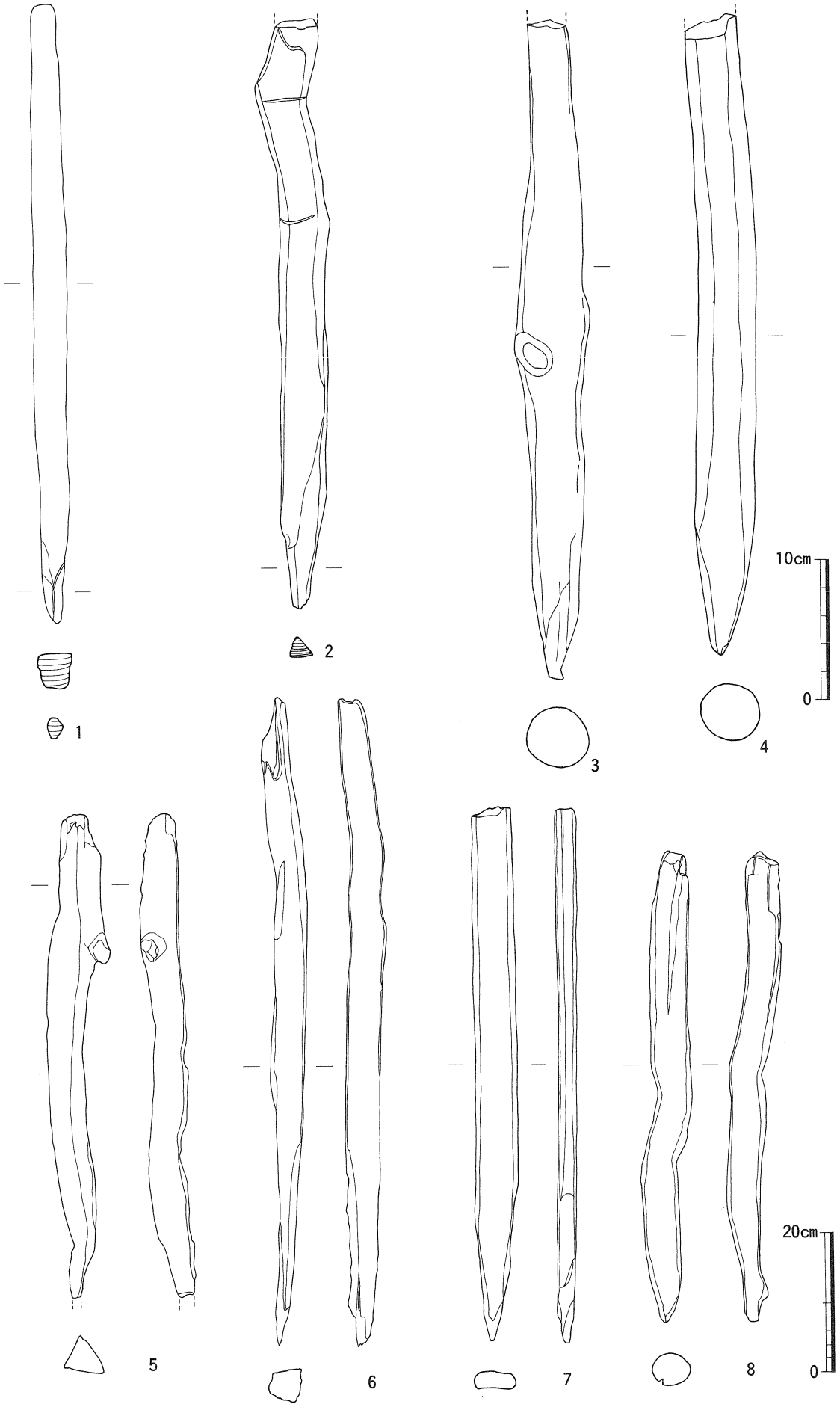

第48図　Ⅵ区出土　木製品実測図(1)　S＝1:6



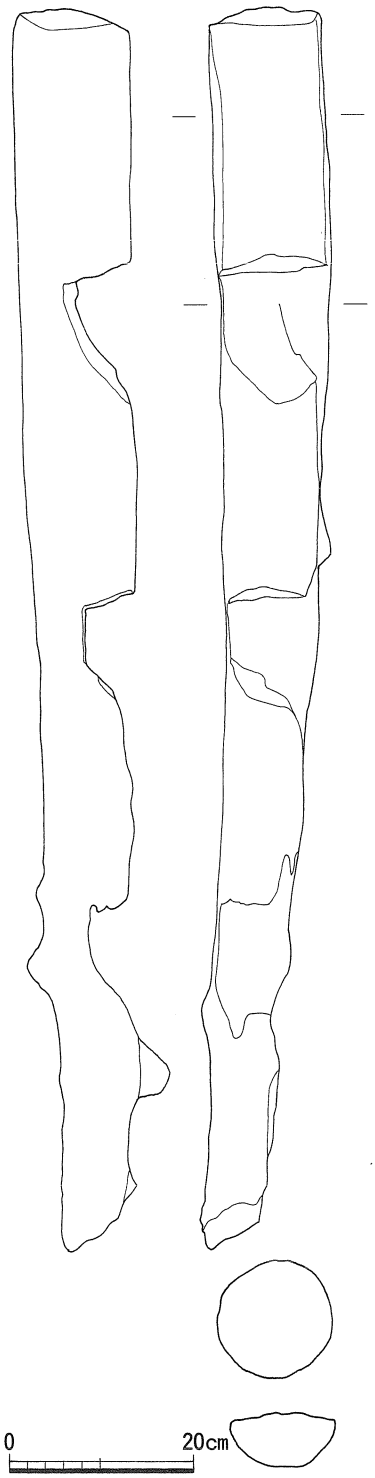

第49図　Ⅵ区出土　木製品実測図(2)　S＝1:8




第50図　Ⅵ区出土　木製品実測図(3)　1～5 S＝1:8　6～7 S＝1:4




第51図　Ⅵ区出土　木製品実測図(4)　1～4 S＝1:4　4～8 S＝1:8




第52図　Ⅵ区出土　木製品実測図(5)　S＝1:8

## 表７　西川津遺跡Ⅵ区出土土器観察表

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) | | | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 32-01 | 弥生甕 | 17.6 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ?ヘラケズリ | 淡青灰色土 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 32-02 | 弥生甕 | 15.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 淡青灰色土 | 微砂粒を含む　淡茶黄色　良好 | 口縁部:7条平行沈線文 |
| 32-03 | 弥生甕 | 29.0 | | | 外面:ナデ　内面:風化のため不明 | 淡青灰色土 | 1～2mmの砂粒を多く含む　淡茶白色<br>良好 | 口縁部:6条平行沈線文 |
| 32-04 | 弥生甕 | 13.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ? | 淡青灰色土 | 微砂粒を含む　茶白色　良好 | |
| 32-05 | 弥生甕 | 16.4 | | | 風化のため不明 | 淡青灰色土 | 1mm以下の砂粒を多く含む　淡桃褐色　良好 | |
| 32-06 | 弥生脚部 | | 11.2 | | 内・外面:風化のため不明 | 淡青灰色土 | 3mm以下の砂粒を多く含む　淡色褐色　良好 | 低脚坏か? |
| 32-07 | 弥生底部 | | 7.0 | | 外面:ヘラミガキ　底部ナデ?<br>内面:ヘラミガキ、ナデ | 淡青灰色土 | 1mm以下の砂粒を含む　暗灰色～灰茶色　良好 | |
| 32-08 | 土師甕 | 15.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ? | 淡青灰色土 | 1mm以下の砂粒を多く含む　淡灰黄色　良好 | 外面に波状文 |
| 32-09 | 土師甕 | 14.6 | | | 外面:ヨコナデ　胴部不明<br>内面:ヨコナデ　胴部ヘラケズリ | 淡青灰色土 | 微砂粒を含む　外面:淡茶褐色<br>内面:淡黄白色　良好 | ヘラ描刺突文 |
| 32-10 | 土師甕 | 13.0 | | | 内・外面:風化のため不明 | 淡青灰色土 | 2mm以下の砂粒を含む　外面:灰白色<br>内面:淡茶褐色～淡黄白色　良好 | 壺の可能性もある |
| 32-11 | 土師坏 | 13.0 | | 4.7 | 表面剥離のため調整不明 | 淡青灰色土 | 1mm以下の砂粒を多く含む、2～5mmの大きい砂粒もあり　淡茶黄色、一部淡灰色　良好 | |
| 32-12 | 土師高坏 | 18.7 | | | 内・外面:ヨコナデ | 淡青灰色土 | 1～2mmの砂粒を含む　淡灰褐色<br>良好 | 外面に段 |
| 32-13 | 土師高坏 | | | | 外面:ナデ、ヘラミガキ<br>内面:ヘラケズリ後ナデ、ナデ | 淡青灰色土 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡黄白色(淡橙色が混じっている) | |
| 32-14 | 須恵坏蓋 | 14.4 | | 5.4 | 外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ<br>内面:回転ナデ、ナデ | 淡青灰色土 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>青灰色　良好 | |
| 32-15 | 土師壺? | 15.2 | | | 風化のため不明 | 淡青灰色土 | 4mm大の砂粒を含む　淡灰色　良好 | 直口壺か? |
| 32-16 | 土師壺 | 26.1 | | | 外面:ヨコナデ?<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ? | 淡青灰色土 | 3mm以下の砂粒を僅かに含む<br>淡灰褐色　良好 | ヘラ描有軸羽状文 |
| 32-17 | 土師壺 | 20.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヘラケズリ? | 淡青灰色土 | 3mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰白褐色　良好 | |
| 32-18 | 土師甕 | 23.0 | | | 外面:ヨコナデ?<br>内面:ナデ?ヘラケズリ? | 淡青灰色土 | 2mm以下の砂粒を少し含む<br>灰褐色　良好 | 5条の平行沈線文、6条の波状文 |
| 35-01 | 縄文深鉢 | | | | 内・外面:貝殻条痕 | 砂礫層1 | 2mm大の砂粒を含む　外面:黒灰色<br>内面:灰色　良好 | 刻目をもつ隆帯文、西川津Ｂ式 |
| 35-02 | 縄文深鉢? | | | | 外面:条痕　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 舟元Ⅵ |
| 35-03 | 縄文深鉢? | | | | 内・外面:ナデ? | 砂礫層1 | 2mm大の砂粒を含む　黒灰色　良好 | 波状口縁、凹線文、中津式? |
| 35-04 | 縄文深鉢 | | | | 外面:ナデ?内面:風化のため不明 | 砂礫層1 | 1mm大の砂粒を多く含む　淡赤茶色～淡灰色　良好 | 巻貝による沈線、宮滝式 |
| 35-05 | 弥生甕 | 15.6 | | | 外面:指頭圧痕、ナデ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 4mm大の砂粒を含む　淡灰色　良好 | 朝鮮系無文土器か? |
| 35-06 | 縄文?不明 | 4.9 | | | 風化のため不明 | 砂礫層1 | 3mm大の砂粒を含む　灰茶色　良好 | 円孔、刺突文 |
| 35-07 | 弥生壺 | | | | 外面:ナデ　内面:ナデ、ハケメ | 砂礫層1 | 1mm大の砂粒を含む　茶灰色～灰色<br>良好 | ヘラ描沈線、クシ描列点文 |
| 35-08 | 弥生壺 | | 6.4 | | 外面:ヘラミガキ、底部ナデ<br>内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm大の砂粒を含む　茶灰色～暗灰色　良好 | |
| 35-09 | 弥生甕 | 15.0 | | | 外面:ナデ?　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 35-10 | 弥生甕 | 18.2 | | | 外面:ナデ(指頭圧痕)<br>内面:ナデ、ハケメ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>黒褐色　良好 | |
| 35-11 | 弥生甕 | 15.3 | | | 風化のため不明 | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　2～4mmの白く大きい粒も有り　淡灰色　良好 | 口縁部:ヘラ状工具による刻目文<br>頸部1条の沈線 |
| 35-12 | 弥生甕 | | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:風化のため不明 | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を多く含む　外面:淡茶白色　内面:淡灰色～淡茶白色　良好 | 口縁部:ヘラ状工具による刻目文<br>頸部1条の沈線 |
| 35-13 | 弥生甕 | 26.6 | | | 外面:ヨコナデ、指頭圧痕、ハケメ<br>内面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡黄褐色～暗褐色<br>内面:淡黄褐色　良好 | 口縁部:貝殻腹縁による刻目文<br>頸部:3条のヘラ描沈線文 |
| 35-14 | 弥生甕 | 23.4 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | 砂礫層1 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>黄灰褐色　良好 | 口縁部:刺突文<br>頸部:6条ヘラ描沈線文 |
| 36-01 | 弥生壺 | 16.8 | | | 風化のため不明 | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡黄灰色　良好 | |
| 36-02 | 弥生壺 | 28.8 | | | 内・外面:ナデ? | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を多く含む　外面:灰白色　内面:暗灰色(部分的に黒色) | 口縁部:ヘラ状工具による刻目文 |
| 36-03 | 弥生壺 | 28.6 | | | 内・外面:ナデ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡黄色　内面:橙黄色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>口縁部内面:5条平行沈線文 |
| 36-04 | 弥生壺 | | | | 外面:風化のため不明<br>内面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:黄灰色　内面:灰黒色　良好 | 口縁部:2条平行沈線文 |
| 36-05 | 弥生壺 | 12.6 | | | 内・外面:ヨコナデ　頸部指頭圧痕 | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外:淡黄灰色～暗灰色　内:暗灰色　良好 | 口縁部:2条平行沈線文<br>刻目文　ヘラ描波状文 |
| 36-06 | 弥生壺 | 21.2 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　灰白色<br>良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 36-07 | 弥生壺 | 26.2 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ　内面:口縁ヨコナデ、頸部(指頭圧痕)、ナデ? | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　淡黄褐色～淡黒色<br>良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 36-08 | 弥生壺 | 22.2 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 4mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:2条平行沈線文<br>頸部:4条の平行沈線文 |
| 36-09 | 弥生壺 | 25.0 | | | 外面:頸部:ハケメ　他、風化のため不明　内面:風化のため不明 | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　桃白色<br>良好 | 口縁部:4条ヘラ描平行沈線文 |
| 36-10 | 弥生壺 | 29.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む　灰茶黄色<br>良好 | 口縁部:3条平行沈線文　頸部2条平行沈線文、ヘラ描刺突文<br>内面:口縁部:3条ヘラ描沈線文 |
| 37-01 | 弥生甕 | 17.6 | | | 外面:ヨコナデ、指頭圧痕<br>内面:ヨコナデ、ナデ? | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡黄褐色　良好 | 頸部:8条クシ描平行沈線文 |
| 37-02 | 弥生甕 | 18.6 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色　良好 | |
| 37-03 | 弥生甕 | 13.6 | | | 内・外面:ヨコナデ、ハケメ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む　黄灰色<br>良好 | |

| 挿図番号 | 種類 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 37-04 | 弥生甕 | 18.2 | | | 外面:ナデ、ハケメ、ヘラミガキ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>暗灰褐色　良好 | 胴部:クシ描刺突文 |
| 37-05 | 弥生甕 | 28.8 | | | 外面:ヨコナデ　胴部ハケメ<br>内面:口縁部ヨコナデ　胴部ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の微砂粒を多く含む<br>外面:暗灰色　内面:灰茶色　良好 | 口縁端部:浅い沈線 |
| 37-06 | 弥生甕 | 23.6 | | | 内・外面:ヨコナデ、ハケメ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を僅かに含む　黒褐色<br>良好 | 刻目文、指頭圧痕突帯、<br>ヘラ描刺突文 |
| 38-01 | 弥生甕 | 19.6 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>黒褐色　良好 | 胴部:クシ描刺突文 |
| 38-02 | 弥生甕 | 20.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ、ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:3条の平行沈線文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 38-03 | 弥生甕 | 28.8 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ? | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を少し含む　黒褐色<br>良好 | 口縁部:平行沈線文、刻目文、<br>円形浮文　頸部:指頭圧痕突帯 |
| 38-04 | 弥生甕 | 29.8 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 38-05 | 弥生甕 | 16.8 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>茶黄色～灰色　良好 | 口縁部:3条の平行沈線文<br>外面:一部すす付着 |
| 38-06 | 弥生甕 | 17.0 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒をやや含む<br>外面:暗茶色　内面:茶白色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>頸部:刻目突帯 |
| 38-07 | 弥生甕 | 19.4 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ? | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:茶灰色　内面:暗灰色　良好 | 口縁部:2条平行沈線文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 38-08 | 弥生甕 | 16.6 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm大の砂粒を含む　外面:灰褐色<br>～黄褐色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文 |
| 38-09 | 弥生高坏 | 15.4 | | | 外面:ナデ　内面:ヘラケズリ後ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡黄褐色　良好 | 口縁部:2条の沈線　坏部:4条の<br>ヘラ描沈線文、刻目文 |
| 39-01 | 弥生壺 | 25.4 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む　灰白色<br>良好 | 口縁部:4条平行沈線文　内側に<br>すす付着 |
| 39-02 | 弥生壺 | 12.0 | | | 外面:ヘラミガキ　内面:口縁部ナデ<br>胴部ヘラケズリ | 砂礫層1 | 3mm大の砂粒をやや含む　1mm以下<br>の砂粒を含む　赤褐色　良好 | 直口壺 |
| 39-03 | 弥生甕 | 10.4 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>暗灰褐色　良好 | 口縁部:3条の平行沈線文 |
| 39-04 | 弥生甕 | 15.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡<br>灰色～暗灰色　内面:灰褐色　良好 | 口縁部:3条の平行沈線文<br>胴部:ヘラ描刺突文 |
| 39-05 | 弥生甕 | 17.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ? | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を少し含む　黒褐色<br>良好 | 口縁部:2条の平行沈線文 |
| 39-06 | 弥生甕 | 12.2 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 3mm以下の砂粒を少し含む　黒褐色<br>良好 | |
| 39-07 | 弥生甕 | 12.4 | | | 外面:ヨコナデ　胴部に一部ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　茶黄色　良好 | 胴部:クシ描刺突文(一部ハケメ) |
| 39-08 | 弥生甕 | 10.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ後ナデ? | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:乳灰色～黒色<br>内面:乳灰色～暗褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>胴部:クシ描刺突文　すす付着 |
| 39-09 | 弥生甕 | 14.0 | | | 外面:風化のため不明<br>内面:胴部ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を含む　淡黄灰色<br>良好 | 胴部:刻目文 |
| 39-10 | 弥生甕 | 22.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 3mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:黄褐色　内面:黒褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 39-11 | 弥生甕 | 15.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡<br>灰色～暗灰色　内面:淡灰色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>外面口縁下部:すす付着 |
| 39-12 | 弥生甕 | 19.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm大の砂粒を少し含む　黒褐色<br>良好 | 口縁部:4条平行沈線文 |
| 39-13 | 弥生甕 | 13.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む　外面:黒茶灰色<br>内面:茶灰色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 39-14 | 弥生甕 | 21.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、指頭圧痕、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>外面:黒褐色　内面:灰褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 39-15 | 弥生甕 | 15.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗<br>灰色　内面:淡黄褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>すす付着 |
| 39-16 | 弥生甕 | 18.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む　外面:灰褐色<br>内面:淡灰色　良好 | 口縁部:4条ヘラ描沈線文<br>全体にすす付着 |
| 39-17 | 弥生甕 | 16.2 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ後ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を僅かに含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 39-18 | 弥生甕 | 24.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を含む　外面:灰褐色<br>内面:淡灰褐色　良好 | 口縁部:4条ヘラ描平行沈線文 |
| 39-19 | 弥生甕 | 16.0 | | | 外面:ナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:茶<br>褐色～灰褐色　内面:淡茶褐色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文<br>途中で4条になっている |
| 39-20 | 弥生甕 | 18.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>灰白色～暗灰褐色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文 |
| 39-21 | 弥生鉢? | 16.6 | | | 外面:ヨコナデ、ヘラミガキ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　外面:淡橙茶白色～<br>黒白茶色<br>内面:淡橙茶色～黒白茶色　良好 | |
| 40-01 | 弥生甕 | 16.2 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗<br>灰褐色～淡灰色　内面:灰茶色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文<br>すす付着 |
| 40-02 | 弥生甕 | 23.8 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ、指頭圧痕 | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む | 口縁部:5条平行沈線文 |
| 40-03 | 弥生甕 | 13.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む　外面:黒灰色<br>内面:淡灰色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>外面に黒色の付着物あり |
| 40-04 | 弥生甕 | 27.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む　外面:黄白色<br>内面:灰茶色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文 |
| 40-05 | 弥生甕 | 13.6 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を多く含む<br>暗灰褐色　良好 | 口縁部:4条の平行沈線文 |
| 40-06 | 弥生甕 | 20.5 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む　淡灰色～灰褐色<br>良好 | 口縁部:5条ヘラ描平行沈線文 |
| 40-07 | 弥生甕 | 21.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　淡灰色<br>良好 | 口縁部:4条のヘラ描平行沈線文 |
| 40-08 | 弥生甕 | 16.4 | | | 外面:口縁部ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒をやや含む　黒灰色<br>良好 | 口縁部:6条ヘラ描平行沈線文 |
| 40-09 | 弥生甕 | 12.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:暗灰褐色<br>内面:暗灰褐色～淡黄褐色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>すす付着 |
| 40-10 | 弥生甕 | 12.2 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>灰白色～茶黄色　良好 | |
| 40-11 | 弥生甕 | 16.4 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:灰<br>茶色～黒色　内面:灰茶色　良好 | 口縁部:6条平行沈線文 |
| 40-12 | 弥生甕 | 14.0 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を少し含む<br>外面:黒褐色　内面:灰褐色　良好 | 口縁部:6条平行沈線文<br>肩部:クシ描列点文 |

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) | | | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 40-13 | 弥生甕 | 19.4 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ? | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を含む　淡灰色<br>良好 | 口縁部:7条平行沈線文 |
| 40-14 | 弥生甕 | 31.4 | | | 外面:ナデ　内面:ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の白色砂粒を多く含む<br>外面:黄白褐色　内面:黒褐色　良好 | 口縁部:12条平行沈線文 |
| 40-15 | 弥生甕 | 15.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を含む<br>外面:黒茶色　内面:茶白色　良好 | 口縁部:17条平行沈線文<br>頸部:平行沈線　外面:すす付着 |
| 40-16 | 弥生甕 | 15.6 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>灰褐色　良好 | 胴部:10条平行沈線文 |
| 40-17 | 弥生甕 | 17.8 | | | 外面:ヨコナデ?<br>内面:ヨコナデ?　ヘラケズリ | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　黄白色　良好 | |
| 40-18 | 弥生甕 | 15.2 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む　淡灰色<br>良好 | 外面:黒色付着物有り |
| 41-01 | 弥生高坏 | 24.8 | | | 外面:ヨコナデ、ヘラミガキ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ後ヘラミガキ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む<br>外面:淡茶褐色～黒褐色<br>内面:淡茶褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文、刻目文 |
| 41-02 | 弥生高坏 | 16.4 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む　黒灰茶色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 41-03 | 弥生高坏? | | 13.2 | | 外面:ヨコナデ、ハケメ　内面:ハケメ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む　外面:灰茶色<br>内面:黒灰色～淡黄褐色　良好 | 脚部?3条平行沈線文 |
| 41-04 | 弥生器台 | 20.4 | | | 外面:ヨコナデ、ヘラミガキ<br>内面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡黄灰色　良好 | 口縁部:10条平行沈線文 |
| 41-05 | 弥生器台 | 23.4 | | | 外面:ヘラミガキ(一部ハケメ)、ヨコナデ　内面:ヘラミガキ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を含む　灰黄色<br>良好 | |
| 41-06 | 弥生器台 | 19.4 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ　内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 2mm以下の砂粒を多く含む　橙褐色<br>良好 | 口縁部:11条の平行沈線文、円形浮文 |
| 41-07 | 弥生把手 | | | | 外面:ヘラミガキ　内面:ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を少し含む　黒褐色<br>良好 | 注口土器? |
| 41-08 | 弥生脚部 | | 5.9 | | 外面:ヨコナデ、ナデ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>暗灰色～淡灰色(一部明茶色)良好 | 脚付甕?3条の沈線 |
| 41-09 | 弥生底部 | | 8.4 | | 外面:ハケメ、ナデ<br>内面:ヘラミガキ、ナデ | 砂礫層1 | 2mm以下の白い砂粒を含む<br>外面:明茶灰色～暗灰色<br>内面:茶灰色　良好 | |
| 41-10 | 弥生底部 | | 8.8 | | 外面:ヘラミガキ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:暗灰色～黒色<br>内面:淡灰色～黒色　良好 | |
| 41-11 | 弥生底部 | | 11.0 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　外面:灰黄色<br>内面:淡茶黄色　良好 | |
| 41-12 | 弥生底部 | | 9.0 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡茶灰色～暗白色　内面:茶白色　良好 | |
| 41-13 | 弥生底部 | | 5.8 | | 内・外面:ナデ | 砂礫層1 | 1～2mmの砂粒を含む<br>淡灰～暗灰色　良好 | |
| 41-14 | 弥生底部 | | 7.2 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mmの砂粒を含む<br>外面:暗灰色～灰白色<br>内面:黒褐色～灰褐色　良好 | |
| 41-15 | 弥生底部 | | 5.8 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ<br>内面:ナデ、指頭圧痕 | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　外面:暗灰色<br>内面:灰褐色　良好 | |
| 41-16 | 弥生底部 | | 5.2 | | 外面:ヘラミガキ<br>内面:ナデ(指頭圧痕) | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　外面:黒灰色<br>内面:灰黄色　良好 | |
| 41-17 | 弥生底部 | | 5.3 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡灰色～暗灰色<br>内面:淡灰色～黒灰色　良好 | |
| 41-18 | 弥生底部 | | 8.6 | | 外面:ハケメ、ナデ　内面:ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:明茶色～淡灰褐色<br>内面:淡茶灰色　良好 | |
| 41-19 | 弥生底部 | | 6.2 | | 外面:ヘラミガキ<br>内面:ヘラケズリ、ナデ | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　外面:灰黒色<br>内面:黒茶色　良好 | 外面にすす付着 |
| 41-20 | 弥生底部 | | 5.6 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ<br>内面:ヘラケズリ、ナデ(指頭圧痕) | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>暗褐色～淡灰褐色　良好 | |
| 41-21 | 土師甕 | 23.3 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 微砂粒を多く含む　淡灰黄色　良好 | |
| 41-22 | 土師甕 | 14.8 | | | 内・外面:ヨコナデ | 砂礫層1 | 微砂粒を含む　外面:黒茶白色<br>内面:灰茶色　良好 | |
| 41-23 | 土師高坏 | 20.8 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヘラミガキ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:茶灰色(表面は剥落)内面:茶色 | |
| 41-24 | 土師?高坏 | 24.6 | | | 外面:不明　内面:ナデ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡橙褐色　内面:淡褐色　良好 | |
| 41-25 | 土師器台 | | 22.2 | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層1 | 1mm以下の砂粒を多く含む　黄白色<br>良好 | 鼓形器台、脚部 |
| 42-01 | 縄文浅鉢 | | | | 内・外面:条痕 | 砂礫層2 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>暗灰褐色　良好 | 斜めの隆帯、西川津式 |
| 42-02 | 縄文深鉢? | | | | 内・外面:条痕 | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を含む　黒褐色<br>良好 | 長山式 |
| 42-03 | 縄文深鉢 | | | | 外面:ナデ、貝殻条痕<br>内面:貝殻条痕 | 砂礫層2 | 1mm大の砂粒を含む　淡灰～暗灰色<br>良好 | 突帯文土器、貝殻腹縁による刻目 |
| 42-04 | 縄文深鉢 | | | | 外面:ナデ、貝殻条痕<br>内面:貝殻条痕 | 砂礫層2 | 1mm大の砂粒を含む　灰褐色～暗灰色　良好 | 突帯文土器、刻目文 |
| 42-05 | 弥生壺 | | | | 内・外面:ハケメ後ナデ | 砂礫層2 | 2mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | ヘラ描沈線、斜行文 |
| 42-06 | 弥生壺 | 27.6 | | | 内・外面:ナデ | 砂礫層2 | 3mm以下の砂粒を多く含む　灰褐色<br>良好 | 頸部に段をもつ |
| 42-07 | 弥生甕 | 15.0 | | | 外面:ナデ、ハケメ　内面:ナデ | 砂礫層2 | 1mm大の砂粒を僅かに含む　淡灰色～黒灰色　良好 | 頸部に沈線<br>朝鮮系無文土器か? |
| 42-08 | 弥生甕 | 15.8 | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ナデ(一部指頭圧痕) | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗褐色～暗灰色　内面:暗灰色　良好 | 内、外面ともすす付着 |
| 42-09 | 弥生甕 | 32.6 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>明橙褐色　良好 | 頸部:指頭圧痕突帯 |
| 42-10 | 弥生甕 | 20.0 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヘラミガキ? | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を少量含む　灰白色<br>良好 | |
| 42-11 | 弥生甕 | 23.6 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ハケメ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む　灰茶色<br>良好 | 口縁部:2条平行沈線文 |
| 42-12 | 弥生鉢 | 15.2 | | | 内・外面:ヨコナデ、ナデ? | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を含む　淡灰色<br>良好 | 口縁部:ヘラ描刻目文<br>胴部:6条のクシ描刺突文 |

| 挿図番号 | 種類 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 42-13 | 弥生 鉢 | 24.8 | | | 外面:ナデ　内面:ナデ、ハケメ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗灰色　内面:黒灰色　良好 | 口縁部:クシ描格子文<br>胴部:刻目突帯文、クシ描刺突文 |
| 43-01 | 弥生 甕 | 18.2 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層2 | 2mm以下の砂粒を少し含む<br>黒褐色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文 |
| 43-02 | 弥生 甕 | 16.4 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | 砂礫層2 | 2mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗褐色　内面:淡灰茶色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文<br>すす付着 |
| 43-03 | 弥生 甕 | 11.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | 砂礫層2 | 1mm程度の砂粒を多少含む<br>外面:灰白色　内面:赤茶色　良好 | 6条平行沈線文、円孔、<br>平行沈線文、刺突文(貝殻復縁) |
| 43-04 | 弥生 甕 | 13.2 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を含む<br>淡黄灰色　良好 | |
| 43-05 | 弥生 甕 | 8.1 | | | 外面:指頭圧痕、ナデ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ | 砂礫層2 | 微砂粒を多く含む　外面:淡灰褐色<br>内面:明灰色　良好 | 胴部:刺突文(半裁竹管)<br>ミニチュア土器? |
| 43-06 | 弥生 底部 | | 5.5 | | 外面:風化のため不明<br>内面:ナデ、指頭圧痕 | 砂礫層2 | 1～2mmの白色砂粒多く含む<br>淡黄灰色　良好 | |
| 43-07 | 弥生 脚部 | | 6.5 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ<br>内面:ヘラミガキ、ナデ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗灰褐色　内面:暗灰色　良好 | すす付着　底部:焼成後穿孔<br>壺か? |
| 43-08 | 弥生 底部 | | 6.8 | | 外面:ヘラミガキ　内面:ナデ | 砂礫層2 | 2mm大の砂粒を含む　外面:灰白色～黒灰色　内面:灰白色～灰色　良好 | |
| 43-09 | 弥生 底部 | | 11.8 | | 外面:ヘラミガキ、ハケメ(一部ヘラケズリ?)　内面:ハケメ、ナデ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡暗灰色<br>内面:灰色～濃暗灰色　良好 | |
| 43-10 | 弥生 底部 | | 5.6 | | 外面:ヘラミガキ、ヘラミガキ後ナデ<br>内面:ナデ、部分的にハケメ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡灰褐色<br>内面:淡灰褐色～暗灰色　良好 | |
| 43-11 | 弥生 底部 | | 7.6 | | 外面:タテ方向にヘラミガキ、ナデ<br>一部ヘラミガキ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:灰～黒灰色　内面:淡灰色　良好 | |
| 43-12 | 弥生 底部 | | 5.1 | | 外面:タテ方向にヘラミガキ、ナデ<br>内面:横方向にヘラミガキ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:黒灰色　内面:淡灰色　良好 | |
| 43-13 | 弥生 底部 | | 6.8 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ<br>内面:ヘラミガキ、ナデ | 砂礫層2 | 1mm以下の砂粒を含む　外面:暗灰～黒灰色　内面:灰茶色　良好 | |
| 44-01 | 縄文 深鉢? | | | | 内・外面:条痕 | 砂礫層3 | | 長山式か? |
| 44-02 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:風化の為不明　内面:条痕 | 砂礫層3 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>黒褐色　良好 | 口縁部:肥厚、貝殻復縁による<br>連続刺突文、西川津A式 |
| 44-03 | 縄文 深鉢 | | | | 内・外面:条痕 | 砂礫層3 | 2mm大の砂粒を含む<br>灰～黒灰色　良好 | 二又の工具と2枚貝による刺突、<br>西川津A式 |
| 44-04 | 縄文 深鉢? | | | | 内・外面:条痕 | 砂礫層3 | 2mm以下の砂粒を少し含む<br>黒褐色　良好 | 西川津の無文部分か? |
| 44-05 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:羽状縄文　内面:条痕 | 砂礫層4 | 1mm大の砂粒を含む<br>灰褐色～黒色　良好 | 胎土に繊維を含む、菱根式 |
| 44-06 | 縄文 深鉢? | | | | 内・外面:条痕? | 砂礫層4 | | 菱根(新) |
| 44-07 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:条痕　内面:ナデ | 砂礫層5 | 3mm以下の砂粒を少し含む<br>黒褐色　良好 | 貼付突帯、2枚貝による刺突、<br>長山式 |
| 44-08 | 縄文 深鉢 | | | | 内・外面:条痕 | 砂礫層5 | | 菱根(新) |
| 45-01 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:縄文　内面:条痕 | その他 | 2mm大の砂粒を含む<br>灰色～黒灰色　良好 | 菱根式 |
| 45-02 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:縄文　内面:条痕 | その他 | 4mm大の砂粒を含む<br>灰茶色～暗灰色　良好 | 波状口縁、磨消縄文、中津式 |
| 45-03 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:ナデ、条痕　内面:条痕 | その他 | 1mm大の砂粒を含む<br>灰褐色～暗灰色　良好 | 突帯文土器、刻目文 |
| 45-04 | 縄文 深鉢 | | | | 外面:ナデ、条痕　内面:条痕 | その他 | 1mm大の砂粒を含む　淡灰色　良好 | 突帯文土器、刻目文 |
| 45-05 | 弥生 壺 | | | | 内・外面:ヘラミガキ | その他 | 1mm大の砂粒を含む<br>灰褐色～黒褐色　良好 | 斜行文、沈線文　刺突文 |
| 45-06 | 弥生 甕 | 21.8 | | | 内・外面:ナデ | その他 | 1～2mmの砂粒を多く含む<br>灰白色　良好 | |
| 45-07 | 弥生 壺 | 21.0 | | | 内・外面:ナデ? | その他 | 1mm大の砂粒を含む　淡灰色　良好 | 頸部に凹線 |
| 45-08 | 弥生 壺 | 11.8 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ハケメ後ヨコナデ? | その他 | 1mm以下の砂粒をやや多く含む<br>黄灰褐色　良好 | 口縁部:2条平行沈線文 |
| 45-09 | 弥生 壺 | | | | 内・外面:ヨコナデ | その他 | 微砂粒を含む　灰白色　良好 | 4条の凹線、クシによる刻目文 |
| 45-10 | 弥生 鉢 | 25.6 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ?(指頭圧痕)<br>内面:ナデ、指頭圧痕 | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡灰色　内面:淡黄灰色　良好 | |
| 45-11 | 弥生 甕 | 15.8 | | | 外面:ヨコナデ　内面:縦方向ハケメ | その他 | 1mm以下の砂粒を含む<br>淡灰色　良好 | 口縁部:刻目文 |
| 45-12 | 弥生 甕 | 17.0 | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | その他 | 1mm以下の砂粒をやや含む<br>灰白色　良好 | |
| 45-13 | 弥生 甕 | 18.6 | | | 内・外面:ヨコナデ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:黄白色～灰褐色　内面:黄白色　良好 | 口縁部:2条平行沈線文<br>すす付着 |
| 45-14 | 弥生 甕 | 17.0 | | | 内・外面:ヨコナデ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰褐色 | 口縁部:5条平行沈線文 |
| 45-15 | 弥生 甕? | 25.0 | | | 外面:ナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ナデ | その他 | 1mm以下の砂粒を少し含む<br>灰褐色　良好 | 口縁部:平行沈線文<br>頸部:指頭圧痕突帯 |
| 45-16 | 弥生 甕 | 12.0 | | | 内・外面:ナデ | その他 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>灰白色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文 |
| 45-17 | 弥生 甕 | 16.9 | | | 内・外面:ヨコナデ | その他 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡灰色～暗灰褐色<br>内面:茶灰色～暗灰褐色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文<br>すす付着 |
| 45-18 | 弥生 高坏 | 21.2 | | | 外面:ナデ、ハケメ後ヘラミガキ<br>内面:ヨコナデ、ヘラミガキ | その他 | 1mm以下の砂粒を含む<br>淡茶褐色　良好 | 口縁部:ヘラ描刻目文 |
| 46-01 | 弥生 甕 | 22.0 | | | 外面:ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | その他 | 1～2mmの砂粒を含む　外面:淡灰色<br>内面:淡黄褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>全体に黒くすすけている |
| 46-02 | 弥生 甕 | 15.0 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ(一部ハケメ)<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗黒色　内面:暗茶褐色　良好 | すす付着　口縁部:3条平行沈線文<br>(一部途切れる) |
| 46-03 | 弥生 甕 | 22.0 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | その他 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:黒褐色　内面:淡褐色　良好 | 口縁部:5条ヘラ描沈線文<br>内外ともすす付着 |
| 46-04 | 弥生 甕 | 11.6 | | | 外面:ナデ　内面:ヨコナデ、<br>ヘラミガキ、ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>淡茶灰色　良好 | 口縁部:5条平行沈線文<br>すす付着 |
| 46-05 | 弥生 甕 | 22.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:暗灰茶色　内面:灰黄色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>外面にすす付着 |

| 挿図番号 | 種類 | 法量(cm) | | | 形態・手法の特徴 | 出土場所 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 46-06 | 弥生甕 | 18.2 | | | 外面:ナデ　内面:ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:暗灰褐色<br>内面:淡黄褐色～暗灰褐色　良好 | 口縁部:3条平行沈線文<br>全体にすす付着 |
| 46-07 | 弥生壺 | 15.0 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ハケメ後ナデ、ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む　外面:淡灰褐色　内面:黒灰色　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>すす付着 |
| 46-08 | 弥生甕 | 17.2 | | | 外面:ヨコナデ、ハケメ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | その他 | 1～2mmの砂粒を含む　灰褐色<br>良好 | 口縁部:4条平行沈線文 |
| 46-09 | 弥生甕 | 16.4 | | | 外面:ヨコナデ、ナデ<br>内面:ヨコナデ、ヘラケズリ | その他 | 1～2mm以下の砂粒を多く含む<br>淡灰色(白味がかっている)　良好 | 口縁部:4条平行沈線文<br>胴部:刺突文 |
| 46-10 | 弥生甕 | 19.6 | | | 外面:ヨコナデ<br>内面:ナデ、ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:暗茶灰色<br>内面:淡灰黄色　良好 | 10条の平行沈線文 |
| 46-11 | 弥生甕 | 16.4 | | | 外面:ヨコナデ　内面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を含む　淡茶黄色<br>良好 | 胴部:7条平行沈線文 |
| 46-12 | 弥生鉢 | 13.4 | | | 外面:ヨコナデ　他風化のため不明<br>内面:ナデ、ヘラケズリ後一部ヘラミガキ | その他 | 2mm以下の砂粒を多く含む<br>暗灰褐色　良好 | |
| 46-13 | 弥生底部 | | 9.2 | | 外面:ナデ?　内面:ナデ(指頭圧痕) | その他 | 1～3mmの砂粒を含む　外面:茶白色<br>内面:灰～暗灰色　良好 | |
| 46-14 | 弥生底部 | | 7.6 | | 外面:ヘラミガキ　内面:ナデ? | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:灰黒色　内面:淡黄色 | |
| 46-15 | 弥生底部 | | 6.8 | | 外面:ヘラミガキ、ナデ　内面:ナデ? | その他 | 2～4mmの白い砂粒をわずかに含む<br>外面:黄褐色<br>内面:黄褐色～黒色　良好 | |
| 46-16 | 弥生底部 | | 4.3 | | 外面:ナデ　内面:風化のため不明 | その他 | 1～2mmの砂粒を多く含む　外面:淡灰褐色　内面:灰褐色　良好 | 焼成後穿孔、転用紡錘車か? |
| 46-17 | 弥生底部 | | 2.4 | | 外面:ナデ、ハケメ　内面:ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:黄褐色～暗黄褐色<br>内面:黄褐色　良好 | |
| 46-18 | 弥生底部 | | 6.4 | | 外面:ヘラミガキ　内面:ナデ、ヘラケズリ | その他 | 2mm大の砂粒を含む　外面:赤茶色～黒灰色　内面:淡橙色　良好 | |
| 46-19 | 弥生脚部 | | 3.6 | | 外面:ヨコナデ　内面:ヘラケズリ | その他 | 1mm以下の砂粒を含む　外面:淡灰色～暗灰色　内面:淡灰色　良好 | ミニチュア土器?甕か? |
| 46-20 | 弥生脚部 | | 5.4 | | 外面:上面ナデ　胴部ヘラミガキ、指頭圧痕　内面:底部ヘラケズリ後ナデ | その他 | 1mm以下の砂粒を多く含む<br>外面:淡灰褐色～暗灰色<br>内面:淡灰褐色　良好 | |
| 46-21 | 須恵杯身 | 9.8 | | | 外面:回転ナデ、ヘラケズリ<br>内面:回転ナデ | その他 | 密　外面:淡灰色～暗灰色<br>内面:淡灰色　良好 | |

## 表8　西川津遺跡Ⅵ区出土石製品・土製品観察表

| 挿図番号 | 種別 | 出土場所 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重さ(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 47-01 | 磨石 | 淡灰色砂礫層 | 9.7 | 8.6 | 689.9 | |
| 47-02 | 石錘 | 砂礫層1 | 7.0 | 4.2 | 36.6 | |
| 47-03 | 分銅形土製品 | 砂礫層1 | 3.5 | 4.7 | 13.2 | 刺突文、ヘラ描沈線 |

表９　西川津遺跡Ⅵ区木製品観察表

| 挿図番号 | 種類 | 法量　(cm) | | | 出土場所 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 最大径 | 厚さ | | |
| 48-01 | 高坏 | | | 1.6 | 砂礫層2 | |
| 48-02 | 男根状木製品？ | 7.1 | 2.6 | 2.0 | | |
| 48-03 | 人形代 | 7.7 | 2.2 | 0.5 | | |
| 48-04 | 不明 | 20.5 | 10.0 | 3.2 | 砂礫層1 | |
| 48-05 | 鋤 | 30.9 | 18.6 | 1.9 | | |
| 48-06 | 柄？ | 28.5 | 3.9 | 2.4 | | |
| 48-07 | 不明 | 28.2 | 3.7 | 3.5 | 砂礫層1 | |
| 48-08 | 不明 | 33.7 | 6.0 | 2.4 | | |
| 48-09 | 不明 | 15.4 | 22.9 | | 砂礫層1 | |
| 48-10 | 不明 | 15.2 | 25.0 | 2.0 | | |
| 49-01 | 杭 | 93.1 | 7.3 | | 杭列状遺構 | |
| 49-02 | 杭 | 69.9 | 6.3 | | 杭列状遺構 | |
| 49-03 | 杭 | 80.2 | 13.1 | | 杭列状遺構 | |
| 49-04 | 杭 | 63.0 | 6.8 | | 杭列状遺構 | |
| 49-05 | 杭 | 84.5 | 8.6 | | 杭列状遺構 | |
| 49-06 | 杭 | 82.4 | 12.2 | | 杭列状遺構 | |
| 49-07 | 杭 | 81.1 | 7.2 | | 杭列状遺構 | |
| 50-01 | 杭 | 78.3 | 7.2 | | 杭列状遺構 | |
| 50-02 | 杭 | 87.8 | 7.1 | | 杭列状遺構 | |
| 50-03 | 杭 | 89.5 | 8.1 | | 杭列状遺構 | |
| 50-04 | 杭 | 97.0 | 14.2 | | 杭列状遺構 | |
| 50-05 | 杭 | 95.0 | 5.3 | | 杭列状遺構 | |
| 50-06 | 杭 | 41.9 | 4.0 | 2.2 | 杭列状遺構 | |
| 50-07 | 杭 | 36.0 | 4.0 | 2.3 | 杭列状遺構 | |
| 51-01 | 杭 | 44.0 | 2.6 | 2.4 | 杭列状遺構 | |
| 51-02 | 杭 | 41.9 | 3.3 | | 杭列状遺構 | |
| 51-03 | 杭 | 46.8 | 5.5 | | 杭列状遺構 | |
| 51-04 | 杭 | 45.5 | 4.5 | | 杭列状遺構 | |
| 51-05 | 杭 | 68.5 | 9.2 | | 杭列状遺構 | |
| 51-06 | 杭 | 92.0 | 7.0 | | 杭列状遺構 | |
| 51-07 | 杭 | 75.8 | 6.6 | | 杭列状遺構 | |
| 51-08 | 杭 | 66.6 | 7.5 | | 杭列状遺構 | |
| 52-01 | 梯子？ | 131.2 | 14.8 | | | |

# 第５章　平成13年度西川津遺跡発掘調査に係る自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

## はじめに

西川津遺跡は島根県東部、松江市西川津町地内に立地する遺跡である。西川津遺跡では、朝酌川改修工事に伴い昭和47年以降、断続的に発掘調査が行われてきた。平成13年度調査区は、一連の発掘調査の最上流の海崎地区に位置し、朝酌川と支流の持田川合流点に近接する。また今回の発掘調査が一連の発掘調査の最後となる。

西川津遺跡では、発掘調査の初期から継続的に花粉分析が行われており（大西・渡辺，1987ほか)、下流に位置する原の前遺跡、タテチョウ遺跡、近隣の島根大学構内遺跡などの花粉分析結果っを踏まえた古植生が論じられてきた（たとえば、渡辺，2001)。前述の様に本調査区は一連の朝酌川改修工事の最上流部に位置し、持田川との合流点に近いことから、従来にない堆積相を示していた（島根県教育委員会・島根県土木部河川課（2003))。当初、層相対比から上部の泥層がK−Ah降灰層準と考えられたが、今回の調査により下部の砂礫層に狭材される泥層からK−Ah起源と考えられる火山ガラスが発見され、$^{14}$C年代測定、花粉組成からもこれを指示する結果を得た。

本報告では、花粉分析、珪藻分析および$^{14}$C年代測定を基に、K−Ah火山灰降灰以降数百年間の遺跡周辺の古植生、堆積環境などの古環境を推定した。

また本報告は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

## 分析試料について

花粉分析試料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターと協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。図１に試料採取地点を示す。調査トレンチ西壁で、すべての分析用試料が採取されている。

## 分析方法

花粉分析処理、珪藻分析処理は、渡辺（1995a，1995b）に従い行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。珪藻分析では原則的検出総数が200個体以上になるまで同定を行った。また、$^{14}$C年代はAMS法を用い、株式会社加速器分析研究所に委託して測定した。

## 分析結果

花粉分析結果を図２に、珪藻分析結果を図３、４に、$^{14}$C年代測定結果を表１に示す。

図２の花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。

**図１　試験採取地点**

総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

図３の珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、白抜きスペクトルで示している。

図４の珪藻総合ダイアグラムで表した５つのグラフの内、左端の「生息域別グラフ」では同定した全ての種類を対象にそれぞれの要因（生息域）毎に百分率で表した。そのほかの４つのグラフでは、淡水種についてそれぞれの要因毎に百分率を算出し、累積百分率で示してある。

### 花粉分帯

西川津遺跡での花粉層序は渡辺（1999）により設定され、渡辺（2001）により修正が加えられ、10 花粉帯が設定されている。また、10 花粉帯はさらにいくつかの亜帯に細分されている。今回の分析層準は$^{14}$C 年代値から、既設定 10 花粉帯のⅥ、Ⅶ帯に相当する時期の堆積物である。

以下では花粉分帯の特徴を基に地域花粉帯を設定するが、同時に西川津遺跡での既知の花粉帯との比較を行い地域花粉帯の名称とした。以下に各花粉帯の特徴を示す。

また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

① Ⅶ帯（試料No.15～5）

アカガシ亜属が卓越傾向にあり、出現率の低い下部の試料No.15、14でもコナラ亜属より低率になることはない。アカガシ亜属が卓越傾向にあることから、試料No.15～5はⅦ帯に対比される。

試料No.15、14では、マツ属（複維管束亜属）が最も高い出現率を占め、モミ属、スギ属、アカガシ亜属、コナラ属、ムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属などが他の種類に比べ高い出現率を示す。一方、アカガシ亜属の出現率がコナラ亜属の出現率を下回らないこと、マツ属（複維管束亜属）が卓越する。また、試料No.14層準で得られた6660±50ｙｒB.P.の年代が得られ、試料No.15層準で火山ガラスが濃縮していることは、Ｖ区－AのⅦ帯ｂ亜帯中（試料No.1－28と28の間）にK－Ah火山灰層を挟み、ｃ亜帯（試料No.1－34層準）で6910±80ｙｒB.P.の年代が得られていることと整合的である。これらのことから、試料No.15、14はｂ亜帯に対比される。

マツ属（複維管束亜属）の卓越傾向は大西ほか（1989）の区分ｉ、ｊでも認められるが、その後の分析では顕著に現れることが無かった。渡辺（1999）ほかでは、海崎地区でのマツ属（複維管束亜属）卓越（大西，1989）を局地的な現象であるとして対応してきたが、今回海先地区に隣接する調査区でマツ属（複維管束亜属）の卓越傾向が認められたことから、マツ属（複維管束亜属）の卓越傾向が局地的植生を示している可能性が一層高まった。

試料No.13～5では、アカガシ亜属が卓越するほか、クマシデ属－アサダ属、ムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属が他の種類に比べ高い出現率を示す。花粉組成の特徴および下位層準がｂ亜帯に対比されることから、試料No.13～5はａ亜帯に対比される。

② Ⅵ帯ｂ亜帯（試料No.4～1）

アカガシ亜属がⅦ帯に比べ減少するが、他の種類に比べ依然高い出現率を示す。一方コナラ属、ムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属は増加し、他の種類よりやや高率を示す。また、シイノキ属－マテバシイ属もやや増加する。また草本花粉の割合が高くなり、検出種類数も多くなる。試料No.13～5から、試料No.4～1への花粉組成の変化はＶ区-Aで得られたⅦ帯ａ亜帯からⅥ帯ｂ亜帯への花粉組成の変化（渡辺，2001）と類似する。また試料No.7と6の間（Ⅶ帯ａ亜帯上部）で得られた$^{14}$C年代（6090±40ｙｒB.P.）も、Ｖ区-A試料No.1－6と5の間（Ⅵ帯ｂ亜帯下部）で得られた$^{14}$C年代（6020±100ｙｒB.P.）と整合的である。これらのことから、試料No.4～1はⅥ帯ｂ亜帯に対比される。

**表１　$^{14}$C年代測定結果**

| 試料No. | 整理番号 | 測定年代(yrBP) | $\delta^{13}$C(‰) | 補正$^{14}$C(yrBP) | 暦年代*1(cal y.) | 測定番号(IAAA-) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | NK01-01 | 6,130±40 | -27.47 | 6,090±40 | BC5210～5170<br>BC5140～5120<br>BC5080～4900<br>BC4890～4840 | 10544 |
| 2 | NK01-02 | 6,140±40 | -28.46 | 6,080±40 | BC5210～5180<br>BC5070～4840 | 10545 |
| 3 | NK01-03 | 6,280±40 | -31.87 | 6,160±40 | BC5260～4950 | 10546 |
| 4 | NK01-04 | 6,770±40 | -31.11 | 6,660±50 | BC5670～5480 | 10547 |

*1：2 sigma,95%probability

③ 各花粉帯の年代

Ⅶ帯ｂ亜帯下位の試料№15では火山ガラスが濃集しており、試料№14層準では6660±50ｙｒB.P.の$^{14}$C年代が得られている。また従来の結果（例えば渡辺，1999）では、K−Ah火山灰層がⅦ帯ｂ亜帯に認められている。これらのことからⅦ帯ｂ亜帯はK−Ah火山灰降灰（6300ｙｒB.P.頃）前後の植生を表していると考えられる。

Ⅶ帯ａ亜帯では、下位より6160±40ｙｒB.P.、6080±40ｙｒB.P.、6090±40ｙｒB.P.の$^{14}$C年代が得られている。またⅤ区−Aでは上位のⅥ帯ｂ亜帯で6020±50ｙｒB.P.の$^{14}$C年代が得られている（渡辺，1999）。これらのことから、Ⅶ帯ａ亜帯は6100ｙｒB.P.頃の植生を表していると考えられる。

今回はⅥ帯ｂ亜帯では$^{14}$C年代が得られていないが、前述のように渡辺（1999）において6020±50ｙｒB.P.の$^{14}$C年代が得られている。このことから、Ⅵ帯ｂ亜帯は6000ｙｒB.P.頃の植生を表していると考えられる。

**珪藻分帯**

珪藻分析結果をもとに地域珪藻帯を設定し、珪藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載した。また試料№も下位から上位に向かって記した。

①D−Ⅵ帯（試料№15、14）

珪藻化石が含まれていなかった。

②D−Ⅴ帯（試料№13、12）

試料№12では汽水種の *Thalassiosira bramaputrae* が卓越傾向にある。淡水種では両試料共に、*Cymbella tumida* などのアルカリ・止水・底生種が特徴的に出現する。

③D−Ⅳ帯（試料№11〜8）

淡水種が60〜80％を占める。汽水種では *Achnanthes brevipes* が卓越し、淡水種では底生の *Cymbella* 属や *Pinnularia* 属が卓越する。

④D−Ⅲ帯（試料№7、6）

淡水種の割合が低く、汽水種が卓越する。

⑤D−Ⅱ帯（試料№5、4）

汽水種や、海〜汽水種が高率を示す。

⑥D−Ⅰ帯（試料№3〜1）

淡水種が卓越する。特に、底生の *Pinnularia* 属が卓越する。

**古環境復元**

① Ⅶ帯ｂ亜帯期（6300ｙｒB.P.頃）の古環境

従来の調査でのK−Ah火山灰層の分布は、中村（1999）、中村ほか（2001）で示されており、ほとんどの地点で泥質堆積物中に狭在されていた。今回の調査地点は西川津遺跡の最上流に位置し持田川との合流部に近いことから、K−Ah火山灰層が河川成堆積物中に狭在していたと考えられる。珪藻化石は検出されていないものの、古宍道湾奥の河口域で堆積したと考えられる。

従来の花粉分析結果との比較より、マツ属（複維管束亜属）は局地的な分布をしていた可能性

が高く、おそらく遺跡南方の丘陵にはアカマツ（あるいはクロマツ）が局地的に分布していたと考えられる。遺跡北・東方に広がる沖積地にはムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属などのニレ科を主体とする自然堤防林が分布していたと考えられる。また、カシ類でも先駆的な種であるアラカシが、自然堤防林中に混淆していた可能性もある。北山山地にかけてはトチノキやサワグルミを要素とする渓畔林が分布していたと考えられる。また、周辺の丘陵部にはカシ類、シイノキ類を主要素とする照葉樹林が分布したと考えられる。遺跡近辺では現在でも照葉樹林中にモミの混淆している様子が観察されることから、当時もモミやスギなどの針葉樹が混淆していた可能性がある。コナラ類についてはミズナラ、カシワなどの冷温帯林要素、コナラ、クヌギ、アベマキなどの暖温帯の遷移林要素である可能性がある。縄文海進最盛期直前の時期であること、北山山地の標高がせいぜい500ｍ程度であることなどから、冷温帯林が北山山地に残存していた可能性は低く、ここでのコナラ類は、暖温帯の遷移林であるコナラ、クヌギ、アベマキなどに由来すると考えられる。

② Ⅶ帯ａ亜帯期（6100ｙｒB.P.頃）の古環境

層相が泥がちになり、珪藻化石も検出されるようになる。珪藻分析結果では上位ほど汽水種が高率を示し、この時期の終わりに向け海水準が上昇したことが明らかである。海水準の上昇に伴って古宍道湾はさらに拡大し、現在調査地北部に広がる沖積平野内に至ったと考えられる。この結果朝酌川の河口はさらに東へ、持田川の河口はさらに北東へ後退したと考えられる。

気温の上昇に伴い、コナラ類を主体とする遷移林はカシ類、シイノキ類を主要素とする照葉樹林に変わり、照葉樹林の分布域は北山山地全体に至るまで拡大していった考えられる。一方で針葉樹の混淆も丘陵部では希になり、山地部で認められる程度になっていったと考えられる。海水準の上昇に伴い沖積低地が狭まり、ニレ科の生育範囲は狭まったと考えられる。一方でトチノキやサワグルミを要素とする渓畔林が拡大した可能性がある。温暖化に伴う雨量の増加により、山地の荒廃が進んだ可能性もある。

④ Ⅵ帯ｂ亜帯期（6000ｙｒB.P.頃）の古環境

珪藻化石で淡水種が増加し、朝酌川、持田川の河口が再び調査地点に迫ったことが示唆される。呼応するように草本花粉の検出量が増加し、調査地近辺にイネ科、カヤツリグサ科の生育する湿原が広がっていったと考えられる。一方、河川沿いの微高地には、ニレ科の木々が自然堤防林を形成し、コナラ類を交える場所も認められるようになったと考えられる。

Ⅶ帯からⅥ帯の間でアカガシ亜属花粉が減少するが、遺跡近隣での植生復活に伴う相対的なものであったと考えられる。

## まとめ

西川津遺跡での花粉、珪藻分析の結果を踏まえ、遺跡近辺の古環境を考察した。特筆すべき点は以下の事柄である。

①西川津遺跡の地域花粉帯の内Ⅶ帯ｂ亜帯からⅥ帯ｂ亜帯が確認できた。また、各花粉帯、花粉亜帯示すおおよその時期が明らかになった。

②縄文時代早期末から前期にかけての海崎地区近辺の古環境が明らかになった。

③Ⅶ帯ｂ亜帯でマツ属（複維管束亜属）花粉が卓越することから、従来推定されていた「海崎地区

でのアカマツ（あるいはクロマツ）の局地的な生育」がほぼ明らかになった。

④Ⅶ帯ｂ亜帯でのコナラ亜属花粉を、コナラ、クヌギ、アベマキなどの暖温帯二次林要素に由来すると推定した。

⑤Ⅵ帯ｂ亜帯でのアカガシ亜属花粉減少の原因を、遺跡近隣での植生復活に伴う相対的な現象であると推定した。

---

【引用文献】


- 大西郁夫・渡辺正巳（1987）西川津遺跡（1983）の花粉分析．朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区Ⅰ）．252－261，島根県教育委員会．
- 大西郁夫・原田吉樹・渡辺正巳（1989）松江市，西川津遺跡の花粉分析．山陰地域研究（自然環境），5,45－54.
- 大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化．地質学論集，39,33－39.
- 中村純（1974）イネ科花粉について,とくにイネを中心として.第四紀研究，13,p.187－197.
- 渡辺正巳（1995a）花粉分析法．考古資料分析法，84,85.ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳（1995b）花粉分析法．考古資料分析法，86,87.ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳（1999）西川津遺跡96、97年度調査における花粉分析．朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―西川津遺跡Ⅵ―，11,321－328．島根県教育委員会・島根県土木部河川課.
- 渡辺正巳（2001）西川津遺跡における花粉組成変遷と周辺地域の環境変遷．朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―西川津遺跡Ⅷ―，13,25－46，島根県教育委員会・島根県土木部河川課.

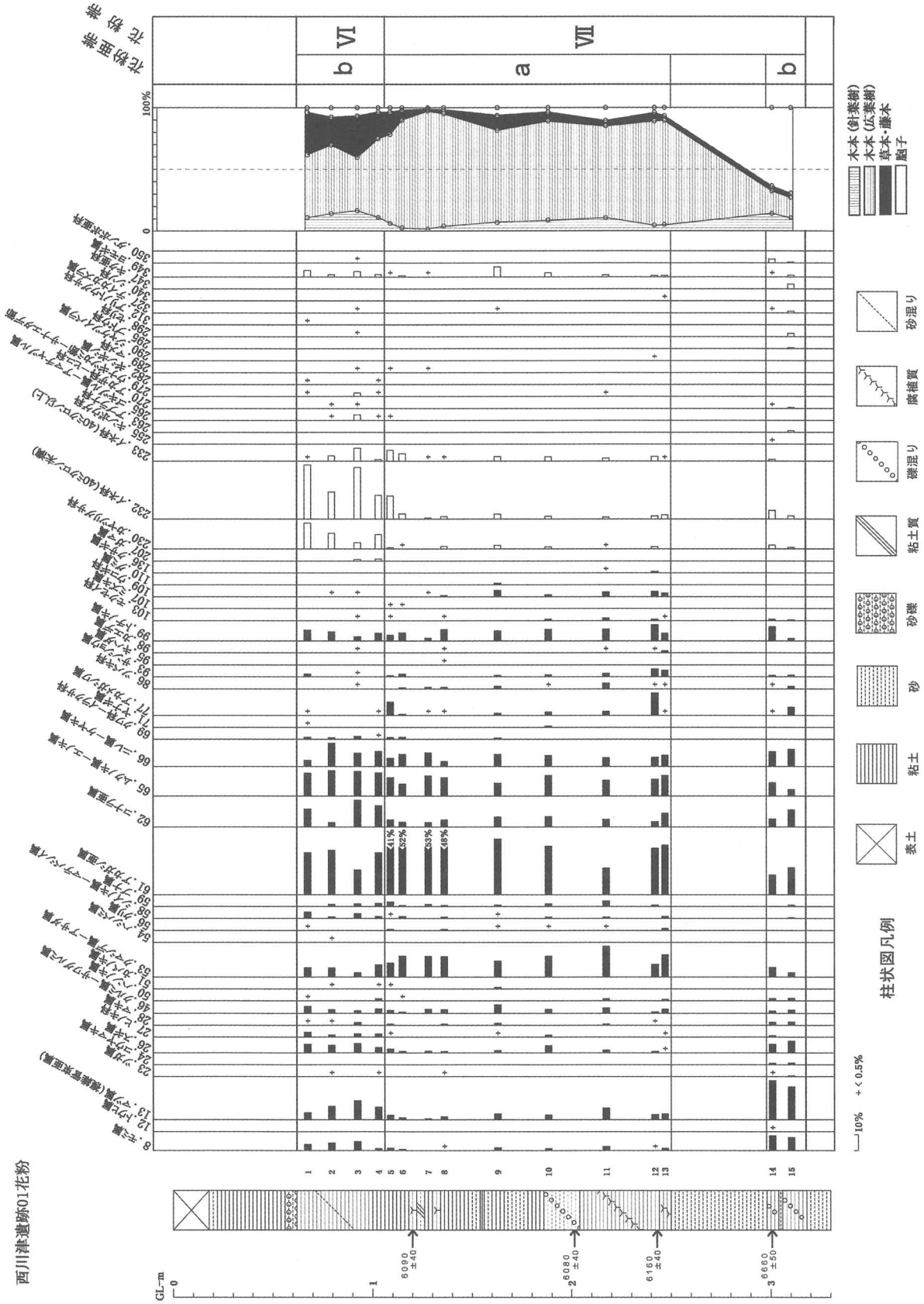

西川津遺跡01花粉
花粉亜帯
花粉帯
VI
VII
b
a
b
100%
0
GL-m
6090 ±40
8080 ±40
6160 ±40
6660 ±50
41%
52%
53%
49%
10%
+ < 0.5%
柱状図凡例
表土
粘土
砂
砂礫
粘土質
礫混り
腐植質
砂混り
木本（針葉樹）
木本（広葉樹）
草本・藻本
胞子

図２　花粉ダイアグラム

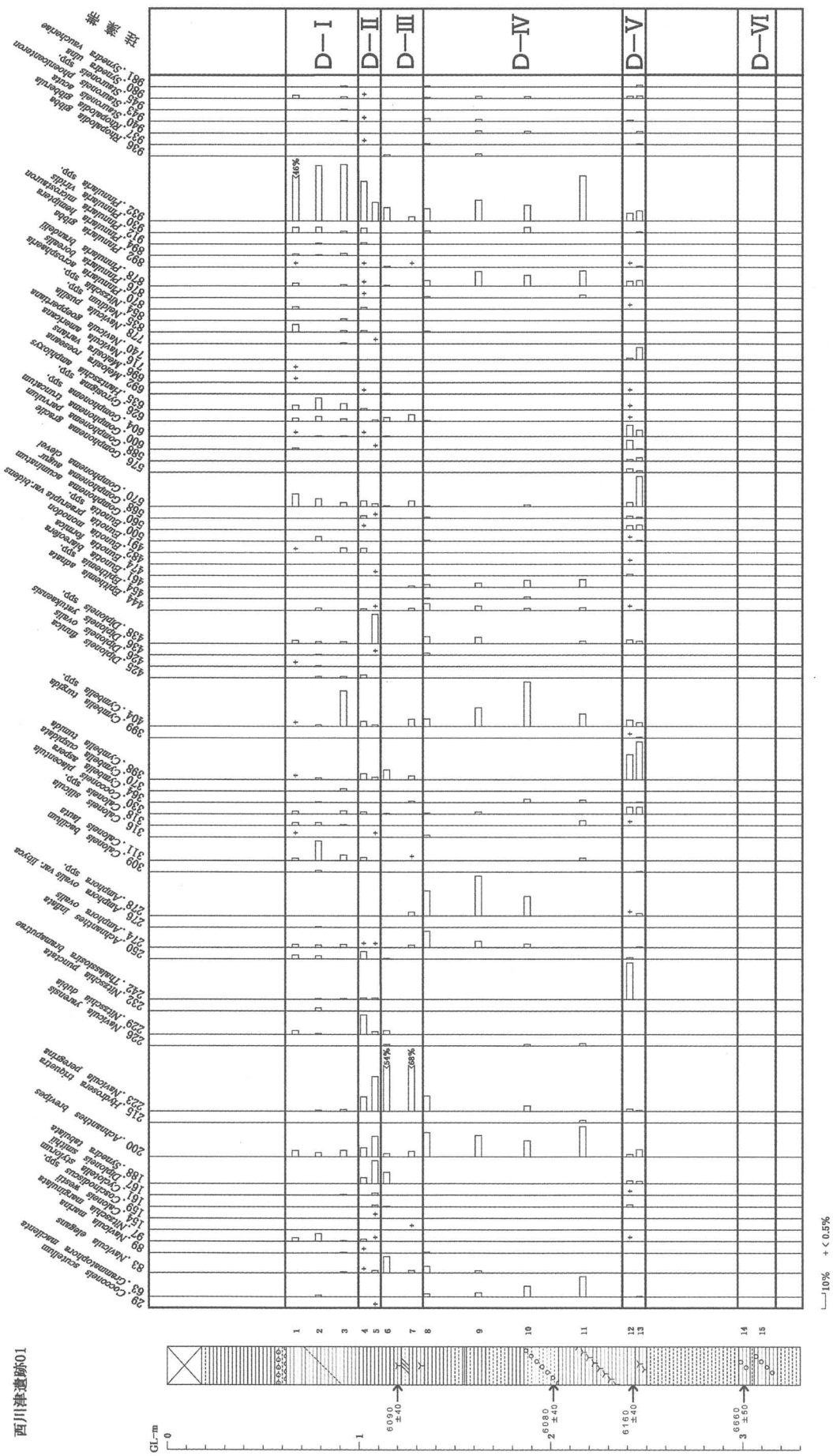

西川津遺跡01
珪藻帯
D—I
D—II
D—III
D—IV
D—V
D—VI
GL-m
6090 ±40
6080 ±40
6160 ±40
6660 ±50
10%
+ < 0.5%

図3　珪藻ダイアグラム

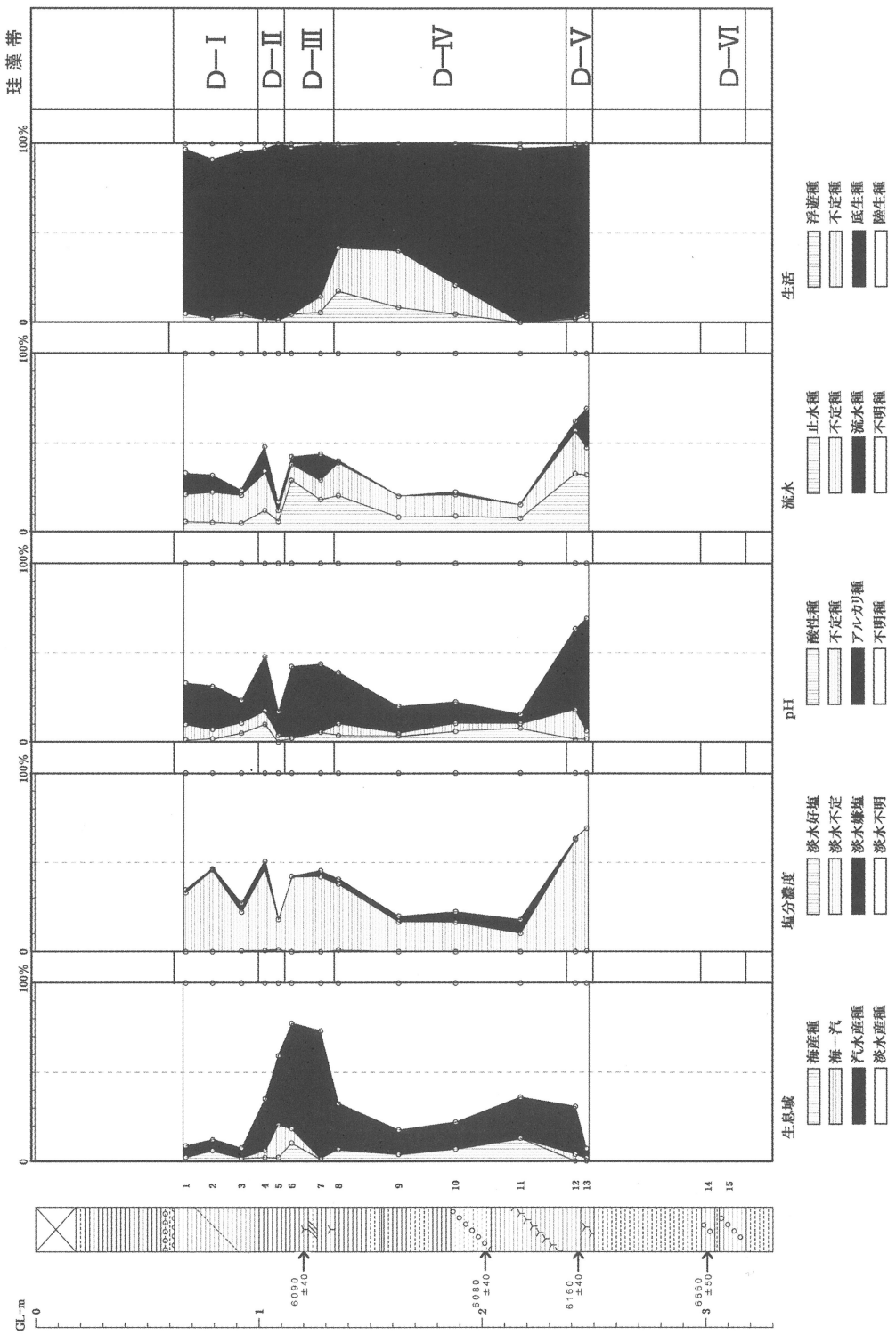



図４　珪藻総合ダイアグラム

# 第6章　小　結

今回の発掘調査は、1996（平成8）年に調査が実施されたⅢ区右岸の隣接地と、海崎橋の上流で西川津遺跡の北端に近いⅥ区について実施し、縄文時代早期末から近世まで6000年以上に及ぶ朝酌川の変遷の一端を窺うことができた。実質的な調査期間が5カ月あまりと短く調査対象面積も大きくなかったため、基本的には今回の調査成果は過去のそれを補強するにとどまるものである。

しかし、Ⅵ区で、宍道湖底の堆積物である宍道湖層[1]が存在しないことを確認したことは、当時の西川津遺跡の様相を考える上で重要な資料を提供することとなった。

### 1）Ⅲ区

今回の調査では、縄文時代から近世までの遺物を含む砂礫層を検出した。この砂礫層は1層で厚さは10cm～40cmと比較的薄いものであった。土器では、弥生土器が多数を占めるが、古代末から中世の土師器が比較的多く出土している。また、注目される遺物としては、陶磁器や銭貨、玉作の剥片が認められた。

遺物を包含する砂礫層の堆積年代については、1996（平成8）年の調査で下限を平安時代としている。今回はその南西に隣接する調査区を発掘したが、砂礫層出土遺物の下限は近世であった。遺物包含層の堆積時期については、前回の調査においても下流ほど新しくなる傾向があるとされている[2]。また、Ⅲ区左岸の調査でも、この付近では南西側になるほど河道の時期が新しくなると想定されている[3]ことから、過去の調査成果を追認したものといえよう。

なお、土層の最下層は宍道湖層となっており、この上面は標高－1.1～－1.6ｍで北（西）側ほど低くなっていた。この中にはアカホヤ火山灰が挟まれていた。この火山灰は調査区西壁のほぼ全面で検出されており、検出した高さは標高－1.8ｍ～－1.9ｍである。

### 2）Ⅵ区

今回の調査は、過去の発掘調査を含めて西川津遺跡の最も北側（上流側）に調査区を設定して実施した。遺構としては、杭列状遺構を検出した。時期は、この遺構の上下に存在する砂礫層1・2の出土遺物から弥生時代後期～古墳時代と考えられる。この杭列の用途・性格については不明であるが、当時の人々の活動の所産であることは疑いない。

主要な遺物包含層は4層（砂礫層1～4）を確認し、縄文時代早期末から古墳時代までの遺物を検出した。このうち砂礫層1と2については、前者が縄文時代前期～古墳時代、後者が縄文時代前期～弥生時代と出土遺物の年代幅が広いが、砂礫層3・4については縄文時代早期末～前期初頭の遺物のみが出土している。この砂礫層3・4についても二次堆積である可能性は高いが、土器の年代観と堆積時期に大きな開きはなく[4]、当該期の単純層と考えて差し支えないであろう。ところで、西川津遺跡では隣接するⅤ区を含め、ほとんどの調査区でアカホヤ火山灰を挟む宍道湖層が確認されることから、縄文時代早期末～前期には縄文海進の影響で内湾になっていたと考えられている。今回の調査区にこの宍道湖層が存在せず縄文時代早期末～前期初頭の砂礫層が存在するということは、少なくともその時期にⅥ区付近は内湾ではなく河口だったということを示す。また、砂礫層3・4の上にのる縞状堆積（第31図北壁の21層、西壁の12層）は縄文時代前期以降のある時期、

流れがきわめて緩やかな状態にあったことを示すものである。縄文海進による海面上昇は前期初頭に停滞・小海退の時期があり、最高頂期は縄文時代中期初頭以降にあったとする報告[5]があり、これとの関連も興味深い。

---

註

1) 島根県教育委員会『原の前遺跡』 1995
2) 島根県教育委員会『西川津遺跡』Ⅵ　1996
3) 島根県教育委員会『西川津遺跡』Ⅶ　2000
4) 渡邉正巳「平成13年度西川津遺跡発掘調査に係る自然科学分析」 本書第5章所収
5) 島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡第1次調査』(橋縄手地区1) 1997

# 付篇　西川津遺跡Ｖ－４－１区出土の杭状木製品について

Ｖ－４－１区調査区砂レキＦ層中から出土した杭状木製品については、都合により『西川津遺跡Ⅷ』に掲載できなかったので、紙面を借り報告したい。

**出土状況**

Ｖ－４－１砂レキ区Ｆ層中から出土しており，臼状木製品（103 図－1）の西側で加工痕のある先端を北西に向けた状態で出土した。水平ではなく、加工のない基部のレベルがやや高い状態であった。

**杭状木製品の概要**

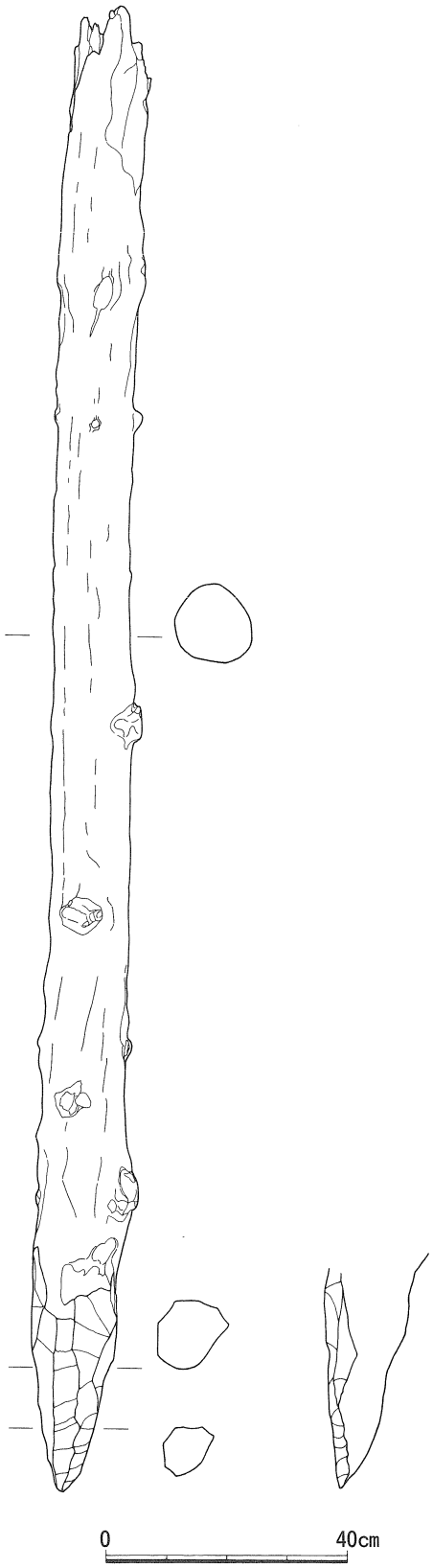
杭状木製品は現存全長 243.8cm 、径は 13.4cm である。基部側は破損のためか切り口は粗く、本体はほぼ全面にわたって、本来の樹皮を残している。

先端部は杭状に加工しているが、中心部から放射状円錐形に形を整えるのではなく、 1/2 面のみを手斧状の工具で削り取っている。手斧痕は 5 条確認でき、それぞれ基部は広く、先端ほど細くなっていく。手斧痕の最大幅は 5.5mm ほどで、長さは 5.7 ～ 1.0cm ほどである。加工痕全体の長さは 30.3cm である。

木製品の長さが長大であることから、建築部材や橋脚などの用途が考えられるが、表面には顕著な風化が見られないことから、未使用の可能性も残される。近隣では下流に所在する原の前遺跡で平安時代の橋脚が見つかっているが、全長 438cm で先端は鉛筆状に丁寧な加工が行われたものである。

**時期**

杭状木製品が出土した砂レキＦ層は陶邑編年 TK 47 の須恵器が最新の遺物である河川堆積層であることから、5 世紀末～ 6 世紀初頭を下限とすると考えられる。




第 53 図　Ｖ－４－１区
出土杭状木製品実測図 S＝1：12

【参考文献】
島根県教育委員会『西川津遺跡Ⅷ』 2001
島根県教育委員会『原の前遺跡』 1995

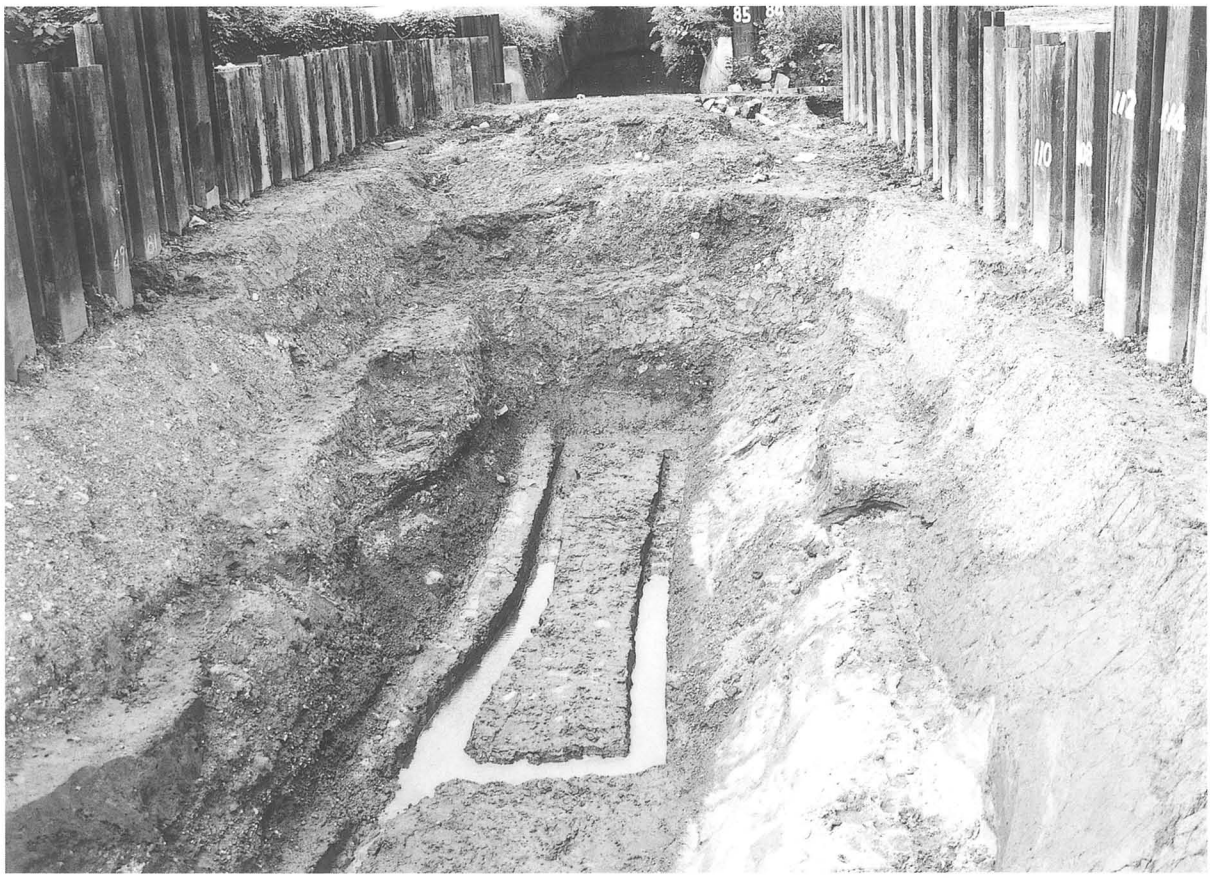
# 図　　版

Ⅲ区全景

Ⅲ－１区全景（北から）

図版２

Ⅲ－２区全景（北東から）



Ⅲ－３区全景（南東から）

Ⅲ区西壁土層

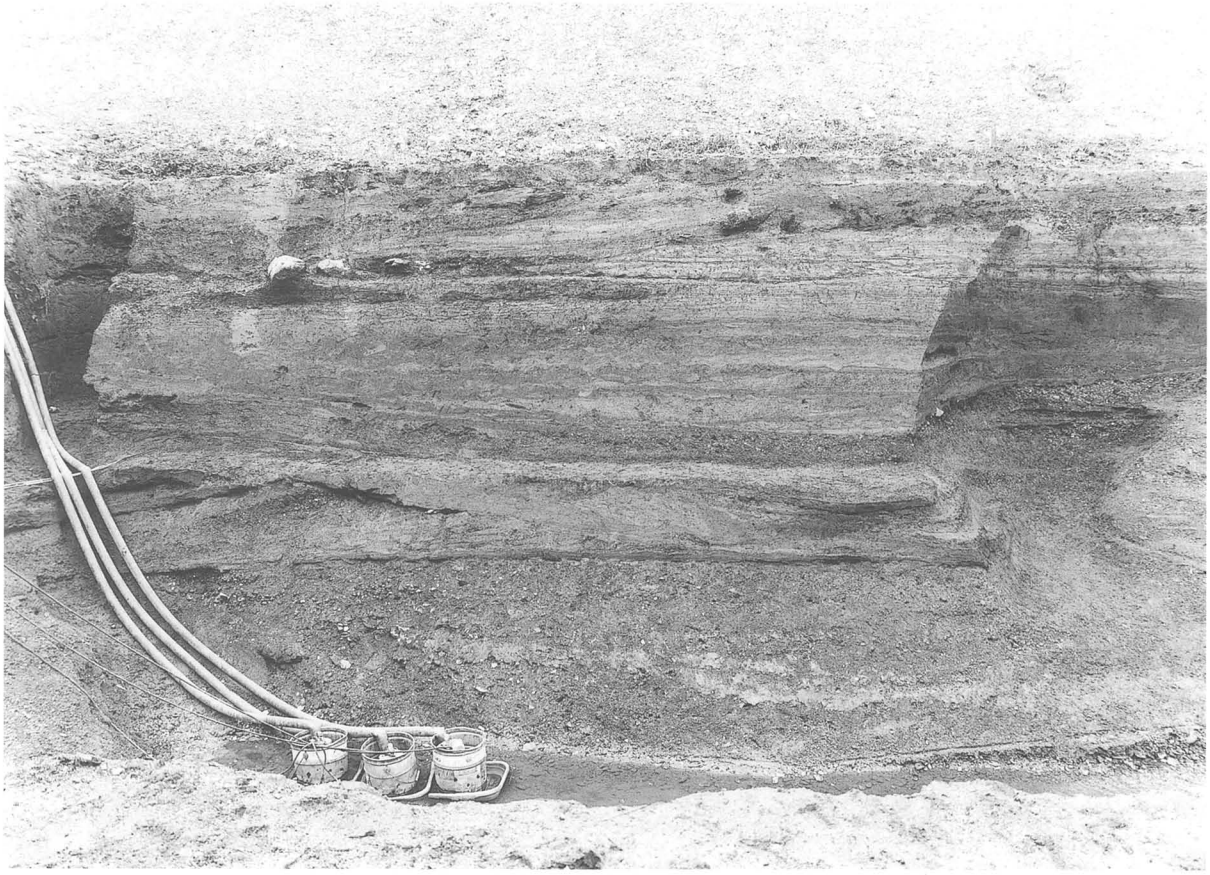
Ⅲ区西壁土層（南端）

図版 4

Ⅲ区南壁土層

Ⅲ区北西壁土層

Ⅵ区全景



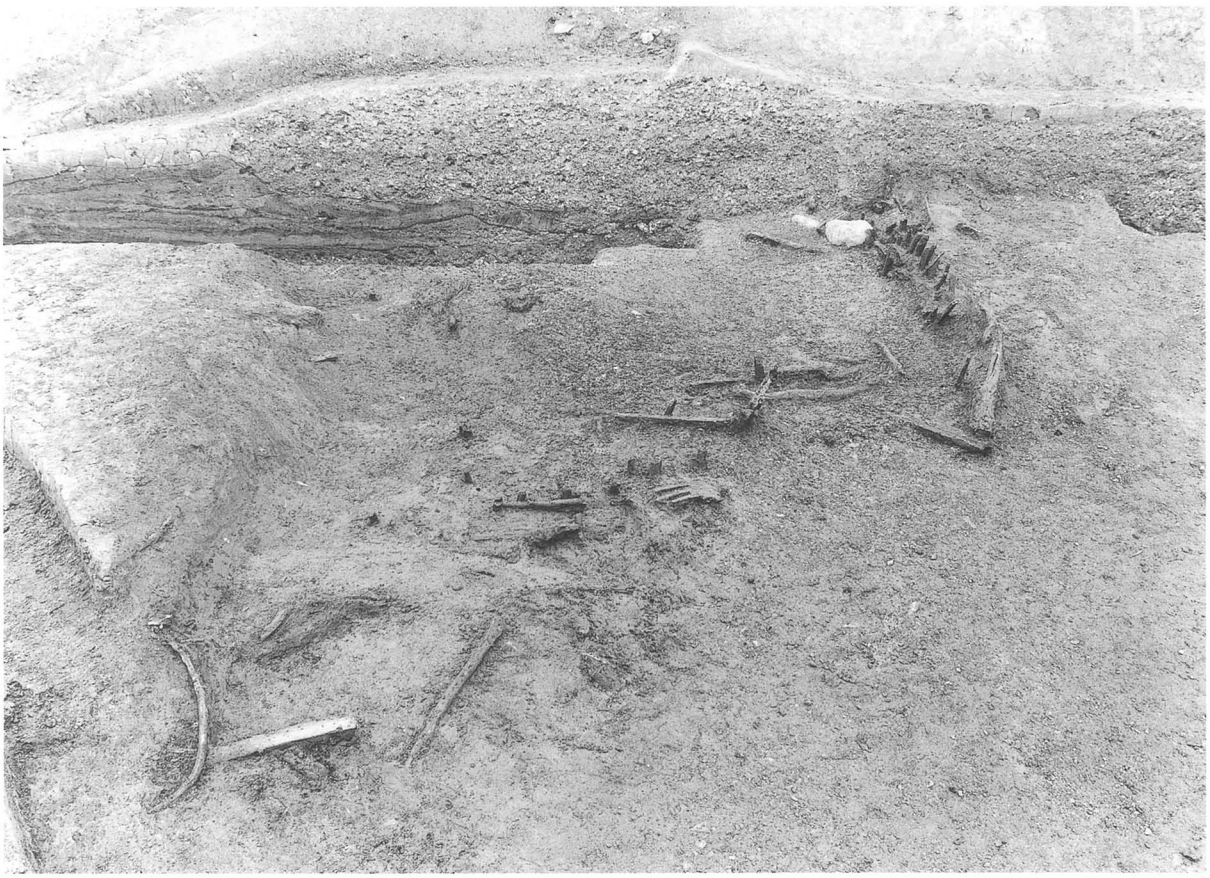
Ⅵ区西壁土層

図版 6

Ⅵ区北壁土層

Ⅵ区北壁土層（西側）

Ⅵ区北壁土層（西端付近）

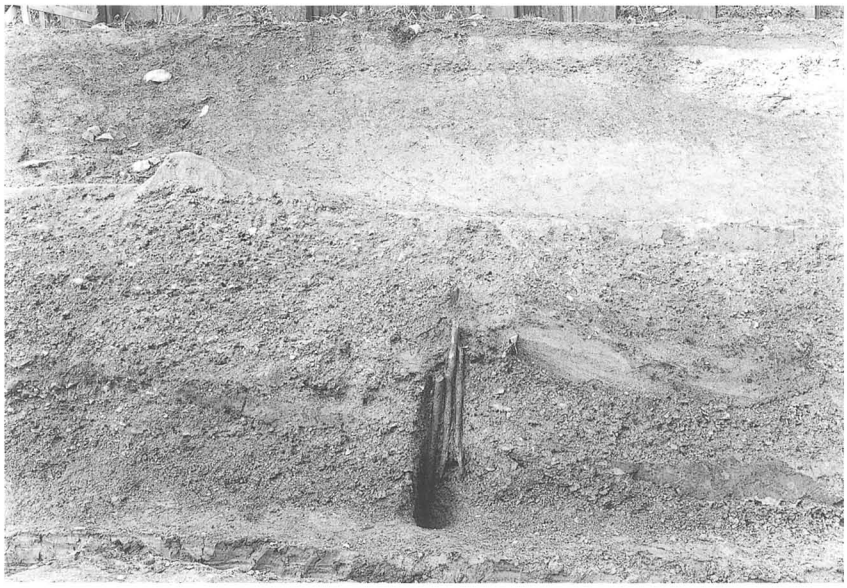


Ⅵ区杭列検出状況

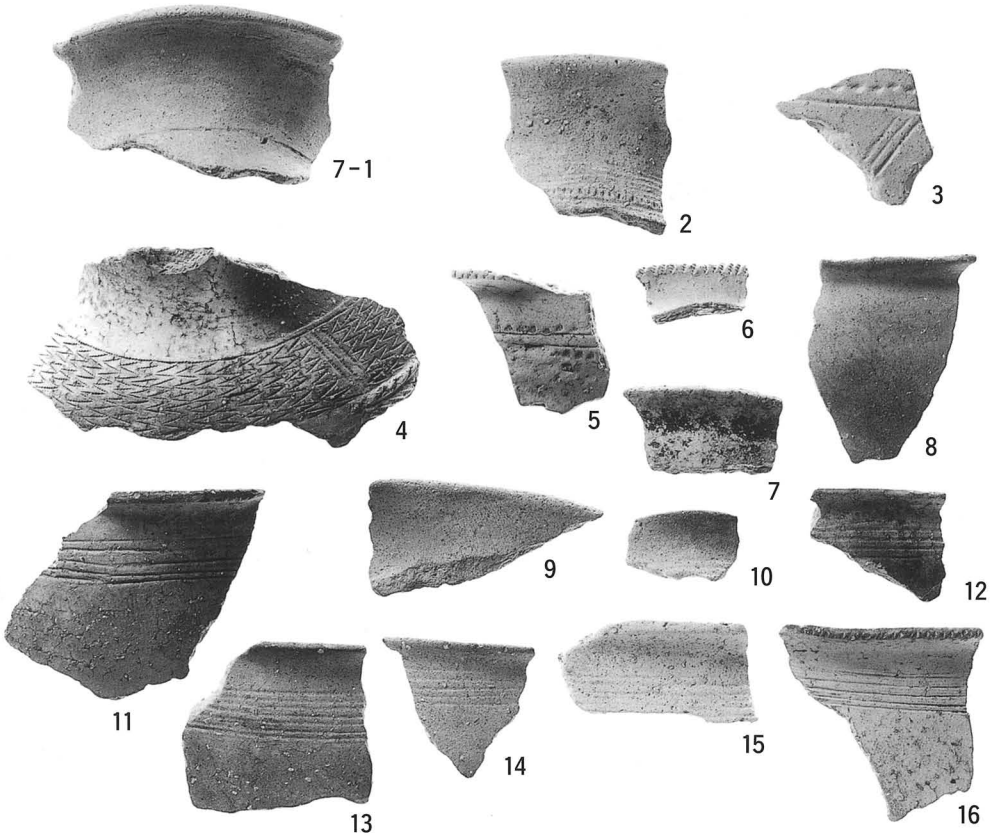
図版 8

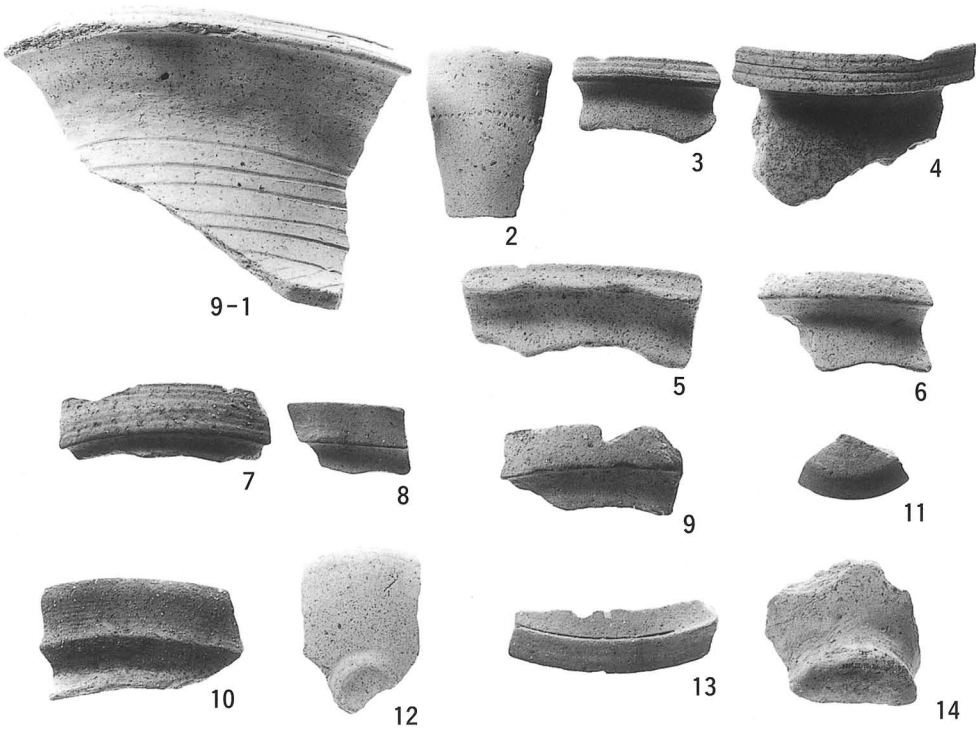
杭列検出状況
（北から）

同上（南から）



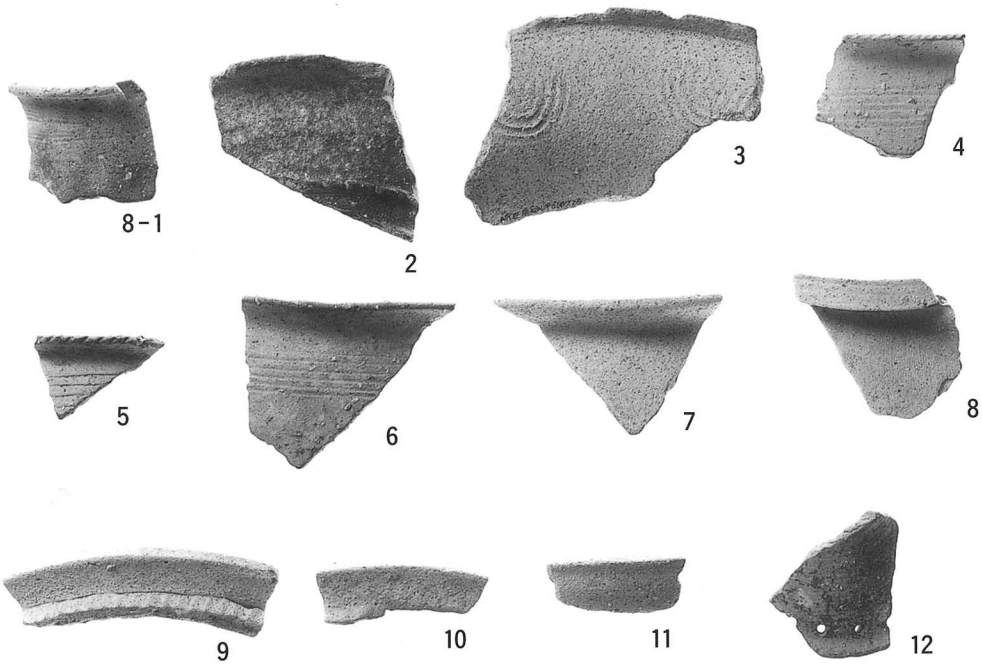
杭列と土層との関係

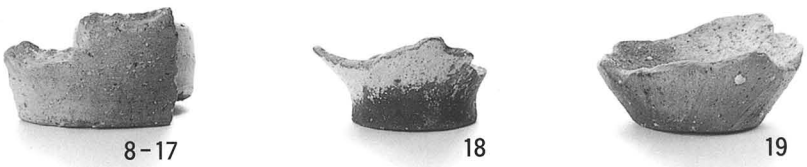



Ⅲ－1区砂礫層出土土器

図版 10

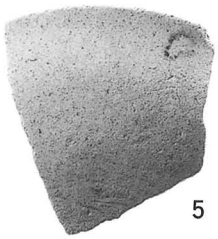





Ⅲ－1 区砂礫層出土土器

10-1

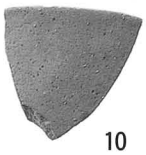
2

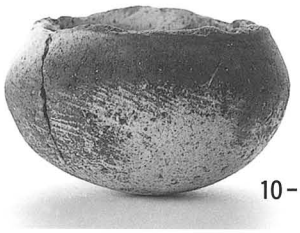

5

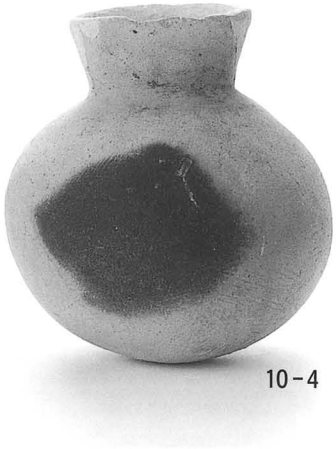
7

8

9


10


10-3


10-4

10-6

11-2

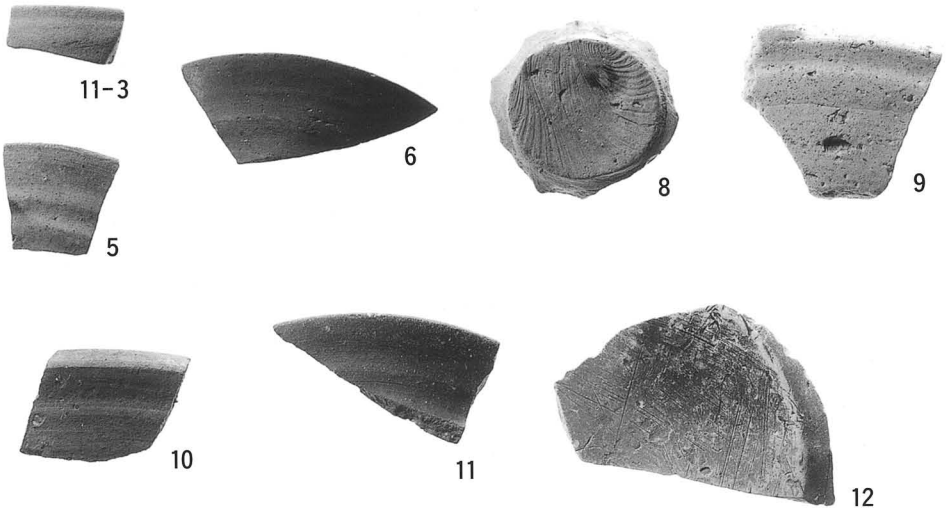
11-1

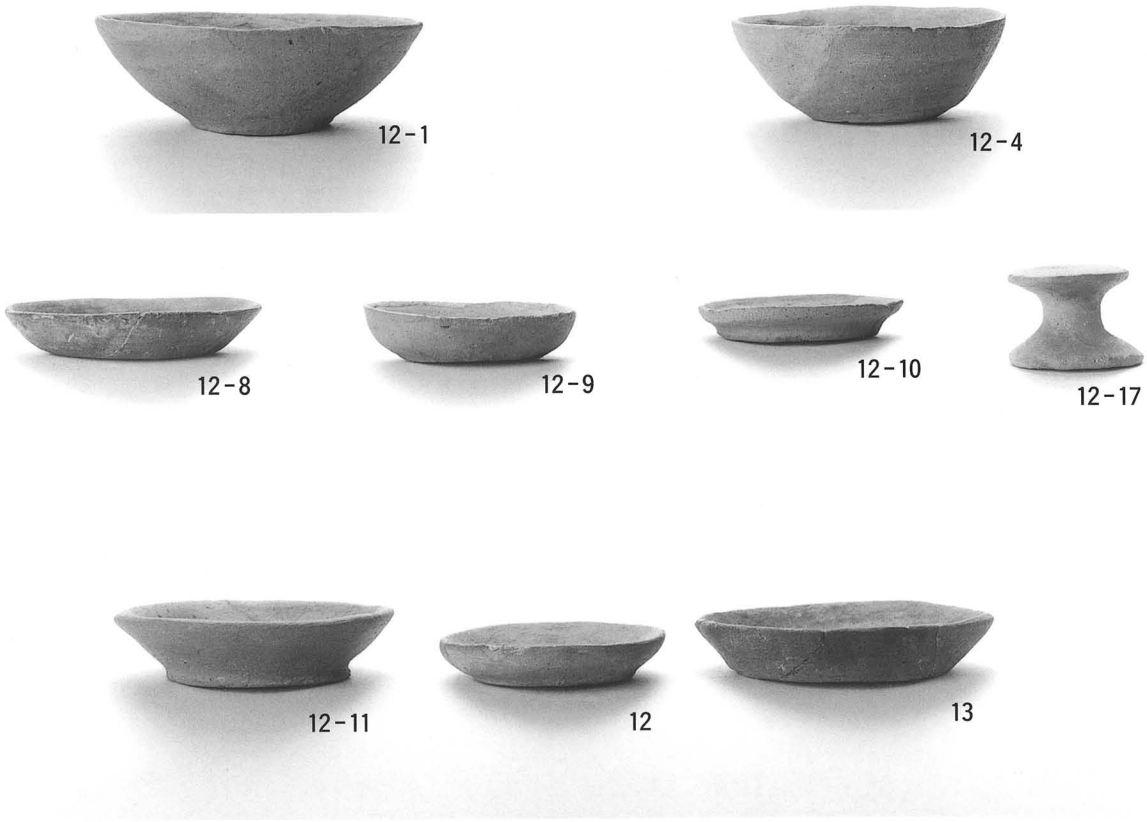
11-4

11-7

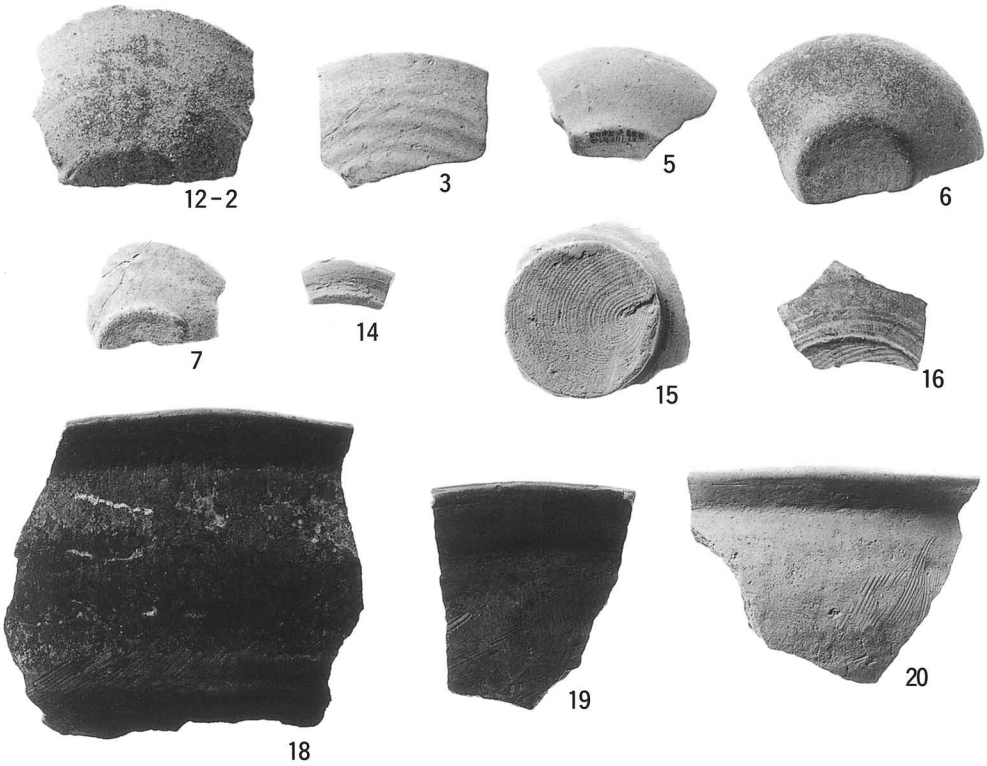
Ⅲ－１区砂礫層出土土器

図版12

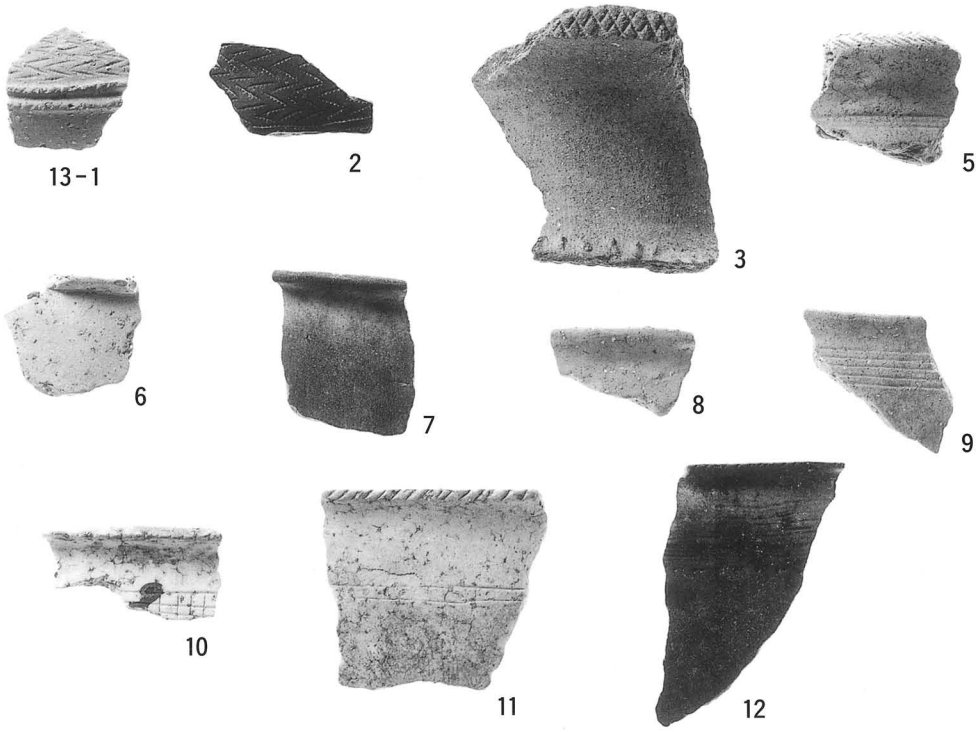



Ⅲ－1区砂礫層出土土器

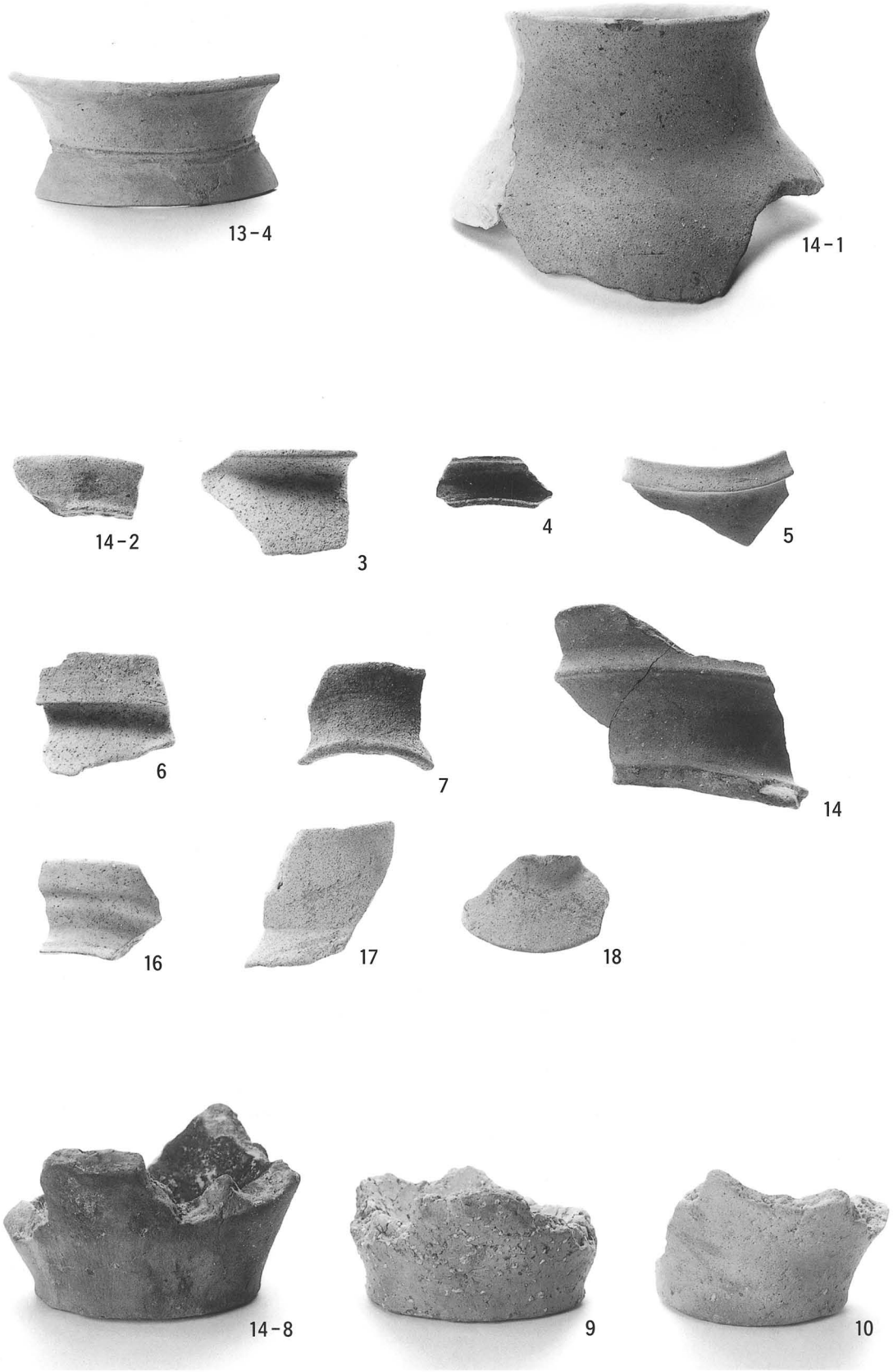



Ⅲ－1区砂礫層出土土器

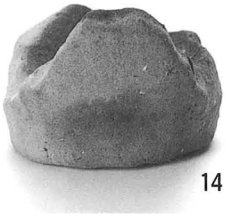



Ⅲ－2区砂礫層出土土器

図版14




Ⅲ－2区砂礫層出土土器


14-11

12

14-13

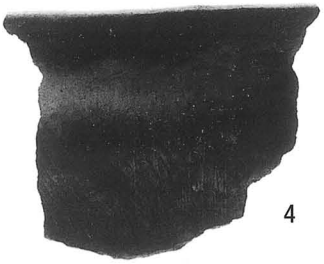
14-15

14-19

15-2

15-1

3


4

5

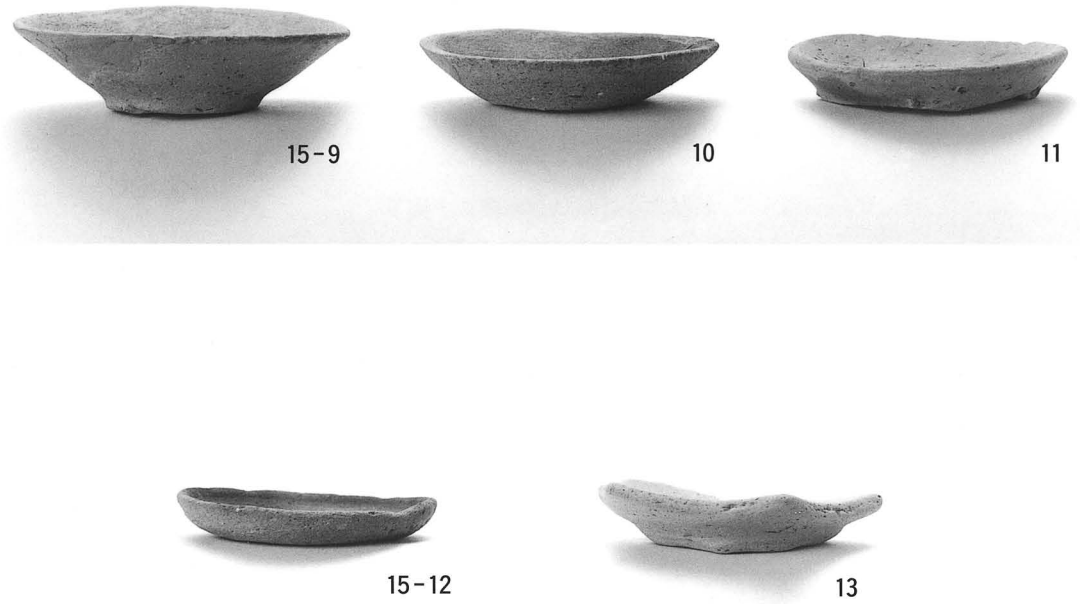
6

7

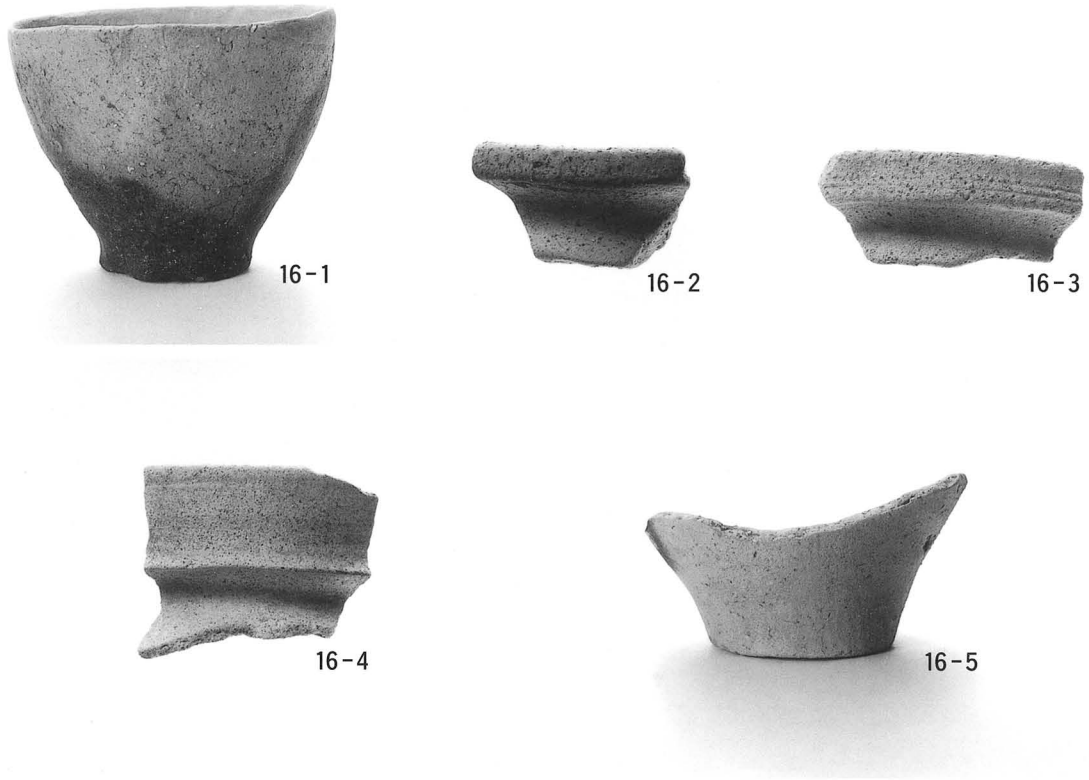
8

Ⅲ－2区砂礫層出土土器

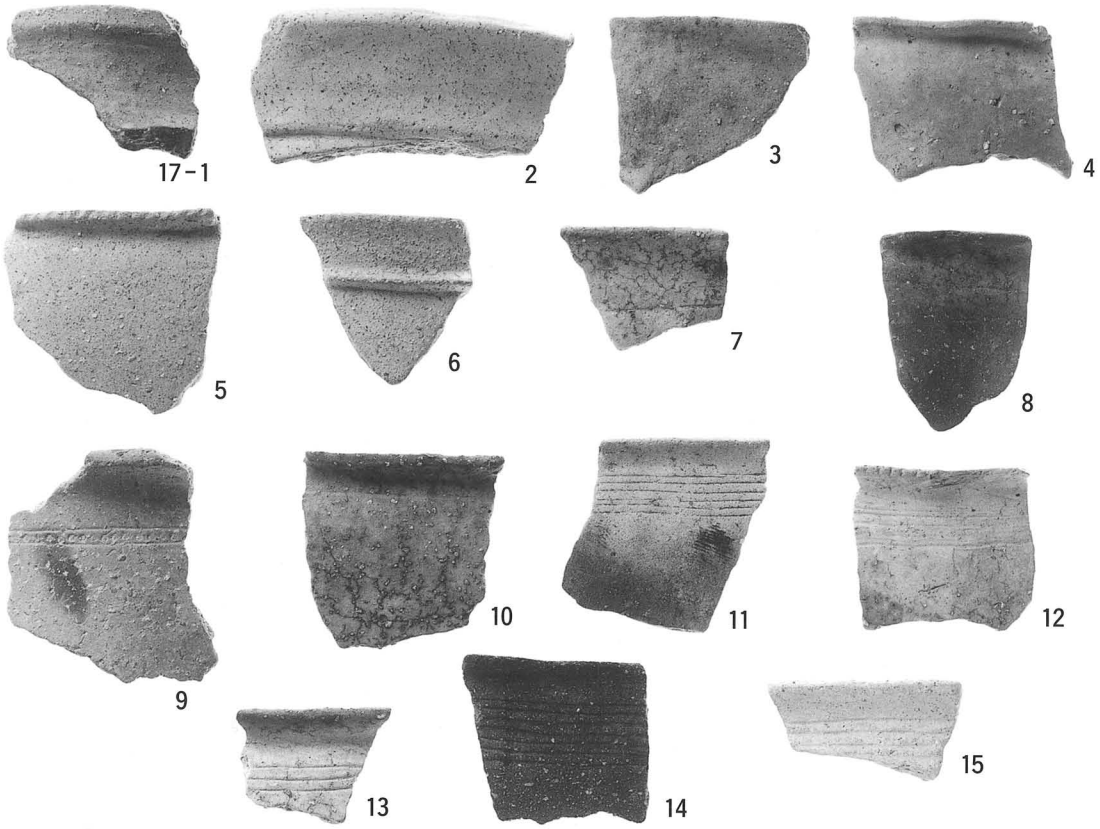
図版16

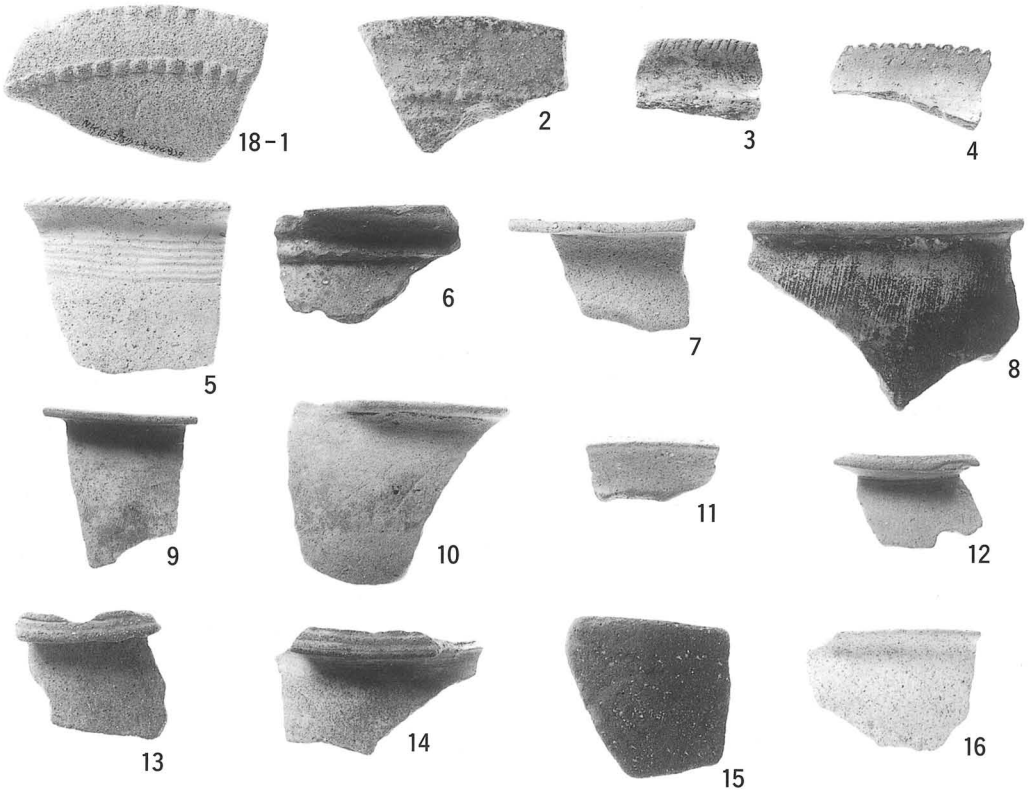



Ⅲ－2区砂礫層出土土器



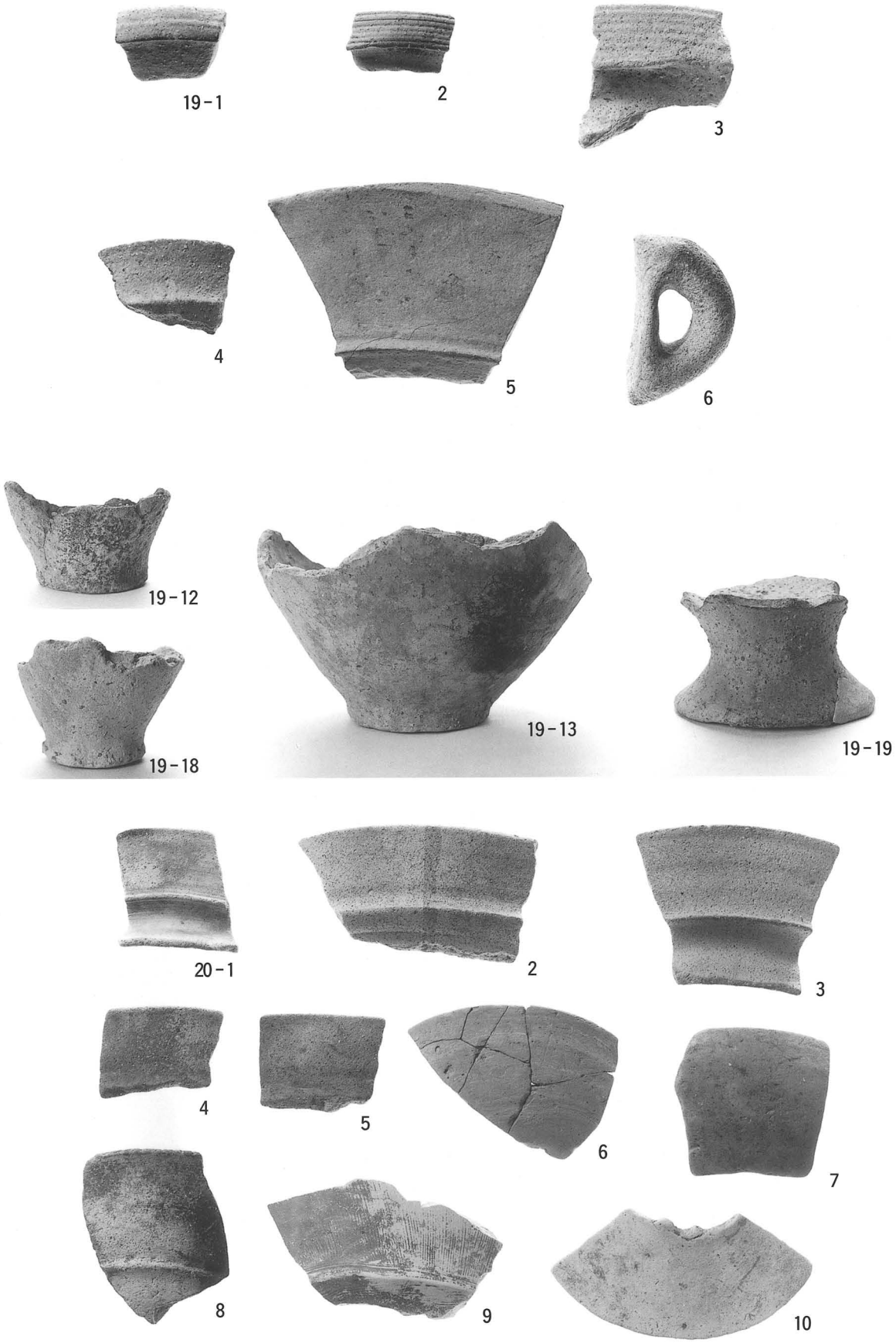

Ⅲ－3区灰茶色砂層出土土器



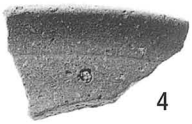



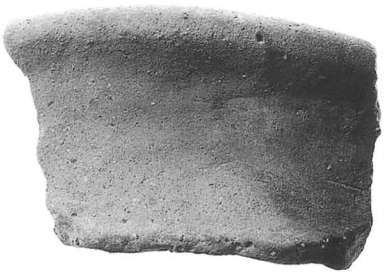

Ⅲ－3区砂礫層出土土器

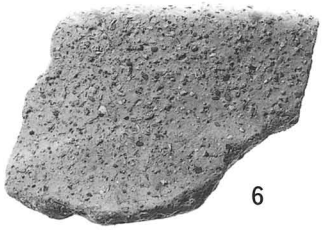
図版18




Ⅲ－3区砂礫層出土土器

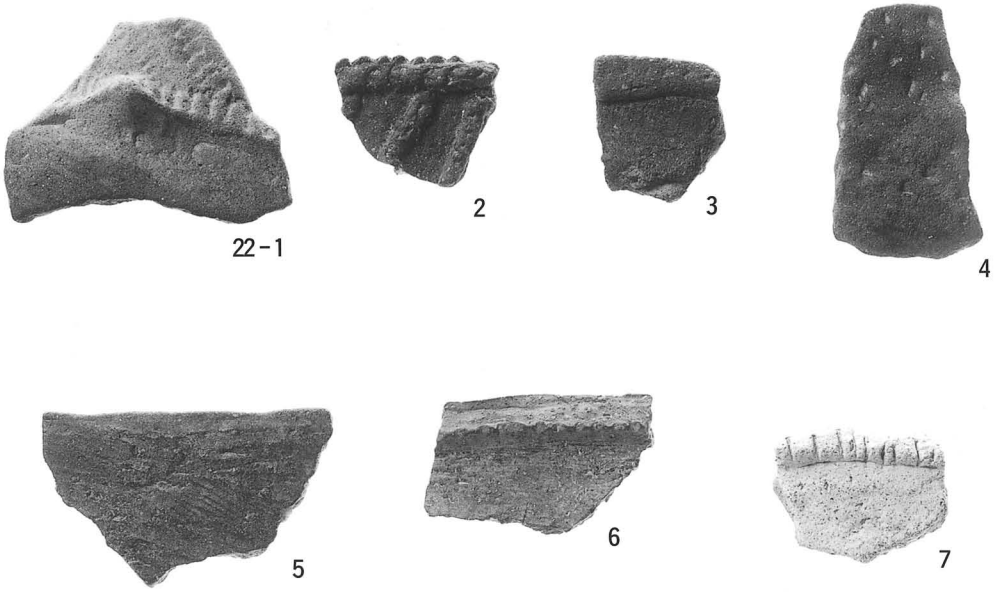


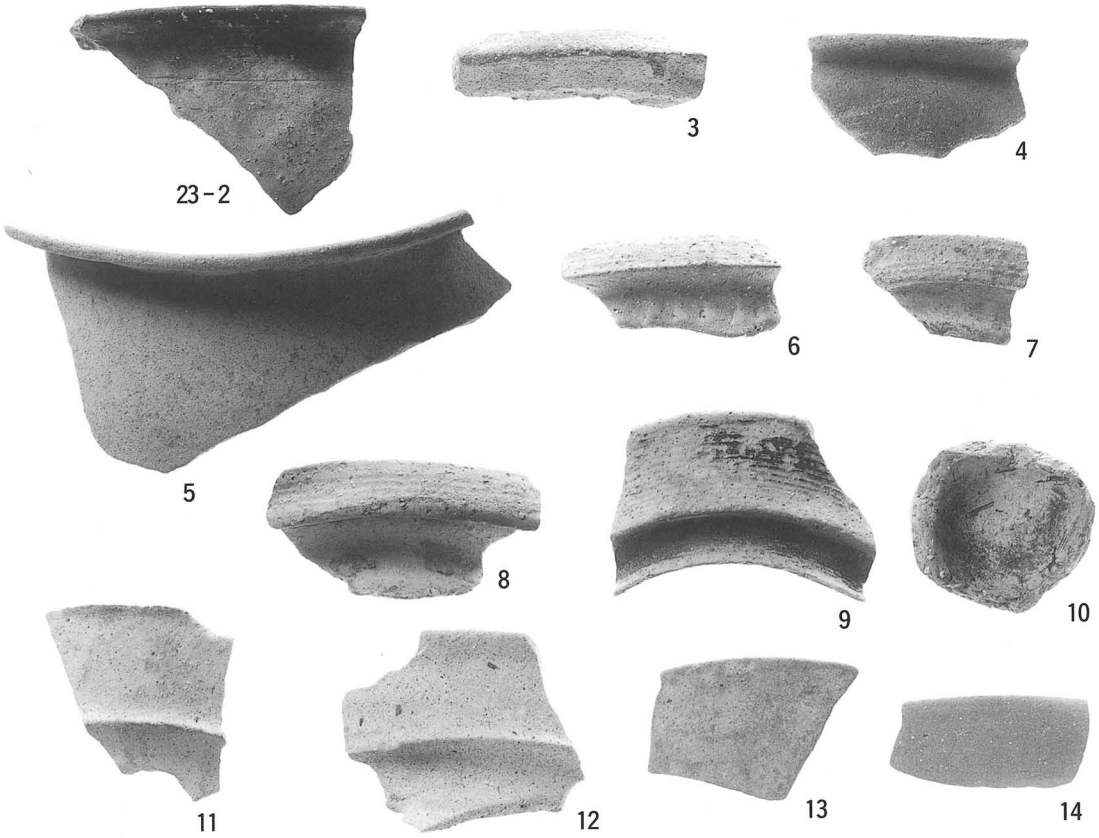



Ⅲ－３区砂礫層出土土器

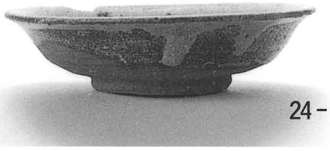
図版 20



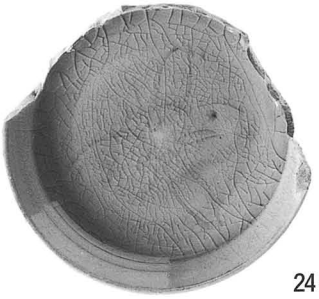

Ⅲ区出土縄文土器

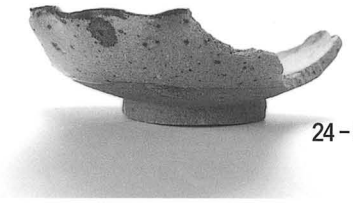



Ⅲ区出土土器

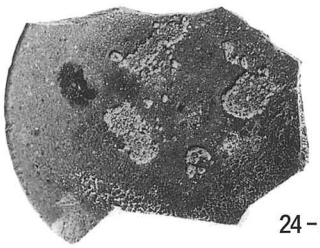

24-1

24-2（内）


24-3（内）


24-2

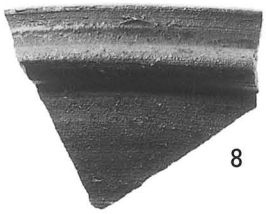
24-3

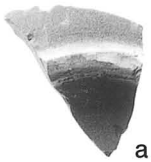

24-5（内）

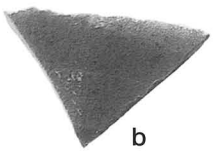
24-6

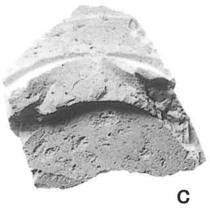
24-5

24-4


8


a


b


c

d

e

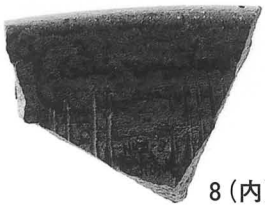
Ⅲ区出土陶磁器

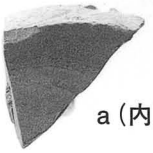
図版 22

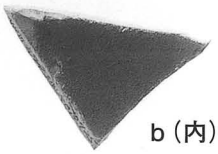
24-7

24-9

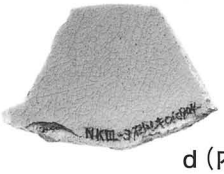
24-4（内）


8（内）


a（内）


b（内）

c（内）


d（内）

e（内）

Ⅲ区出土陶磁器

25-1

2

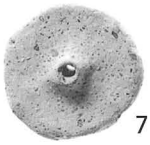
3

25-9

4

5

6

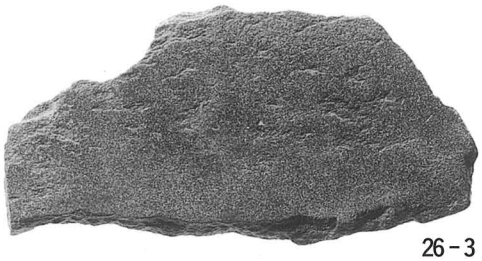

7

8

25-10

Ⅲ区出土土製品・銭貨

26－1



26－3

2

26－4

27－1

2

3

27－4

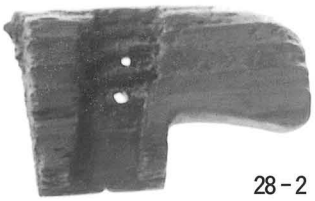
5

27－6

Ⅲ区出土石製品

図版 24

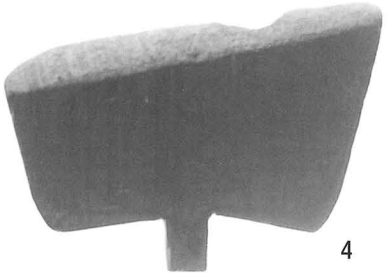
28-1



28-2

28-1（底面）

3



4

29-1

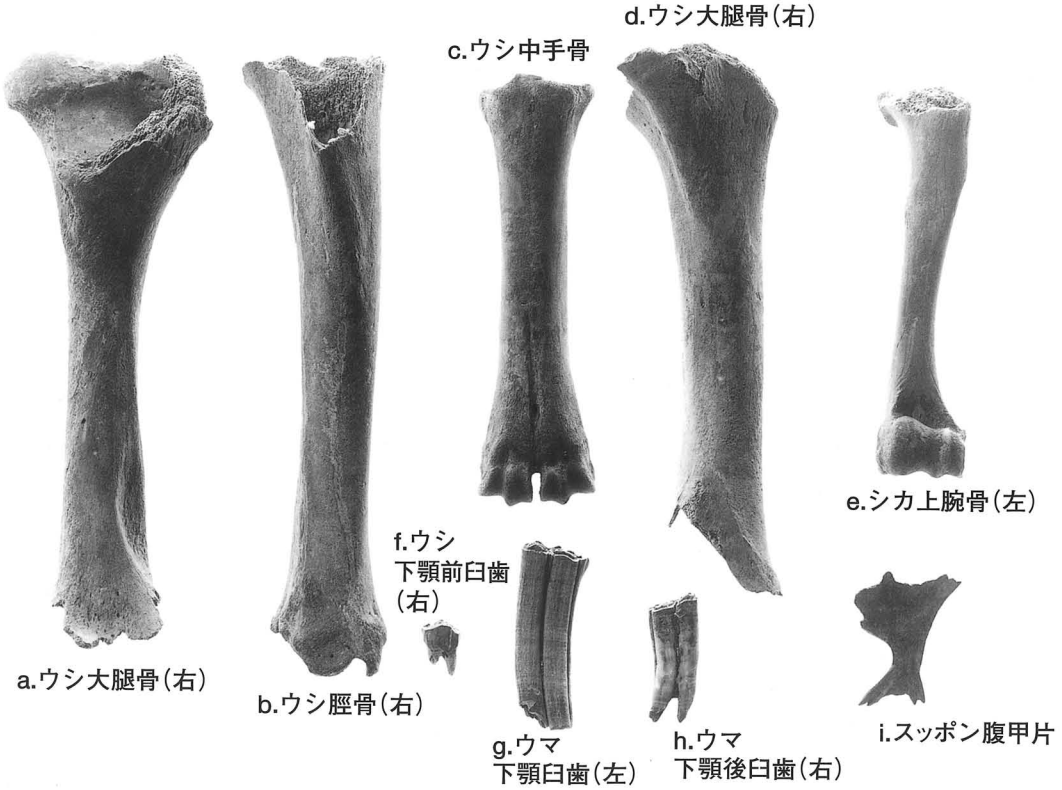
2

4

3

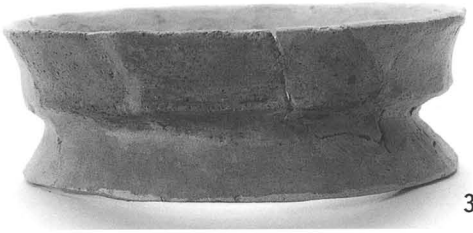
29-5

Ⅲ区出土木製品


d.ウシ大腿骨(右)
c.ウシ中手骨
e.シカ上腕骨(左)
f.ウシ
下顎前臼歯
(右)
a.ウシ大腿骨(右)
b.ウシ脛骨(右)
g.ウマ
下顎臼歯(左)
h.ウマ
下顎後臼歯(右)
i.スッポン腹甲片

Ⅲ区出土獣骨

図版 26



32-2

32-9

32-11

32-7

32-6

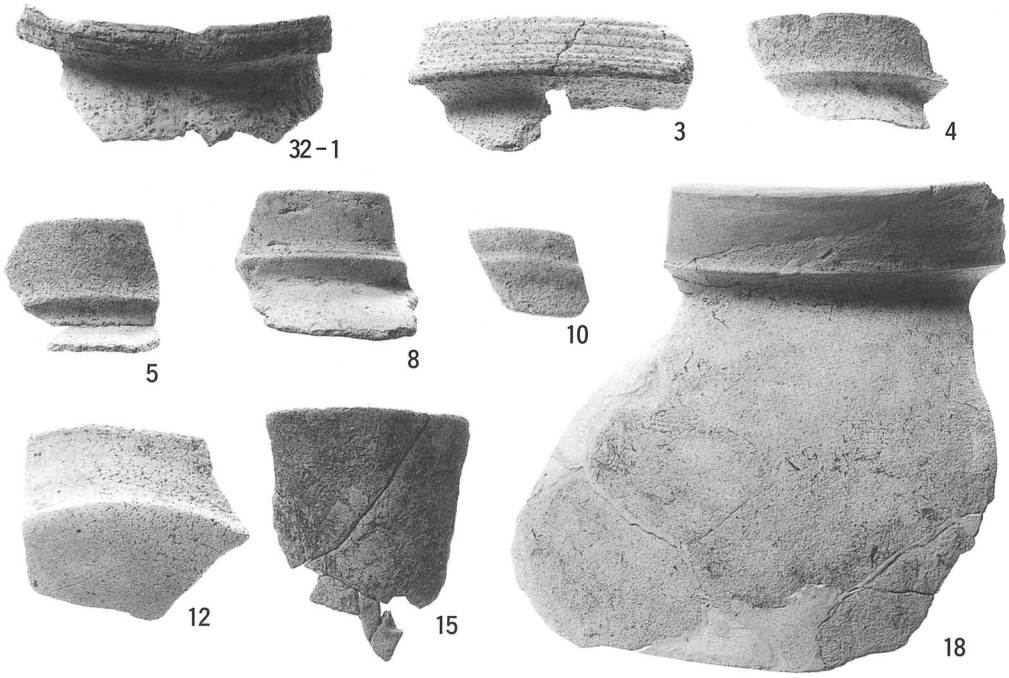
32-16

32-13

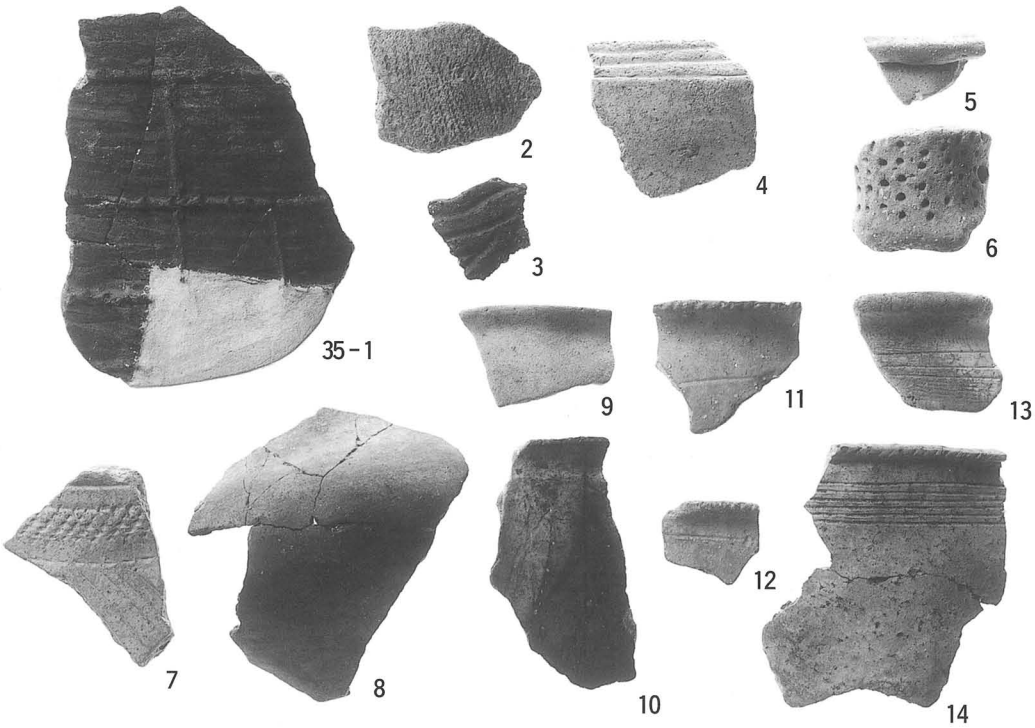
32-14

32-17

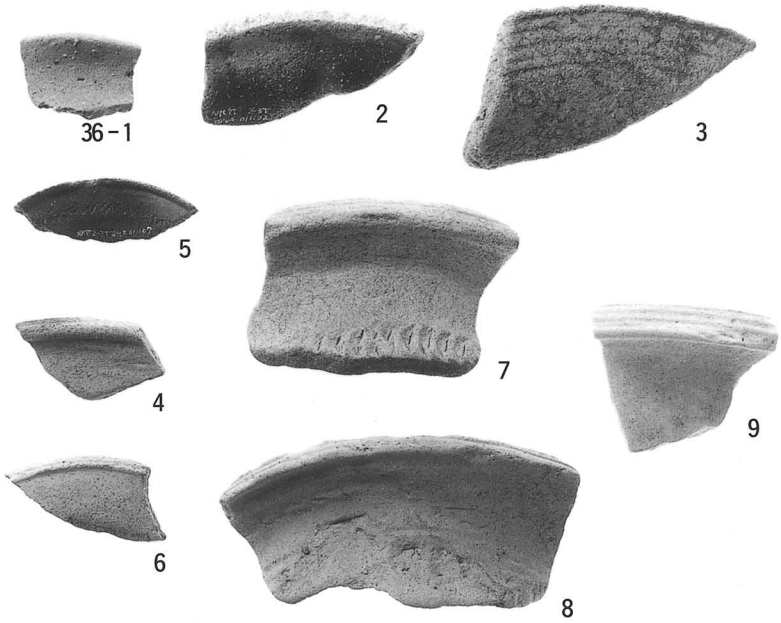
Ⅵ区淡青灰色土出土土器

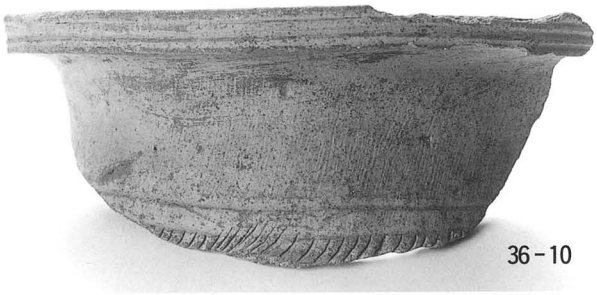


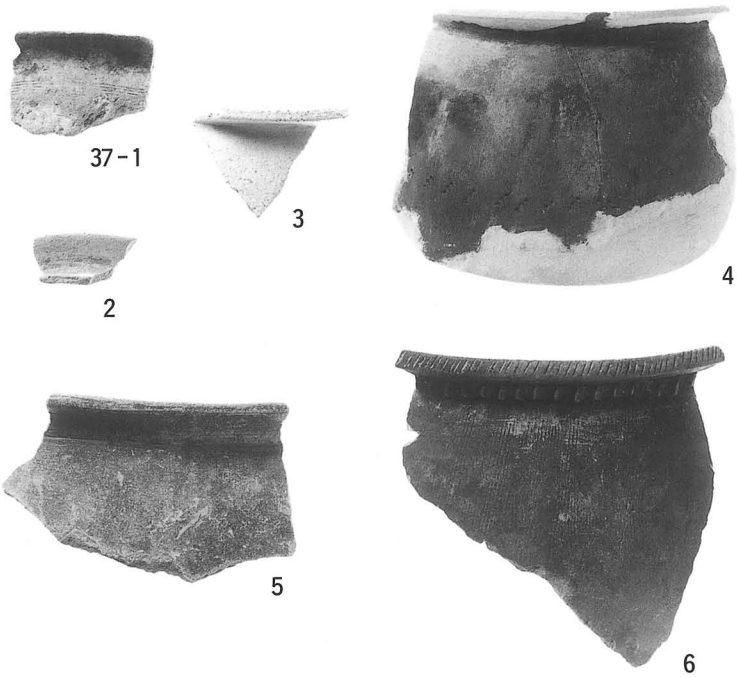

Ⅵ区淡青灰色土出土土器



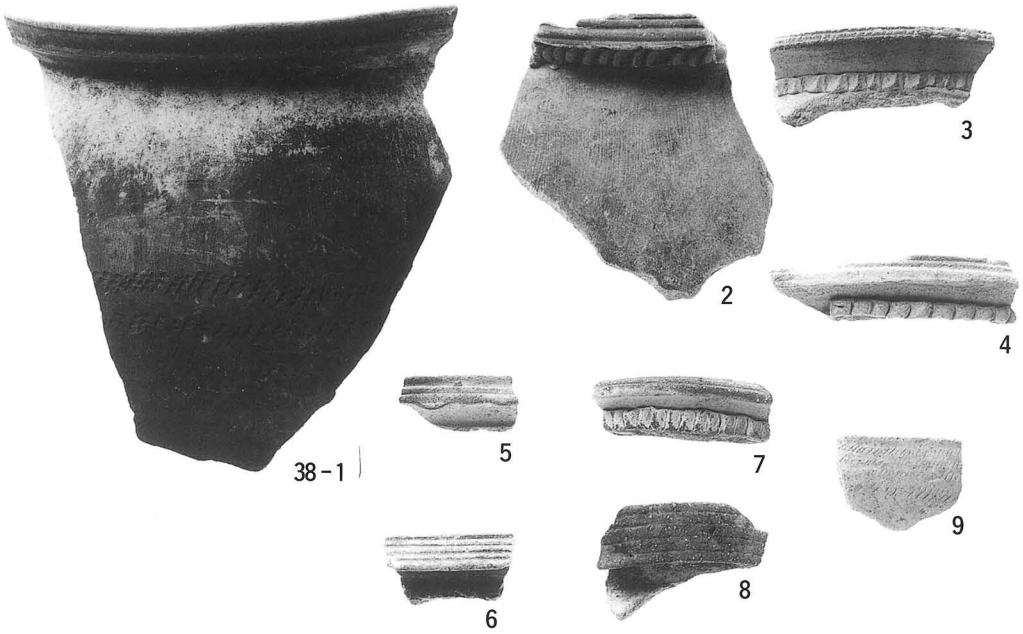

Ⅵ区砂礫層 1 出土土器

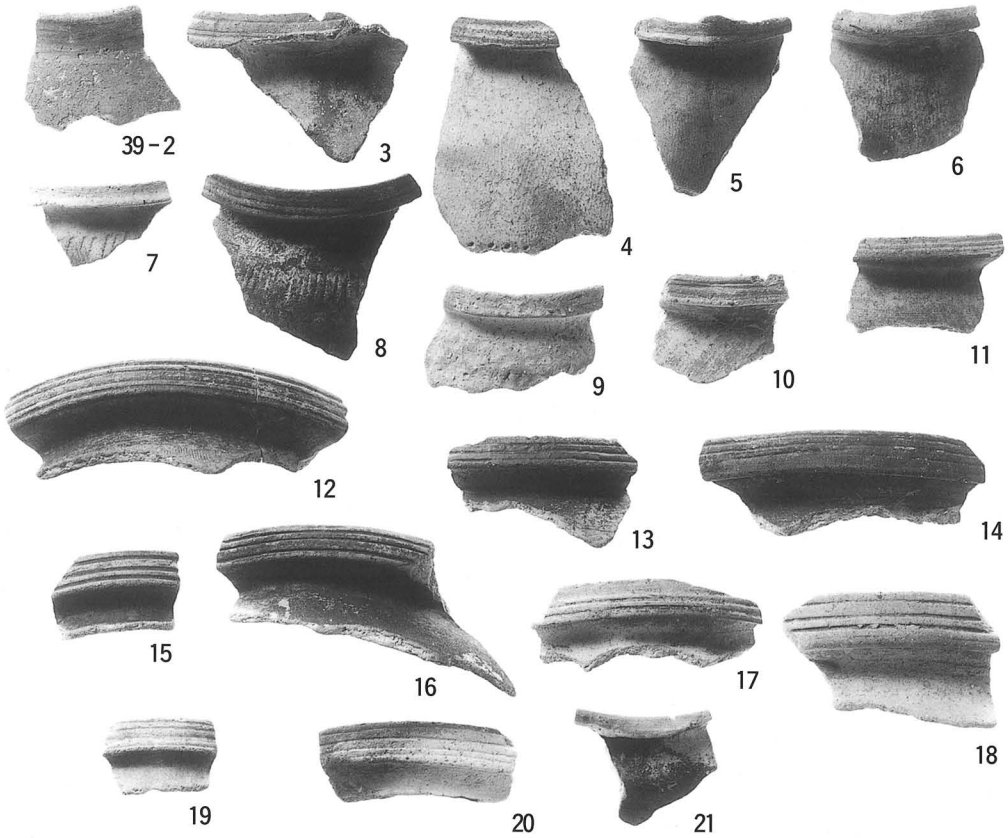



Ⅵ区砂礫層 1 出土土器

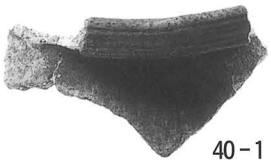



Ⅵ区砂礫層 1 出土土器

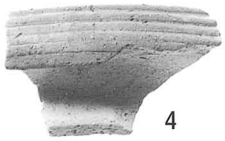
39-1

40-16


40-1

2

3


4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

17

18

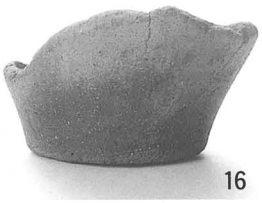
15

41-8

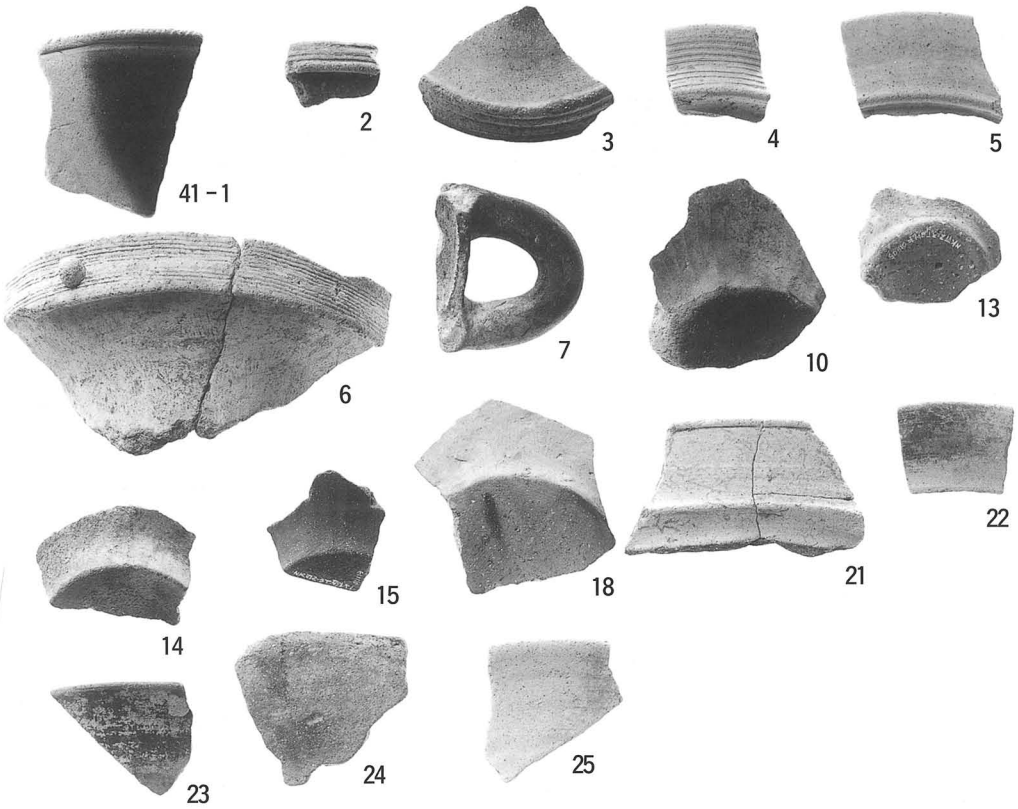
41-9

41-11

12

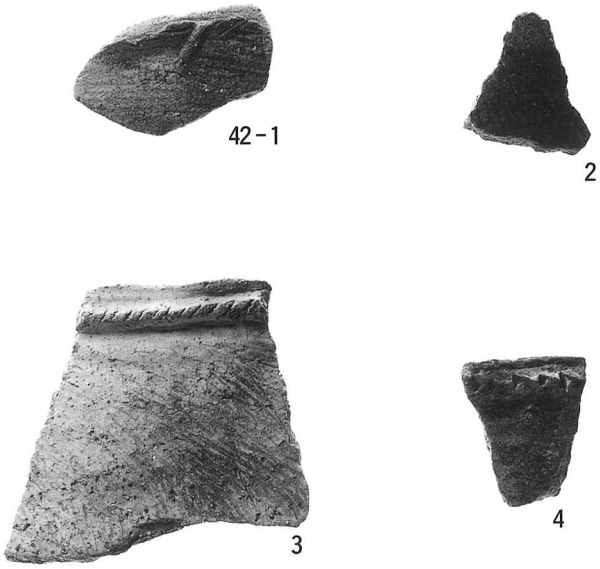

16

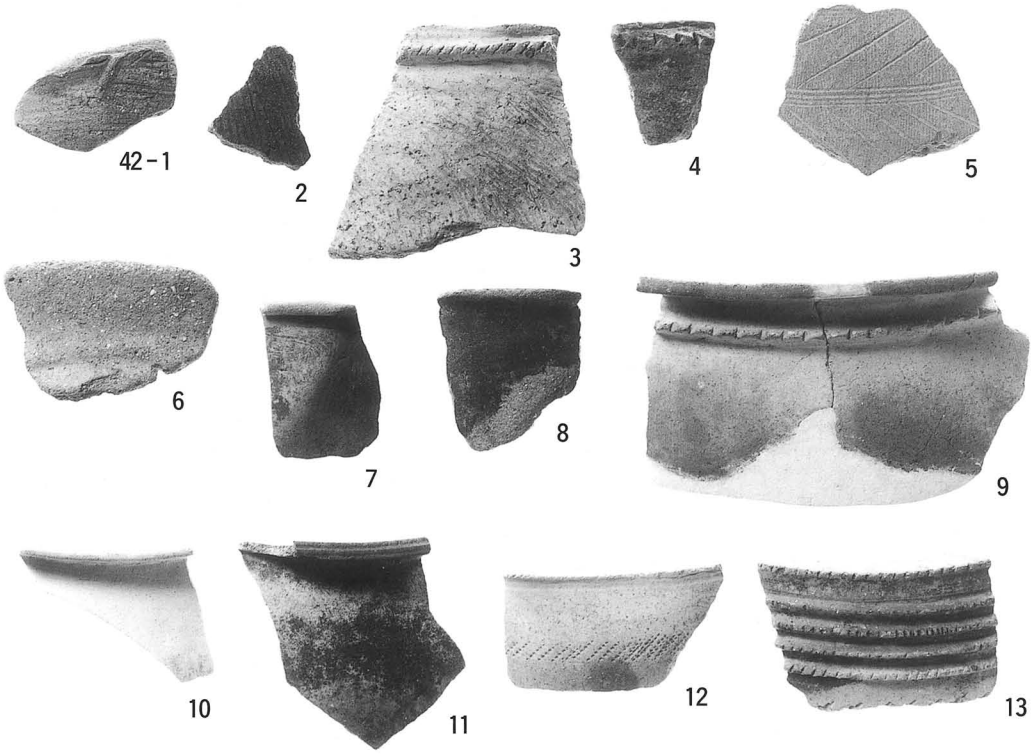
Ⅵ区砂礫層１出土土器



Ⅵ区砂礫層 1 出土土器

図版 32




Ⅵ区砂礫層 2 出土土器

43-1

2

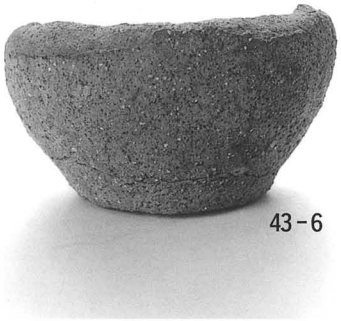
3

4

5

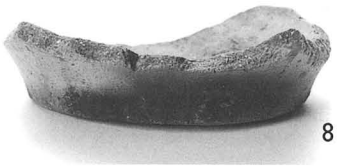
10

12


43-6

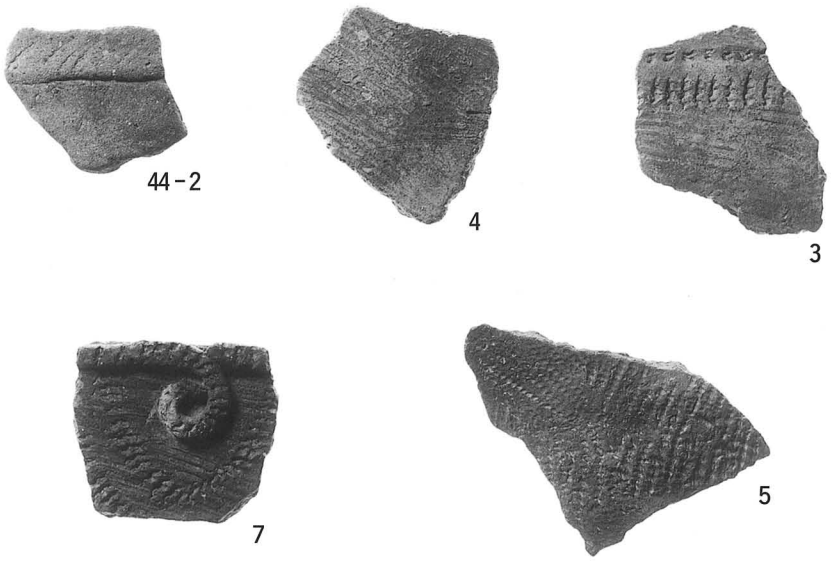
43-9

43-7


8

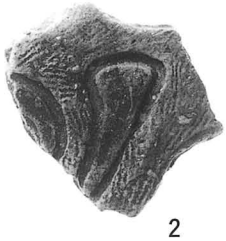
Ⅵ区砂礫層 2 出土土器

Ⅵ区砂礫層 2 出土土器




Ⅵ区砂礫層 3 ・ 4 出土土器

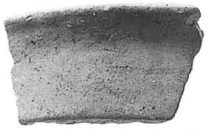
45-1


2

5

3

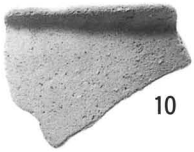
4

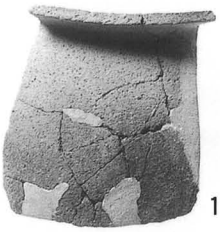

45-6

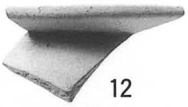
7

8

9


10


11


12

13

14

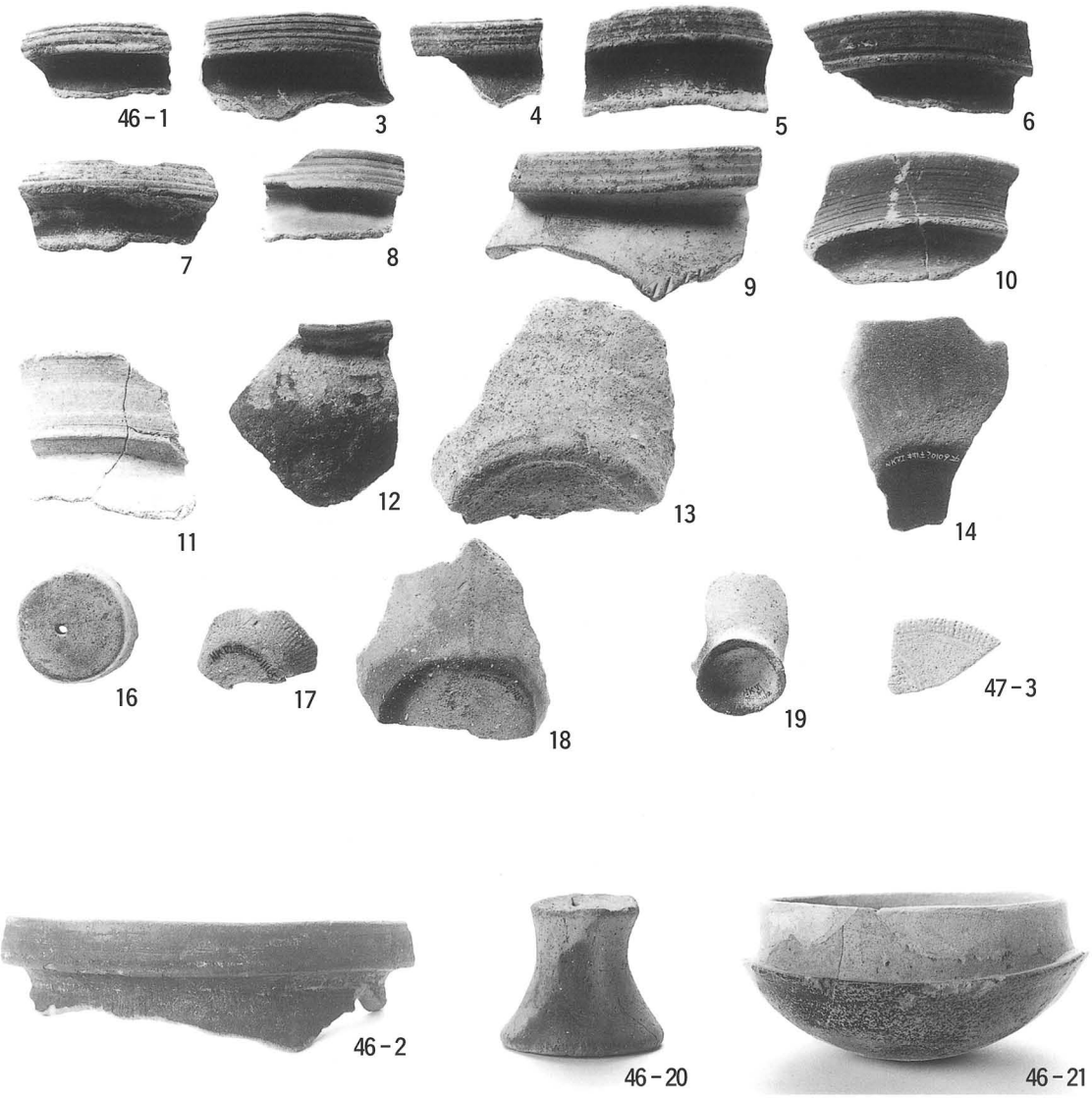
15

16

17

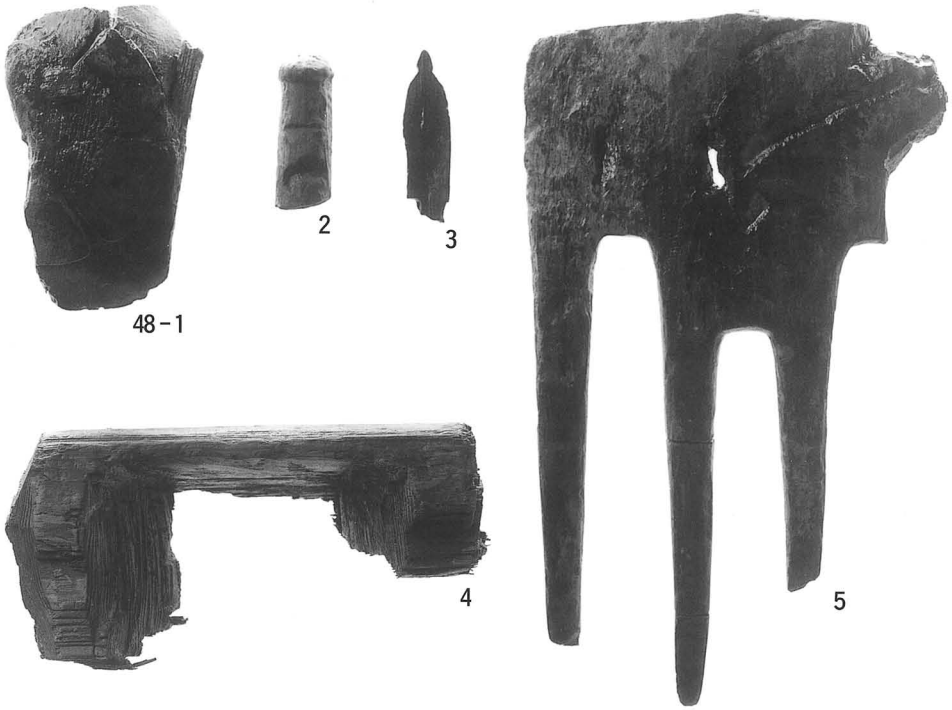
18

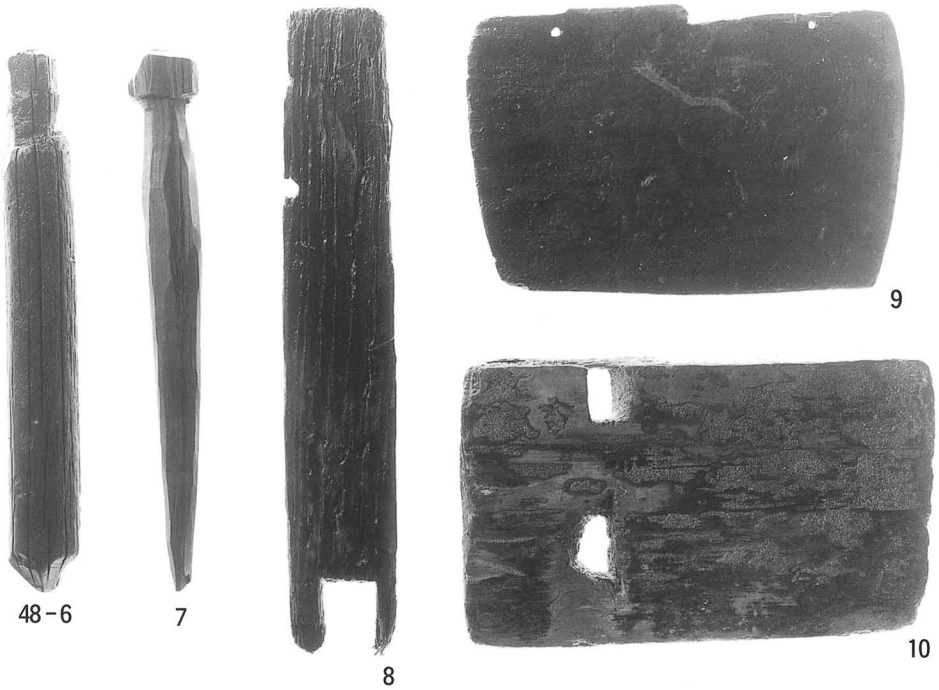
Ⅵ区出土土器



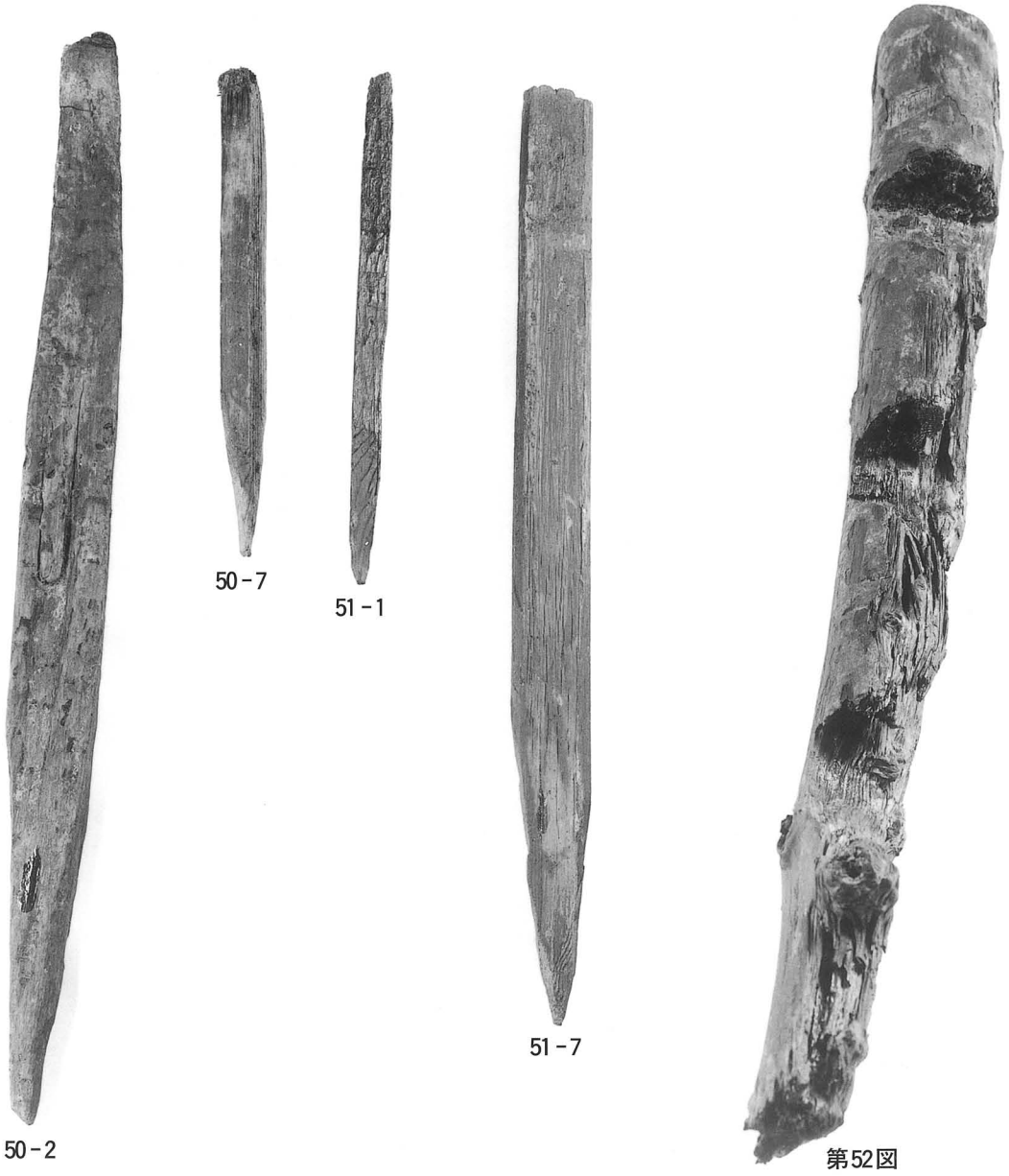

Ⅵ区出土土器

Ⅵ区出土石器・土製品




Ⅵ区出土木製品




Ⅵ区出土木製品

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| フリガナ | ニシカワツイセキ |
| 書名 | 西川津遺跡Ⅸ |
| 副書名 | 朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第14冊 |
| 編著者名 | 岩橋孝典　宮本正保　渡邉正巳 |
| 編集機関 | 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター<br>URL http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/ |
| 所在地 | 〒690-0131　島根県松江市打出町33番地　TEL0852-36-8608<br>E-mail:maibun@pref.shimane.jp |
| 発行年月日 | 2003年3月 |

| 収録遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間（西暦年月日） | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 西川津遺跡Ⅲ区（ニシカワツイセキサン） | 島根県松江市（シマネケンマツエシ）<br>西川津町560（ニシカワツチョウ） | 32201 | 0005 | 35°<br>29’05” | 133°<br>04’37” | 20020702～<br>20021217 | 1240m² | 朝酌川広域河川改修事業 |
| 西川津遺跡Ⅵ区（ニシカワツイセキロク） | 島根県松江市（シマネケンマツエシ）<br>西川津町609（ニシカワツチョウ） | | | 35°<br>29’27” | 133°<br>04’48” | | | |

| 収録遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 西川津Ⅲ区 | 河川跡 | 弥生時代<br>古墳時代<br>奈良時代<br>平安時代 | 河川跡 | 弥生土器<br>土師器、須恵器<br>陶磁器<br>銭貨 | |
| 西川津Ⅵ区 | 河川跡 | 縄文時代<br>弥生時代<br>古墳時代 | 河川跡<br>杭列状遺構 | 縄文土器<br>弥生土器 | |

※北緯・東経は日本測地系による

# 西川津遺跡 Ⅸ

朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第14冊

発行　2003年3月
編集　**島根県教育委員会**
　　島根県松江市殿町一番地
印刷　柏村印刷(株)